

# 統一新羅時代の九州と五小京の考古学的研究

李 在桓

2016年9月

滋賀県立大学大学院博士後期過程  
人間文化学研究科博士学位論文  
博士(人間文化学)

統一新羅時代の九州と五小京の考古学的研究

李 在桓  
(地域文化学専攻)

# - 目 次 -

はじめに.....	1
<b>第1章 研究史と課題</b>	
第1節 研究の意義と背景.....	3
第2節 九州と五小京の研究現況と問題点.....	6
第3節 研究の範囲と方法.....	9
<b>第2章 五小京の都市構造</b>	
第1節 金官小京の都市構造.....	10
第2節 中原小京の都市構造.....	36
第3節 北原小京の都市構造.....	52
第4節 西原小京の都市構造.....	67
第5節 南原小京の都市構造.....	82
<b>第3章 九州の都市構造</b>	
第1節 沙伐州の都市構造.....	97
第2節 牛首州の都市構造.....	117
第3節 河西州の都市構造.....	131
第4節 完山州の都市構造.....	141
第5節 熊川州の都市構造.....	151

第6節 武珍州の都市構造	158
第7節 菁州の都市構造	164
第4章 九州と五小京の都市構造分析	
第1節 州と小京の城郭問題	169
第2節 州と小京の中心地検討	176
第3節 王京の考古学的検討	184
第5章 結論	
－九州と五小京の都市構造の類型－	194
おわりに	202
参考文献	204

## 図目次

図1 九州と五小京の位置(現在の行政区域).....	4
図2 山田隆文の金官小京の方格地割復元案.....	12
図3 金海府内地地図.....	15
図4 金海古邑城関連遺跡分布.....	16
図5 金海古邑城の遺構配置.....	17
図6 金海鳳凰洞220-16番地遺跡の遺構配置.....	18
図7 金海伽耶寺造成駐車場敷地遺跡の遺構配置.....	19
図8 金海大成洞195番地共同住宅敷地遺跡の遺構配置.....	20
図9 金海鳳凰洞217-7番地遺跡の遺構配置.....	20
図10 土城の造成模式図.....	21
図11 金海鳳凰洞220-16番地遺跡の出土遺物.....	23
図12 金海古邑城関連遺跡分布(1934年製作の旧地籍図).....	24
図13 金海鳳凰洞220-3・5・9・16番地遺跡の遺構分布.....	28
図14 山田隆文の金官小京の方格地割復元案に関連する遺跡分布.....	32
図15 金海市内地域の旧地籍図(1912年製作)一部.....	34
図16 金官小京の都市構造復元案.....	35
図17 忠州地域の地形と遺跡分布1.....	38
図18 楼岩里古墳群.....	40
図19 下九岩里古墳群.....	40
図20 丹月洞古墳群の5号墳.....	42
図21 忠州邑城(虎岩洞遺跡)の土城残存区間.....	43
図22 忠州市内地域の中原小京関連遺跡分布.....	45
図23 忠州地域の地形と遺跡分布2.....	48
図24 忠州地域の地形と遺跡分布3(1929年製作の旧地形図).....	49
図25 忠州市内地域の旧地籍図(1914年製作).....	50
図26 中原小京の区画地割と都市構造の復元案(1914年製作の旧地籍図).....	51
図27 原州地域の北原小京関連遺跡分布と主要交通路.....	55
図28 鶴城洞遺跡の遺構配置.....	56
図29 鶴城洞遺跡の出土遺物.....	56

図30 盤谷洞遺跡の石槨墓	57
図31 盤谷洞遺跡の石槨墓出土遺物	57
図32 原州市内地域の北原小京関連遺跡分布	58
図33 原州市内地域と周辺地域の北原小京関連遺跡と城郭位置	64
図34 原州市内地域と周辺地域の旧地籍図(1916年製作)	66
図35 山田隆文の西原小京の方格地割復元案	69
図36 黄仁鎬の西原小京の都市区画復元案	70
図37 清州地域の主な城郭位置	71
図38 清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡の道路遺構	73
図39 清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡の遺構分布	74
図40 清州市内地域の西原小京関連遺跡分布	76
図41 清州市内地域の旧地籍図(1913年製作)	80
図42 西原小京の区画地割の復元案(1913年製作の旧地籍図)	81
図43 朴泰祐の南原小京の坊里区画復元案	84
図44 山田隆文の南原小京の方格地割復元案	85
図45 南原市内地域の地形と南原小京関連遺跡分布1	87
図46 南原市内地域の南原小京関連遺跡分布(1938年製作の旧地形図)	88
図47 南原市内地域の旧地籍図(1917年製作)	90
図48 南原小京の都市構造の復元案1	91
図49 南原小京の都市構造の復元案2	92
図50 朴泰祐の沙伐州復元案と関連遺跡分布	95
図51 南原市内地域の地形と南原小京関連遺跡分布2	95
図52 朴泰祐の沙伐州の坊里区画図復元案	99
図53 山田隆文の沙伐州の方格地割復元案	100
図54 朴達錫の沙伐州の里坊区画復元案	101
図55 尚州地域の地形と周辺の遺跡分布	102
図56 尚州市内地域の地形と沙伐州関連遺跡分布	102
図57 尚州市内地域の沙伐州関連遺跡分布(1927年製作の旧地形図)	106
図58 伏龍洞遺跡群	107
図59 伏龍洞遺跡230-3番地遺跡	107
図60 伏龍洞230-3番地遺跡の竪穴建物跡のカマド形態	109

図61 伏龍洞230-3番地遺跡の統一新羅時代の遺構配置	111
図62 城東洞81・81-1番地遺跡の統一新羅時代の遺構配置	112
図63 沙伐州の関連遺跡と都市構造の復元案	116
図64 山田隆文の牛首州の方格地割復元案	119
図65 春川市内地域の牛首州関連遺跡分布1	119
図66 鳳儀山城の建物跡配置	121
図67 春川昭陽路遺跡の遺構配置	121
図68 春川槿花洞遺跡(B区域)	122
図69 春川槿花洞遺跡の統一新羅時代の竪穴建物跡と竪穴遺構の分布	123
図70 春川槿花洞遺跡の竪穴建物跡の類型	124
図71 春川槿花洞遺跡の竪穴建物跡	125
図72 伏龍洞遺跡の竪穴建物跡	125
図73 春川市内地域の牛首州関連遺跡分布2(1925年製作の旧地形図)	129
図74 牛首州の区画地割の痕跡(1915年製作の旧地籍図)	130
図75 山田隆文の河西州の方格地割復元案	133
図76 江陵市内地域の遺跡分布(1933年製作の旧地形図)	135
図77 江陵地域の遺跡分布	137
図78 江陵市内地域の旧地籍図(1916年製作)	139
図79 河西州の区画地割の復元案(1916年製作の旧地籍図)	140
図80 山田隆文の完山州の方格地割復元案	143
図81 全州市内地域の完山州関連遺跡分布	145
図82 全州後百濟都城壁推定地遺跡の調査現況	146
図83 全州市内地域の航空写真と全州後百濟都城壁推定地遺跡	148
図84 全州市内地域の旧地籍図(1912年製作)	149
図85 完山州の区画地割の様相(1912年製作の旧地籍図)	150
図86 山田隆文の熊川州の方格地割復元案	152
図87 公州市内地域の熊川州関連遺跡分布	155
図88 公州市内地域の旧地籍図(1913年製作)	156
図89 熊川州の区画地割の推定範囲(1913年製作の旧地籍図)	157
図90 山田隆文の武珍州の方格地割復元案	159
図91 光州市内地域の武珍州関連遺跡分布	161

図92 武珍州の区画地割の推定範囲(1912年製作の旧地籍図)·····	163
図93 山田隆文の菁州の方格地割復元案·····	165
図94 菁州の区画地割の推定範囲(1933年製作の旧地形図)·····	167
図95 菁州の区画地割の推定範囲(1912年製作の旧地籍図)·····	168
図96 河西州の区画地割と邑城の位置·····	173
図97 中原小京の区画地割と邑城の位置·····	173
図98 沙伐州の区画地割と邑城の位置·····	174
図99 西原小京の区画地割と邑城の位置·····	174
図100 南原市内地域の旧地籍図(1917年製作、上)と旧地形図(1938年製作、下)の比較···	177
図101 王京の地形と関連遺跡分布·····	187
図102 王京の道路遺構の分布·····	190
図103 牟梁里遺跡の道路遺構の分布·····	192
図104 牟梁里遺跡の道路遺構の分布(1913年製作の旧地籍図)·····	193
図105 II-1型の模式図(左:中原小京、右:河西州)·····	195
図106 II-2型の模式図(左:西原小京、右:北原小京)·····	195
図107 A類型の都市構造模式図·····	198
図108 B-1類型(中原小京)の都市構造模式図·····	199
図109 B-2類型(金官小京)の都市構造模式図·····	199
図110 C類型の都市構造模式図·····	199

## 表目次

表1 九州と五小京·····	3
表2 金官小京の名称変遷·····	12
表3 金海古邑城の関連遺跡·····	15
表4 金海古邑城の特色·····	23
表5 金海古邑城関連の報告書比較·····	26
表6 金海市内地域の統一新羅時代関連遺跡·····	27
表7 中原小京の名称変遷·····	37



表8 中原小京設置以前の関連遺跡	41
表9 中原小京の関連遺跡	44
表10 中原小京の都市構造の復元案	47
表11 北原小京の名称変遷	52
表12 北原小京設置以前の原州地域の主要な遺跡	55
表13 原州市内地域の統一新羅時代遺跡	58
表14 原州地域の城郭	63
表15 西原小京の名称変遷	68
表16 清州市内地域の西原小京関連遺跡	75
表17 西原小京の都市構造の復元案	77
表18 南原小京の名称変遷	83
表19 南原州市内地域の南原小京関連遺跡	86
表20 南原小京の都市構造の復元案	93
表21 沙伐州の名称変遷	99
表22 尚州市内地域の沙伐州関連遺跡	105
表23 沙伐州の都市構造の復元案	115
表24 牛首州(首若州)の名称変遷	118
表25 春川市内地域の牛首州関連遺跡	122
表26 春川槿花洞遺跡の遺構現況	122
表27 牛首州の都市構造の復元案	127
表28 河西州の名称変遷	132
表29 江陵市内地域の主要遺跡	134
表30 河西州の都市構造の復元案	138
表31 完山州の名称変遷	142
表32 全州市内地域の完山州関連遺跡	145
表33 完山州の都市構造の復元案	147
表34 熊川州の名称変遷	151
表35 公州市内地域の熊川州関連遺跡	153
表36 熊川州の都市構造の復元案	154
表37 武珍州の名称変遷	159
表38 光州市内地域の武珍州関連遺跡	160

表39 武珍州の都市構造の復元案	162
表40 菁州の名称変遷	165
表41 菁州の都市構造の復元案	166
表42 州と小京の関連城郭	171
表43 州と小京の中心地と関連する邑城	175
表44 州と小京の区画地割の規模	180
表45 王京の都市構造に関連する主要遺跡	186
表46 州と小京の中心地移動の類型	196
表47 九州と五小京の都市構造の類型	200

## はじめに

新羅は三国を統一して、文武王・神文王代に全国の行政体系を九州と五小京に整備した。九州は、新羅の領土になった旧高句麗地域と旧百済地域を含む全国を九つに分けた行政区画である。五小京は、王京が領土の南東側に位置しているため、その補完として中原小京を中心として方位に沿って金官小京・北原小京・西原小京・南原小京が設置された。

その統一新羅時代の地方の中心都市であった九州と五小京の治所が置かれた地域が、本論文の研究対象である。

統一新羅時代の九州と五小京の都市構造に関しては文献史料が限定されているため、考古資料の役割が特に重要であろう。しかし、最近まで九州と五小京に対する考古学的研究は量と質ともに貧弱であったといえる。特に、九州と五小京に関する全般的な研究は一部しか行われていなかった。ところで、最近韓国の各地では開発に伴う調査と文化遺跡の整備が盛んに行われ、九州と五小京が設置された地域の関連考古資料も徐々に増えてきている。

本論文では、今までほとんど行われてこなかった九州と五小京の考古資料を網羅してまとめ、分類する。さらにその考古資料を解釈し、多様な研究方法と接近を通して現段階で可能な九州と五小京に関する考古学的様相を明らかにすることが、本論文の目的である。

これまでは考古資料の不足で充実した九州と五小京に対する考古学的検討が難しく、それに関する関心も低かった。そのため、九州と五小京の関連遺跡の調査でも、関連遺構の検出や調査過程での遺構確認が行われなかった場合が多い。

なお、本論文ではこれまでの文献史料を中心とした九州と五小京に関する研究ではなく、より多様な研究方法と接近を通じた研究を試みしてみる。

その研究方法として、あらためて九州と五小京に関連する旧地籍図・旧地形図の分析を行い、復元案を提示したい。もちろん、このような検討は考古学的検討ではないと批判されることもあるかもしれないが、不足している考古資料の補完のためにも十分な検討が求められる。

本論文の構成は次のとおりである。

第1章では九州と五小京に対する研究の意義とその背景を述べ、既存研究の現況と問題点を主に考古学的研究を中心に検討する。さらに、本論文で検討する九州と五小京の研究対象の範囲とその研究方法を提示してみる。

第2章では五小京の都市構造、第3章では九州の都市構造に対する検討を行う。

第2・3章における節の構成は、まず基本的な関連史料である『三國史記』の記事をまとめてみる。そして、各節で九州と五小京に関連する既存研究を検討する。次に、九州と五小京が設置された地域の関連遺跡をまとめて分析し、さらに全体的な考古学的様相を把握するために、該当する地域の多様な時期の調査現況も検討する。各節のまとめとして、九州と五小京の都市構造と中心地を分析検討し、各都市構造の特徴を探ってみる。

第4章では第2・3章の九州と五小京の都市構造の検討でまとめた結果をもとに、州と小京に関連する城郭の性格、区画地割の様相、関連遺跡の様相を分析する。また、王京(慶州)の都市構造に関連する研究を検討し、九州と五小京の研究の参考にしたい。

第5章では本論文のまとめとして、九州と五小京の都市構造の様相から分類される類型を提示する。

本論文の目的である九州と五小京に対する考古学的検討のためには資料が不十分である地域も多少あるが、現段階で検討可能な考古資料をまとめることに集中した。

今後、九州と五小京が設置された地域を含む統一新羅時代の地方都市関連の調査は必然的に増加することは間違いないと思う。本論文では、これからの九州と五小京を含む統一新羅時代の地方都市関連の調査・研究に対して、多様な様相と事例を提供し、さらなる研究と調査の方向を提示していきたい。

# 第1章 研究史と課題

## 第1節 研究の意義と背景

本論文の研究対象は、統一新羅時代の地方行政体系である九州と五小京の治所が置かれた地域の考古資料である。

州と小京の治所が設置された都市はその州と小京の中心地であり、その総称が九州五小京である。したがって、本論文では‘九州’と‘五小京’を九州と五小京の治所が設置された都市(地域)の意味で使うことにする。

九州は、沙伐州(慶尚北道尚州市)、牛首州(江原道春川市)、河西州(江原道江陵市)、完山州(全羅北道全州市)、熊川州(忠清南道公州市)、武珍州(光州広域市)、菁州(慶尚南道晋州市)、歙良州(慶尚南道梁山市)、漢山州(京畿道河南市あるいは広州市)である。五小京は、中原小京(忠清北道忠州市)、金官小京(慶尚南道金海市)、北原小京(江原道原州市)、西原小京(忠清北道清州市)、南原小京(全羅北道南原市)である。なお、五小京は行政区域上各州に属している。中原小京は漢山州に、北原小京は牛首州に、西原小京は熊川州に、南原小京は完山州に、そして金官小京は歙良州に属している(図1、表1)。

表1 九州と五小京

名称	設置当時	景德王代 (757年)	現在地名	名称	設置当時	景德王代	現在地名
九州	沙伐州(687)	尚州	慶尚北道尚州市	五小京	金官小京 (680)	金海京	慶尚南道金海市
	牛首州(673)	朔州	江原道春川市		国原小京 (557) 中原小京 (神文王代)	中原京	忠清北道忠州市
	河西州(658)	溟州	江原道江陵市				
	完山州(685)	全州	全羅北道全州市		北原小京 (678)	北原京	江原道原州市
	熊川州(686)	熊州	忠清南道公州市		西原小京 (685)	西原京	忠清北道清州市
	武珍州(686)	武州	光州広域市		南原小京 (685)	南原京	全羅北道南原市
	菁州(685)	康州	慶尚南道晋州市				
	漢山州(664)	漢州	京畿道河南市 あるいは広州市				
	歙良州(665)	良州	慶尚南道梁山市				



図1 九州と五小京の位置 (現在の行政区域)

※統一新羅時代の行政区域ではなく、現在の行政区域での検討対象地域である。

九州と五小京が設置された地域は、高麗・朝鮮時代を経て現代まで主な地方都市として発展してきた。九州と五小京が設置された都市(地域)の沿革でも、現在の地名の淵源が統一新羅時代の九州と五小京にある場合が多く見られる。

したがって、九州と五小京の設置(正確には治所の設置)は古代都市の本格的な建設を意味しているといえる。

新羅の都である王京(慶州)の場合、関連調査が進んでおり、その都市構造や都市の発展過程などのさまざまな分野で議論と研究が行われている。それとは対照的に地方都市である九

州と五小京の考古学的研究はほとんど行われてこなかった。その理由としてはやはり関連する考古資料の不足があげられるが、王京に対する調査と研究のような関心が九州と五小京に対しては低かったこともあげられる。

九州と五小京に対する文献史学の研究は小京に対する研究が主であり、小京の設置背景と性格などに関する議論であった。州と小京に関する史料は非常に少なく、都市構造と発展過程など具体的な研究をするには限界がある。それゆえ、不足している史料の補完のため、考古資料への関心は徐々に高まっている。九州と五小京の総合的な研究には考古学的検討が必要といえよう。

だが、最近まで九州と五小京に対する関連調査の成果は少なく、九州と五小京に関する考古学的研究も進んでこなかったといえる。

ここ10年余り、韓国の各地ではさまざまな開発に伴う調査が盛んに行われ、九州と五小京が設置された地域の考古資料も徐々に増えてきている。

本論文では、九州と五小京の考古学的検討を目的として、まず最近までの九州と五小京に関連する遺跡をまとめて分析する。それから、最近までの考古学的研究が抱えている問題点を指摘する。また、限られた考古資料を活用するため、いくつかの研究方法の検討も行いたい。

九州と五小京に対する考古学的な検討のための考古資料が、十分に蓄積されたというにはほど遠い。しかし、本論文で最近まで明らかになった考古学的成果をまとめて分析して、多様な検討案を示すだけでも研究成果と関心が貧弱なこの分野では意味があろう。九州と五小京に対する考古学的研究の現況をあらためて認識し、さらなる研究につながる土台になることを期待したい。

## 第2節 九州と五小京の研究現況と問題点

統一新羅時代の九州と五小京に対しては、全体的な考古学的研究はあまり行われていない。その理由は、やはり九州と五小京に関する考古資料の不足が一番の原因であった。しかし、一部の地域では小京城の比定を通して小京の治所や中心地を推定する研究があった。

個別的な研究は、主に中原小京(忠州)と西原小京(清州)でそれぞれ行われた。一方、九州と五小京の全体を対象とする考古学的研究には、朴泰佑(朴泰佑1987)と山田隆文(山田隆文2008)の研究がある。それは1910～1930年代に製作された各地域の旧地籍図や旧地形図を利用して、統一新羅時代の九州と五小京の中心地の都市構造(区画地割の形態)を推定する研究である。このような研究は、旧地籍図や旧地形図を使用して九州と五小京の中心地、州城や小京城の位置などを推定したもので、注目すべきである。

また、2003～2005年に慶尚北道尚州市で実施された発掘調査の成果にもとづき、沙伐州を中心テーマとして、九州と五小京のうち五つの都市の復元案を検討した朴達錫の研究がある(朴達錫2007・2012)。朴達錫の研究は沙伐州に集中しているが、考古資料をもとにしているので、本格的な考古学的研究として評価できる。

朴泰佑の研究は先行的なものでもあり、あくまでも推定であって、証拠になる考古資料は1987年にはほとんどなかった。また、山田隆文の2008年の研究では関連遺跡の事例は少し増えているが、まだ十分ではなかった。

最近、各地域の発掘調査では九州と五小京の関連遺跡も注目されている。さらに考古資料を通じた州と小京の都市構造に関連する研究もなされている。盧秉湜(盧秉湜2014)は中原小京と西原小京の防禦施設の変遷に対する研究で、小京の関連城郭を中心に都市構造を検討している。

黄仁鎬(황인호2013・2014)は、旧地形図に見られる九州と五小京の中心地の都市構造を検討している。このように、最近では九州と五小京の都市構造の考古学的研究に対する関心が高まっているが、考古資料はまだ一部地域に限定されていたり不足していたりすることが多い。

九州と五小京が設置された地域の遺跡現況を見ると、地域によってその差はあるものの、すべての地域に統一新羅時代の遺跡が確実に分布していることがわかった。もう一つの特徴として、ほぼすべての地域に統一新羅時代から高麗・朝鮮時代までの遺跡が分布していることがあげられる。

九州と五小京が設置された都市や地域の関連遺跡の分布と調査は、地域によって差がある。



また、各地域の調査は統一新羅時代の九州と五小京を優先的に想定して行われてはいない。したがって、調査の際、その地に九州と五小京の治所が設置されたことを認識していても、調査そのものが統一新羅時代の遺構を目的にしていることはほとんどない。

九州と五小京が設置された地域は、統一新羅時代だけではなく高麗・朝鮮時代にも各地域で重要な拠点都市として行政・文化・政治の中心地であった。したがって、統一新羅時代に建設が始まった市街地がそのまま都市構造を維持して発展し、人口の増加もありながら高麗・朝鮮時代まで変遷してきたと思われる。

また、高麗・朝鮮時代になって州城や小京城の範囲と規模に少し変化があったとしても、基本的には統一新羅時代に建設された範囲内で発展と変化があったと考えられる。このような事例が九州と五小京にすべて適用できるのかどうかはまだ断言できないが、調査された遺跡の分布状況と各遺跡の時期から見ても可能性は高いと思われる。

このような事実は、九州と五小京に関連する統一新羅時代の遺跡調査にさまざまな影響を与えると考えられる。発掘された遺跡では高麗・朝鮮時代の遺構と統一新羅時代の遺構の重複が多く見られ、実際の調査でそれらを区別するのは難しい。調査地の文化層が少なくとも統一新羅・高麗・朝鮮時代の三つあって攪乱もある場合、遺構の時期を確定することは難しい。このような例は、第2・3章の遺跡現況で見ると、沙伐州の伏龍洞遺跡群や牛首州の槿花洞遺跡でよく示されていると思う。

各地域で発掘調査が行われ、高麗・朝鮮時代の遺構は多数検出されているのに、統一新羅時代の遺構は検出例が少ない。その理由は、高麗・朝鮮時代において統一新羅時代の遺構の破壊があったことが想定できるかもしれない。

さらに、九州と五小京が設置された都市や地域で、統一新羅時代の遺構は、高麗・朝鮮時代を経て、近現代でもその都市の開発によって破壊が頻繁に起きている。そして、統一新羅時代の遺構が残存している可能性があっても、その上層には高麗・朝鮮時代の遺構がある場合が多く、現在も残存している邑城や建物などもある。この場合、現在までよく残っている高麗・朝鮮時代の遺構が優先的に価値を認められることになる。

実際に、関連遺跡の現況から見ても金海邑城・清州邑城・南原邑城の場合、朝鮮時代の邑城の復元を目的として調査が行われたのである。それがたまたま統一新羅時代の遺構の発見につながっただけである。したがって、遺跡の調査や復元作業は高麗・朝鮮時代の遺跡や遺構に集中してしまい、その下層に残存する可能性がある統一新羅時代の遺跡や遺構が発見されるのは厳しいといえる。

全州市の場合も、全羅監營址復元のための発掘調査で統一新羅時代の建物跡が検出された

のである。結局、発掘調査者と専門家が統一新羅時代の遺跡や遺構の調査まで念頭においている例が少なく、認識も足りないのである。

このようなことは、九州と五小京の関連遺跡の正確な調査にも影響を与えてきたと考えられる。九州と五小京が設置された地域の関連遺跡の調査は、このような問題を解決しなければならぬと思われる。

最近、九州と五小京が設置された古代都市に対する認識が高まっているので、当然そのような認識を念頭において調査が行われる事例が増加しているのも事実である。したがって、今後の調査ではさらに正確な考古資料を得ることができると期待される。

### 第3節 研究の範囲と方法

本論文では、九州と五小京の治所が設置された地域に対して考古学的検討を行う。基本的には考古資料を中心とした検討であるが、各対象地域の考古学調査の成果によって検討の範囲や分析の量は異なっている。研究の対象としては、九州の治所が設置された地域と五小京が設置された地域とする。特に、州と小京の都市構造の検討が主なテーマであるので、その地域の中心地の考古資料および関連資料を検討する。

したがって、最近、増加している九州や五小京関連の考古資料を活用して研究するためには、多様な研究方法を検討していく必要がある。

また、沙伐州の例から一部明らかになったように、主に1910年代製作の旧地籍図と1920～1930年代製作の旧地形図を基本資料として活用し、これからの研究を行うのが重要であると思う。この場合、坊里制を通して九州と五小京の都市建設が行われたことを前提とした調査と研究が行われるべきであると思う。旧地籍図と旧地形図の有効性が確認できるのはきわめて一部でしかないので、すべての地域に適用可能かどうかはまだ判断できない。しかし、旧地籍図・旧地形図を活用し、かつ坊里制を前提とした調査と研究によって、九州または五小京が設置されたそれぞれの地域の共通点と相違点がわかると思う。

九州と五小京が設置された各地域の遺跡の時期は、三国時代・統一新羅時代から高麗・朝鮮時代まで多様である。すなわち、遺跡の検討の際、九州と五小京に関連する統一新羅時代の遺跡だけではなく、他の時期の遺跡も検討する必要がある。

沙伐州の例から見ると、統一新羅期に州の中心地があらたに建設されたという証拠として、遺構や遺物の時期が統一新羅時代から始まることがあげられる。したがって、これからの調査では九州と五小京が設置された地域の遺跡の時期的な様相も重要であると思う。

さらに、九州と五小京に関連する遺跡の数がまったく足りないのが現実である以上、研究方法として考えておきたいことがある。それは、各地域で調査されたすべての遺跡を参考にすると、その地域の全体的な遺跡分布や今後の関連遺跡の調査に重要な手がかりになるということである。

特に、九州と五小京が設置された地域は、統一新羅時代以降の高麗・朝鮮時代にも中心地であったので、文化の連続性からその関連性が推定される。限定的な考古資料を活用するためには、統一新羅時代以降の高麗・朝鮮時代の遺跡にも十分注意する必要がある。

以上のような研究方法を通して、州と小京の設置が地域や状況によってどのような変化を示しているのかを各章で検討したい。

## 第2章 五小京の都市構造

考古資料を通じた五小京の所在地に対する研究はあまり進んでいないが、中原小京(忠州市)と西原小京(清州市)では早い時期から比較的活発に行われてきた。これらの地域では小京の設置と直接に関連があると思われる遺跡が調査され、それにもとづき治所の位置、小京城の比定など多様な論議が行われている(中原小京:羅庚峻2000、梁起錫ほか2001、장준식1998、田中俊明1996・2011、西原小京:車勇杰1993、梁起錫1993、梁起錫・姜珉植2000、장민식2001、盧秉湜2005)。これらの地域での小京関連遺跡としては主に城郭と古墳があげられる。最近では、中原小京と西原小京に対するさらに多様な議論がなされている(車勇杰2012、盧秉湜2014、황인호2013・2014)。

原州地域に設置された北原小京は考古資料の不足から研究があまり進んでいなかったが、最近小京関連の調査成果が増え、小京の設置に伴う中心地の移動に関する研究が行われている(이재환2012)。しかし、小京の都市構造や中心地推定などの検討に関しては関連する考古資料がまだ必要である。

南原地域に設置された南原小京の場合は、関連遺跡の調査はほとんどない。しかし、南原市内地域の旧地籍図に区画地割の痕跡が見られるので、南原小京設置当時の都市構造に対する研究がなされてきた(朴泰祐1987、李京贊2002)。

金官小京に対する研究はほとんど行われていない。最近になって、関連遺跡の調査成果の増加により、考古資料を通じた研究が可能になりつつある。

本章ではまず、金海の考古資料を検討して金官小京の都市構造の復元案を示し、それをもとに他の小京の都市構造の検討を行いたい。

### 第1節 金官小京の都市構造

金官小京が設置された金海地域は三国時代金官伽耶の中心地域であり、鳳凰洞遺跡や首露王陵・大成洞古墳群など伽耶に関連する重要な遺跡が多数分布していることが注目されている。そのため、金海市の伽耶文化整備事業が海畔川東側の市内地域を中心として集中的に行われているが、金官伽耶や三国時代の関連遺跡の調査と研究成果が多数を占めている。一方、

統一新羅時代の金官小京に対する調査と研究は相対的にあまり進んでいない。

ところが、最近の金海地域で飛躍的に増えている発掘調査によって、多様な遺跡の分布が明らかになっている。それに伴って金官小京の関連遺跡も増えつつあり、金官小京に関する遺跡の検討や研究も進むようになった。

本節では、このような近年の金官小京関連遺跡の調査成果を分析したうえで、金官小京の都市構造やその中心地に対する検討を行いたいと思う。

特に、金官小京の関連遺跡と考古資料の検討の中で注目されるいわゆる金海古邑城の資料を重点的に検討してみる。そのうえで、金官小京の都市構造および中心地の区画地割に關して考察したい。

## 1) 金官小京の関連史料と既存研究

### (1) 関連史料

考古学的検討の前に関連史料をあげてみよう。統一新羅時代の金官小京と直接的に関連する文献記録は少ない。『三國史記』「新羅本紀」には、文武王20(680)年に金官小京が設置されたという記事だけが簡略に出ている。

『三國史記』卷第七「新羅本紀」第七 文武王20年夏5月  
加耶郡置金官小京

『三國史記』「地理志」には、法興王19(532)年新羅に併合されて金官郡になり、文武王20(680)年に小京になって、景德王代に金海京に改称されたという記事がある。

『三國史記』卷第三十四「雜志」第三 地理3  
金海小京 古金官國[一云伽落國 一云伽耶] 自始祖首露王 至十世仇亥王  
以梁中大通四年 新羅法興王十九年 率百姓來降 以其地爲金官郡  
文武王二十年 永隆元年 爲小京 景德王改名金海京 今金州

この二つの記録で、金官伽耶の地域に金官小京が設置され、景德王代には金海という地名が使用され始めたことがわかる。その後、高麗・朝鮮時代には行政機構の整備や反乱などの事件があるごとに、県に降格されたり、都護府に昇格されたりしながら、金州・金海府・金州牧など時期によって名称の変動があった。

表2 金官小京の名称変遷

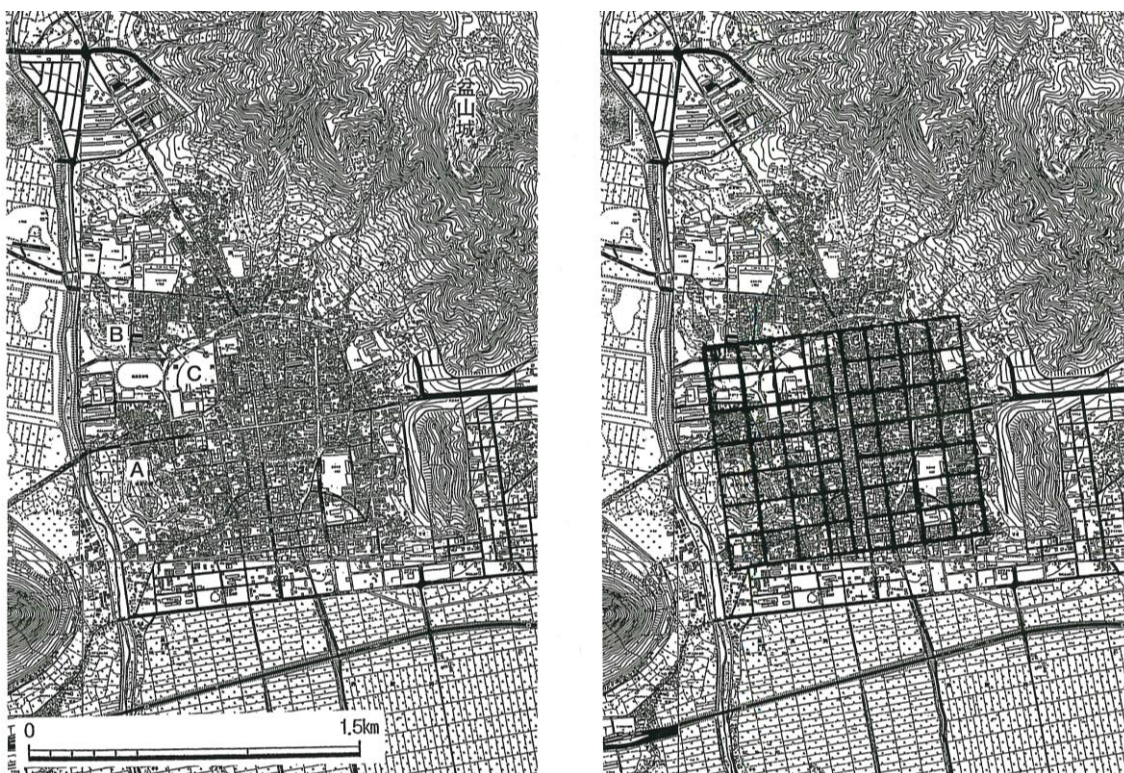
法興王19年 (532年)	文武王20年 (680年)	景德王代	高麗・朝鮮時代	現在地名
金官郡	金官小京	金海京	金州・金海府・金州牧	慶尚南道金海市

また、現在の南原の実相寺にある『秀澈和尚楞伽寶月塔碑』(893年)に秀澈が東原京の福泉寺に至り、具を潤法大徳より受けたことが記されている<sup>1)</sup>。碑文の内容の検討によると、そこに見られる東原京が金海のことを示しているという指摘がある<sup>2)</sup>。したがって、金官小京の名称に関わりがある記録といえる。

以上の記録の他に、金官小京に関連があると見られる当時の史料はない。

## (2) 既存研究の検討

統一新羅時代の金官小京に関連する研究は、九州と五小京に対する研究の中の一部として



金官小京(金海)の地形(左)と復元案  
A. 鳳凰台遺蹟 B. 大成洞古墳群 C. 首露王陵

図2 山田隆文の金官小京の方格子地割復元案(山田隆文2008、35頁、図31から引用)

1) …… 旬出至東原京福泉寺、受具于潤法大徳……(『秀澈和尚楞伽寶月塔碑』)。

2) 田中俊明 1997「新羅五小京の成立と国原小京」『古代の日本と渡来の文化』 学生社、212-214頁。

多少行われてきた(朴泰佑1987、山田隆文2008)。朴泰佑と山田隆文の研究では、朝鮮時代の金海邑城が位置している現在の金海市内地域が金官小京の中心地であると推定されている。朴泰佑は、統一新羅時代の地方都市に関する研究の中で、五小京の一つである金官小京を検討している。しかし、他の小京と比べて、金官小京の都市構造にはあまり触れていない。金海市内東北の盆城山に位置する盆山城を、三国時代に築城され統一新羅期から小京城に活用されたと見て、盆山城を小京城に比定しているだけである(朴泰佑1987)。

山田隆文は、九州と五小京の中心地に関して、地形図(東亜大學校博物館・金海市1998)に見られる方格地割<sup>3)</sup>の痕跡を通して都市構造の復元案を示している。その復元案によると、中軸大路をもつ東西8坊×南北7坊の方格地割になっている(山田隆文2008、図2)。ところが、1934年製作の旧地籍図にもとづくと、中心部に見られる中軸大路の痕跡は推定できるが、他の部分はほとんど推定できない。一方、2000年以降、活発になった発掘調査で金海市内地域の統一新羅時代の遺跡も増えていて、山田隆文が方格地割の範囲とした地域の調査も数多く実施されている。しかし、金官小京の中心地に関連する山田隆文の方格地割や都市構造が具体的にわかるような遺跡や遺構はまだ確認されていない。

## 2) 金官小京の関連遺跡

### (1) 遺跡調査の現況

金海地域中心地の地理的・歴史的環境を見ると、この地域は先史時代(新石器時代から青銅器時代)には海と接していた。それを古金海湾と呼んでいる。新石器時代の貝塚が確認され、青銅器時代には丘陵の傾斜が緩む斜面や丘陵の頂上部に当時の集落遺跡が確認されている。

また、古金海湾の沿岸部には支石墓や竪穴建物跡が数多く分布しているので、人間の集中的な居住があったと見られる。したがって、主な遺跡の遺構分布や時期を見ると、先史時代から三国時代、統一新羅時代から高麗・朝鮮時代のものが重複して検出される場合が多い。代表的な例をあげれば、金海市内中心部の鳳凰洞遺跡一帯では貝塚、竪穴建物・地上式建物、環濠、土城など多様な時期と性格の遺構が検出されている。

特に、伽耶文化整備事業によって海畔川東側の金海市内地域を中心に小規模な発掘調査が多数行われている。その結果、この地域では先史時代から三国時代までの遺跡が確認されて

---

3) 山田隆文の論文では方格地割であるが、本論文では広い意味で区画地割を使うことにした。両用語の差はほとんどない。他に、研究者によって土地区画や格子型土地区画などの用語も使われる場合がある。

いて、調査事例が少なかった統一新羅時代～朝鮮時代の遺跡も増えている。

ところが、金海地域の金官小京に関連する調査と研究や金官小京の都市構造に関連する調査と研究は進展が見られない。その理由としてはもちろんいろいろあげられるが、何よりも小規模な発掘調査が多いことが一番の原因である。すなわち、調査が小規模に行われているので、関連遺構が検出されていても、限られた範囲の調査ではその分布や性格が非常にわかりにくい。また、小規模な調査は調査機関も多様であり、調査期間も限定されている。したがって、遺跡の範囲を把握するのも難しく、充実した分析や研究が十分にできないのである。まさに、都市構造の研究のためには望ましくない状況である。それゆえ、小京関連資料の分析や検討は総合的に行われるべきである。

## (2) 関連遺跡の検討

金官小京の中心地と推定される海畔川東側の小京に関連する遺跡に関しては、調査事例も検出遺構の数も多くはない。特に、金官小京の中心地の証拠になる関連遺構の調査と報告はほとんどなかった。

しかし、金海地域の考古学調査が増えるにしたがって、高麗・朝鮮時代の邑城の外部を囲んでいると推定される土城の存在が実際の調査で確認されることになった。金海地域と関連がある城郭の築城記録は、朝鮮時代までほとんど確認できない。朝鮮時代の世宗代・文宗代になって邑城の築城記録が見られるが<sup>4)</sup>、土城に関しては文献史料には見られない。

ところが、1750年代に作製された『海東地圖』、1820年に作製された『金海府内地圖』(図3)などの古地図には、朝鮮時代前期に築城された邑城の外部を囲むような城郭が描かれている。古地図はもちろん、実際の距離や面積が縮約されている。『海東地圖』には「首露王時而築土城」、『金海府内地圖』には「土城」という文字が書かれているので、高麗時代や朝鮮時代の石城ではなく、土城の存在が確認されるのである。この土城の築城記録はなく、土城が実際にどの時期まで使用されたのかは不明であるが、少なくとも古地図が作製された18～19世紀までは古地図に描けるほどの土城あるいはその痕跡が残存していたことになる。

両地図のうち、早い時期の『海東地圖』では首露王陵と首露王妃陵、郷校など現在の位置がわかるところが土城の外側に描かれている。

一方、『金海府内地圖』では首露王陵と郷校は土城と邑城の間であって、首露王妃陵が土城の外側になっているので、この地図のほうがかきわめて正確に描いているといえる。古地図

に表示されている土城は実際に2006年の調査でその実態が確認され、2008年の報告書から

---

4) 『世宗實録』卷六十五、十六年八月。『文宗實録』卷九、元年九月。



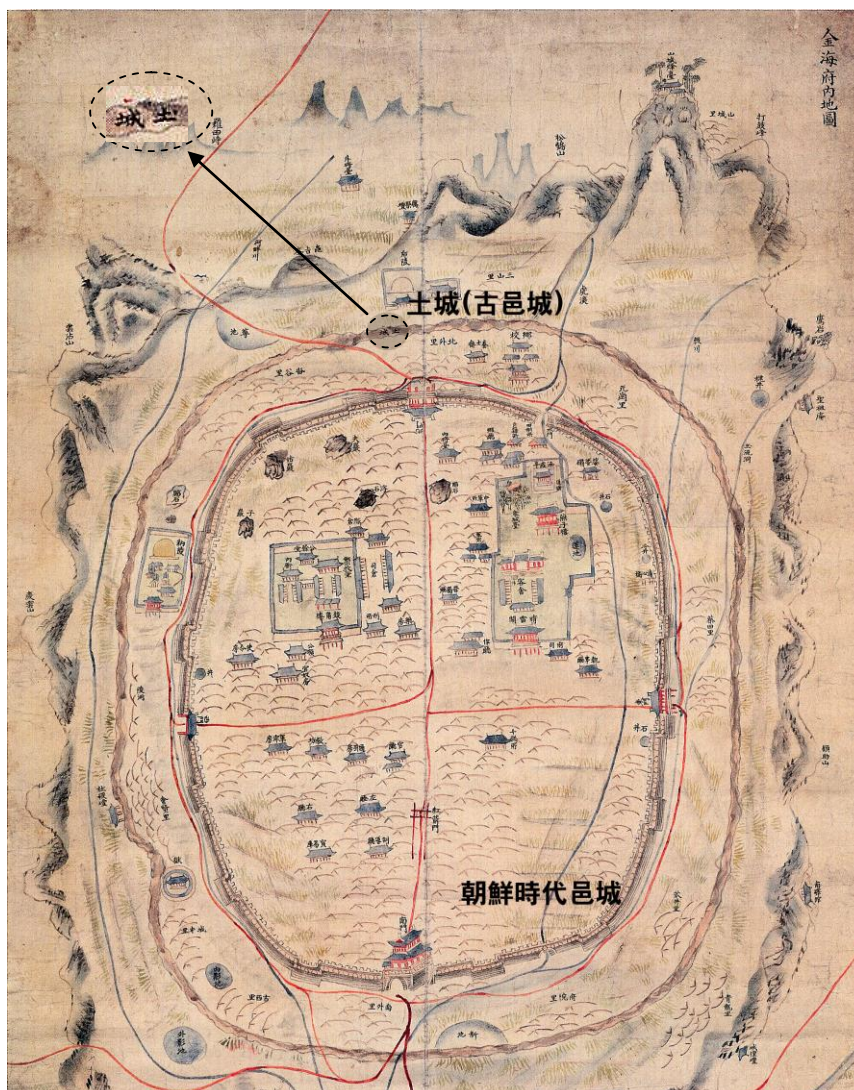


図3 『金海府内地圖』(筆者再編集)

表3 金海古邑城の関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	調査機関
①	金海古邑城 (金海図書館敷地遺跡)	2006年	1,645㎡	高麗	(財)東亞細亞文化財研究院(報告書)
②	金海鳳凰洞220-16番地遺跡 (金海鳳凰洞土城址)	2008年	242㎡	統一新羅、高麗、朝鮮	(財)東西文物研究院(報告書)
③	金海伽耶寺 造成駐車場敷地遺跡	2010年	1,577㎡	三国、高麗	(財)慶南文化財研究院
④	金海大成洞195番地 共同住宅敷地遺跡	2011年	458㎡	高麗、朝鮮	(財)頭流文化財研究院
⑤	金海鳳凰洞217-7番地遺跡	2012年	220㎡	高麗、朝鮮	(財)韓国文化財財団(報告書)
⑥	住宅開発敷地立会調査	2012年	?	?	金海市

金海古邑城の名称が初めて使われることになった。その後、金海古邑城の西側・南側・北側にあたる一部地域で発掘調査が行われてきた(図4、表3)。

それでは、調査で確認された金海古邑城関連遺構を、金官小京の中心地を囲む関連城郭として検討してみよう。



図4 金海古邑城関連遺跡分布(①~⑥は表3に一致)

- ①金海古邑城 ②金海鳳凰洞220-16番地遺跡 ③金海伽耶寺造成駐車場敷地遺跡
- ④金海大成洞195番地共同住宅敷地遺跡 ⑤金海鳳凰洞217-7番地遺跡 ⑥住宅開発敷地立会調査

### (3) 金海古邑城関連遺跡

#### ① 金海古邑城(金海図書館敷地遺跡)(図5)

遺跡の位置は金海古邑城の西側城壁にあたる。金海古邑城の関連遺跡の中で、調査範囲がもっとも広い。この調査から金海古邑城の名称が使われている。また、現時点では金海古邑城の内壁と外壁両方の基壇石築が検出されている唯一の遺跡である。報告書によると、土城は初築後も長期間にわたって、補修と改築が行われたことが指摘されている。

内壁と外壁両方の基壇石築が検出されているので、基壇石築の内外壁の間の幅(約900～920cm)が推定できる。金海古邑城の性格としては、基壇石築を階段式に構築している基壇石築型版築土城であり、統一新羅の土城<sup>5)</sup>と築城方法が同一であると見られている(東亞細亞文化財研究院2008)。

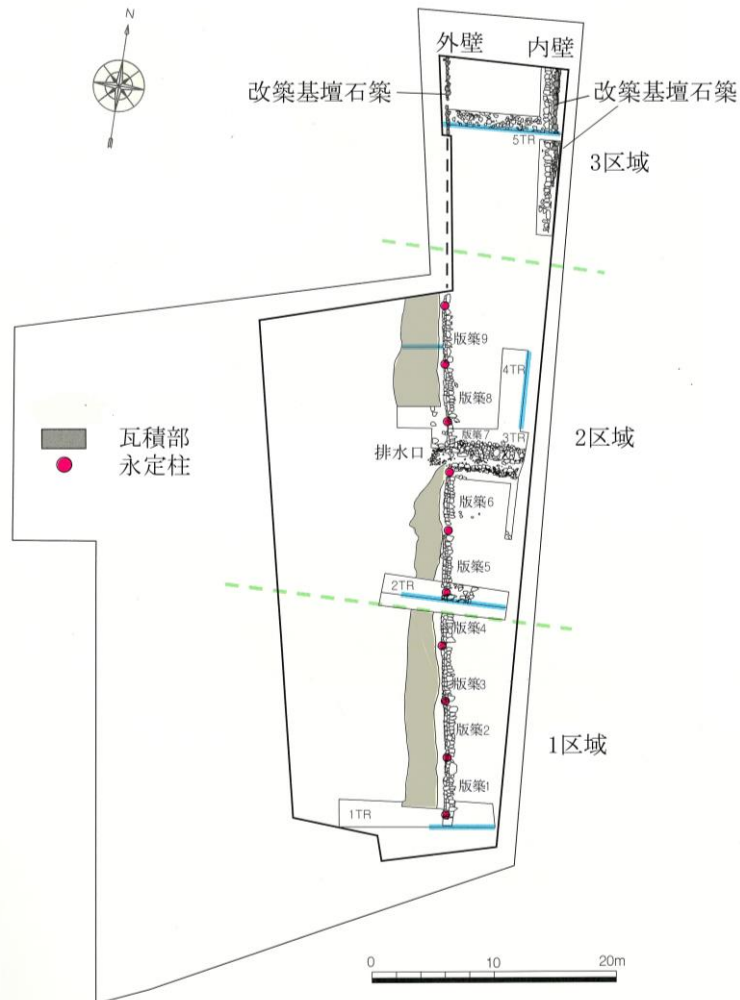


図5 金海古邑城の遺構配置(東亞細亞文化財研究院2008、30頁、図面4、筆者再編集)

5) 報告書では東萊古邑城(釜山)・木川土城(天安)・神衿城(洪城)などと比較している。

## ②金海鳳凰洞220-16番地遺跡(図6)

調査では金海古邑城の南側城壁が確認されている。当初は鳳凰洞土城の一部として発掘調査された。遺構は金海古邑城の南側城壁の内壁基壇石築と体城<sup>6)</sup>が検出されている。土城の基壇石築の築造方法や基底部の造営方法は、2006年調査の金海古邑城と同じである。基壇石築から出土している土器と瓦の時期は7世紀中・後葉である。また、永定柱<sup>7)</sup>の木材のAMS分析は740年と820年である

したがって、報告者は初築年代を統一新羅時代と見ている。また、遺物として「南南」銘の瓦が出土している(東西文物研究院2010)。

## ③金海伽耶寺造成駐車場敷地遺跡(図7)

調査では金海古邑城の西側城壁の内壁基壇石築が検出されている。他の金海古邑城関連遺跡と同じ形態の3段の基壇石築と版築の築造方法が推測できる。基壇石築の石材は1次加工された割石であり、永定柱は五つ確認され、その間隔は約450~460cmである。土城の基壇部の下層で三国時代の木棺墓が検出されているのが特徴である(慶南文化財研究院2010)。

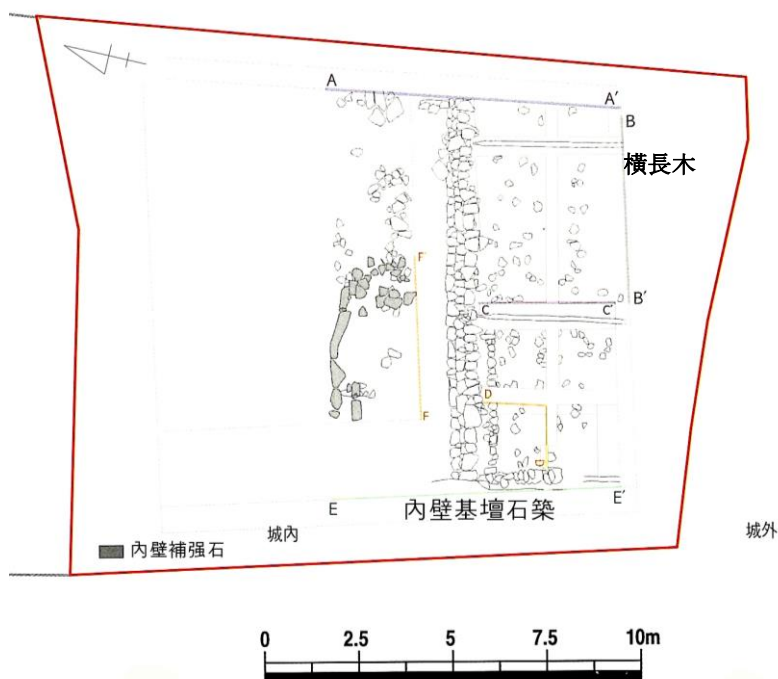


図6 金海鳳凰洞220-16番地遺跡の遺構配置(東西文物研究院2010、26頁、図面3の一部、筆者再編集)

6) 基底部である基壇石築の上部に版築で造成された土城の城体部分(図10参照)。

7) 土城の基底部と体城の築造時、版築の土砂の崩れを防ぐため、板木を架構する。その板木(註8参照)を固定する木柱のこと。北宋時代の李誠が編纂した建築関連書籍『營造法式』に出ている名称である。高龍圭 2001「韓國 南部地域 版築土城斗 研究」『古文化』第58輯 韓國大學博物館協會。

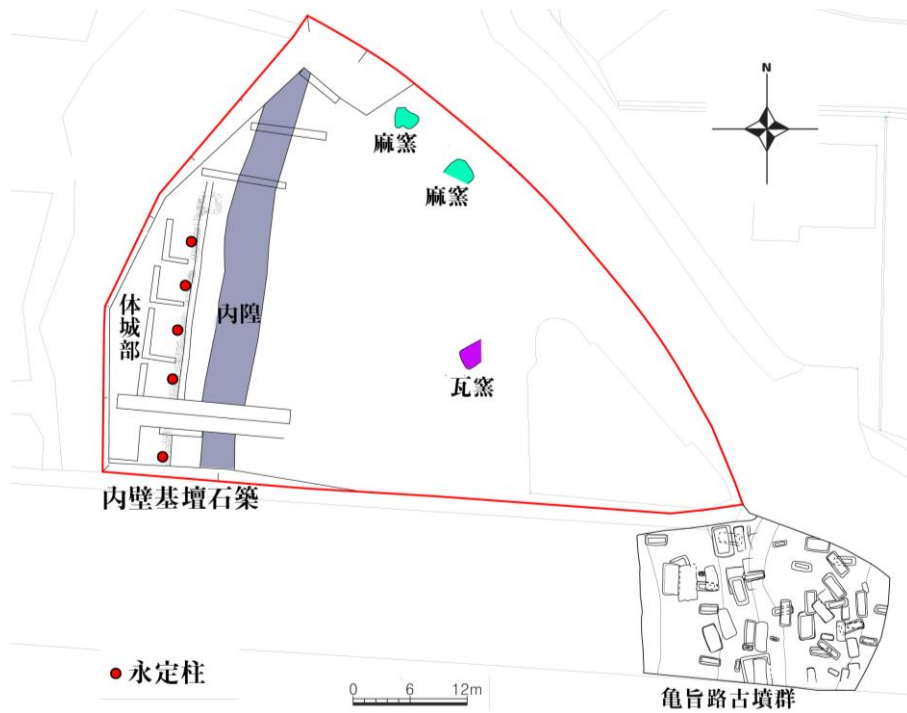


図7 金海伽耶寺造成駐車場敷地遺跡の遺構配置(慶南文化財研究院2010、図面1、筆者再編集)

#### ④金海大成洞195番地共同住宅敷地遺跡(図8)

調査では金海古邑城の北側城壁の外壁基壇石築が検出されている。調査の結果、体城は東西方向に確認された。

基壇石築は3段で、内部は砂質粘土で版築されている。永定柱の間隔は約380cmで、他の金海古邑城関連遺跡より狭いが、検出された遺構の立地が丘陵の近くにあるのが原因と見られる。

遺物は瓦がほとんどであり、「北面」銘の瓦が出土している。瓦の時期はだいたい高麗時代にあたり、後の土城使用時期である高麗時代と関連すると見られている。しかし、初築時期は基壇石築の築造方法が既調査の金海古邑城遺構と同一であるので、統一新羅時代と推定された(頭流文化財研究院2011)。

#### ⑤金海鳳凰洞217-7番地遺跡(図9)

調査された遺跡は金海鳳凰洞220-16番地遺跡の東側に位置している。遺構は金海古邑城の南側城壁の外壁基壇石築が検出されている。基壇石築は1次基壇石築と改築された2次基壇石築が検出されている。1次基壇石築で横長木<sup>8)</sup>が四つ確認されている。基壇石築の補強

8) 土城の基底部と体城を築造する際、版築される土砂の崩れを防ぎ、城壁の厚さと版築の高さを一定にするために、一定の区間に木材の板を土城に対して平行に使用する(板木)。版築土の圧力で板木と永定柱が均衡を失うことを防ぎ、内壁と外壁の永定柱をつないで支える役割をする木材のことである(図6・9参照)。

土には、暗褐色砂質粘土、黒褐色砂質粘土を使用している。

遺物は体城の基壇部から統一新羅時代の土器片が少量出土しているが、ほとんど瓦であり、「右徒(?)成子草」・「大平萬歳」・「東面」銘の瓦が出土している(한국문화재단2015)。

#### ⑥住宅開発敷地立会調査

2012年の住宅開発敷地に対する立会調査では基壇石築が確認された。調査地は金海古邑城の東側城壁に該当する。

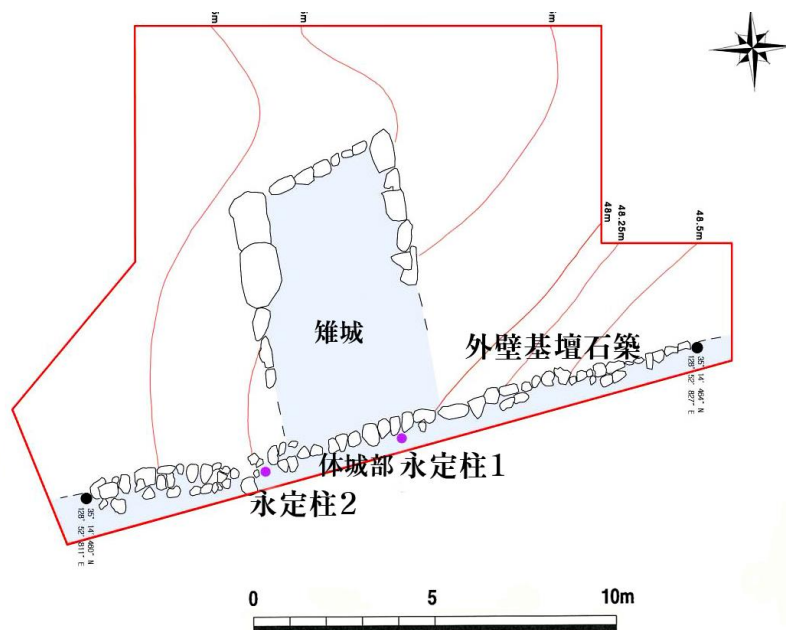


図8 金海大成洞195番地共同住宅敷地遺跡の遺構配置(頭流文化財研究院2011、25頁、図面5、筆者再編集)

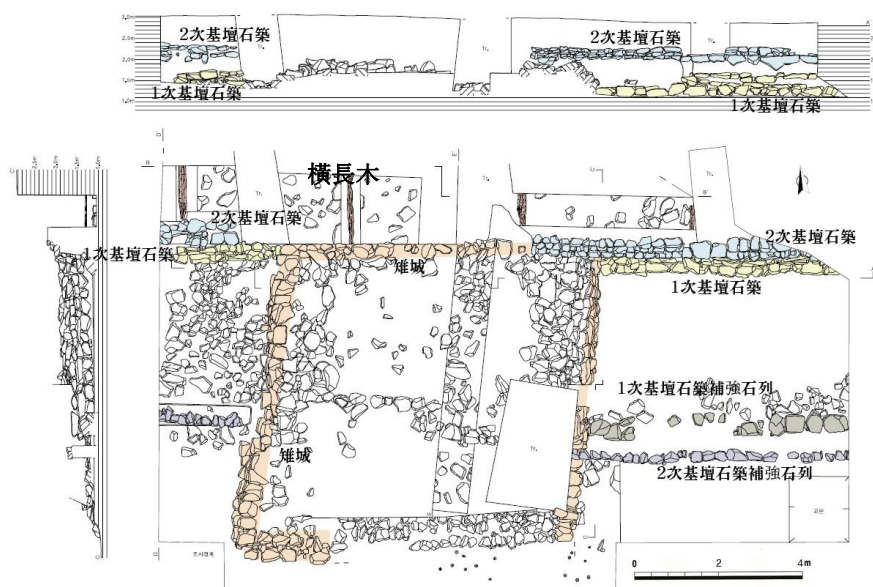


図9 金海鳳凰洞217-7番地遺跡の遺構配置(한국문화재단 2015、175頁、図面5の一部、筆者再編集)

### 3) 金海古邑城の考古学的分析

#### (1) 金海古邑城の立地

金海古邑城が立地している金海市内地域は、北東側が盆城山(332m)の末端部であり、西側に海畔川が流れ、南側は洛東江三角州の湾入部にあたる。全体的には海拔17m内外で、高低差はあまりないが、北東側が高く、南西側が低い緩やかな微高地性地形である。したがって、海拔が高い北東側は現代の生活面によって包含層が大きく削平されていて、遺構の残存する可能性が低い。しかし、海拔が低い南西側は土城の体城部を中心に盛土され、遺構が残存している可能性が高い。

#### (2) 金海古邑城の造成

海拔が低い南西側に立地する土城の基底部造成は、きわめて重要な工程である。基底部は基盤層である砂質土または砂質粘土を整地してから基壇石築を構築し、体城の幅を設定している。基壇石築には約430～460cmの間隔で永定柱と横長木を構え、10～20cmの厚さの貝殻粘質土と粘土を交互に版築して、60cmの高さで基底部が造成されている。

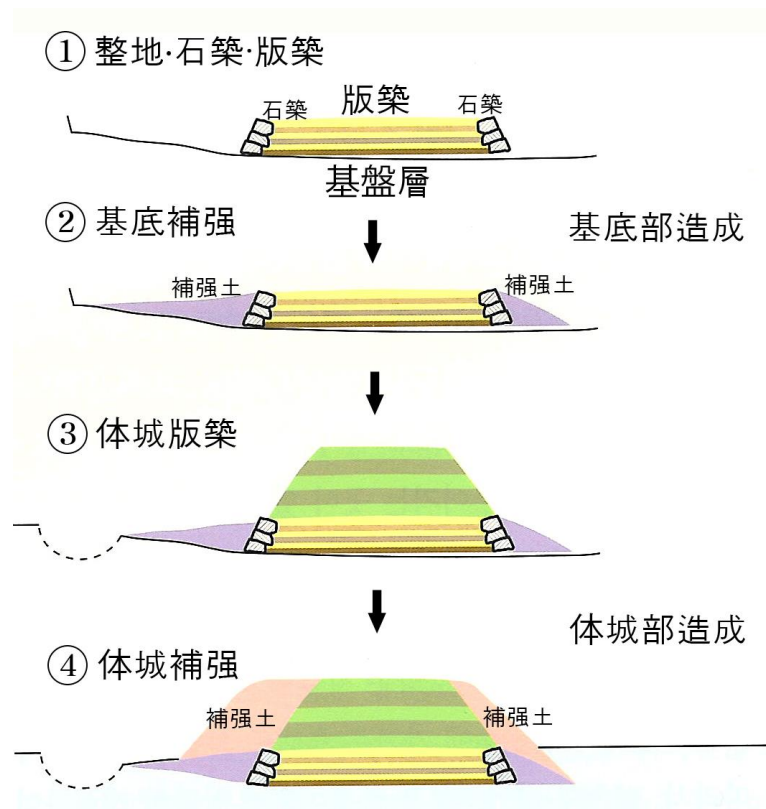


図10 土城の造成模式図(東西文物研究院2010、82頁、挿図4、筆者再編集)

基壇石築は3段検出されている。使われた石材は20～40cmの長さの1次加工した割石であり、外部に向かった面は整えられている。基壇石築内部の版築土層を見ると、貝殻が混じっていることが確認される。さらに、基壇石築に補強が行われ、基底部の造成工程が完了する。

体城部造成は、版築による体城の造成から始まる。そして、体城を造成してから補強が行われたことが確認された。特に体城の内外壁面の補強には瓦の混入土が使用されている。瓦の混入土が使用された体城の内外壁面の補強は数回行われ、修築や改築の時期と関連することが考えられる。

結果として、金海古邑城の関連調査では、ほぼ類似した形態の基壇石築が見られる。各遺跡の検討の結果、土城の造成は次のようになる(図10)。

### **基底部造成**

①砂質土または砂質粘土の基盤層(三国時代の文化層)→整地→基壇石築構築→基壇石築内の版築土造成

②基壇の補強土造成

### **体城部造成**

③版築による体城構築

④体城の内外壁面の補強土造成

基本的な土層の様相は同じであるが、地形によって多少違いが出ているところもある。また、階段式の3段の基壇石築の築造方法、粘土の版築方法、同じ間隔の永定柱の使用など、共通点が見られる。ほぼ同じ時期に同じ方式で築造された可能性が高いと思われる(表4)。

### (3) 出土遺物の検討

土城の築城時期を判断する場合、出土遺物を出土位置から分析する必要がある。特に、基底部や基壇石築で検出された土器の時期が注目される。

金海古邑城では基底部の下文化層から三国時代の土器片が出土している。また、基底部・瓦積部・排水口から出土した土器がだいたい6～7世紀と9～10世紀に編年できる。瓦は統一新羅時代のものもあるが、高麗時代前・中期のものが多数である。

金海鳳凰洞220-16番地遺跡では出土遺物は多くないが、基底部から出土した土器がだいたい7世紀中葉に編年されている。また、体城の内壁の補強土から出土した瓦は7～8世紀のものと分析された(図11)。



金海古邑城関連遺跡から出土した遺物では、瓦が多数を占めている。特に、方位が書いてある銘文瓦がいずれの遺跡でも出土している。この銘文瓦によって、金海古邑城は東西南北の城壁をもつ方形の城郭であったことは確かであると考えられる。しかし、瓦の時期を検討すると、ほぼ高麗時代になってしまう。土城の初築時期とは直接的に関係がなく、改築時期の高麗時代に関係するものであると推定されるが、初築時期の地名や名称と関係がある可能性もあるので、検討の余地がある。

表4 金海古邑城の特色

	遺跡名	調査面積	基壇石築	永定柱の間隔	特徴
①	金海古邑城 (金海図書館敷地)	1,645m <sup>2</sup>	3段	検出 10 430~460cm	初築、改築の基壇石築、 内外壁基壇石築 「城西面屬瓦」・「城子草」銘瓦など
②	金海鳳凰洞220-16番地遺跡 (金海鳳凰洞土城址)	242m <sup>2</sup>	3段	検出 5 430~460cm	体城、内壁基壇石築 「南南」銘瓦など
③	金海伽耶寺 造成駐車場敷地遺跡	1,577m <sup>2</sup>	3段	検出 5 450~460cm	体城、内壁基壇石築
④	金海大成洞195番地 共同住宅敷地遺跡	458m <sup>2</sup>	3段	検出 2 380cm	体城、外壁基壇石築
⑤	金海鳳凰洞217-7番地遺跡	220m <sup>2</sup>	2~3段	検出 4? 400cm	土城の基壇石築(1次・2次) 外壁基壇石築

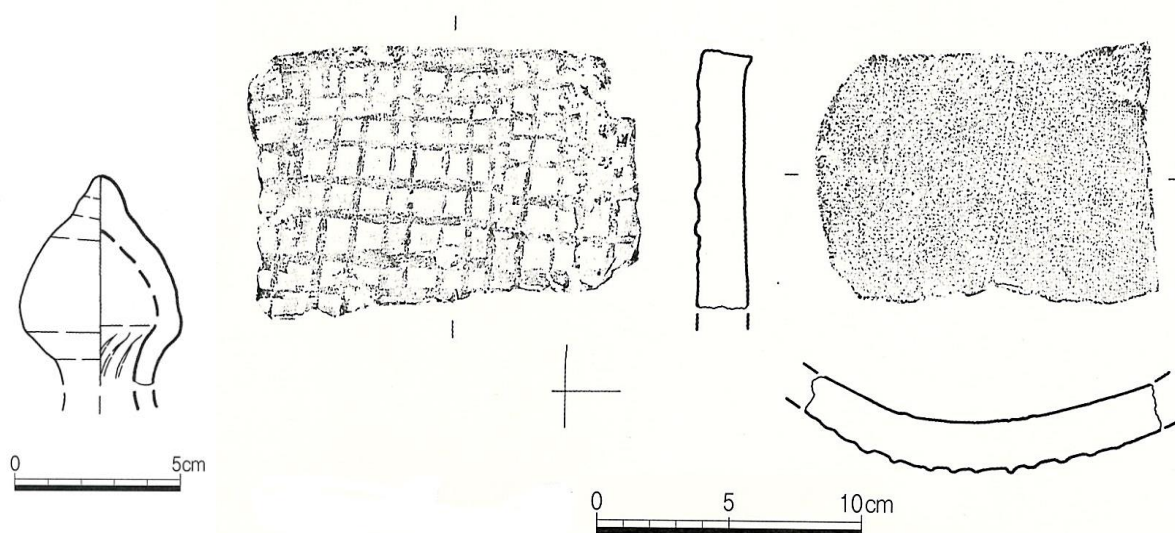


図11 金海鳳凰洞220-16番地遺跡の出土遺物  
(東西文物研究院2010、宝珠形つまみ:40頁挿図、瓦片:64頁挿図、筆者再編集)

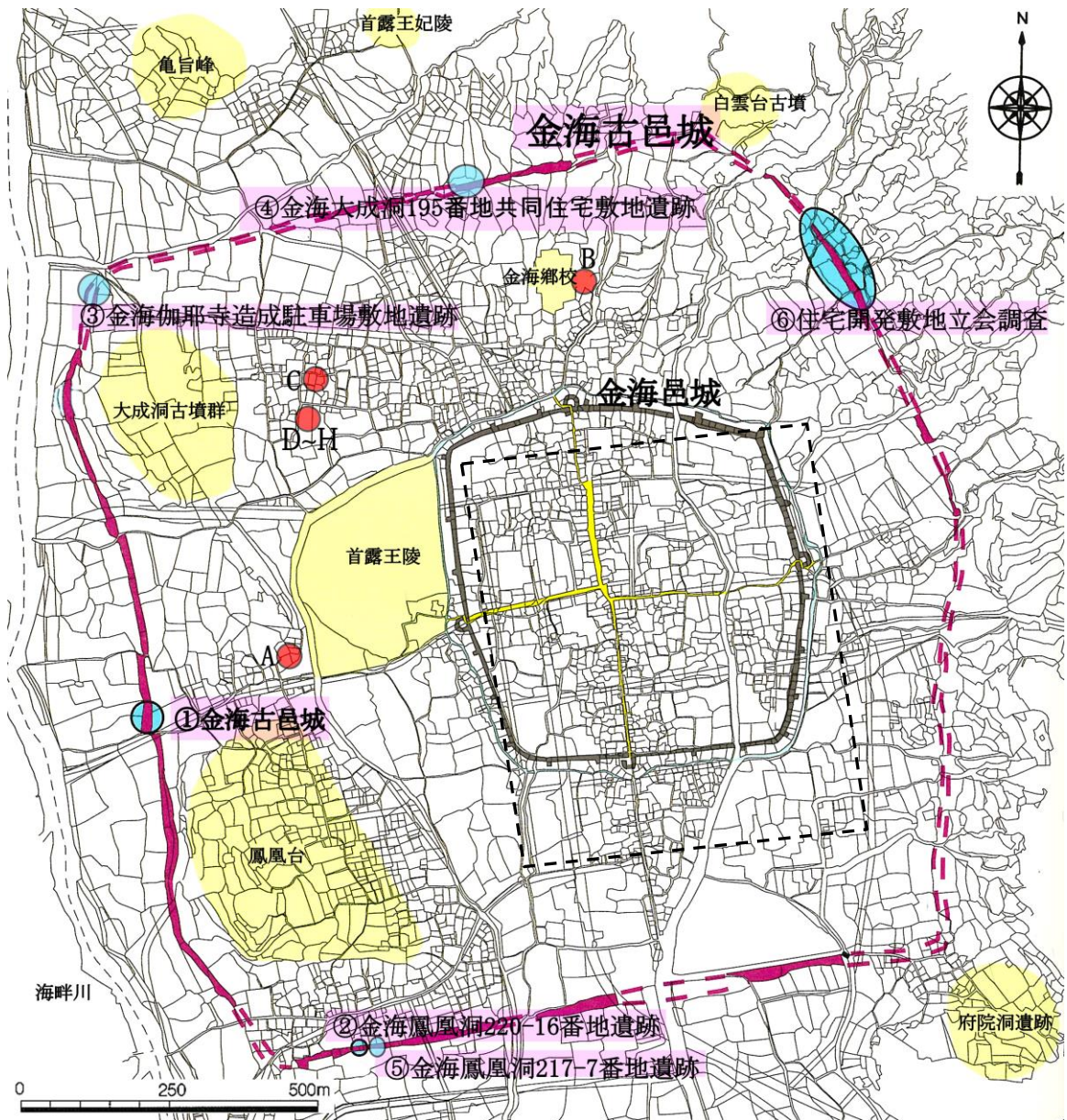


図12 金海古邑城関連遺跡分布(1934年製作の旧地籍図) [ ]は図15の[ ]と同じ  
 (東亞細亞文化財研究院2008、172頁、図面15、筆者再編集)

#### (4) 金海古邑城の運営時期

金海古邑城の発掘調査は2006年が最初で、関連遺跡は現在まで5遺跡が確認されている。その5遺跡すべてで、土城の基底部である基壇石築が検出されている。その中で、正式な報告書が刊行されている遺跡は3箇所である。しかし、初築時期については調査機関によって、また報告書によって見解が異なっていることもある。遺構や遺物の分析から築城年代が多少異なっているが、土城が築城されてから修築や改築が数回行われたことや、土城が高麗時代にも使用されていたことの認識は各報告書とも同じである。

ここで分析が可能な以下の報告書を比較して、土城の初築年代や運営時期を検討してみる。

東亞細亞文化財研究院2008『金海古邑城』(以下、2008報告書)は、最初の金海古邑城の発掘調査報告であり、土城の外壁と内壁の基壇石築が検出されている唯一のものであるため、きわめて注目される。土城の築城年代は遺物の編年と永定柱の木材のAMS分析をもとに考察されている。基底部・瓦積部・排水口から出土した土器はだいたい6～7世紀と9～10世紀に編年できる。瓦は統一新羅時代のものもあるが、高麗時代前・中期のものが多数であると分析している。また、永定柱の木材のAMS分析ではだいたい10～12世紀の推定年代が出ている。永定柱の木材のAMS分析と出土遺物から土城の築城時期は10世紀以降に推定されているが、6～7世紀の土器が出土していることから、築城年代が6世紀～11世紀の間にある可能性にも言及している。

東西文物研究院2010『金海鳳凰洞土城址』(以下、2010報告書)は、2008年に行われた金海鳳凰洞220-16番地遺跡の発掘調査報告で、調査当初は金海古邑城の認識はなかった。しかし、この報告書は上述の2008報告書を分析しながら作成されたので、より多様な検討が行われたと思われる。また、2010報告書は検出された土城の遺構を2008報告書の遺構と基本的に同一であると認識している。土城の築城年代は、遺物の編年と永定柱の木材のAMS分析をもとに考察されている。基底部・補強土から出土した土器がだいたい7世紀、瓦は7～8世紀のものが出土していると分析されている。また、永定柱の木材のAMS分析では740年と820年の推定年代が出ている。したがって、遺物の編年と永定柱の木材のAMS分析から築城年代を統一新羅時代に推定している。

韓国文化財財団(한국문화재단)2015『金海鳳凰洞217-7番地遺跡(김해 봉황동 217-7번지 유적)』(以下、2015報告書)は、金海鳳凰洞220-16番地遺跡の東側に隣接した金海鳳凰洞217-7番地遺跡の発掘調査報告である。土城の外壁部の1次・2次の基壇石築が検出されている。土城の基底部から少量の土器片、基壇石築から高麗時代の瓦が出土している。したがって、土城の機能が維持された中心年代を高麗時代に推定している。

各報告書は調査地が土城の西側になるのか南側になるのかということ以外には、全体的に共通点が多数存在している。基壇石築の築造方法が基壇石築型版築土城であること、修築や改築方法、瓦の出土様相、永定柱の検出とその間隔など、多様な面で共通している。

ところが、2008・2015報告書と2010報告書の最大の相違は、調査された地点が土城の基壇石築の内壁にあたるのか外壁にあたるのかという点である。調査された土城の基壇石築が同じ築造方法であっても、2008報告書では基壇石築の内壁と外壁の両方が検出されているが、分析対象の瓦の出土位置や修築と改築の遺構面はすべて外壁基壇石築の外側である。2015報

告書でも1次・2次の基壇石築ともに外壁基壇石築である。

一方、2010報告書では検出された土城の遺構は内壁基壇石築だけであり、分析もその内壁の内側である。さらに、築造年代の判断材料になる基壇石築からの出土遺物や木材のAMS分析の年代などについても、修築や改築と関わりがある可能性があるため、注目される。土城の一部区間が洪水などの理由で流失し、基壇石築まで修築と改築が行われた場合、その築城年代や使用時期を判断できないかもしれない。

したがって、2008報告書の分析は、改築時期と関連する資料に依拠している傾向があると思われる。また、2008報告書では遺物の編年と木材のAMS分析の年代も違う結果が出ていることがわかる(表5)。

各報告書の遺物の編年と永定柱の木材のAMS分析の推定年代が異なるので、土城の築城年代や運営時期を判断するのは困難である。しかし、各報告書では遺物の編年から土城の築城年代を統一新羅時代に推定することも可能であると言及されている。さらに、金海鳳凰洞220-16番地遺跡(金海鳳凰洞土城址)の基礎石築の基底部から7世紀中・後葉の土器が出土している。8世紀以降の土器の出土は見られないことから、金海古邑城の築城時期が推定できる。

表5 金海古邑城関連の報告書比較

	内容	2008報告書	2010報告書	2015報告書
1	基壇石築の築造方法	階段式(3段) 430(490)cm×300(600cm) 区間版築	階段式(3段)	階段式(3段)
2	修築や改築方法	修築時瓦積部 改築痕跡	修築時瓦積部 修築痕跡	1次 基壇石築 2次 基壇石築
3	永定柱と間隔	検出 10、430～490cm	検出 5、430～460cm	痕跡検出 1
4	検出遺構	土城内壁・外壁の基壇石築	土城内壁の基壇石築	土城外壁の基壇石築
5	関連出土遺物	土器類21点 「城西面屬瓦」 銘瓦など	土器類 「南南」 銘瓦など	土器類 「右徒(?)成子草」 銘瓦など
6	分析	AMS分析 永定柱の木材	AMS分析 永定柱・横長木の木材	
7	編年	遺物 土器 6～7世紀 9～10世紀 瓦 高麗前・中期  AMS分析 基底部 木柱 965～1180A. D. 永定柱4 1000～1205A. D. 永定柱5 1020～1225A. D. 永定柱8 955～1170A. D.	遺物 土器 基底部 4～5世紀 基礎部 7世紀中葉 瓦 内壁補強土 7～8世紀 内壁生活面 11～12世紀 AMS分析 永定柱 740A. D. 横長木 820A. D.	遺物 瓦 高麗前・中期

また、遺物の編年や木材の AMS 分析の年代の他にも、基壇石築の築造方法や版築方法が統一新羅時代に築城された他の土城と類似していること(慶南文化財研究院 2007)に注目したい。結局、金海古邑城の初築時期は統一新羅時代の金官小京の設置時期と関連するものと見ることがより合理的であると考えられる。

#### 4) 統一新羅時代の関連遺跡

以上で、金海古邑城を金官小京に関連する城郭として検討してみた。ここからは土城以外に金官小京と関連する遺跡を検討してみよう。しかし、金官小京の中心地と推定される金海古邑城の内側の地域では、金官小京と関連する遺跡の調査はあまり行われていない。実際に調査された遺構のうち、金官小京との関連性を推定できるような統一新羅時代の遺構もほとんどが竪穴遺構・柱穴群であって、直接的に関連する事例の報告はない(図12、表6)。

統一新羅時代の関連遺跡は9箇所が報告されているが、実際には表6のD～Hは同じ遺跡なので、5箇所であると見てもよい。報告されている遺跡の位置は、主に金海古邑城の内側の北西地域に集中している。また、各遺跡は青銅器時代から高麗・朝鮮時代の遺構が複合的に検出されているのが特徴である。金海鳳凰洞韓屋体験館造成敷地遺跡では竪穴遺構・溝遺構・柱穴なども検出された他に、横穴式石室墳が1基だけ検出されているが、その性格は明らかではない。

表6 金海市内地域の統一新羅時代関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構
A	金海鳳凰洞 韓屋体験館造成敷地遺跡	2004年	3,995㎡	三国、統一新羅 高麗、朝鮮	横穴式石室墳1
B	金海東上洞・大成洞遺跡	2004年	136㎡	青銅器、三国 統一新羅	建物跡1、石列3 溝遺構1
C	金海東上洞 消防道路開設区間遺跡	2005年	592㎡	統一新羅、高麗	竪穴遺構、溝遺構
D	金海大成洞住宅敷地遺跡	2010年	2,648㎡	青銅器、三国 統一新羅	竪穴遺構、柱穴 石列
E	金海大成洞402-4番地遺跡	2011年	199㎡	統一新羅 高麗、朝鮮	竪穴遺構6、溝遺構1 柱穴
F	金海大成洞402-10番地遺跡	2011年	199㎡	青銅器、統一新羅	柱穴群
G	金海大成洞402-12番地遺跡	2012年	250㎡	青銅器、統一新羅、朝鮮	竪穴遺構1、柱穴13
H	金海大成洞402-13番地遺跡	2012年	225㎡	青銅器、統一新羅、朝鮮	竪穴遺構1、柱穴2
I	盆山城	2010年	382㎡	三国、統一新羅、朝鮮	門跡、体城

金海市内東北の盆城山に位置する盆山城は高麗・朝鮮時代に修築・改築され、記録もあるが、城郭の立地や出土遺物から三国時代に初築されたと見られている。実際の調査は1998年から2012年まで5回行われ、城壁と門跡などが確認された(東亜細亞文化財研究院2013)。調査では三国時代末～統一新羅時代の初築城壁と遺物が確認され、三国～統一新羅時代にも城郭として使用されていたことがわかった。

朴泰祐は盆山城を金官小京城に比定しているが、その根拠はあまり示されていない。実際に山城の位置から見ると、市内北部からの近接性はあるが、金官小京の治所城として活用されたとは思えない。しかし、山城は可視圏が優れていて、市内地域との近隣性からも重要な立地である。したがって、金官小京の防禦に関連する城郭であったと見るべきである<sup>9)</sup>。

一方、金海古邑城の内側に統一新羅時代の建物群や市街地の痕跡が検出されていないので、具体的な都市構造の検討ができない。金官小京の都市構造や中心地がわかる証拠としては、小京内の主な施設である大型建物跡、区画地割の痕跡である道路関連遺構、またその中の市街地の痕跡である密集した建物跡などが必要である。その他にも小京関連の寺院などの仏教遺跡や瓦窯などの生産遺跡なども必要である。現段階では金官小京の中心地を説明できるような、直接的な遺跡・遺構は残念ながらない。

ところで、金海古邑城の内壁基壇石築が検出されている金海鳳凰洞220-16番地遺跡の北側に隣接した金海鳳凰洞220-3・5・9番地遺跡の発掘調査で高麗・朝鮮時代の建物跡群が検出されている(東西文物研究院2011)。金海鳳凰洞220-3・5・9番地遺跡の文化層は二つあり、

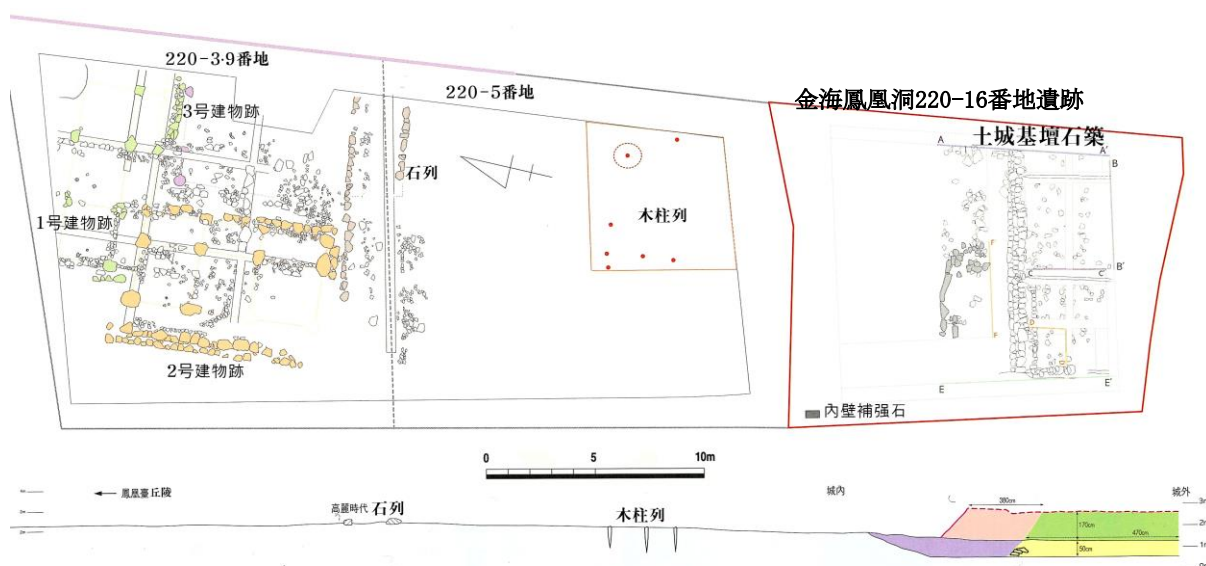


図13 金海鳳凰洞220-3・5・9番地(Ⅱ文化層、高麗時代)・220-16番地遺跡(統一新羅時代)の遺構分布(東西文物研究院2010、26頁、図面3、筆者再編集)

9) 朴泰祐は平地の城郭と連携する城郭運用(母子式城郭)をしたと分析している。

I 文化層は調査地の南側(220-5番地遺跡)で朝鮮時代の建物跡と溝遺構が検出されている。  
II 文化層は調査地の北側(220-3・9番地遺跡)で、高麗時代の建物跡3基、石列などが検出され、調査地の南側(220-5番地遺跡、金海古邑城遺構の北側隣接)で木柱列が検出されている(図13)。南側の木柱列は軟弱地盤を強化する機能を有するので、木柱列のすぐ南側にある金海鳳凰洞220-16番地遺跡の金海古邑城に関連する遺構の可能性がある。

検出された高麗時代の建物跡3基のうち、1・3号建物跡は調査地の外側まで遺構がのびているので、その正確な形態や規模は不明である。1・2号建物跡は、残存様相から見ると、規模と形態が類似していて、直交している。注目されるのは出土した遺物である。II文化層では青磁と瓦が多数を占めているが、銘文瓦が建物跡から出土している。「南丁」・「白丁」・「東北」・「北面」・「北面癸」・「丁亥年金海<sup>府</sup>」・「客舎<sup>桃</sup>」・「東面」・「南南南」などが確認された。金海鳳凰洞220-3・5・9番地遺跡の報告書では、丁亥年は12世紀中葉(1167年)あるいは13世紀前葉(1227年)に該当するとされている。銘文瓦は金海古邑城関連遺跡から出土しているものと類似しているが、文字の種類は多様である。金海古邑城は高麗時代にも修築・改築が行われ、実際に使用されていたので、その時の関連遺物である可能性が高い。銘文瓦には多様な文字が見られるので、検討が必要であり、高麗時代の建物跡と関連しているとすると、金海古邑城関連遺跡(表4)から出土した方位が押印されている瓦の分析にも参考になる。

また、金海古邑城が高麗時代に使用されていた時の金海鳳凰洞220-3・5・9番地遺跡にある石列と建物配置は注目できる。高麗時代の石列および建物配置は統一新羅時代から整備された可能性がある。したがって、高麗時代の石列と建物配置から、統一新羅時代の土城とその内側の構造が推定できる可能性がある。

図13を見ると、高麗時代の石列および建物配置と金海古邑城の城壁とは並行せず少しずつれているのがわかり、その点が問題である。さらに精密な検討が必要であるが、これからの金海古邑城の内部構造の研究でも、検出例が少ない統一新羅時代の遺構だけではなく、高麗・朝鮮時代の遺構と市内各地域で行われた多数の小規模な調査事例を参考にしなければならない。

## 5) 金官小京の都市構造の検討

### (1) 金海古邑城の性格

以上、金海市内地域の金官小京と関連があると推定できる遺跡を検討してみた。その中で

も、最近の調査で確認されている金海古邑城を金官小京と関連する城郭に比定できるかどうかを主に検討してみた。金海古邑城の関連遺跡として調査された遺跡は5箇所であり、そのうち報告書が刊行されている3箇所を前項で詳しく分析した結果、以下のことがわかった。

まず、各遺跡で確認された金海古邑城の基壇石築の築造方法は基壇石築型版築土城であること、永定柱の検出などによって築城方法は他の地域の統一新羅時代の土城と類似していることがわかった。また、金海古邑城の基壇部より統一新羅時代の遺物が出土し、永定柱の木材のAMS分析でも統一新羅期の年代が出ている。

もちろん、土城の築城方法と遺物の編年、永定柱の木材のAMS分析から導き出された金海古邑城の築城時期をそのまま金官小京の設置時期とするにはまだ困難が伴う。さらに、金海古邑城の各遺構から出土する遺物と木材のAMS分析から見ると、金海古邑城が高麗時代にも運用されたことが確認できる。しかし、築城方法と出土遺物の編年、永定柱の木材のAMS分析などの検討から、金海古邑城が統一新羅時代に築城されたことは確かであるといえる。

一方、金官小京は五小京の中でただ一つ築城記録がない小京であるが、記録がなくても一般的には州や小京には城郭が設置されていたと見られているので、小京城があった可能性は否定できない。また、州城と小京城の形態や性格に関する意見は多様であり、記録に出ている州城と小京城が築城された城郭そのものを意味するのか、あるいは州や小京の設置を意味するのかという議論もある。したがって、州城と小京城の比定のためには明確な基準が必要である。

金海古邑城が統一新羅時代に築城されたとしても、ただちに金海古邑城が金官小京城であったとすることには当然疑問の余地がある。しかし、考古資料の検討から金海古邑城が統一新羅時代に築城されたと推定すると、金官小京の設置時期と関わりがある可能性はかなり高い。

金海古邑城の調査に関しては、五小京の一つである忠州地域に設置された中原小京の調査・研究成果を参考にする必要がある。中原小京の場合、最近の調査成果の増加とともに小京の中心地に対する研究が活発になされている。特に、中原小京の中心地と推定されている忠州市内地域でも、朝鮮時代の邑城とその周りを囲んでいる古邑城が存在していることがわかった(충청북도문화재연구원2011)。したがって、金海古邑城の検討は金官小京の中心地の構造と関連する城郭の在り方を把握することにもなる。

金海古邑城が位置している金海市内地域は金官伽耶の中心地であり、多様な金官伽耶の関連遺跡が分布している。この地域は金官伽耶が新羅に併合され、金官郡が設置されてから金官小京が設置されるまで、中心地であったことがわかる。



一方、金官小京の設置地域は必ずしも金官伽耶の中心地であった金海市内地域一帯であると想定する必要はないとする考え方もあろう。他の小京が設置された地域の事例から見ても、統一新羅期の小京の設置地域は統一新羅期以前の中心地から離れた新しい地域になることが確認される例もある(中原小京・北原小京)。しかし、金官伽耶の中心地であった金海市内地域には統一新羅時代の土城である金海古邑城が存在している。つまり、統一新羅時代の土城が存在しているところが当然金官小京の中心地であり、その中心地は金海市内地域以外には考えられないのである。

以上のようなことから、金海古邑城は金官小京の中心地と関連する城郭であることは確かであろう。

調査された関連遺構と旧地籍図に見られる城郭形態の痕跡から、金海古邑城は方形の土城であり、推定周囲は約5,400mになる。ここで、金海古邑城を金官小京に関連させて考えると、金海古邑城は小京の中心地を囲む方形の羅城であったことが推測される。その城郭の内側が小京の中心地であることになり、規模から見ると、当時の主要な施設だけではなく市街地も囲む形になる。

以上、金海古邑城の性格を検討してみた結果、金官小京は中心地を囲む城郭(羅城)をもつことが判明した。

## (2) 金官小京の中心地の検討

以上のように、金海古邑城を金官小京を囲む城郭に比定した場合、金官小京の都市構造はどうか、その内部がどうであったのかを検討してみたい。

金海古邑城の内側では、統一新羅時代の大型建物跡・建物跡・道路関連遺構などの関連遺構はほとんど検出されていない。このように考古資料は足りないが、すでに旧地形図を活用して金官小京に方格地割があったとする山田隆文の復元案があり、その検討が必要である。

山田隆文の復元案は、地形図を活用した金官小京中心地の方格地割案である。当然、山田隆文の方格地割案に金海古邑城は意識されていない。

山田隆文の復元案(図2)では、中央に東西幅約80mの中軸大路を設定している。その両側に1列だけ東西幅約100m区画があり、そこからさらに両側に東西幅約140m区画が3列ずつあることになっている。南北幅は基本的に約140m区画である。山田隆文の復元案は、考古資料が不足している金官小京の中心地の都市構造を推定するのによい方法であると評価はできる。

筆者が旧地籍図(1934年製作)をもとにして、金官小京の中心地の区画地割の痕跡を検討した結果、金海古邑城の内側全域に方形か長方形の区画地割が存在するかどうかは不明確であると判断した。一部では区画地割のような痕跡が推定できるが、小京全域に区画地割の痕跡が存在したとはいえないのである(図12)。

さらに、旧地籍図で区画地割が不明な西側は、鳳凰洞遺跡と大成洞古墳群・首露王陵などが分布しているので、区画地割の設定に疑問の余地がある。最近、この地域では広範囲に調査が行われているが、まだ区画地割に関連する遺構の検出は報告されていない。

山田隆文の復元案では金海市内地域に東西8坊×南北7坊の方格地割が設定されている。しかし、その地域では近年調査が進められて、遺跡の分布がわかるようになっている。それを検討してみると、方格地割に関連する道路遺構などは検出されていないことがわかる(図14)。また、山田隆文の復元案では南側の最後の東西区画1列が旧地籍図の金海古邑城の外側になってしまうので、山田隆文の方格地割の設定には疑問がある。

金海古邑城内側の西側の一部地域では、山田隆文の方格地割の東西区画線上と南北区画線上で調査が行われている。調査の結果、方格地割の主な証拠になる道路遺構などは検出されていない。

図14の調査された遺構の時期や性格を見ると、三国時代のものが多数を占め、他に高麗・朝鮮時代の遺構が分布している。現在まで調査された考古資料にもとづけば、金海古邑城西



図14 山田隆文の金官小京の方格地割復元案に関連する遺跡分布

側地域では統一新羅時代の金官小京と関連する区画地割は確認されていないといえるだろう<sup>10)</sup>。今後、金海古邑城と中心地の区画地割がなされたと推定される地域の精密な分析も必要であるが、現段階では金官小京の中心地に山田隆文の復元案のような東西8坊×南北7坊の全体的な区画地割は存在していない可能性が高いといえる。

その理由は、金官伽耶の中心地でもあったであろう金海古邑城の内側地域の特殊性のためである。すでに首露王陵、大成洞古墳群、鳳凰洞遺跡など金官伽耶の関連遺跡が存在するところは、区画地割を設定できなかった可能性がある。ただし、金海古邑城の痕跡も確認できる1934年の旧地籍図では、確かに中央の一部分に南北と東西の区画地割のような痕跡が見られるのである(図12の〔---〕)。

しかし、金海地域には1912年に製作された旧地籍図も存在し、両旧地籍図の比較ができた。その結果、1934年の旧地籍図に見られる区画地割のような痕跡が1912年の旧地籍図には存在しないことがわかった(図15)。この場合、1934年の旧地籍図の区画地割の痕跡は1912年以降にあらためてできた道路である可能性が高い。つまり、金海古邑城の内側地域では、旧地籍図でも考古資料でも区画地割の痕跡は確認できないのである。

したがって、金官小京の中心地には、王京(慶州)や南原小京(南原)・沙伐州(尚州)のような区画地割は存在しない可能性が高い。

金官小京が中心地を囲む城郭をもつ構造であると考え、金官小京の都市構造や中心地の区画地割が他の小京の都市構造や区画地割と同様であるのかどうかを検討する必要がある。まず、王京の都市構造や区画地割がそのまま九州と五小京に適用されたのかは当然疑問になる。また、他の小京の事例では区画地割が見られる場合、中心地を囲む形態の城郭が存在しない場合もある。

現段階では、九州と五小京のすべての地域を比較できるような考古資料は不十分であるが、他の小京と金官小京の都市構造は異なる可能性がある。金官小京の事例から見ると、州と小京の城郭の在り方や都市構造がそれぞれ異なる可能性もあるので、金官小京の都市構造が小京の一つの類型である可能性を含めて、これから多様な検討が必要である。また、金官小京と他の小京との比較や州の中心地に対する分析は、本章および第3章で詳しく検討することにした。

以上をまとめると、筆者は金官小京の中心地には区画地割は施行されていないと考える。すなわち、金官小京の都市構造は、平地の中心地を囲む方形の土城が存在し、その城郭は当

---

10) 調査地に統一新羅時代の遺構が検出されていない理由として、一部の調査では高麗・朝鮮時代の遺構や近代の開発によって、三国時代の文化層の上部まで削平されていることが指摘されている。

然小京の主要な施設だけではなく市街地を含む地域全体を囲む形態であり、小京に隣接した山城(盆山城)を運用している形態であると考えられる(図16)。したがって、金官小京は方形の城郭(土城)で囲まれた区画地割がない都市構造にその特質性が反映されていると考えられる。

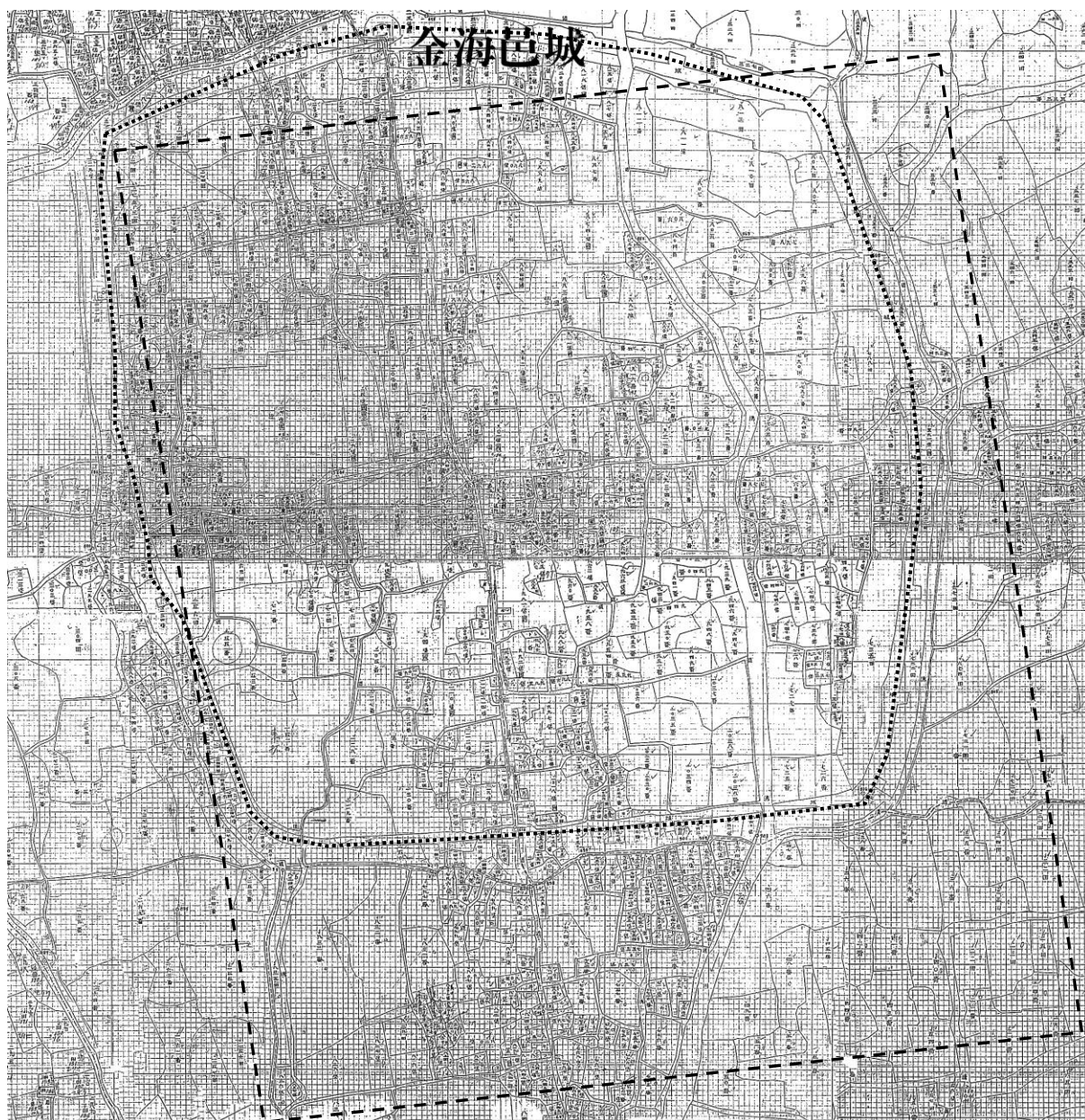




図15 金海市内地域の旧地籍図(1912年製作)一部、は図12のと同じ  
(本論文で使用した旧地籍図に関しては、韓国国家記録院所蔵の文書を申請して提供してもらった。  
各地籍図は地域別に数枚から数十枚あるものを筆者が合成の作業を行い完成した。)

山城  
(盆山城)

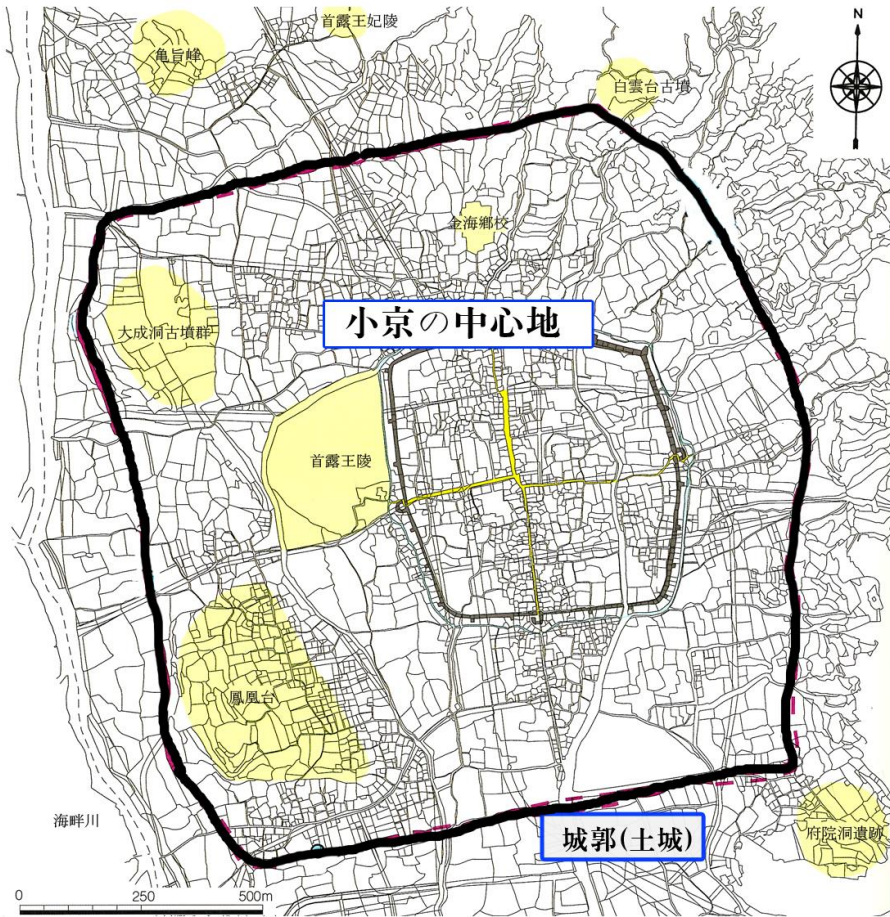


図16 金官小京の都市構造復元案

## 第2節 中原小京の都市構造

中原小京は、現在の忠清北道忠州市に設置された。忠州地域は南漢江の沖積地帯に位置している。忠州地域は原三国時代には馬韓の領域であって、4世紀頃には百済の勢力圏に入っていると推定されている。それから高句麗が漢江地域に進出した時、忠州地域にも高句麗の勢力が進出したと見られている。また、6世紀代には新羅の領域になったことが知られている。

忠州地域では、中原小京に関連する発掘調査の事例と関連遺跡の数が他の小京に比べて比較的多いが、小京の都市構造や中心地に関する道路遺構などの具体的な事例や関連遺構は少ない。しかし、最近の調査成果にもとづいて、中原小京の中心地の移動に関する研究が行われているので注目したい。

### 1) 中原小京の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

前述したように、忠州地域は原三国時代には馬韓の領域であって、4世紀頃には百済の勢力圏に入っていると推定されているが、関連史料は少ない。それから高句麗の勢力が忠州地域に進出したと見られていることに関しても史料はほとんどないが、忠州高句麗碑の存在がそれを立証している。

『三國史記』「地理志」には、忠州(中原京)はもともと高句麗の国原城であって、真興王代に小京が設置され、文武王代に小京城が築城され、景德王代に中原京に改称されたという記事がある。

#### 『三國史記』卷三十五「雜志」第四 地理2

中原京 本高句麗國原城 新羅平之 真興王置小京 文武王時築城 周二千五百九十二步  
景德王改爲中原京 今忠州

『三國史記』「新羅本紀」には、真興王18(557)年に国原を小京にしたこと、文武王13(673)年に国原城が築城されたことが簡略に記されている。

#### 『三國史記』卷七「新羅本紀」第七 真興王18年

十八年 以國原爲小京 廢沙伐州 置甘文州 以沙飡起宗爲軍主 廢新州 置北漢山州

## 『三國史記』卷七「新羅本紀」第七 文武王13年

### 九月 築國原城[古亂長城]

『三國史記』「地理志」では、国原小京城の周囲は2,592歩である<sup>11)</sup>。『三國史記』「地理志」に築城記録と規模が記されている北原小京城の周囲1,031歩の約2.5倍の規模である。このことは、小京城の規模が他の小京とは異なっていることを示している。

『三國史記』には、国原小京が中原小京に名称変更された明確な記録はないが、地方制度を整備して九州と五小京を設置した文武王代ないしは神文王代に中原小京に変更されたと一般的に認識されている。その後、景德王代に中原京に改称され、高麗時代(太祖代)には忠州牧に改称されてから、忠州府・忠州牧など時期によって名称の変動があり、忠清監營も設置された。

#### (2) 既存研究の検討

中原小京に関する研究は早い時期から行われていた。中原小京に対する既存研究では、忠州地域の関連遺跡とその調査成果をもとにして小京の中心地を推定している。中原小京の中心地を推定する見解には二つある。

一つは、忠州市内から北西側へ行った南漢江流域の塔坪里一帯が中原小京(国原小京の時代も含む)の中心地であったと推定している研究である(장준식1998)。

もう一つは、中原小京の中心地を忠州邑城が位置している忠州市内地域に比定している研究である(朴泰祐1987)。朴泰祐は忠州市内地域の逢峴城址が小京城の痕跡であり、中原小京は羅城をもつ都市である可能性に言及した。

山田隆文の復元案(山田隆文2008)では、朴泰祐と同じく市内地域の南側に位置している忠州邑城(逢峴城址)一帯が中原小京の中心地にあげられている。山田隆文は、旧地形図で方格子割の痕跡を確認し、東西約160～180m×南北約120～140mの坊が最低でも東西6坊×南北6坊に復元可能であると見ている。

表7 中原小京の名称変遷

真興王18年 (557年)	文武王13年 (673年)	文武王・神文王代 (推定)	景德王代	高麗・朝鮮時代	現在地名
国原小京	築城記録	中原小京	中原京	忠州牧・忠州府・忠清監營	忠清北道忠州市

11) 2,592歩を各尺別に換算すると、周尺約3,100m、唐尺約4,588m、布帛尺約6,000mの長さである。

最近の研究傾向としては、忠州地域の三国時代の中心地を塔坪里一帯とし、統一新羅時代の中原小京の設置によって忠州市内地域へ中心地が移動したと見る見解が優位になっている。黄仁鎬(황인호2013)は、忠州市内地域へ中心地が移動したという見解を示し、その中心地



図17 忠州地域の地形と遺跡分布1(國立中原文化財研究所2009a、25頁、挿図1、筆者再編集)



に1坊が東西450尺(約160m)×南北350尺(約124m)の5坊(800 m)×9坊(1,116m)の規模の長方形の区画地割の復元案を提示している。

盧秉湜(盧秉湜2014)は、小京城の築城時期に注目して、文武王代の統一戦争中に国原城が築城された背景は、治所としての機能より戦争のための戦略的拠点の防禦力補完と南漢江流域を完全に掌握しようとする軍事的性格が強かったためと説明している。したがって、『三國史記』「新羅本紀」に築城記録が記されている国原城は、7世紀後半、新羅山城の一般的性格をもつものとして小京の背後に位置した山城と解釈ができ、立地・規模・出土遺物などからそれが大林山城である可能性が非常に高いと見た。特に、中原小京が中原京へ名称変更された景德王代には、名称の変化だけではなく都市計画の変更も行われたと推定した。そして忠州市内地域へ中原小京の中心地が移動した時期を景德王代と見る新しい見解を提示した。

## 2) 中原小京の関連遺跡

### (1) 統一新羅期以前の三国時代の遺跡分布様相

中原小京が設置された現在の忠州地域には、忠州高句麗碑と新羅～統一新羅時代の古墳群および三国時代の山城などさまざまな遺跡が分布している。以前からの一部の研究で、南漢江西側の沖積地帯の塔坪里一帯が中原小京の中心地であると推定されてきた。塔坪里一帯は七層石塔があるところで、「塔坪里」と地名が付いていて、塔坪里寺址として知られていた。この周囲には新羅の忠州地域進出を立証する6～7世紀の楼岩里古墳群・下九岩里古墳群などの大規模な古墳群が分布している(図17、表8)。

#### ①楼岩里古墳群(図18)

忠清北道忠州市可金面一帯にある新羅末期の古墳群である。古墳群が位置しているところは、忠州市内の北西側約5kmにある南漢江の西岸丘陵地帯である。この丘陵は、北西から南東にのびた山地から北東の南漢江に向う稜線の末端部に該当する。丘陵の北側には南漢江によって形成された塔坪里一帯の沖積平野が広がり、南東側には約1.5km離れて達川と南漢江との合流地点があり、水運交通の要衝と見ることができる。楼岩里古墳群はこの丘陵の標高150m程度の稜線支脈に沿って分布している。

1980年の地表調査で初めて確認され、4回の精密地表調査・発掘調査が実施された。一部実施された調査では大型の石室墳が検出され、新羅後期様式の土器が出土した。築造年代が6世紀中葉以後であり、当時の国原小京の支配者層の墳墓であることがわかった(国立中原

文化財研究所2009b)。

## ②下九岩里古墳群(図19)

下九岩里古墳群は、楼岩里古墳群の北西側に位置している古墳群である。1992年の楼岩里古墳群の地表調査でその一部が確認され、初めて知られるようになった。1999～2001年の高速道路建設工事の発掘調査で、石室墳と石槨墓が確認された。1999年の学術地表調査で全体的な古墳群の分布の様相が明らかになり、8区域で386基が確認され、そのうち8基が調査された。

2007～2008年の発掘調査では、新羅期の石室墳35基と石槨墓31基が調査された。2009年には精密地表調査とともに3基の古墳が発掘調査された。古墳の築造方法と出土遺物は楼岩里古墳群と類似し、当時の国原小京の支配者層の墳墓であることがわかった(国立中原文化財研究所2011)。

## ③塔坪里遺跡

塔坪里一帯は中原(小)京の中心地として注目され、関連調査が行われてきた。塔坪里遺跡の調査では、三国時代の百済・高句麗・新羅と統一新羅時代の遺構などが確認・報告されて



図18 楼岩里古墳群(左:古墳群全景 右:45号墳)(国立中原文化財研究所2009b、126・132頁から引用)

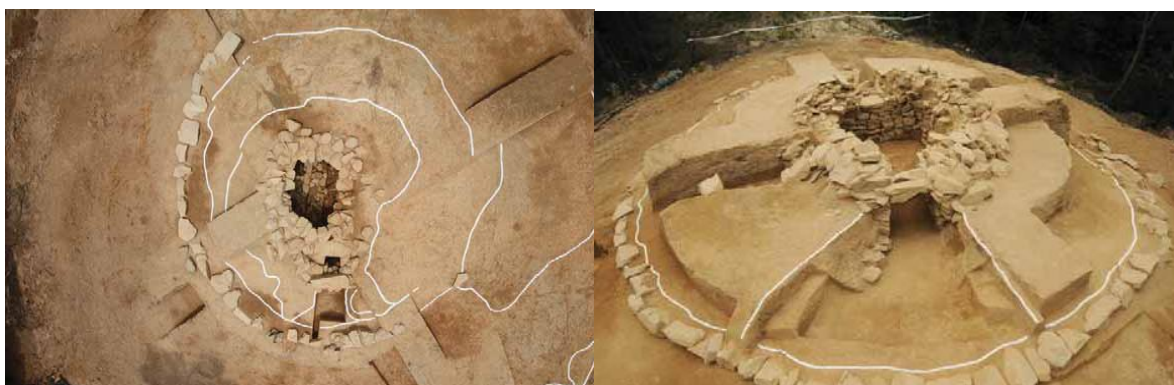


図19 下九岩里古墳群(左:25号墳 右:27号墳)(国立中原文化財研究所2011、30・75頁から引用)

いる。この遺跡では漢城期百済の竪穴建物跡が検出され、高句麗の竪穴建物跡ではオンドル遺構も確認されている。新羅の大型建物跡や回廊跡なども検出されている。遺構の検出様相からも、塔坪里一帯に百済・高句麗・新羅の集落や市街地が形成されていたことがわかる。

調査の結果、塔坪里一帯が百済→高句麗→新羅の順にそれぞれの領域になったことが考古資料からも明らかになっている。塔坪里一帯が、百済の領域になってから統一新羅時代まで、忠州地域の中心地域であった可能性もある。

しかし、周囲の新羅期の古墳群の築造時期や塔坪里一帯の立地を考えると、塔坪里一帯は真興王代に国原小京が設置された地域として見るのが妥当であろう。塔坪里一帯では文武王代に築城された小京城に推定される城郭が比定できず、立地上の地形としても、文武王・神文王代の九州と五小京の整備に伴う計画都市建設の空間としては狭いという問題がある(国立中原文化財研究所2009a)。

表8 中原小京設置以前の関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	遺構
①	楼岩里古墳群	1989年	—	新羅～統一新羅	横穴式石室墳2基
		1990年	—		横穴式石室墳4基
		1991年	—		横穴式石室墳17基 横口式石室墳2基 小型石槨墓3基
		2008年	1,000m <sup>2</sup>		横穴式石室墳2基
		2008年	(精密地表調査)		各種墳墓計234基
		2010年	9,900m <sup>2</sup>		横穴式石室墳17基 石槨墓2基
②	下九岩里古墳群	1999年	—	新羅～統一新羅	横穴式石室墳 石槨墓 計85基調査 各種墳墓計489基
		2000年	24,793m <sup>2</sup>		
		2008年	87,105m <sup>2</sup>		
		2009年	1,000m <sup>2</sup>		
③	塔坪里遺跡	2008年 ～ 2010年	13,677m <sup>2</sup>	百済	竪穴建物跡
				高句麗	オンドル遺構
				新羅～統一新羅	建物跡(回廊跡)など

## (2) 統一新羅時代の遺跡現況(図22、表9)

中原小京の中心地を上述した塔坪里一帯に設定するのではなく、忠州市内地域に設定した研究もある。その根拠としては、市内地域に痕跡が残された忠州邑城の存在があげられる。朴泰佑や山田隆文は、忠州市内地域に残された城郭の痕跡や地形から中原小京の中心地と小京城の復元案を示した。しかし、朴泰佑や山田隆文の復元案と関連がある遺跡はほとんど調査されていない。また、都市構造や中心地に関連する具体的な遺構もない。ところが、市内地域の南側には統一新羅時代の古墳群が分布していることや忠州邑城と関連する土城の調査事例から、忠州邑城が統一新羅時代に築城された可能性が出てきている。また最近、忠州市内南側の虎岩地区遺跡の発掘調査でも新しく土城の痕跡が検出されているので、注目すべきである。

### ①丹月洞古墳群(図20)

丹月洞古墳群は忠州市内地域の南西側に位置し、7基の横穴式石室墳が調査された。石室の平面形態は長方形であり、南側短壁の右側に細長い羨道をもつ穹窿状天井の横穴式石室墳である。忠州市内地域で唯一印花文土器が副葬された統一新羅時代の古墳群であり、塔坪里の周囲に位置する大規模な楼岩里古墳群・下九岩里古墳群とは異なり、小規模化した特徴が見られる(건국대학교박물관1994)。



図20 丹月洞古墳群の5号墳  
(國立中原文化財研究所2009c、168頁から引用)

### ②大林山城

大林山城は忠州市内地域の南側に位置する。正式な発掘調査は行われていないが、統一新羅時代の印花文土器が地表採集されている。中原小京城に比定する見解もあり、中原小京と関連がある城郭である可能性は高い(상명대학교박물관1997)。

### ③清寧軒周辺遺跡

忠州市内地域の邑城に隣接した清寧軒周辺地域の試掘調査では、統一新羅時代の礎石と積心<sup>12)</sup>遺構が検出され、印花文土器と瓦が出土している。高麗時代の石列なども検出された(충청대학박물관2008)。

### ④忠州邑城(虎岩洞遺跡)(図21)

報告書では、忠州邑城はもともと二重複郭構造をもつ羅城であり、統一新羅時代に築城されて高麗・朝鮮時代まで使われた可能性が高いと見られている。また、内郭と外郭ともに統一新羅時代の瓦などの遺物が出土していて、残存している土城の築城方法も統一新羅時代のものであると見られている。忠州邑城の外郭は虎岩洞遺跡の調査で検出された土城や逢峴城址に該当する。報告書で推定されている忠州邑城の外郭は、発掘調査や調査報告などで確認された一部の区間のみが確かであるが、他の部分は朴泰佑の復元案を参考にして作製されたものである(충청북도문화재연구원2011)。

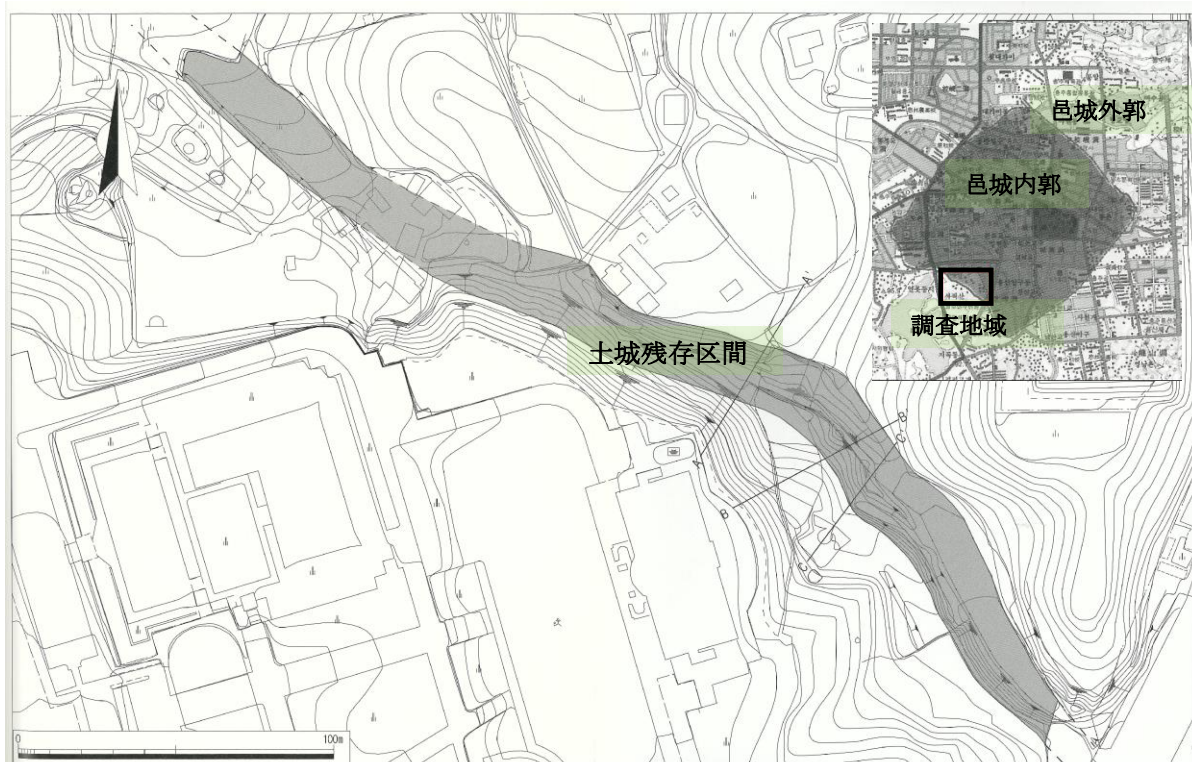


図21 忠州邑城(虎岩洞遺跡)の土城残存区間  
(충청북도문화재연구원2011、85頁、図面20、筆者再編集)

12) 礎石建物の基礎になる根石のことである。

表9 中原小京の関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構・遺物
①	丹月洞古墳群	1994年	33,054㎡	統一新羅	横穴式石室墳 計7基
②	大林山城	1997年	(地表調査)	統一新羅、高麗	印花文土器
③	清寧軒周辺遺跡	2008年	1,800㎡	統一新羅、朝鮮	印花文土器
④	忠州邑城 (虎岩洞遺跡)	2008年	10,926㎡	統一新羅、高麗	土城跡、瓦
⑤	虎岩地区遺跡	2013年 2014年	24,907㎡	高麗、朝鮮	土城跡

### ⑤虎岩地区遺跡

最近の調査で、忠州市内南側の虎岩地区一帯において土城跡が確認されている。遺跡は忠州邑城の推定外郭から南東側に約1 km離れていて、南東側の約2 kmの距離に丹月洞古墳群が位置している。正式な調査報告がなされていないので正確なことはわからないが、土城の南壁および西壁の基壇部と土塁などが検出されている。出土遺物の一部に統一新羅時代のものが確認されるが、築城方法と出土遺物の様相から高麗時代の土城であると推定されている。土城が市内地域の忠州邑城とつながる可能性も考えられるので注目されるが、まだ断定はできない(東亞細亞文化財研究院2014)。

## 3) 中原小京の都市構造の検討

### (1) 中原小京の設置と中心地移動

忠州地域の関連遺跡を検討した結果、統一新羅期以前の忠州地域の中心地は国原小京が置かれた南漢江の塔坪里一帯であったことが確認できた。塔坪里一帯には倭岩里古墳群・下九岩里古墳群のような6～7世紀の大型墳を含む古墳が密集して分布し、国原小京の設置時期と関連がある支配者層の墓域であると考えられる。さらに、塔坪里遺跡の調査によって三国時代の百済・高句麗・新羅と統一新羅時代の遺構が確認され、塔坪里一帯が長期間にわたって忠州地域の中心地であったことは確実であろう。

そして、三国時代まで忠州地域の中心地であった塔坪里一帯から統一新羅時代に忠州市内地域へ、その中心地が移動したことも考古学的様相から推定される。では、塔坪里一帯から忠州市内地域へ中心地が移動したのはいつであるのか。考古資料では正確な中原小京城の築

城時期と位置比定はまだできないが、おそらく『三國史記』の記録に見られる小京城の築城とともに、その中心地が忠州市内地域へ移された可能性が考えられる。

一方、中原小京城の築城記録から見ると、文武王13(673)年の築城時期は他の小京城の築城時期とは多少異なっている。他の小京は、すべて小京が設置されてから4～7年後に城郭



图22 忠州市内地域の中原小京関連遺跡(충청북도문화재연구원2011、10頁、図面1、筆者再編集)  
 ①丹月洞古墳群 ②大林山城 ③清寧軒周辺遺跡 ④忠州邑城(虎岩洞遺跡) ⑤虎岩地区遺跡(土城)

の築城記録が見られる<sup>13)</sup>。つまり、統一新羅期の九州と五小京の設置・整備時期以前に忠州市内地域に城郭が築城されたのである。

したがって、五小京の中心である中原小京の重要性から考えると、五小京の中では一番早い時期に忠州市内地域が小京の中心地として小京城の築城とともに整備されたことが推定できる。おそらく、この時期に国原小京から中原小京への名称変更があった可能性も考えられる。なお、中原小京の中心地の移動様相と城郭の築城時期に関しては、注目しておきたい。

## (2) 中原小京の中心地の検討

朴泰佑の中原小京の都市構造復元案は、忠州市内地域を小京の中心地として検討し、中原小京城を羅城と認識して、忠州市内地域に一部痕跡が残された逢峴城址を小京城に比定している。朴泰佑は、小京城の周囲が2,592歩という『三國史記』の記事から、周尺で換算すると約3,100mであると見ているが、実際の距離とは合わないのが問題である。

山田隆文は1929年に製作された旧地形図(図24)を分析し、中原小京の都市構造を推定している。一部確認できる痕跡を土地区画と見て、東西6坊×南北6坊の方格地割の復元ができると見ている。黄仁鎬も旧地形図を検討し忠州市内地域に東西5坊(800m)×南北9坊(1,116m)の長方形の区画地割の復元案を提示している。しかし、筆者は旧地形図では具体的な都市構造の痕跡を見つけることはできなかった。

それでは、中原小京の都市構造と中心地を検討してみよう。前述したように、中心地は塔坪里一帯から忠州市内地域へ移動したと推定される。しかし、新しい中心地である忠州市内地域には関連遺跡がほとんど報告されていない。都市構造を検討するための考古資料が足りないのである。

筆者は、区画地割の痕跡を1914年製作の旧地籍図を通して検討してみた。その結果、忠州邑城(内郭)の南側の市内地域に区画地割の痕跡が確認された。その範囲は東西約400m×南北約1,375mであり、東西区画の範囲が狭く、南原小京のように正方形を呈する区画地割とは異なっている。さらに、忠州市内地域を南から北に流れる河川の影響で、区画地割の正確な規模や形態は一部不明である。旧地籍図の分析で推定される区画地割は東西2坊×南北9(11)坊である(図26、表10)。

ここで注目したいのは、忠州邑城(外郭)と虎岩地区遺跡の土城である。忠州邑城は城壁の

---

13) 北原小京設置：文武王18(678)年、築城：神文王5(685)年。

西原小京設置：神文王5(685)年、築城：神文王9(689)年。

南原小京設置：神文王5(685)年、築城：神文王11(691)年。



一部の区間が調査で確認され、二重複郭構造をもつ羅城であり、統一新羅時代に築城されて高麗・朝鮮時代まで使われた可能性があるとされている。したがって、忠州邑城が記録に見られる小京城であるのかどうかはまだ断定できないが、忠原小京と関連する可能性は高いと思われる。

また、最近調査された忠州市内地城南側の虎岩地区遺跡の土城は高麗時代に築城されたと推定されているが、忠州邑城(外郭)とつながる可能性もあるので注目されている。

筆者は、忠州邑城(外郭)と虎岩地区遺跡の土城について、旧地籍図にその痕跡が確認されるのか分析してみた。その結果、旧地籍図でも忠州邑城(外郭)と虎岩地区遺跡の土城の痕跡のようなものが確認された(図25・26)。

さらに分析は必要であるが、虎岩地区遺跡の土城が忠州邑城(外郭)につながる可能性も十分考えられることになろう。その場合、忠州邑城(外郭)と虎岩地区遺跡の土城は、区画地割が確認できるところまでを囲むような形態になる。したがって、中原小京は小京の中心地を囲むような城郭が存在していた都市構造が想定される。

もちろん、虎岩地区遺跡の土城は高麗時代に築城された可能性が高いと報告されているので、忠州邑城(外郭)とつながる城郭として想定することには疑問の余地がある。この場合、虎岩地区遺跡の土城が忠州邑城の高麗時代の修築や増築区域であった可能性も考えられるので、注目しておきたい。

以上、中原小京の都市構造とその中心地を検討してみた。中原小京の都市構造は、小京の中心地の周りを囲む城郭が存在することから、金官小京と類似しているといえよう。この場合、一部の研究で小京城に比定された大林山城が中原小京の防禦と関連する城郭であると思われる。

表10 中原小京の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)
①	山田隆文(2008)	東西 約1,400m 南北 約1,200m	東西 約160~180m 南北 約120~140m	6坊×6坊(最低) 1坊の規模は道路を含む
②	黄仁鎬(2013)	—	東西 450尺(約160m) 南北 350尺(約124m)	5坊×9坊 (800m×1,116m) 1坊の規模は道路を含む
③	筆者	東西 約 400m 南北 約1,375m	東西 約200m 南北 約125m	2坊×9(11)坊 1坊の規模は道路を含む

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。

また、城郭で囲まれる中心地には南北が長い区画地割が確認され、忠州市内地域の地形に沿った都市建設が行われたと推定される。中心地の区画地割は、西原小京の区画地割の痕跡のように南北が長い構造である。今後、忠州市内地域に小京城の築城とともに実施されたとと思われる区画地割、都市構造の検討が必要である。

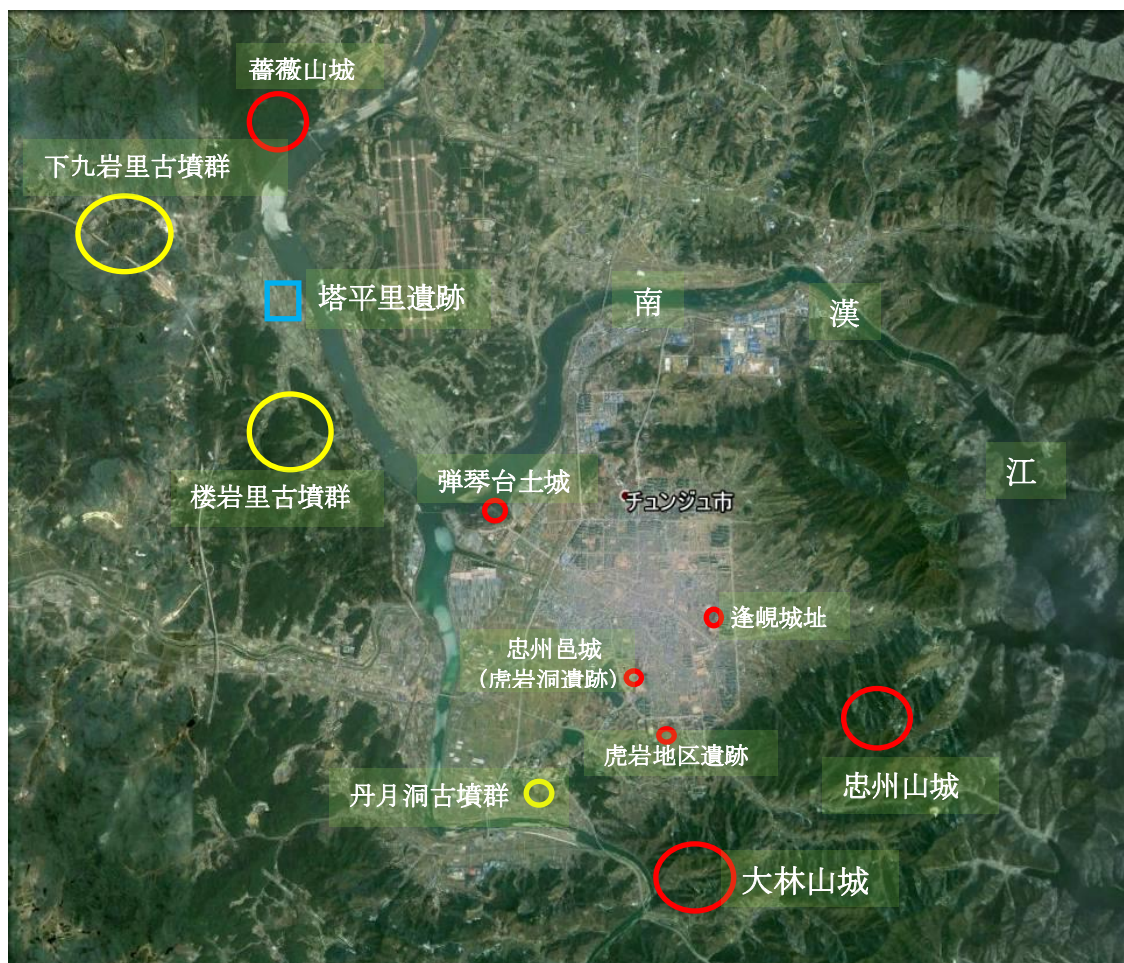


図23 忠州地域の地形と遺跡分布2(GOOGLE EARTHから作製)

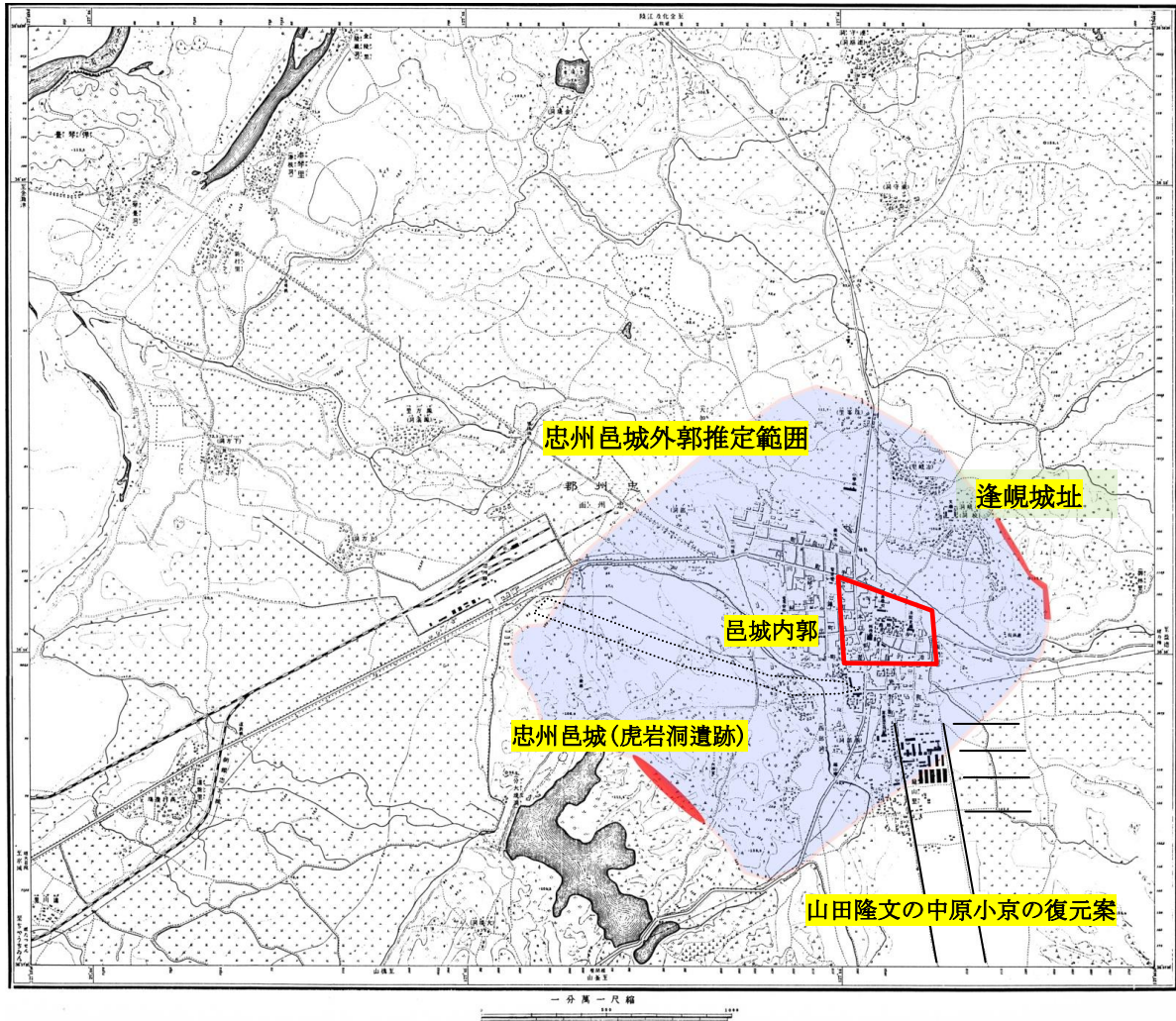


図24 忠州地域の地形と遺跡分布3(1929年製作の旧地形図)

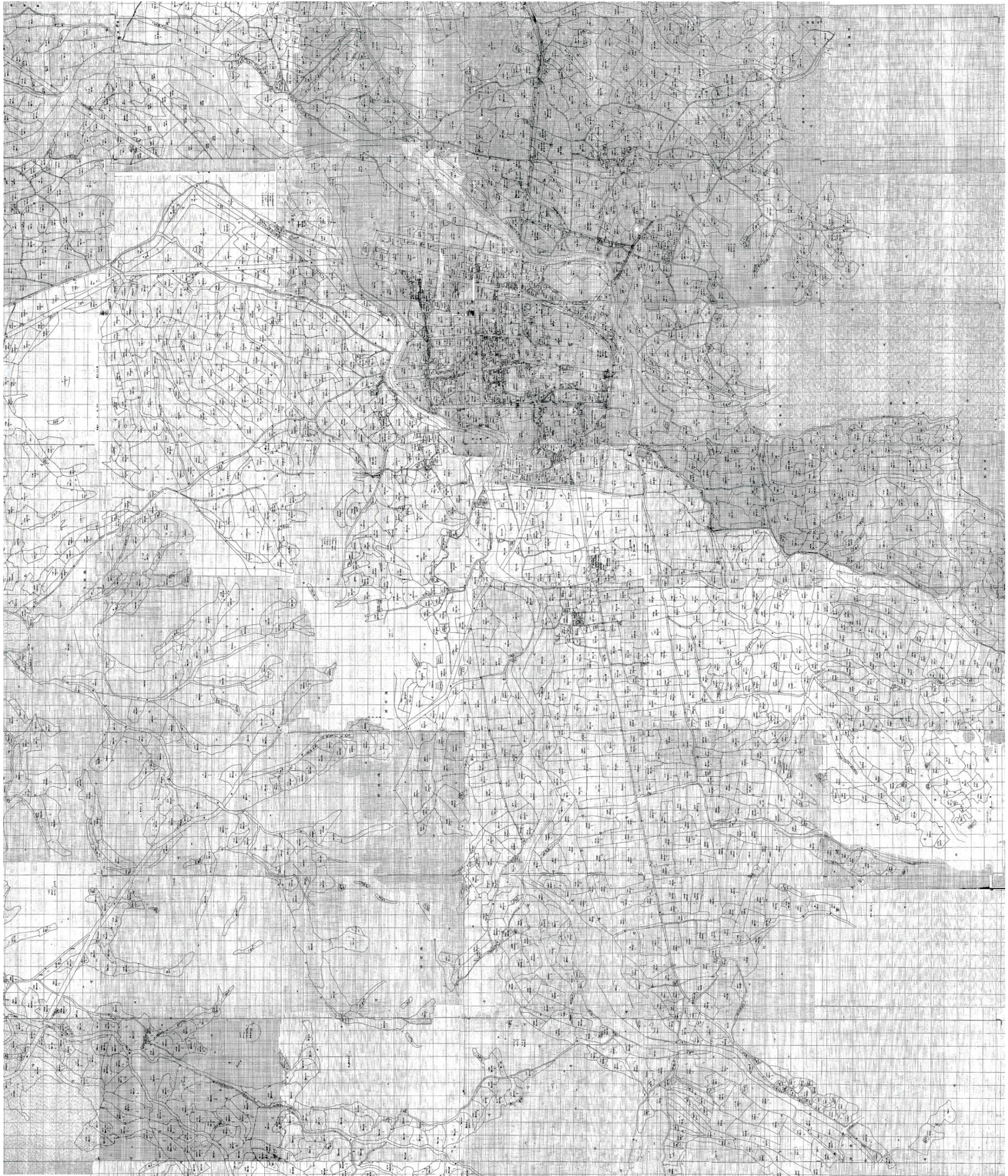


図25 忠州市内地域の旧地籍図(1914年製作)



図26 中原小京の区画地割と都市構造の復元案(1914年製作の旧地籍図)

### 第3節 北原小京の都市構造

北原小京は現在の江原道原州市に設置され、新羅の北方経営に重要な役割を果たした。北原小京に関しては一部の研究者が新羅の小京研究や新羅の地方都市研究で少し言及しているだけであり、北原小京に関する直接的な研究はほとんどないといえよう。その理由はやはり、北原小京の関連史料の不足とともに関連遺跡の調査成果が不足しているためである。

最近までの原州地域の考古学的成果から、北原小京に関連する資料の検討がある程度できるようになりつつある。しかしながら、原州地域は他の地域と比べて、小京の都市構造に関わる資料が不足している。ここでは原州地域一帯で行われてきた考古学調査の成果にもとづき、原州地域の考古学的様相を分析し、北原小京の設置地域とその都市構造を検討してみよう。

#### 1) 北原小京の関連史料と既存研究

##### (1) 関連史料

北原小京に関わる記録は、『三國史記』「地理志」・「新羅本紀」の中で原州地域の淵源を説明する際に登場する。これをまとめると、“北原京はもともと高句麗の平原郡であって、新羅が三国を統一した頃の文武王18(678)年に北原小京が設置され、大阿滄吳起に守らせた。神文王5(685)年に小京城を築き、景德王代には北原京と呼ばれるようになった。”という内容である。

『三國史記』 卷三十五「雜志」第四 地理2

北原京 本高句麗平原郡 文武王置北原小京 神文王五年 築城 周一千三十一歩 景德王  
因之 今原州

『三國史記』 卷七「新羅本紀」第七 文武王18年

置北原小京 以大阿滄吳起守之

表11 北原小京の名称変遷

文武王18年 (678年)	神文王5年 (685年)	景德王代	高麗・朝鮮時代	現在地名
北原小京	築城記録	北原京	原州牧・江原監營	江原道原州市

このように、北原小京に関わる史料としては、単に北原小京の設置と築城についての記事があるだけである。北原小京は景德王代に北原京に改称され、高麗時代(太祖代)に原州に改称された。高麗時代には益興都護府・原州牧など名称の変動もあり、朝鮮時代には江原監營が設置された。

## (2) 既存研究の検討

北原小京に関する研究はほとんど行われておらず、五小京に関する研究の中でもあまり言及されていない。朴泰祐(朴泰祐1987)は、北原小京の中心地を原州市内地域に比定して、羅城があった都市に分類しているが、確実な証拠は提示していない。山田隆文(山田隆文2008)も旧地形図を使用した九州と五小京の復元案のうち、原州地域は地形の変化があった可能性を指摘して、復元案を提示していない。

これら以外に、北原京の政治勢力に対する一部の研究(李仁在2003・2004)と北原京の仏教文化研究(金惠婉2004)において北原小京に関する言及はあるが、直接的な北原小京の研究ではない。筆者は原州地域の考古学的成果を検討して、北原小京の設置とともに中心地が現在の原州市内地域に移動したと見た(이재환2012)。

既存研究には、北原小京が原州に設置されたという史料を通して、北原小京の中心地は江原監營が設置された原州市内地域であるという認識がある。しかし、原州市内の江原監營址周辺が北原小京の中心地であるということを何らの根拠もなく主張するのは説得力がない。

そのような研究状況の中で、最近の考古学的成果は北原小京の位置や中心地の論議において重要な資料を提供している。

## 2) 北原小京の関連遺跡

北原小京に関連する遺跡の調査成果は、他の小京と比べて著しく足りない。そのような状況の中で、筆者としては北原小京の設置前後の原州地域における考古学的様相を検討し、北原小京の設置とその中心地を推定してみたい。結論からいえば、原州地域の考古学的様相は北原小京の設置によって、原州市内地域へ中心地が移動したことを示している。

### (1) 北原小京設置以前の原州地域の考古学的様相

まず、北原小京設置以前の原州地域の考古学的様相を検討してみよう。ここで注目される地域は原州地域の西部、南漢江・蟾江流域の富論・文幕地域である。この地域は、地理的要

件から見ると先史時代から人々が居住するには良好な環境であった。確認されている遺跡も旧石器時代から三国時代まで多様であり、長期間、生活の場として活用されたことがわかる。原三国時代から三国時代まで、この地域に強力な勢力が存在していた可能性が高いことを示す遺跡も確認されている。

そのような遺跡は、馬韓・百済期の古墳が確認された南漢江流域の富論地域に所在する法泉里遺跡と、高句麗文化の存在が確認された蟾江流域の文幕地域に所在する建登里遺跡である。

#### ①法泉里遺跡(図27、表12)

1973年に発見埋蔵文化財として中国の東晋製羊形青磁および青銅鏃斗が申告されたのを機に、これらの百済文化の重要遺物と関連した遺構を確認するため、遺跡の調査が始まった。1999年から2001年まで3次にわたって行われた学術発掘調査を通して30基の遺構が確認され、899点の遺物と24体の古人骨が出土した。

法泉里遺跡の報告書によると、調査された遺構は長方形の竪穴建物跡を除き大部分が墓で、(土壇)木槨墓、横口式石室墳、横穴式石室墳、横口式石槨墓、甕棺墓など種類が非常に多様である。その時期も2世紀から7世紀に至る原三国時代の馬韓、三国時代の百済・新羅、そして高麗時代である。

また、法泉里遺跡で確認された古墳の中で、百済期の横口式石室墳と横穴式石室墳は、3世紀から5世紀にわたって、この地域で百済と関係があった土着勢力の性格と変動がわかる遺構である。出土遺物から見ると、古墳の被葬者は相当な身分をもっていたことがわかる。

一方、新羅期の横口式石槨墓は6世紀中葉から7世紀初に築造された墓で、新羅地域から受容されたと考えられるが、同じ時期の新羅の中心地域とは区別される地域性が見られる。

新羅期の古墳の形態と規模、出土遺物から見ると、百済期より著しく質が落ちている。周辺地域の古墳群では新羅系石室墳が存在するのに対して、法泉里遺跡では小型石槨墓だけが発見される。このことは、新羅期には法泉里の戦略的重要性が百済期より著しく減少したことを示している(国立中央博物館2000・2002)。

#### ②建登里遺跡(図27、表12)

建登里遺跡は、原州市文幕邑建登里1440番地一帯でマンションの新築工事前に実施された発掘調査によって、高句麗遺跡であることが確認された。建登里遺跡は、北から南に流れる蟾江の扇状地の先端部に立地し、そこは蟾江流域の文幕平野地域に該当する。

調査の結果、三国時代の竪穴建物跡3基と溝遺構2基、竪穴遺構23基、柱穴550基余りが検出された。遺構の大半は河川によって侵食されていたため、保存状態は良好ではない。



特に、三国時代の2号竪穴建物跡の内部から出土した長胴壺と波状文が施文された土器片などは、高句麗土器と関連が深いとされている。

法泉里遺跡の北側に位置している建登里遺跡では竪穴建物跡と高句麗系土器が確認され、この地域への高句麗文化の影響が実証されることになった。建登里遺跡は、高句麗の原州地域進出を立証する最初の考古資料として重要な意味をもつといえる(예맥문화재연구원2008)。

表12 北原小京設置以前の原州地域の主要な遺跡

遺跡名	調査年度	調査面積	時期	遺構
① 法泉里遺跡	1999年(1次) 2000年(2次) 2001年(3次)	300㎡ 2・3次 600㎡	新石器、青銅器 原三国、百濟 新羅、統一新羅 高麗	竪穴建物跡、(土壇)木槨墓 横口式石室墳、横穴式石室墳 口式石槨墓、甕棺墓 計 30 基 遺物899点、古人骨24体
② 建登里遺跡	2006年	19,597㎡	高句麗	竪穴建物跡、溝遺構、竪穴遺構、柱穴 高句麗系土器

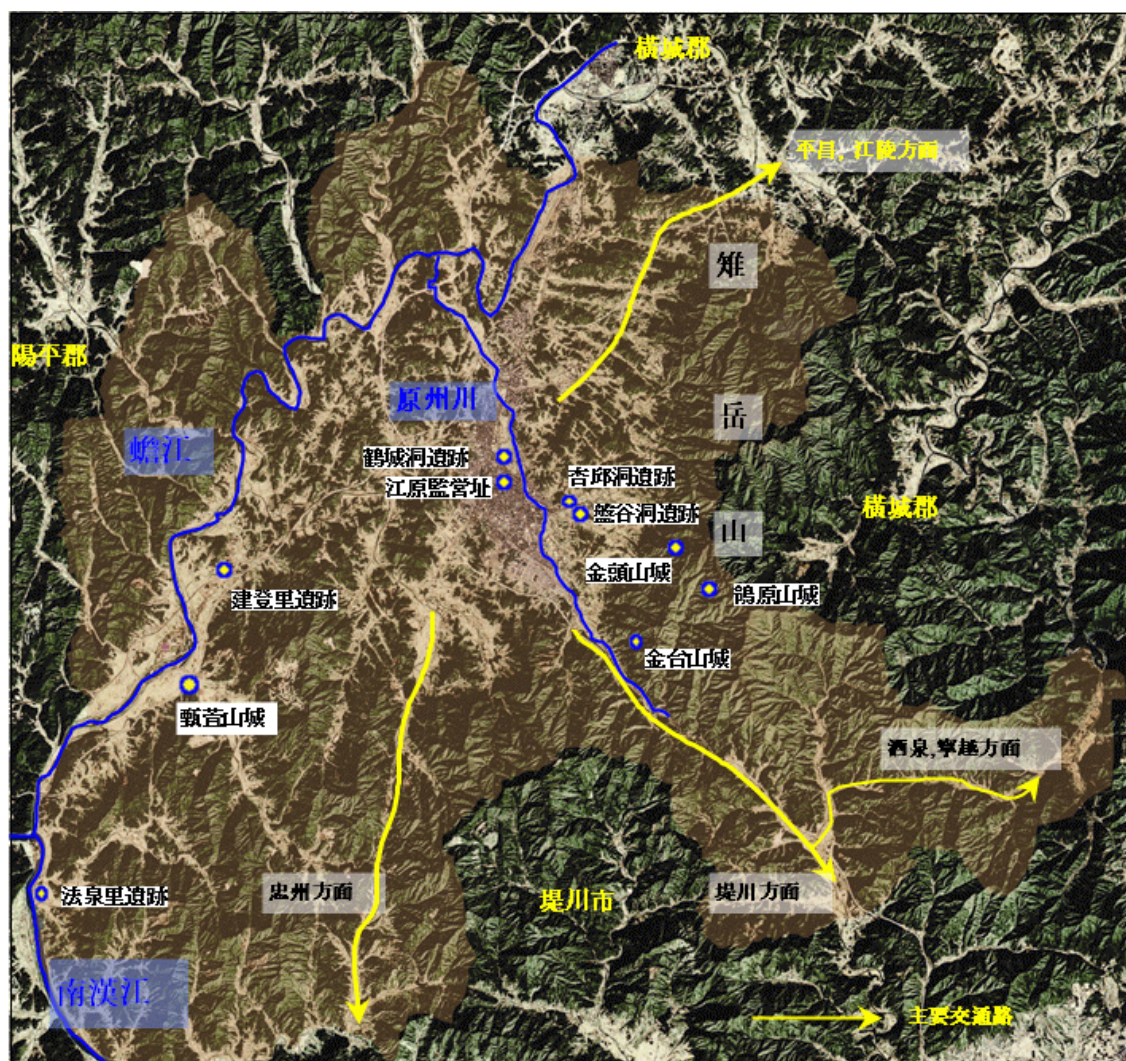


図27 原州地域の北原小京関連遺跡分布と主要交通路(이재환2012, 311頁、図1、筆者再編集)

(2) 北原小京の関連遺跡(図32、表13)

蟾江と合流する原州川の沖積地帯を含めて、雉岳山西側一帯に位置する原州市内地域には多様な遺跡が分布している。原州川流域の沖積地帯では、上流域から下流域まで多くの地域で調査が実施されてきた。

それらの調査成果によると、原州川流域を中心とした原州市内地域は、上述した南漢江流域の富論地域などと比べると、三国時代までは市街地が形成されるほどに開発された痕跡は見られないといえる。このような成果が、北原小京が設置された統一新羅時代以後から原州市内地域の開発が本格化したことを意味するのか、それとも関連遺跡が確認されていないだけであることを意味するのかはまだ判断できない。しかし、原州市内地域では最近までの考古資料に三国時代と関連する遺跡の存在が見られず、統一新羅時代と関連する遺跡だけが存在することも事実である。原州市内地域で北原小京に関連する遺跡としては、鶴城洞遺跡と盤谷洞遺跡があげられる。

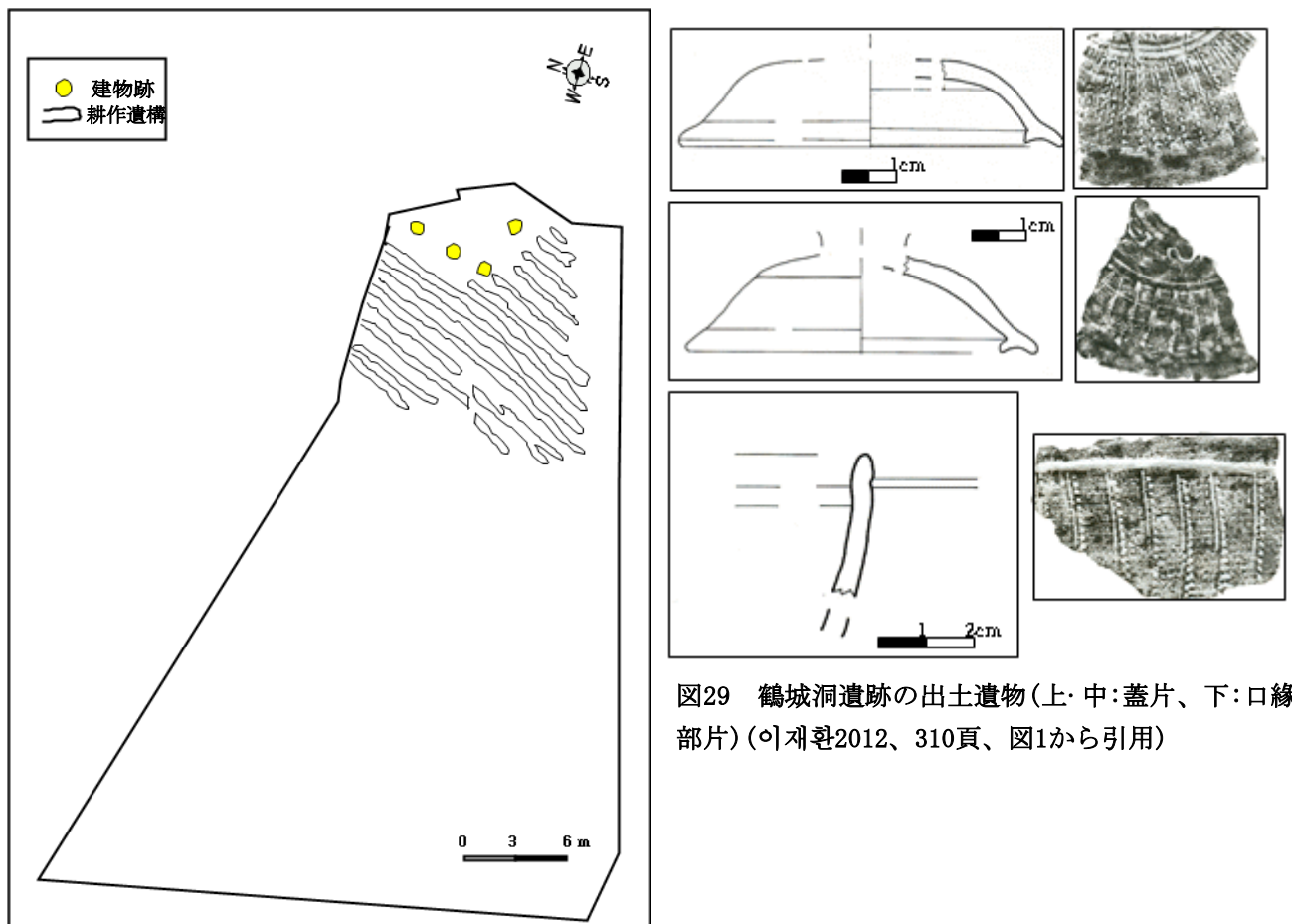


図29 鶴城洞遺跡の出土遺物(上・中:蓋片、下:口縁部片)(이재환2012、310頁、図1から引用)

図28 鶴城洞遺跡の遺構配置

(연세대학교원주박물관2005、18頁、図面1、筆者再編集)

### ①鶴城洞遺跡(図28・29)

鶴城洞遺跡は原州駅に隣接し、南から北に流れる原州川が形成した沖積地帯に位置する。鶴城洞遺跡では統一新羅時代の耕作遺構と建物跡から印花文土器などが出土している。出土遺物の文様や形態から見ると、統一新羅期の7世紀後半から8世紀前半の遺物がほとんどである。また、耕作遺構によって、北原小京における生産地と消費地との関係を推定することができる(연세대학교원주박물관2005)。

### ②杏邱洞遺跡

杏邱洞遺跡は、原州市内地域の江原監営址から約2km離れた原州川の東側に位置している。この遺跡では主に朝鮮時代の大型建物跡が検出されているが、統一新羅時代の建物跡と印花文土器も確認されている(한림대학교박물관2011)。

### ③盤谷洞遺跡(図30・31)

盤谷洞遺跡は、原州革新都市発掘調査地域で確認された統一新羅時代の古墳群である。遺跡は原州市内地域の東側であり、雉岳山の西側の丘陵地帯に位置している。原州地域で初めて統一新羅時代の竪穴式石槨墓が確認されたことに意味がある。

出土した遺物にも、鶴城洞遺跡で見られる7世紀後半から8世紀前半の点列文が施文された蓋、台付鉢と台付碗などが確認されている。盤谷洞遺跡で検出された石槨墓は6基で、すべて竪穴式石槨墓であり、忠北地域で確認される7世紀後半から8世紀前半の小規模化した様式の石槨墓と類似している。盤谷洞遺跡と隣接した地域では遺構は検出されなかったが、古墳や住居などから流れ出たと思われる印花文土器片が多量に出土した(한강문화재연구원2010)。



図30 盤谷洞遺跡の石槨墓  
(한강문화재연구원2010、26頁、写真45から引用)



図31 盤谷洞遺跡の石槨墓出土遺物  
(한강문화재연구원2011、92頁、挿図49から引用)

表13 原州市内地域の統一新羅時代遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構・遺物
①	鶴城洞遺跡	2004年	1,262㎡	統一新羅	建物跡、耕作遺構 印花文土器
②	杏邱洞遺跡	2007年	12,467㎡	統一新羅、朝鮮	建物跡 印花文土器
③	盤谷洞遺跡	2010年	12,000㎡	統一新羅、朝鮮	石槨墓 6基 印花文土器

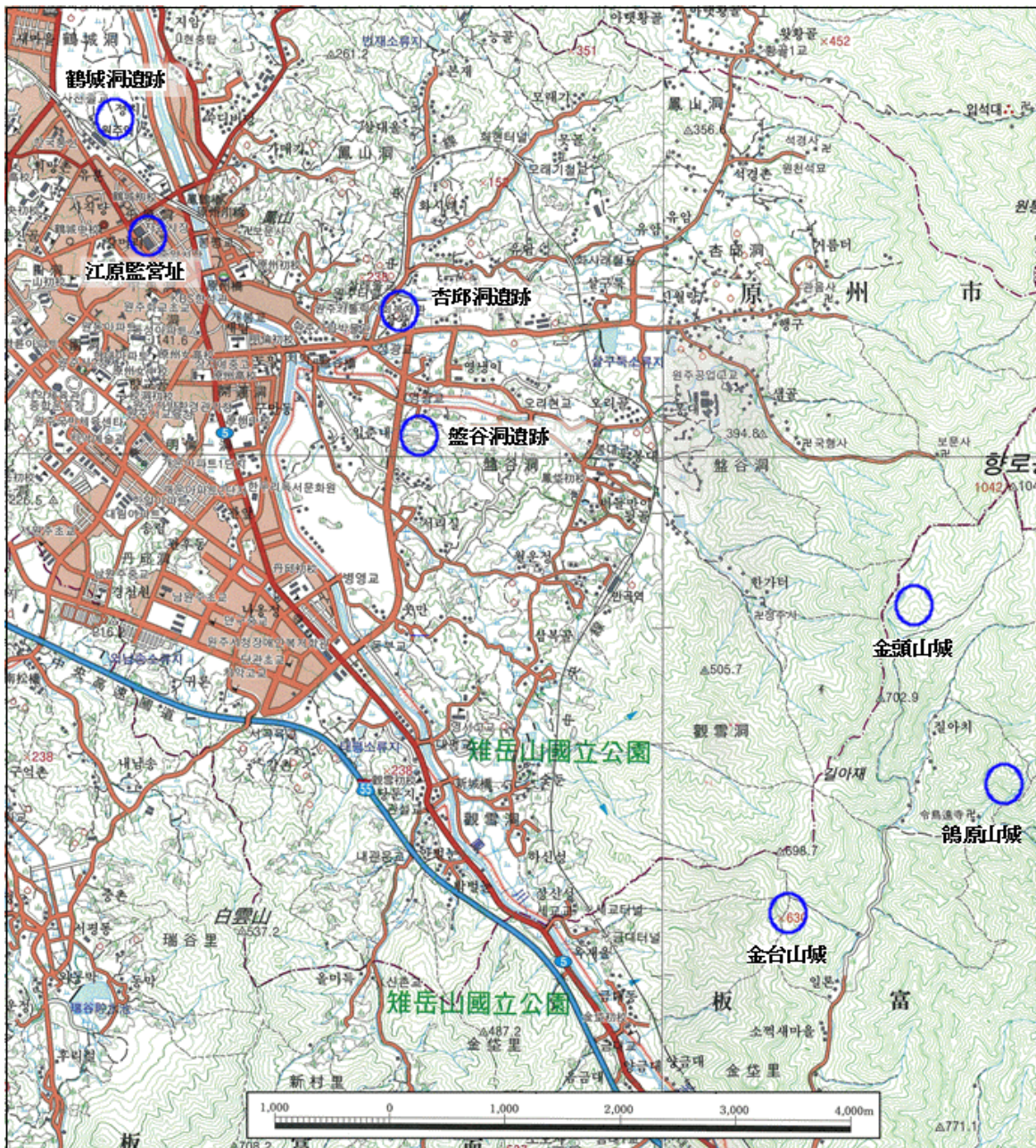


図32 原州市内地域の北原小京関連遺跡分布(이재환2012、312頁、図3、筆者再編集)

### (3) 北原小京の設置と中心地移動

以上で原州地域の考古学的様相と北原小京の関連遺跡を検討してみた。その結果、北原小京の設置によって、統一新羅期以前の中心地域である南漢江流域から原州市内地域へその中心地が移動したことが推定できる。

原州地域は史料上に現われる記録はないが、法泉里遺跡で確認された文化水準を見ると、この地域には漢城百濟期の中央から威勢品を送られるほど強力な勢力が存在していたことを知ることができる。

北原小京の設置以前、原州地域が馬韓時期を経て漢城百濟勢力の影響圏にあったことは、周辺地域の考古学調査の成果を通して確認できる。現在までの調査では、北漢江上流の華川原川里(예맥문화재연구원2013)などでも百濟関連遺跡が確認されていて、原州地域も当然百濟の領域に含まれていたと思われる。百濟の影響圏の下にあった地域が、法泉里遺跡が位置する富論地域を含めた南漢江流域に限定されるのか、あるいは原州市内地域まで含められるのかはまだわからない。しかし、原州市内地域には百濟と関連する遺跡はまだ確認されていないので、原州市内地域が原州地域の当時の中心地であった可能性は低いと思われる。

法泉里遺跡で見られる当時の集団の存在は、南漢江流域の富論地域を中心に強力な百濟系土着勢力が存在していたということを確かに示している。この地域に一定の市街地と官衙施設が存在した可能性も十分に考えられる。

一方、高句麗が南漢江上流地域まで進出した時、原州地域の富論・文幕地域も高句麗の領域に編入されたと思われる。原州に関する記録類では、原州が本来高句麗の平原郡だったとされている。原州市内には‘平原’という地名が残っていて、土着氏姓である原州元氏の始祖は高句麗系統だと『世譜』に記録されている点も注目できる(李仁在2008)。

また、建登里遺跡の存在から、文幕地域が高句麗の領域に含まれていたことは当然考えられる。しかし、河川に沿って南西方向へわずか10km余り離れた法泉里遺跡では百濟系と新羅系の古墳が確認される一方、高句麗と関わる古墳や遺物が確認されていないことは興味深い。実際には富論地域に高句麗の支配力があまり及ばなかった可能性もあるが、百濟系土着勢力の存在によって高句麗の支配力や文化的影響が南漢江流域の富論地域まで大きく及ぶことがなかったと推定される。

新羅が原州地域を領有するようになったのは6世紀中葉、真興王代に高句麗の領域に進出した時であると推測されている。したがって、新羅が原州地域を領有するようになった時点では、その中心地あるいは拠点が富論地域一帯にあった可能性が高い。法泉里遺跡の古墳の中に新羅期のものが一部見られることも関連があろう。

以上のような原州地域の考古資料を通じた文化様相から見ると、百済→高句麗→新羅の順に支配勢力が変わる原州地域の三国時代までの中心地は、現在の富論地域が所在する南漢江流域だった可能性が高いといえる。

特に、南漢江流域の強力な百済系土着勢力は、以後、この地域を領有した高句麗・新羅に統治と支配力においてさまざまな影響を与えたと推定される。統一新羅期に入ってもこの地域では百済系土着勢力がある程度は影響力を維持し、統一新羅期の中央政府に負担になるほどの存在だった可能性も想定できるかもしれない。このようなことは、北原小京が雉岳山西側の原州川流域である現在の原州市内地域に設置された主な背景であると考えられる。

北原小京と関連する統一新羅時代の遺跡は、原州市内地域から東側である雉岳山の丘陵地帯まで確認され、統一新羅期の文化の拡散が見られる。これらの遺跡では統一新羅時代以前の遺物がほとんど確認されていないという点も特徴である。

原州市内地域で確認される統一新羅時代の遺跡は、北原小京の設置と密接な関連があるに違いない。特に、印花文土器を副葬した統一新羅時代の石槨墓が確認された盤谷洞遺跡は、原州市内地域と雉岳山に位置する山城との間にある海拔150～200m程度の丘陵地帯に立地している。このことから、雉岳山に位置する山城が北原小京・北原小京城と関連する可能性が考えられる。

### 3) 北原小京の都市構造の検討

原州市内地域で確認される統一新羅時代の建物跡・古墳と出土遺物は、統一新羅時代の文化の拡散とその様相が確認できる重要な証拠になる。しかし、その中心地を比定するための直接的な証拠にはならない。最近、江原監営址とその周辺地域の発掘調査が行われたが、北原小京に関連する遺構は検出されていない。

#### (1) 小京城の検討

上述したように、北原小京の中心地を検討するための関連遺跡は足りない。しかし、北原小京に築かれたとされる北原小京城の位置比定を通して、間接的ではあるが、その中心地を推定してみることができる。

『三國史記』に記されている北原小京城の設置記録は次のとおりである。“文武王が(ここに)北原小京を設置して、神文王5(685)年に城を築くと周囲が1,031歩だった”。

北原小京を設置してそこに築いたという北原小京城の位置は、他の小京に築城された小京

城と同じく北原小京の中心地を推定する重要な手がかりの一つになるといえる。他の小京に設置された小京城の位置比定の例と既存研究の検討を総合してみると、神文王代に築城されたという城郭は次の三つの可能性をもっていると考えられる。

- ①北原小京の中心地を囲む羅城形態の城郭である。
- ②北原小京の治所城の機能がある城郭である(平地城の形態あるいは山城の形態)。
- ③北原小京の防禦に関連する城郭である(あるいは有事の際に拠点として活用する城郭)。

まず、①の可能性については一部の研究で言及されている。北原小京城は羅城の形態に築城された可能性があるが、都市開発によって破壊されたと主張されている<sup>14)</sup>。

北原小京と同じ時期に小京に城郭が築城された西原小京の場合にも、小京城が小京の中心地を囲んだ城郭であるという証拠は明らかにされていない。また、西原小京城の推定地の一つに比定されている清州邑城のような邑城の存在も原州市内地域では見られない。邑城の痕跡が残っていた場合には、高麗・朝鮮時代の各種地理志に原州地域の邑城に関する史料がなければならない。ところが、関連記録を探すことができず、また原州市内地域で羅城の痕跡などが確認された事例もない。したがって、北原小京城が北原小京の中心地を囲んだ羅城という①の可能性は現在のところ立証する根拠がまったくない。

次に、②の可能性について検討してみよう。北原小京城を北原小京の主要施設だけを囲んだ治所城として想定することである。北原小京城を治所城と想定した場合、原州市内地域の平地に築かれた可能性が考えられる。しかし、原州市内地域ではそのような城郭の痕跡はいまだに確認されておらず、平地である原州市内地域に北原小京城が築かれたということは現段階では推定できない。

それでは、北原小京城の治所城として山城を想定して考えてみよう。原州市内地域に近接して存在する城郭は、鴿原山城・金台山城・金頭山城がある。

雉岳山に位置しているこの三つの山城の中で鴿原山城・金台山城は地表調査が実施されたが、統一新羅時代に編年される遺物は採集されず、北原小京城に比定される可能性は低いという見解が提示されている(忠北大学校湖西文化研究所1998)。

しかし、三つの山城すべて築城年代が正確ではないが、『新增東國輿地勝覽』・『輿地圖書』などの記録でも高麗時代以前から存在していたことがわかる。正式な発掘調査は実施さ

---

14) 朴泰祐(朴泰祐1987)は、北原小京の中心地を原州市内地域に比定して羅城があった小京に分類しているが、都市開発によって小京に関連する遺構は破壊されたと推定している。

れていないので、精密な調査ができれば統一新羅時代の遺物が出土する可能性も排除することはできない。もちろん、統一新羅時代の遺物が出土しても、その城郭がただちに北原小京城に比定されるわけではない。

一方、統一新羅時代末期(後三国時代)に梁吉が鵠原山城を根拠地にしたという記録<sup>15)</sup> から見ると、鵠原山城は少なくともそれ以前から存在した可能性がある。

史料に見られる北原小京城の築城記録とその規模をそのまま当時の尺で換算してみると、1,031歩は約1,856m(唐尺の6尺=1歩で計算)である。ところで、朝鮮時代の文献『増補文献備考』・『大東地志』などの史料では鵠原山城の設置時期が言及されていて、その周囲が1,031歩であると記されている。この二つの文献の内容から朝鮮時代には、三つの山城の中で鵠原山城が『三國史記』に記された北原小京城であると認識していたことになる。精密地表調査(忠北大學校湖西文化研究所1998)を通して現在残っている城郭の規模が把握された二つの山城の周囲は、鵠原山城が約2,350m、金台山城が約1,730m程度である。

以上、北原小京城の治所城として雉岳山に位置している三つの山城を想定して検討してみた。北原小京の治所(官衙などの主要な施設)が山城に該当するのかは疑問であるが、後三国時代に梁吉が鵠原山城を拠点にしたという記録に見られるように、可能性がまったくないわけではない。

しかし、雉岳山に位置している山城が治所城の機能を果たすには、北原小京の中心地に推定される原州市内地域から距離が離れすぎている。鶴城洞遺跡などが位置する原州市内地域からこれら山城への距離は南東側へ直線距離で約6~8.5kmの範囲にあり、盤谷洞遺跡が位置している地域とは約4.4~6.5kmの距離にある。治所城としては雉岳山に位置している山城は立地と距離が不適合であると思われる(図33)。

最後に、③の可能性について検討してみる。雉岳山に位置している山城を北原小京の防禦と関連して検討する。

『三國史記』に見られる北原小京城の築城時期である神文王代は、新羅の三国統一以後、地方制度の再編過程で州と小京に城郭が築かれた時期である。したがって、原州市内地域に官衙などの主要な施設を置いて、戦争などに使うことができる城郭として北原小京城を築城した可能性も十分にある。

また、梁吉が鵠原山城を根拠地にして酒泉・寧越・平昌などを攻略したという記録も原州市内地域が交通上の要衝という根拠にもなるが、反対に敵の侵入が可能だったことも示している。したがって、交通上の要衝である北原小京に防禦と監視のための城郭などの施設が必

---

15) 『三國史記』卷第五十「列傳」第十、弓裔。



要だったのは当然である。

原州市内地域が北原小京の中心地であるなら、鶺鴒山城・金台山城・金頭山城が北原小京の防禦と関わる山城の役割を果たす地理的位置にあったことは推定できる。

雉岳山に位置する山城は北原小京の設置と関連性があるとはいえるが、統一新羅時代の遺構や遺物が確認されていないのであれば、この山城を北原小京城や統一新羅時代の城郭に比定することは難しい。

他の小京の中心地の防禦に関連すると思われる山城の場合でも、中心地と山城間の距離はあまり離れていない<sup>16)</sup>。したがって、北原小京の防禦と関連がある城郭としては、雉岳山に位置する山城はその距離が遠いという問題がある。

しかし、盤谷洞遺跡で確認された統一新羅時代の古墳の存在と三つの山城の立地を見ると、三つの山城は北原小京の中心地に比定される原州市内地域と確かに関連があると思われる。近接性の側面から見ても、金頭山城の場合は原州市内地域から東側へ直接通じる連絡路をもっている。金台山城の場合も原州川の上流に沿って堤川方面への交通路とつながりながら、これを観望することができる地理的位置に立地している(図27)。

したがって現段階では、三つの山城が北原小京の防禦と関連する城郭であるという③の可能性が高いと見られる。

以上のことから、雉岳山に位置する三つの山城は北原小京と関連する立地であることは十分考えられる。このことは、北原小京の交通上の立地を活用するという点から、北原小京の中心地の防禦と関連して注目できる。さらに、今後の調査成果に期待したい。

表14 原州地域の城郭

城名	位置	築城 推定年代	備考
鶺鴒山城	原州市板富面 金垈里	?	靈原(『世宗實錄』「地理志」) 鶺鴒(『新增東國輿地勝覽』)
金台山城	原州市板富面 金垈里	?	『輿地圖書』、『燃藜室記述』、 『江原道誌』
金頭山城	原州市板富面 金垈里	統一新羅以前(?)	『文化遺蹟總覽』
甄萱山城	原州市文幕邑 厚用里	後三国以前(?)	『江原道誌』

16) 金官小京:盆山城 約0.9km、南原小京:蛟龍山城 約2.3km。

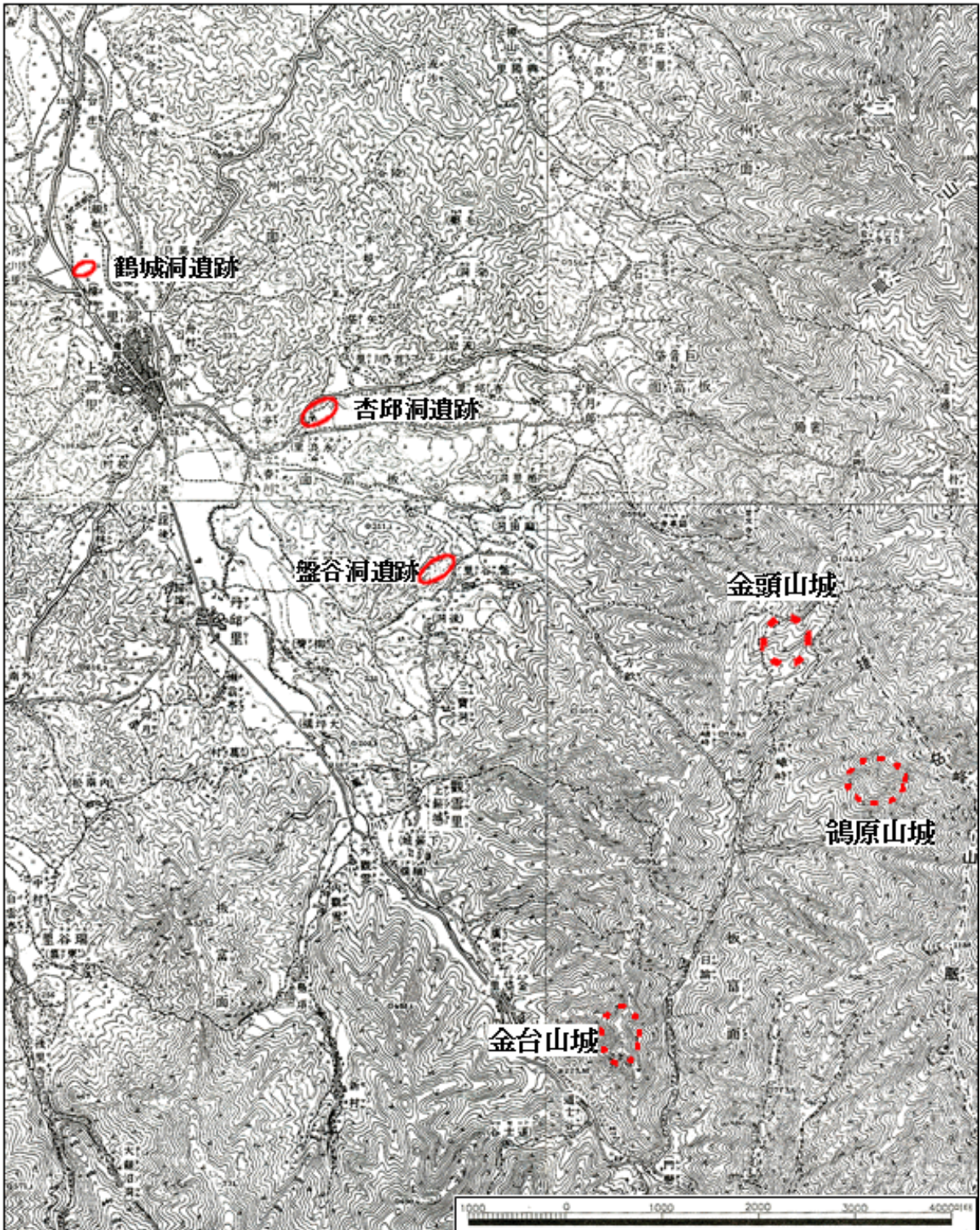


図33 原州市内地域と周辺地域の北原小京関連遺跡と城郭位置(1916年製作の旧地形図)

## (2) 北原小京の中心地の検討

以上のように、考古学的様相から見ると、北原小京の治所は原州市内地域に新しく建設されたことが推定できる。さらに、北原小京の中心地は雉岳山西側の原州川を中心とする現在の原州市内地域(原州駅と江原監営址近辺)だったと推定される。原州市内地域の鶴城洞・盤谷洞などで確認された統一新羅時代の遺跡の分布は、市内地域が北原小京の中心地と関連があることをある程度裏付けている。

ところが、北原小京の都市構造を説明できるような考古資料は現段階では見られない。中心地と関連がある小京城の比定の問題も、前項で述べたように小京との関連性は十分考えられるが、確実な考古資料はないのである。また、原州市内地域には小京が設置された他の地域ですべて存在が確認される高麗・朝鮮時代の邑城が存在していないことも特徴であり、注目すべきである。もちろん、小京が設置された他の地域の高麗・朝鮮時代の邑城がそのまま小京城に比定されるわけではない。

筆者は、他の州と小京の中心地の1910年代製作の旧地籍図や1920～1930年代製作の旧地形図を利用した検討方法を原州市内に適用してみた。特に、北原小京の中心地であると推定される江原監営址周辺の旧地籍図を分析してみた。その結果、区画地割の痕跡と見られるところはほとんど確認されなかった(図34)。確かに旧地籍図や旧地形図を分析してみても、他の小京の中心地において確認される区画地割の痕跡が見られず、市街地が形成される場所としては狭い地形である。

以上、北原小京の都市構造を検討してみた。北原小京は中心地に推定される原州市内地域の考古資料が貧弱なため、検討が難しい。さらに、中心地に関連する城郭も存在せず、坊里制に関連する区画地割も確認できない。北原小京の都市構造と城郭に関連する調査成果がこれから増加していけば、より具体的な研究が可能であると考えられるが、現段階では北原小京の都市構造が他の小京とは異なっている可能性は高いといえるだろう。

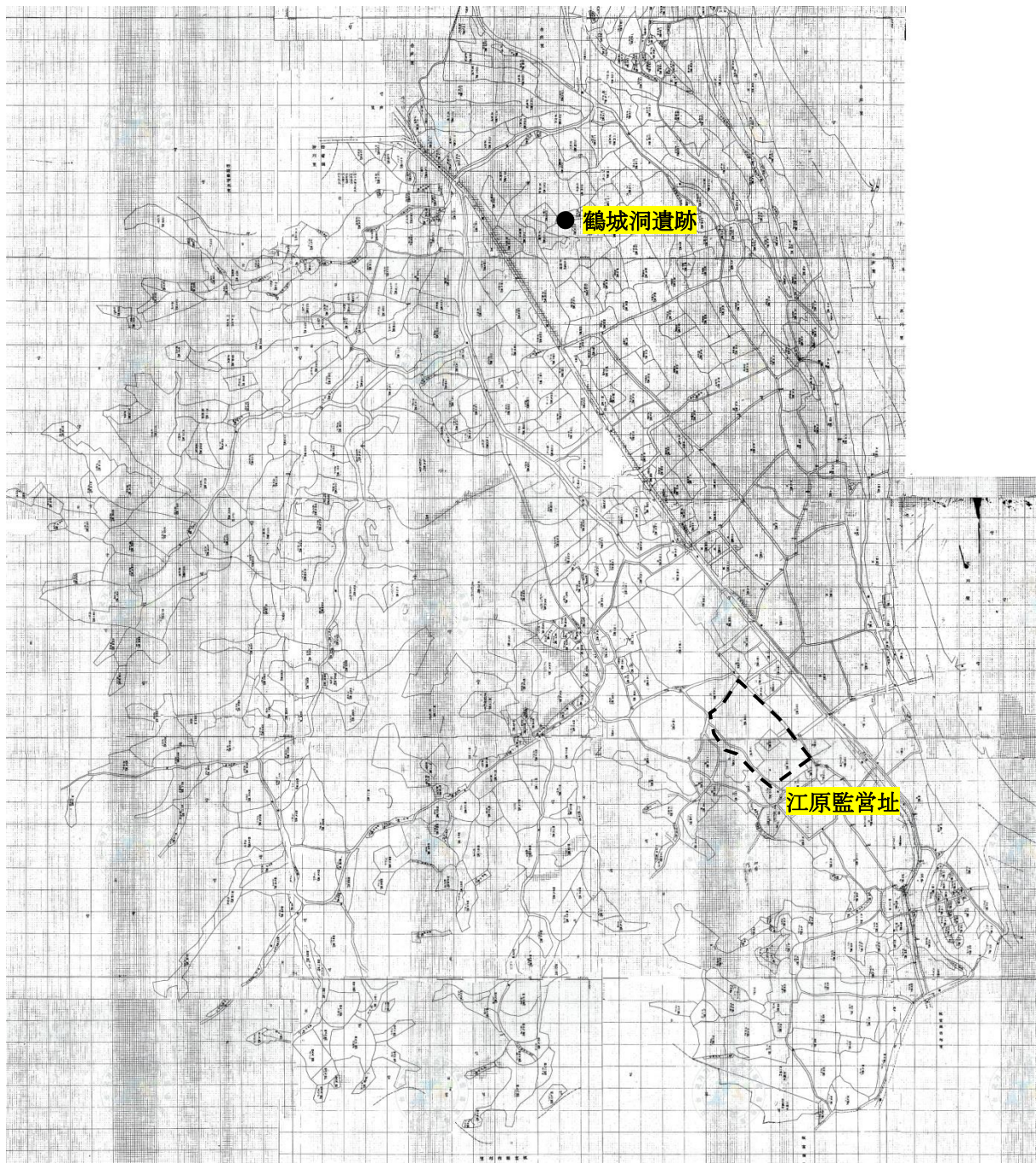


図34 原州市内地域と周辺地域の旧地籍図(1916年製作)

## 第4節 西原小京の都市構造

西原小京は、現在の忠清北道清州市に設置された。清州地域は、三国時代に百済が最初に進出してその領域になった。高句麗と新羅も清州地域に進出していたとされているが、関連遺跡はあまりない。

統一新羅時代の五小京の研究のうち、西原小京に関連する研究は文献と考古学ともに他の小京より活発に行われているといえる。特に、清州地域に分布する城郭の調査成果をもとに西原小京城の比定を中心とする研究が多い。最近では、西原小京の中心地に推定される地域の調査事例が増えつつあり、小京城の比定と小京の都市構造を検討する研究が行われている。

### 1) 西原小京の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

西原小京に関連する史料は多くないが、小京の設置と小京城の築城記録が『三國史記』「地理志」・「新羅本紀」に見られる。『三國史記』「地理志」には、神文王5(685)年に清州に西原小京を設置し、景德王代に西原京になったという記事がある。

『三國史記』卷第三十六「雜志」第五 地理3

西原京 神文王五年 初置西原小京 景德王改名西原京 今清州

『三國史記』「新羅本紀」には、神文王5(685)年に西原京が設置され、阿漚<sup>17)</sup>元泰を統治責任者の仕臣に任命し、神文王9(689)年に西原京城を築城したという記事がある。

『三國史記』卷第八「新羅本紀」第八 神文王5年

三月 置西原小京 以阿漚元泰爲仕臣

『三國史記』卷第八「新羅本紀」第八 神文王9年

秋閏九月二十六日 幸獐山城 築西原京城

『三國史記』「裂起列傳」には、新羅の文武王代に金庾信の長男三光が執政をしていた時、裂起が現在の報恩地域である三年山郡の太守になり、彼と一緒に金庾信を補佐していた仇近

---

17) 新羅の17官位のうち6位の官位。

表15 西原小京の名称変遷

神文王5年 (685年)	神文王9年 (689年)	景德王代	高麗・朝鮮時代	現在地名
西原小京	築城記録	西原京	清州牧	忠清北道清州市

は金庾信の三男の元貞に従い、西原述城を築城したという記事がある。この西原述城が西原小京城を意味するのかは確実ではないが、同じ時期に同じ地域に築城された城郭であることから、西原小京城である可能性が高いとする見解が多い。

### 『三國史記』卷第四十七「列傳」第七 裂起

…順憬説三光 三光授以三年山郡太守 仇近從元貞公 築西原述城 元貞公聞人言…

景德王代に西原京に改称され、高麗時代(太祖代)には清州牧に改称された。朝鮮時代には反乱事件などによって清州牧から西原県に降格、また清州牧に戻ることが数回あった。

#### (2) 既存研究の検討

西原小京に関する研究は、他の小京の研究と比べると比較的多く行われているが、西原小京城の比定と西原小京の都市構造に関する研究に集中しているといえる。

特に、清州地域に位置している城郭に関する調査と研究が進んできた結果、西原小京に関する研究も早くから行われるようになった(図37)。他に、文献史学では新羅村落文書<sup>18)</sup>の分析を通じた研究が活発に行われていた。

朴泰祐(朴泰祐1987)は、西原小京を羅城がめぐる都市に分類し、西原小京城は牛岩山城の外郭城である唐山土城と推定した。しかし、都市構造や中心地の区画地割施行の有無についてはほとんど言及していない。

西原小京の設置とその都市構造に関してはさまざまな研究が行われているが、西原小京城を比定するための城郭の検討が主であった。その結果、牛岩山城あるいは上党山城、また清州邑城を西原小京城に比定するさまざまな見解が示されてきた。既存研究は小京の治所としての小京城の比定に集中し、都市構造に関する検討はほとんど行われてこなかった。

しかし、西原小京の都市構造に関する研究も多少行われていて、李京贊の研究(李京贊

18) 日本の正倉院に所蔵されている新羅時代の村落に関する記録文書。西原小京の付近の村と直接管轄下にある村のことが記録されている。

2002)では西原小京を格子型土地区画が施行された都市と分析している。李京贊の研究は清州の旧地籍図をもとにしている。李京贊は、清州市内地域の格子型土地区画の規模を1坊が東西約150m・155m×南北約150mで、東西3行×南北10列(13~15列)とした。

山田隆文の西原小京の研究(山田隆文2008)では、清州市内地域の東南部一帯に一辺約140mを基本とする方格地割が東西約900m×南北約1,000mの範囲に施行されたと見ている。しかし、清州邑城の北辺は方格地割の痕跡が不明確であり、中軸大路が設定されていない特徴が見られるとした(図35)。

最近では、清州地域に築かれた城郭の築城計画の変化を検討し、西原小京の都市構造と性格を論じた研究(車勇杰2012)も行われている。その研究では、清州地域の約40箇所以上の城堡の様相を分析し、築城計画の連続的発展過程を追究している。清州地域は、小規模な木柵と土築の城堡が築城されている段階に百済の領域に編入されたとされる。

車勇杰の研究によると、城郭都市としての清州地域は、新羅の領土に編入された時期の石築山城の築城から始まる。そして、平地や低い丘陵を利用した邑城の性格をもつ土築城郭と都市の背後の山城から構成された城郭都市は、統一新羅の時期と関連していると見ている。また、文献上の西原小京が西原京に昇格される時期に変化が始まって、10世紀の高麗時代初期に羅城をもった都市へと変化したと見ている。13世紀に至って管轄区域内のもっとも険しいところに大規模な入堡籠城のための避難用の山城が築城され、また朝鮮時代には清州邑城が石築に改築されて行政中心都市になったと見ている。

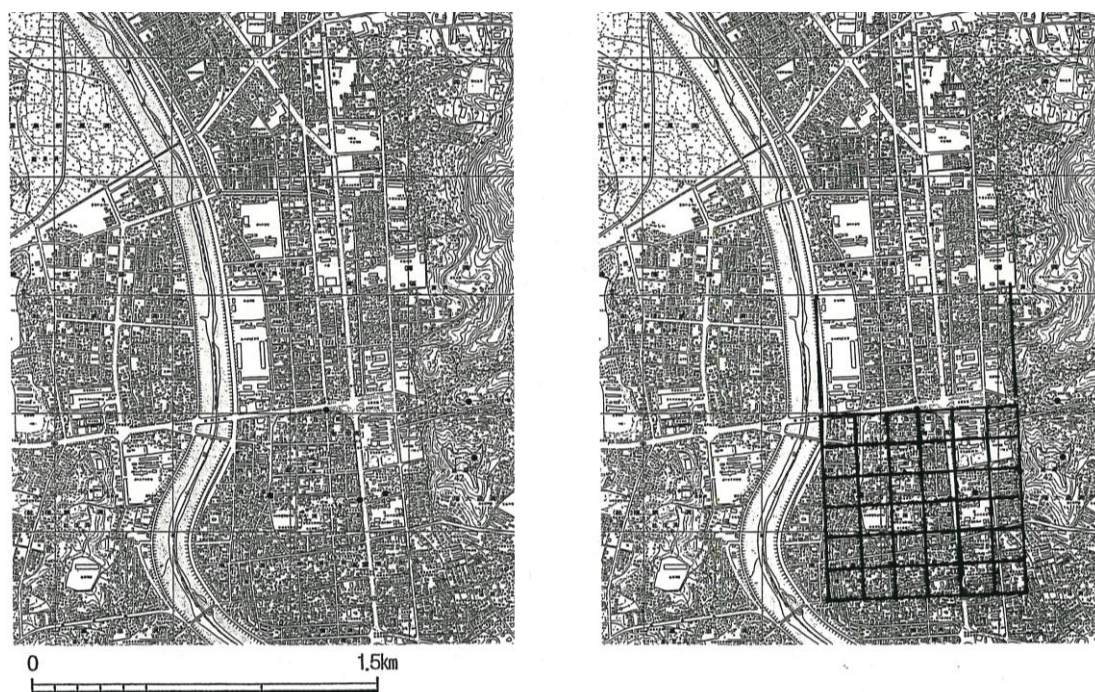


図35 山田隆文の西原小京の方格地割復元案(山田隆文2008、36頁、図32から引用)

最近の西原小京の都市構造に関する研究(盧秉滉2014)では、西原小京の都市構造を平地の都市と背後に山城が位置した構造として、中心地域は王京を模倣して都市計画が行われ、周りが牆垣(塹)に囲まれていたと見ている。また、このような西原小京の外郭としての牆垣は、後に『高麗史』に太祖2(919)年8月王建が清州に行幸して城郭を築城させた<sup>19)</sup>と伝わっている。高麗時代初期の清州邑城のもとになったと見るのが自然であると解釈している。

盧秉滉の研究をまとめると、以下のとおりである。新羅は、清州地域に進出して西原小京を設置する以前には、西側の父母山城を継続的に使用しながら周りの丘陵に定着し始めた。その後、東部の山麓につながる地域に上党山城と牛岩山城を築城し、中心地が移動する。平地には土地区画が行われており、景德王代に西原京に改称され、周囲を牆垣で囲んだとする。

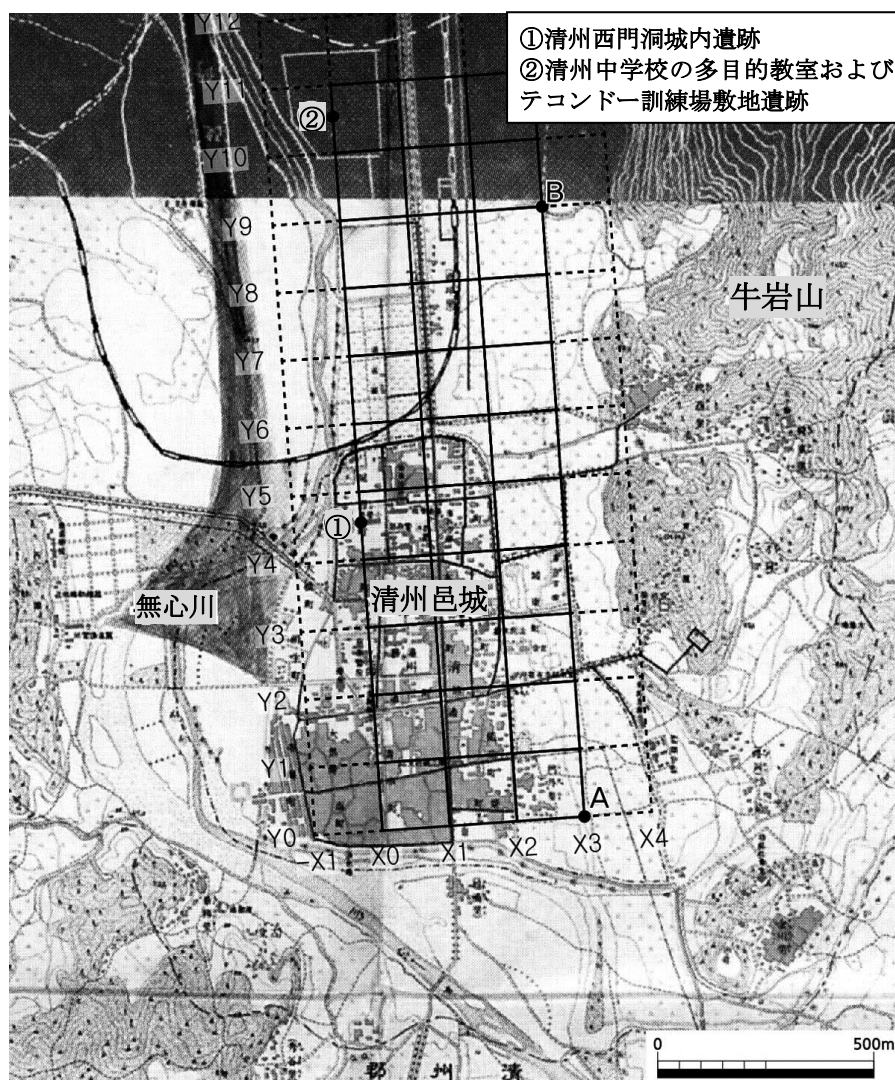


図36 黄仁鎬の西原小京の都市構造復元案(황인호2014、128頁、図面6、筆者再編集)

19) 『高麗史』 卷一、「世家」 卷第一、太祖二年、秋八月。



西原京は東に築城された牛岩山城と上党山城を背後山城とする都市を形成したものと理解することができ、後の高麗時代や朝鮮時代まで都市の基盤となり、清州の中心地域だったとする。

黄仁鎬(황인호2014)は、清州邑城一帯に西原小京の都市構造の復元案を提示している。黄仁鎬は、清州邑城周辺の清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡と清州西門洞城内遺跡が、統一新羅時代の西原小京から高麗時代の清州邑城への転換過程を示していると見ている。また、1918年製作の旧地形図に約160m単位の格子型土地区画の存在が確認されるので、西原小京の都市計画が無心川と牛岩山の間の細長い平地に設定されたと見ている。発掘調査の結果と旧地形図に見られる区画地割の痕跡から、東西3坊×南北11坊あるいは東西5坊×南北12坊の長方形の都市構造を提示している(図36)。

以上のように、既存研究ではさまざまな検討が行われている。しかし、考古資料を通じた小京の中心地と都市構造を検討する研究はまだ足りないといえる。小京城と中心地はだいたい清州邑城とその一帯である可能性が高くなっているが、清州邑城を小京城に比定するには関連遺跡の調査も足りない。また、最近の都市構造の関連研究で西原小京の中心地に長方形の区画地割が提示されていて、注目すべきである。しかし、それが西原小京の都市構造の特



図37 清州地域の主な城郭位置(GOOGLE EARTHから作製)

徴であるのかどうかは検討する必要がある。

## 2) 西原小京の関連遺跡(図40、表16)

清州地域では、西原小京の設置以前の新羅と関連する遺構と遺物はほとんど確認されていない。このことは、新羅の進出が遅れた可能性、あるいは同地域に百済関連勢力が継続的に残留していた可能性を示していると考えられる。

清州地域で西原小京と関連がある遺跡としては、城郭と寺跡が知られている。特に、西原小京の中心地と推定される清州邑城とその一帯では、これまで発掘調査事例はあまり多くなかったが、最近調査事例が増えている。清州邑城の調査も行われているが、西原小京と関連する統一新羅時代の遺構は検出されていない。

### (1) 関連遺跡の現況

#### ① 清州龍潭洞古墳群

古墳群は清州市内地域の南東側にあり、1999～2000年の調査では統一新羅時代の石槨墓が検出された。遺物には、印花文が施文された土器がある(국립청주박물관2002)。

#### ② 清州西門洞城内遺跡

調査地は清州邑城内部の西側であり、2006年の調査では高麗・朝鮮時代の建物跡や推定道路遺構と塀遺構などが検出された。遺物には「城」銘の瓦などがあり、特に統一新羅時代の土器片が出土しているので注目された(중원문화재연구원2008)。

#### ③ 清州南門路2街ナムグンターワ新築敷地遺跡

遺跡の位置は清州邑城の南東角である。遺構の中には朝鮮時代のものもあるが、遺物に統一新羅時代のものが見られる(충청북도문화재연구원2013b)。

#### ④ 清州邑城

清州邑城は清州市内地域の無心川の東側に位置し、高麗時代から朝鮮時代まで使用された記録がある。高麗時代に清州邑城が水害で破壊されたという記録があるが、築城されたのがいつなのかは不明確である。

東西南北の門跡が調査され、城壁の調査で基底部が確認されている。清州邑城の内側も調査されて、「大中三年」銘(849)の瓦が出土し、「城」銘の瓦も出土している。「城」銘の

瓦は、臥牛山城(牛岩山城)と上堂山城からも出土しているので注目される(충청북도문화재연구원 2013c)。

#### ⑤牛岩山城

牛岩山には臥牛山城と唐山土城が位置しており、臥牛山城は牛岩山城とも呼ばれている。牛岩山城と唐山土城はそれぞれ独立的に存在していたが、高麗時代に羅城が築城された際にこの牛岩山城と唐山土城を連結したものである。

調査の結果、内城第1郭は牛岩山の頂上部を中心に築城された城郭であり、出土遺物から三国時代に築城された可能性が高く、高麗時代に改築があったと思われる。内城第2郭は高麗時代に築城されたものとされた。内城第3郭は高麗時代に築城された後、朝鮮時代まで使用され、数回の改築や修築があったと見られる(호서문화유산연구원2013)。

#### ⑥清州北門路2街78-10番地一帯都市型生活住宅敷地内遺跡

調査対象地の周辺には清州邑城の遺構(門跡)などが位置している。調査の結果、積心遺構2基、統一新羅～高麗時代初期の塀遺構、石列が検出された(충청북도문화재연구원2015)。

#### ⑦清州瑞雲洞多家口住宅新築敷地内遺跡

調査の結果、統一新羅時代末～高麗時代初期の積心遺構1基と円形に配置された積心遺構が確認され、台付椀・隆起文土器などが出土した(한국선사문화연구원2015)。

#### ⑧清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡(図38・39)

調査地は清州市の旧市街にあり、清州邑城の北側の外郭に位置していて、東の牛岩山から西にのびる稜線斜面と無心川の間に形成された平坦な台地に該当する。現在、調査地は清州中学校の運動場に利用されている。



図38 清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡の道路遺構  
(중원문화재연구원2014, 27頁, 29頁から引用)

調査の結果、統一新羅時代の竪穴建物跡1基、井戸2基、統一新羅～高麗時代の道路遺構2基、塀遺構2基、溝遺構、排水路、竪穴遺構、柱穴などが検出された。特に、塀遺構は調査地の南側と北側に位置し、その内側で井戸、竪穴遺構、柱穴が検出されている。また、塀遺構に並行して道路遺構が検出され注目される(중원문화재연구원2014)。

⑨清州文化洞50-2番地一帯共同住宅新築敷地内遺跡

調査地は清州邑城の南東側100mに位置し、3箇所(I・II・III地点)に分けて調査が実施

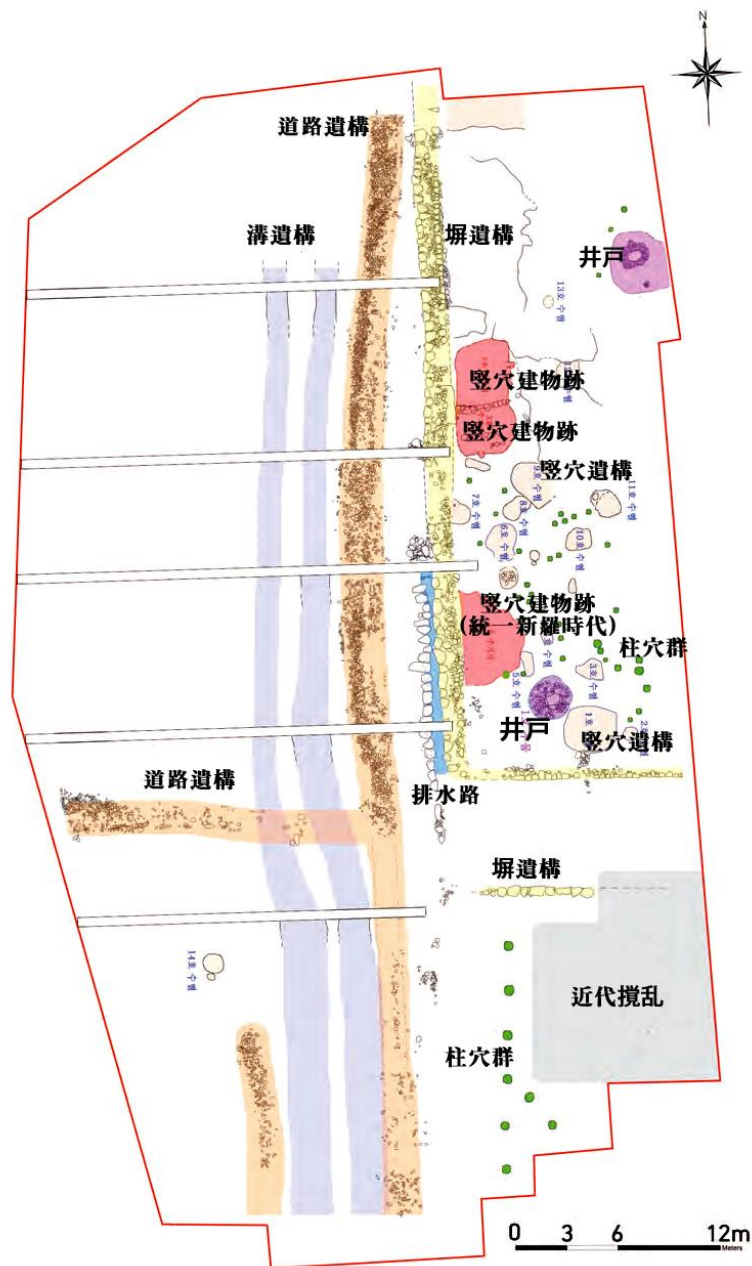


図39 清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡の遺構分布 (중원문화재연구원2014、14頁、図面7、筆者再編集)

された。調査の結果、統一新羅～高麗・朝鮮時代の塀遺構、積心遺構などが検出された。統一新羅時代の蓋片、点列文土器・波状文土器と瓦などが出土している(충청북도문화재연구원2015)。

## (2) 関連遺跡の様相

最近、清州邑城周辺の調査で統一新羅時代の関連遺跡が確認されている。統一新羅時代の関連遺跡の分布様相を見ると、邑城の内側と邑城外の北側・南側で広範囲に確認されている。

清州西門洞城内遺跡の発掘調査では、統一新羅時代の文化層から出土した遺物の中に8世紀中葉の遺物がある。清州北門路2街78-10番地一帯都市型生活住宅敷地内遺跡では、高麗時代の文化層の下で現在の道路と並行した南北方向の石列が検出され、統一新羅時代の点列文がある四面扁瓶が出土した。

清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡の高麗時代初期の文化層で南北方向の道路遺構とそれに直交する東西方向の道路遺構が検出され、統一新羅時代の点列文土

表16 清州市内地域の西原小京関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構・遺物
①	清州龍潭洞古墳群	1999～ 2000年	4,300㎡	統一新羅、高麗	石槨墓、印花文土器
②	清州西門洞城内遺跡	2006年	2,268㎡	高麗、朝鮮	統一新羅時代 土器片
③	清州南門路2街ナムグンター ワ新築敷地遺跡	2011年	1,904㎡	統一新羅、朝鮮	瓦
④	清州邑城	2011年 2012年	150㎡ 426㎡	高麗、朝鮮	城壁基礎部 瓦、磁器、陶器
⑤	牛岩山城	2013年	2,500㎡	三国、高麗、朝鮮	?
⑥	清州北門路2街78-10番地一帯 都市型生活住宅敷地内遺跡	2013年	1,081㎡	統一新羅、高麗	石列、四面扁瓶
⑦	清州瑞雲洞 多家口住宅新築敷地内遺跡	2013年	370㎡	統一新羅～高麗	積心遺構
⑧	清州中学校の多目的教室およ びテコンドー訓練場敷地遺跡	2014年	2,260㎡	統一新羅、高麗 朝鮮	道路遺構 土器片、瓦
⑨	清州文化洞50-2番地一帯 共同住宅新築敷地内遺跡	2014年	10,292㎡	統一新羅 高麗、朝鮮	蓋片、点列文土器 波状文土器

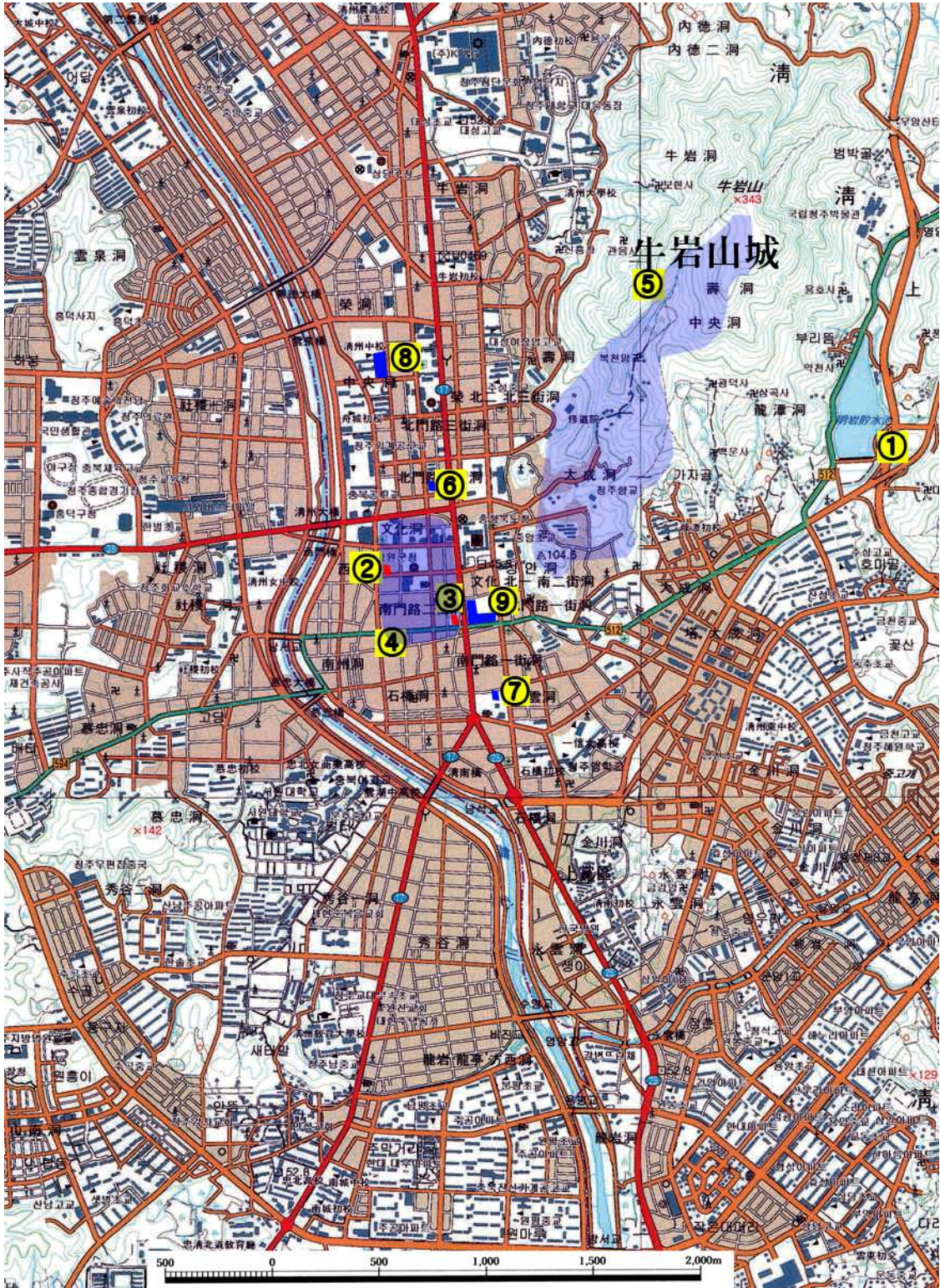


図40 清州市内地域の西原小京関連遺跡分布

- ①清州龍潭洞古墳群 ②清州西門洞城内遺跡 ③清州南門路2街ナムグンターワ新築敷地遺跡
- ④清州邑城 ⑤牛岩山城 ⑥清州北門路2街78-10番地一帯都市型生活住宅敷地内遺跡 ⑦清州瑞雲洞多  
家口住宅新築敷地内遺跡 ⑧清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡 ⑨清州文化  
洞50-2番地一帯共同住宅新築敷地内遺跡

器片などが出土した。このことは、統一新羅時代の西原小京から区画地割が始まっていた可能性を示している。しかし、清州邑城の城壁の調査では小京城が築城された当時の遺構は検出されていない。

### 3) 西原小京の都市構造の検討

#### (1) 西原小京の区画地割の復元(表17)

西原小京の中心地は、清州邑城が位置し、その東側に牛岩山があり、西側には無心川が流れる清州市内地域である。西原小京の都市構造に関する既存研究では、基本的に清州邑城一帯の旧地籍図や旧地形図にもとづいて、清州市内地域の区画地割の復元案を提示している。

李京贊(李京贊2002)は、清州邑城一帯に設定した格子型土地区画の規模を一坊が東西約150m・約155m×南北約150mで東西3行×南北10列(最大13~15列)とした。山田隆文(山田隆文2008)は、清州邑城一帯に一辺約140mの方格地割が東西6坊×南北6坊程度であると推定した。黄仁鎬(황인호2014)は、1918年製作の旧地形図から440尺(約156.2m)単位の格子型土地区画の存在が確認できるとし、発掘調査結果と旧地形図に見られる区画地割の痕跡から、東西3坊×南北11坊あるいは東西5坊×南北12坊の長方形の都市構造を提示している。

これらの諸見解は、西原小京の中心地の区画地割は無心川と牛岩山の間の細長い平地に設定されたと見ている点で共通している。しかし、既存研究では1坊の規模は一辺約140~160mでそれぞれ異なっており、全体の都市構造も東西3~6坊×南北6~13坊と坊数にもそれぞれ少し違いがある。

表17 西原小京の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)
①	李京贊(2002)	—	東西 約150・155m 南北 約150m	3行×10列(最大13~15列) 1坊の規模は道路を含む
②	山田隆文(2008)	東西 約 900m 南北 約1,000m	東西 約140m 南北 約140m	5坊×7坊(最低推定) 1坊の規模は道路を含む
③	黄仁鎬(2014)	—	東西 440尺(約156.2m) 南北 440尺(約156.2m)	3坊×11坊(5坊×12坊) 1坊の規模は道路を含む
④	筆者	東西 約 460m 南北 約1,800m	東西 約140~160m 南北 約155~160m (7) 約140~150m (5)	3坊×12坊 1坊の規模は道路を含む

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。

筆者が1913年製作の旧地籍図を検討した結果、確かに東西約460m×南北約1,800mの範囲に長方形の区画地割が確認された。さらに、旧地籍図を細かく分析してみると、清州邑城一帯の地形と区画地割にはいくつかの特徴が見られる。まず、旧地籍図では清州邑城の西側は無心川に隣接していて、最近の地形図で見られるような土地は存在していないのである。また、南北区画線は西にやや偏向し、東西区画線もそれに合わせて全体的に北にやや偏向している。そして、清州邑城を基準(図42A-B)にすると、その南側に見られる東西方向の区画線はさらに北に傾いていることがわかる。

次に、南北方向の区画地割の規模が清州邑城を基準(図42A-B)にすると、その北側は南北幅約155~160m、南側は南北幅約140~150mと異なっている。また、清州邑城の外側に見られる南北区画線が邑城内側ではその方向が変わったり、なくなったりする。このことは、清州邑城の築城によって邑城内側の区画地割に変化が生じた可能性を示している(図41・42)。

以上のように、清州邑城一帯の旧地籍図を検討すると、区画地割の区画線と規模には相違点が見られる。筆者の都市構造復元案は次のとおりである。東西方向の区画は幅約140~160mの規模で3坊があると推定される。清州邑城を基準(図42A-B)として、その北側には南北幅約155~160mの7坊、南側には南北幅約140~150mの5坊の区画地割が想定される。

## (2) 西原小京の中心地の検討

既存研究を検討し関連遺跡と資料を分析した結果、清州邑城一帯が清原小京の中心地であることがわかった。また、その中心地には南北が長い長方形の区画地割の痕跡も確認された。

清州邑城一帯を西原小京の中心地と考えると、小京が設置された他の地域と比べて狭い地域であるといえる。すなわち、小京の中心地に施行される区画地割は地形によって規制された可能性が考えられる。

一方、その復元案では小京城の比定はされていないが、前述したように盧秉湜の研究では、景德王16(757)年になって西原小京が西原京へ改称された際に、周囲に牆垣をめぐらしたことが指摘されている。それが西原小京城あるいは西原小京に関連する城郭を意味するのかわかるとは疑問であるが、神文王代に築城された小京城がどういう形態であったのかが問題になる。黄仁鎬も西原小京に盧秉湜が指摘した牆垣のような施設を想定しているが、その範囲や形態に関しては具体的に触れていない。

一部の研究では清州邑城を西原小京城に比定している。しかし、清州邑城の規模とその一帯の地形上の特徴から考えると、清州邑城が小京の中心地を囲む形態であるということには無理があろう。小京の主な施設と市街地を囲む小京城として清州邑城の範囲は狭いのではないかと思われる。さらに、旧地籍図の検討によって、清州市内地域の中心地には区画地割が



先に施行され、それから清州邑城が築城されたことも推定できる。清州邑城が西原小京の都市構造と直接に関連しているかどうかはまだわからないのである。

なお、西原小京の具体的な範囲は検討が必要であるが、高麗時代以降の清州邑城の範囲は統一新羅時代の城郭より縮小された範囲になると推定される。この場合、金官小京・中原小京・沙伐州の事例と類似しているといえる。

また、西原小京の主要な施設と市街地を囲む形態の小京城を想定すると、清州邑城の規模は狭い。西原小京城の範囲は旧地籍図に見られる区画地割の痕跡が確認されるところまで広げて考えるべきだと思われる。

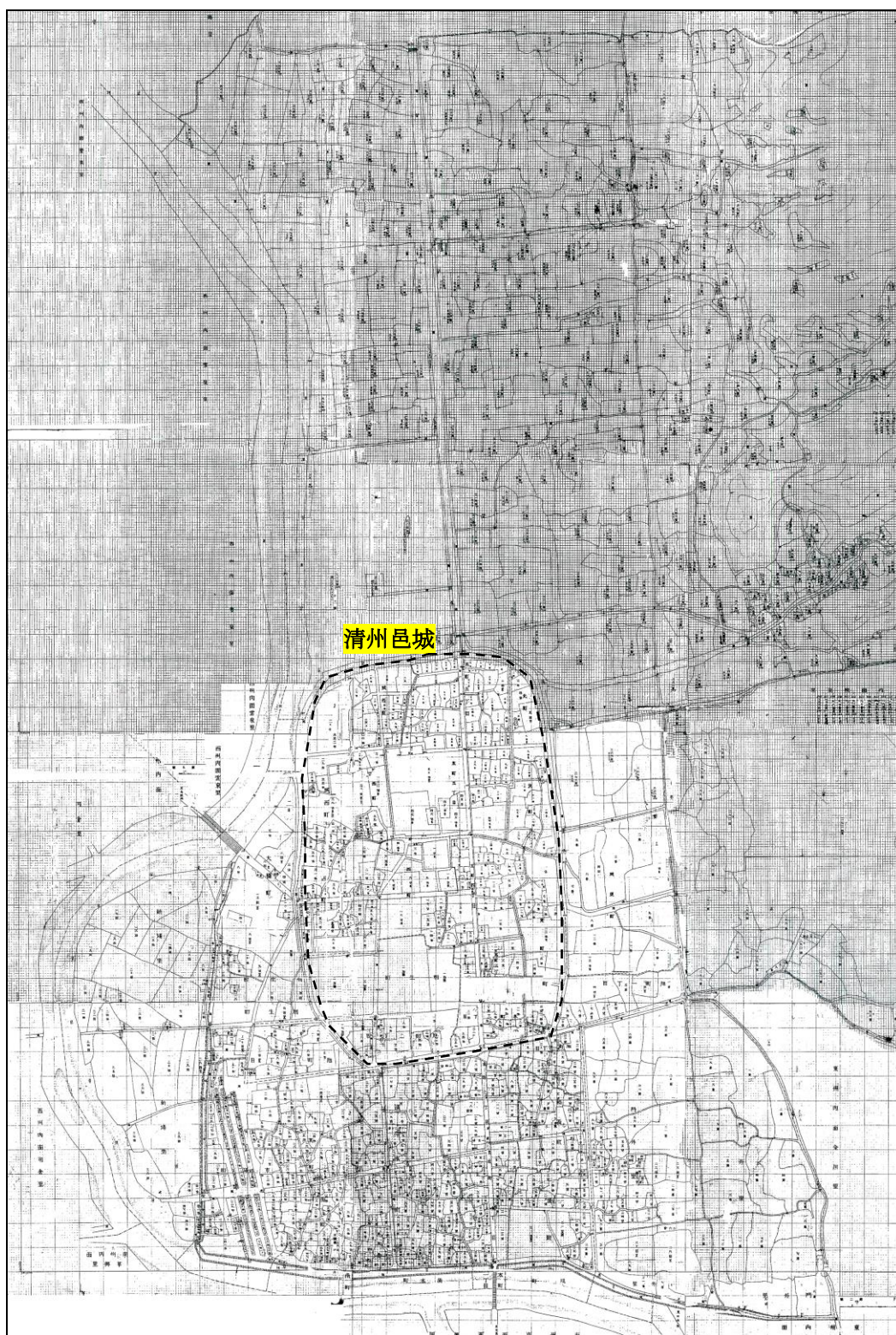


図41 清州市内地域の旧地籍図(1913年製作)

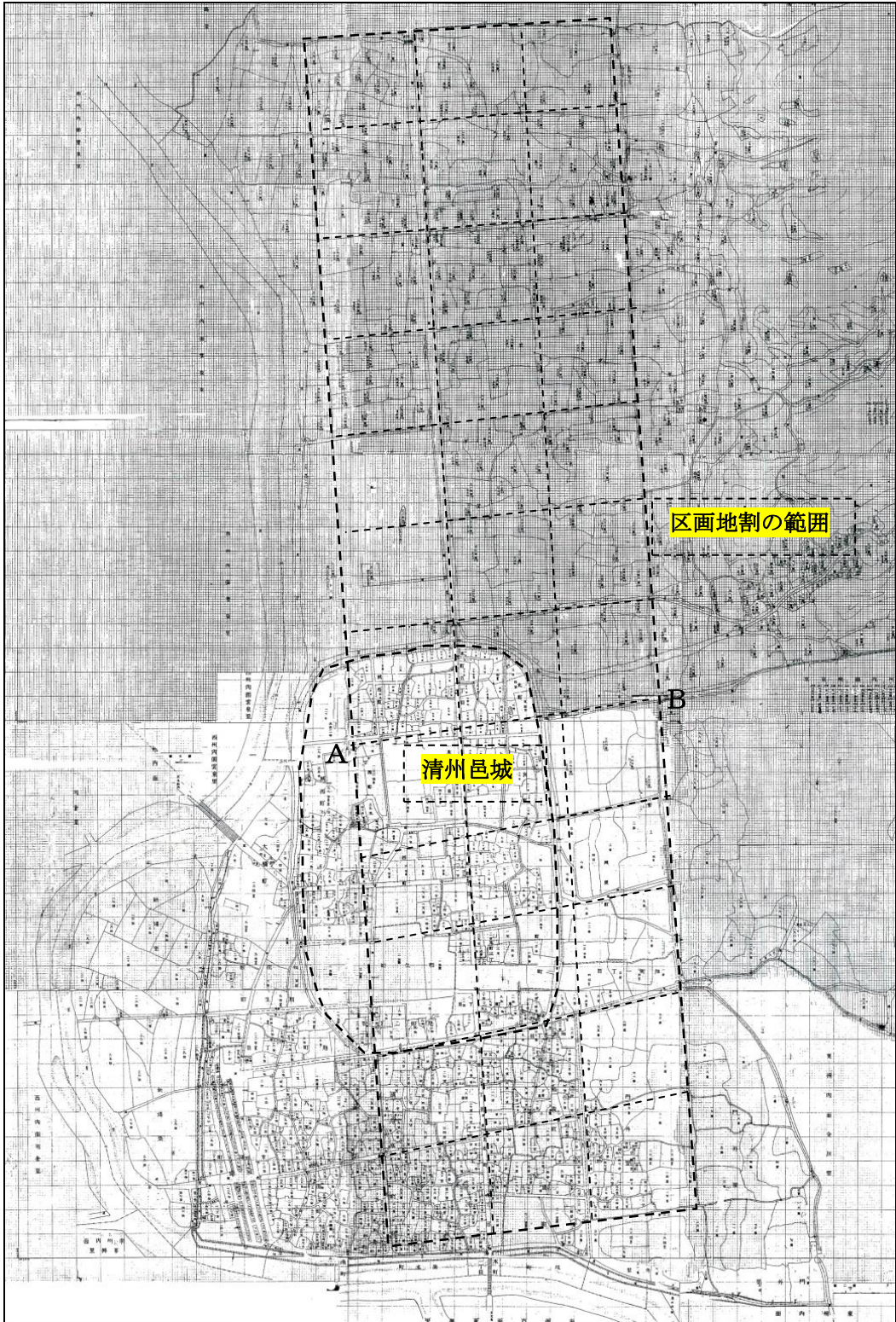


図42 西原小京の区画地割の復元案(1913年製作の旧地籍図)

## 第5節 南原小京の都市構造

南原小京は、現在の全羅北道南原市に設置された。南原地域は三国時代には百済の古龍郡であったが、関連史料や関連遺跡は少ない。南原地域は慶尚南道方面から全羅南道へ向かう主要な交通路上に位置し、全羅北道の全州<sup>20)</sup>方面へ向かう交通路の分岐点にもあたる交通の要衝である。

南原小京は、1910年代に製作された南原市内地域の旧地籍図の分析から、古代地方都市の土地区画の痕跡が確実に見えるところとして注目され、関連する研究が行われてきた。明確な土地区画の痕跡が旧地籍図に確認されるため、五小京の中では都市構造が復元可能な地域として認識される傾向がある。ところが、考古学研究に関しては調査成果の不足で進展が見られていないともいえる。

ここでは、まず南原小京の関連史料と既存研究を検討する。特に、旧地籍図の分析を通して既存の南原小京の都市構造の復元案を検討してみる。それから、現在までの南原小京の関連遺跡と調査成果をまとめ、考古学的検討を試み、復元案を提示してみたい。

### 1) 南原小京の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

南原小京に関連する史料は多くないが、小京の設置と小京城の築城記録が見られる。『三國史記』「地理志」・「新羅本紀」には、南原小京は百済の古龍郡であって、新羅の神文王5(685)年に小京が設置され、神文王11(691)年に小京城を築城し、景德王16(757)年に南原小京を設置した<sup>21)</sup>という記事がある。

『三國史記』卷第三十六 「雜志」 第五 地理 3

南原小京 本百濟古龍郡 新羅并之 神文王五年 初置小京 景德王十六年 置南原小京  
今南原府

『三國史記』卷第八 「新羅本紀」 第八 神文王 5年

三月 置西原小京 以阿飡元泰爲仕臣 置南原小京...

20) 九州の一つである完山州の治所があった地域。

21) 景德王代には小京を京にした記事(中原小京→中原京)があるので、南原小京を南原京にしたと見るのが正しい。

表18 南原小京の名称変遷

神文王5年 (685年)	神文王11年 (691年)	景德王代	高麗・朝鮮時代	現在地名
南原小京	築城記録	南原京 <sup>22)</sup>	南原府・南原都護府	全羅北道南原市

『三國史記』卷第八「新羅本紀」第八 神文王11年  
十一年 春三月…築南原城

南原小京に直接的に関連するものではないが、南原地域には区画地割が存在したことが朝鮮時代の記録から確認できる。『新增東國輿地勝覽』には、唐の都督・劉仁軌による‘井田遺基’があったという記録がある。その内容は“邑内に井田法を使って、九つの区域に区画して、その址が残っている。”というものである。

この記録によると、朝鮮時代にも南原地域には区画地割の存在が確認できたことがわかる。

『新增東國輿地勝覽』 卷之三十九 南原都護府 古跡  
井田遺基 唐劉仁軌為刺史兼都督 邑内里廬取法井田畫為九區 至今遺址尚存

南原小京は、高麗時代(太祖代)に南原府に改称され、帶方郡・南原郡など名称の変動もあり、朝鮮時代には南原都護府が設置されたのである。

(2) 既存研究の検討

南原小京の場合、考古資料が少ないので、考古学的な検討は容易ではない。しかし、旧地籍図から区画地割の痕跡が明確に確認できることから、旧地籍図を活用して都市構造の検討が行われてきた。

南原小京の都市構造に関する本格的な研究は、朴泰祐(朴泰祐1987)から始まる。朴泰祐は南原市内地域の旧地籍図(1917年製作)を利用して、南原小京の都市構造の復元を行った。

朴泰祐の研究では、旧地籍図を分析した結果、南原市内地域に道路によって区画される一辺約160mの正方形の坊が確認された。約160mの幅は道路の幅も含めた数値である。その区画された坊が分布している範囲が、南原小京が設置された当時の中心地であると推定できる。坊が分布している範囲は南原川と蓼川との間の現南原市街地である。

22) 『三國史記』には‘景德王十六年 置南原小京’であるが、他の小京の記録から南原京の誤記であることがわかる。

朴泰佑は、旧地籍図の分析で南原市内地域の東南部一帯に東西約1,680m×南北約1,600mの範囲の土地区画が確認されると見た。復元案では東西方向の土地区画の中央部に幅約80mの南北大路を設定した。そして、その両側に東西幅約160mの区画が5列ずつあると説明した。南北方向の区画地割は160mの区画が9列あり、東西10坊×南北9坊の配列になると分析した(図43)。

朴泰祐は、南原小京の都市構造の検討から、区画地割の中央部北側に官衙が位置していると見ている。小京城に関してはあまり検討していないが、南原邑城ではなく、市内地域の北東側に位置する蛟龍山城を関連する城郭としてあげている。朴泰祐は統一新羅の地方都市を三つの類型に分類して、区画地割の実施が判明し、包谷式山城が付随する都市として南原小京(1類型)を分類している<sup>23)</sup>。

李京贊の研究(李京贊2002)では、南原小京を格子型土地区画が行われた都市と分析している。李京贊の研究は、基本的に朴泰祐と同様、南原市内地域の旧地籍図をもとにしている。しかし、復元案の具体的な規模は朴泰祐とは少し違いが出ている。李京贊は、南原市内地域



図43 朴泰祐の南原小京の坊里区画復元案(朴泰祐1987、85頁、図2から引用)

23)他に、羅城で市街地が防禦されているが、区画地割が施行されていない都市を2類型(西原小京・中原小京・北原小京)、山城が付随しているが、区画地割の痕跡が確認できない都市を3類型(金官小京)に分類した。

の格子型土地区画の範囲を東西約1,345(620+85+640)m×南北約1,410mとし、東西方向の中央部に幅約85mの半区区画を設定した。区画地割は1坊が東西約145~160m×南北約155~160mで東西8区×南北9区であり、計9行9列の坊里区画形態をとっているとしている。

李京贊は、南原市内地域の区画地割の形態が全体的には比較的均一な直角方位をとっていると見たが、単位区画の形態を詳しく見れば、北側と南側の東西区画線が互いに違う方向をとっていることを指摘した。その違いは東西区画線の北側と南側との測量偏差であるとしている。したがって、南原小京は造営されてから継続して原形を維持したのではなく、数回にわたって拡張があったことを示しているとした。

李京贊は、南原市内地域の格子型土地区画の1坊の幅は東西方向で約140m・155m・160m・165mがあり、南北方向も約155m・160m・165mがあったとしている。確かに、南原市内地域の旧地籍図を検討すると、単位区画である坊の東西幅と南北幅はすべて一致していないことがわかる。

山田隆文の南原小京の研究(山田隆文2008)は、1938年製作の旧地形図をもとにしている。朴泰祐の復元案をそのまま認めて、南原市内地域に中軸大路をもつ東西10坊(東西約1,680m)×南北10坊(南北約1,600m)の復元案を提示した(図44)。

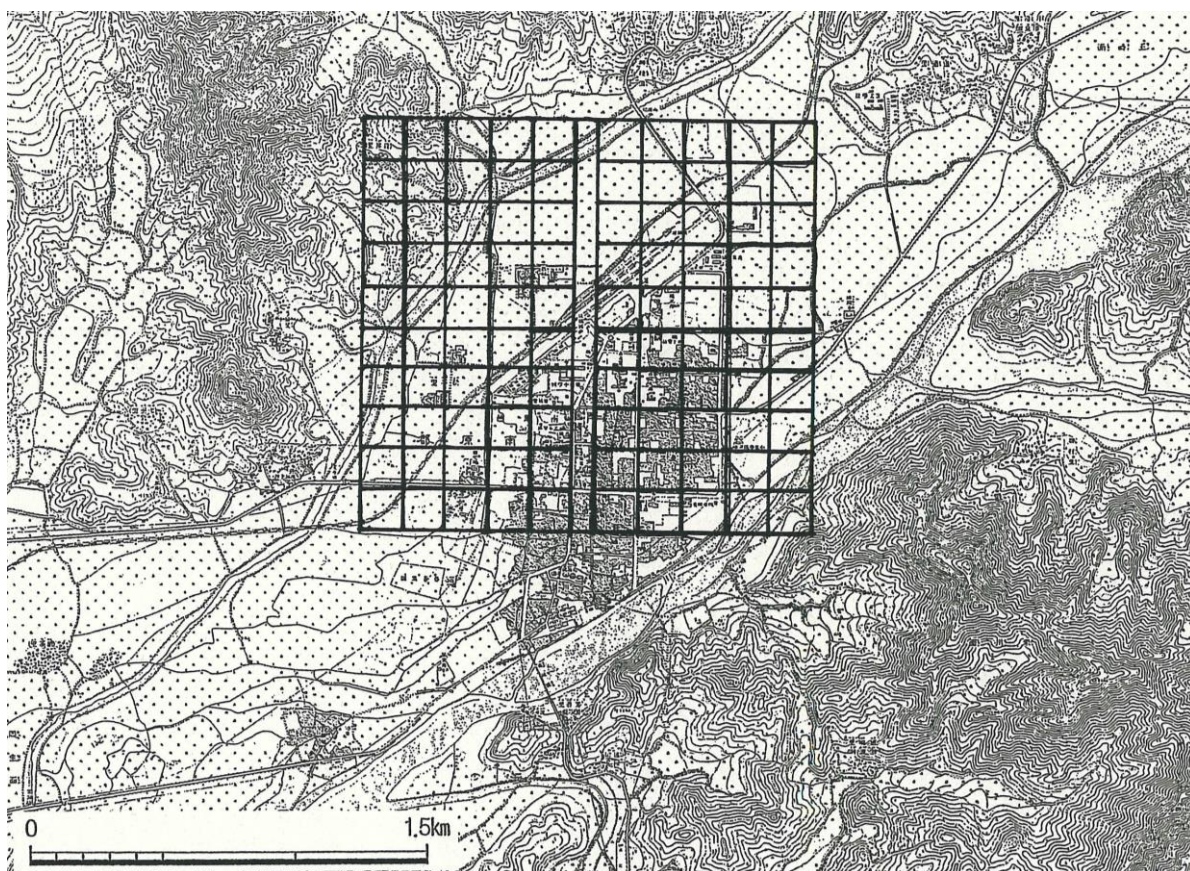


図44 山田隆文の南原小京の方格地割復元案(山田隆文2008、34頁、図29から引用)

山田隆文は、朴泰祐の復元案で官衙が位置していると推定される中央の北辺まで中軸大路の痕跡が明瞭であることから、日本の平城京などで見られる宮のような存在は疑わしいと見ている。南原邑城の内側に区画地割の乱れが見られるので、その地域に宮に相当する施設が位置していた可能性を指摘している。

黄仁鎬(황인호2014)は、南原邑城一帯を中心に南原小京の都市構造の復元案を提示した。黄仁鎬は、南原邑城の実際の規模(東西約860m×南北約860m)を基準として、南原小京の市街地区画を単位復元し、1坊を440尺×440尺(約156.2m)とした。また、南原小京は沙伐州と類似した区画単位であるとし、南原小京の土地区画の規模を東西方向は中央に幅約80mの変形区画を含めた約1,642m(10坊)、南北方向は約1,562m(10坊)に復元した。

以上、旧地籍図と旧地形図の検討によって分析された南原小京の都市構造に関する既存研究をまとめた。一部違いは存在するが、区画地割の規模や中軸大路(南北大路・半区区画・変形区画)の設定など南原小京の基本的な区画地割は4人の研究者の意見がおおむね一致する。すなわち、南原市内地域の区画地割の設定では旧地籍図と旧地形図をもとにして、東西南北の方位と一致する方形の区画地割を想定しているのである。また、李京贊の復元案は朴泰祐の復元案より精密な分析が行われていることもわかる。

しかし、旧地籍図と旧地形図で区画地割の痕跡が見えるところはよいが、北西側と南東側の区画は川の上であり、川を越えて丘陵まで及んでいる。当然、区画地割の計画があっても実際にすべての地域に施行されたのかどうかは疑問である。また、4人の研究では、南原小京の区画地割は提示されているが、南原小京城の比定による具体的な小京の都市構造はあまり検討されていない。

表19 南原市内地域の南原小京関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構・遺物
①	南原義塚路開設区間遺跡	1997年	—	朝鮮	南原邑城の西城壁石築
②	南原電線地中下事業区間内遺跡	2008年	7,500㎡	朝鮮	?
③	南原北門址および北壁推定地遺跡	2010年	500㎡	統一新羅、朝鮮	南原邑城の北城壁基礎部
④	南原都市ガス管路埋設内遺跡(試掘・立会調査)	2011年	400㎡	統一新羅 高麗、朝鮮	南原邑城の西城壁石築 土器片
⑤	南原城北門遺跡	2014年	320㎡	統一新羅、朝鮮	南原邑城北門の基底部 城壁
⑥	南原郷校地区雨水貯溜施設設置関連 覆蓋道路拡張・舗装工事区間遺跡	2014年	172.5㎡	?	南原邑城の北城壁基底部 城壁



## 2) 南原小京の関連遺跡

南原小京の中心地である市内地域では発掘調査があまり実施されていない。南原小京の関  
 連性を把握することは難しい。しかし、南原邑城の関連調査では北・西・南の城壁と基  
 底部、北門跡が確認され(군산대학교박물관2010、전라문화유산연구원2013、전북문화재연

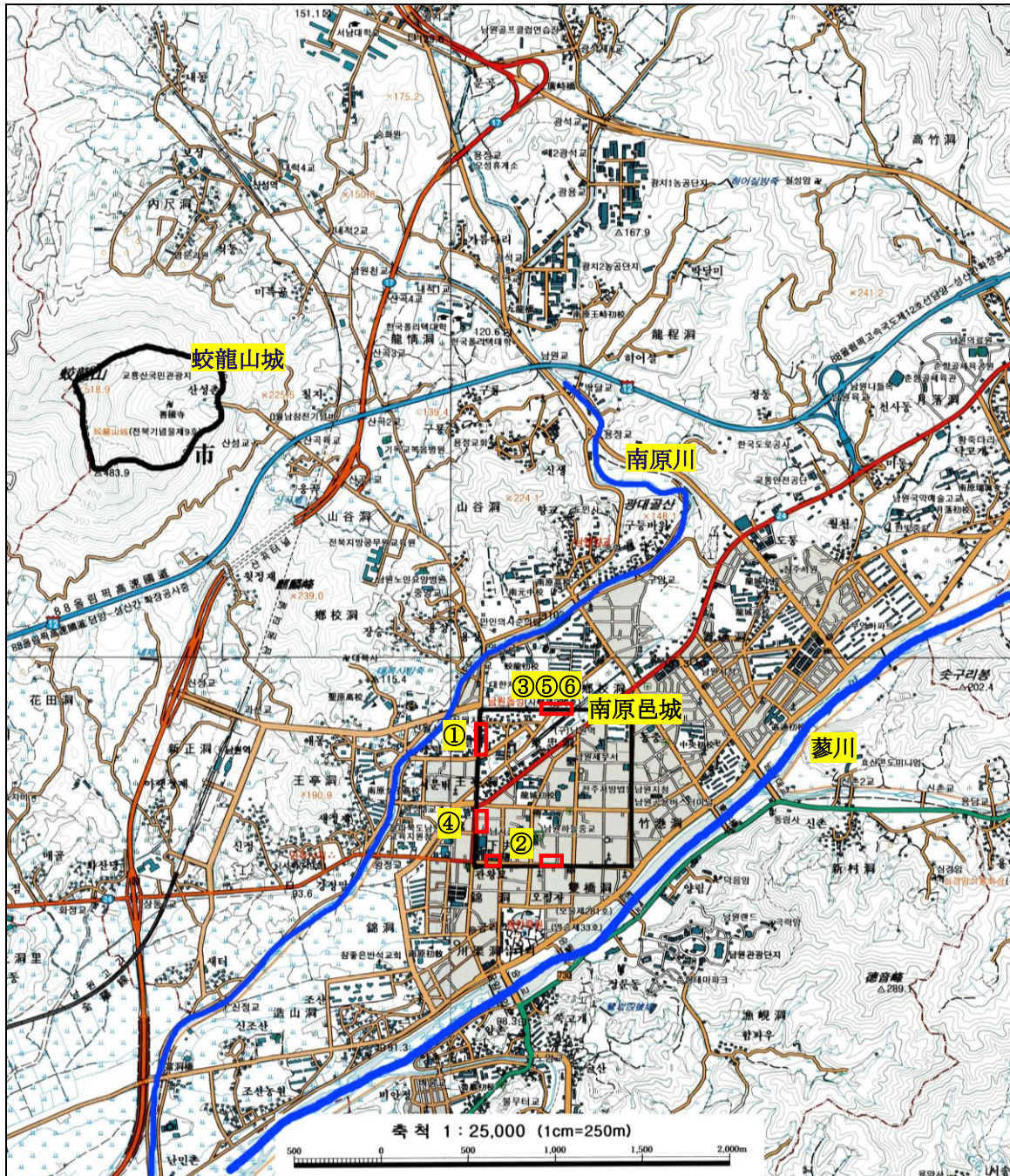


図45 南原市内地域の地形と南原小京関連遺跡分布1

- ①南原義塚路開設区間遺跡 ②南原電線地中下事業区間内遺跡
- ③南原北門址および北壁推定地遺跡 ④南原都市ガス管路埋設内遺跡 ⑤南原城北門遺跡
- ⑥南原郷校地区雨水貯溜施設設置関連覆蓋道路拡張・舗装工事区間遺跡

구원2008)、北城壁一帶の調査で統一新羅時代の城壁の基底部分が発見されて、印花文土器・瓦などが出土していることが注目される(군산대학교박물관2014)。このことから、南原邑城の初築時期が統一新羅時代までさかのぼる可能性があり、南原小京と関連する城郭である可能性も高くなった。

### 3) 南原小京の都市構造の検討

#### (1) 南原小京の都市構造の復元(表20)

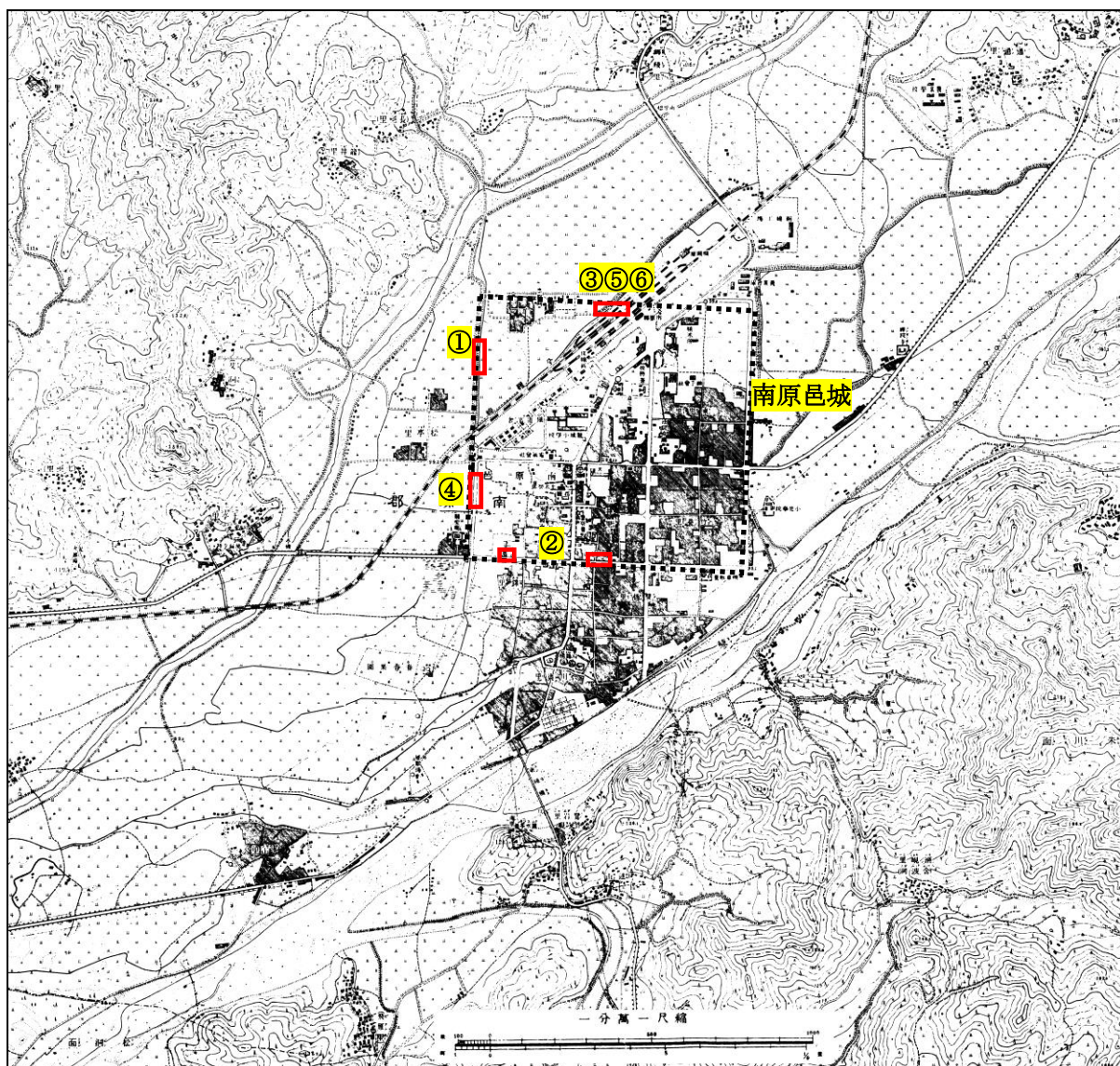


図46 南原市内地域の南原小京関連遺跡分布(1938年製作の旧地形図)

- ①南原義塚路開設区間遺跡 ②南原電線地中下事業区間内遺跡
- ③南原北門址および北壁推定地遺跡 ④南原都市ガス管路埋設内遺跡 ⑤南原城北門遺跡
- ⑥南原郷校地区雨水貯溜施設設置関連覆蓋道路拡張・舗装工事区間遺跡

ここでは、南原小京の都市構造と区画地割を推定してみる。既存研究の項で検討したように、南原小京は旧地籍図を通して見ると、区画地割が存在した都市構造である可能性は高い。当然、その区画地割が実施された地域が南原小京の中心地であることになる(図47)。

しかし、筆者の考えでは、既存研究の復元案のように南原小京の中心地が方形の区画地割であったとすることに関して疑問をもつ。李京贊の研究を参考にすると、南原小京の区画地割は全体的な規模が時期によって変化していることが推定できるのではないかと。

李京贊の研究では、九州と五小京の一部都市の格子型土地区画の検討で、区画地割の性格を田地区画<sup>24)</sup>と市街地区画<sup>25)</sup>に分類している。また、李京贊は都市によって、区画地割の形態が単位区画に均等に分割される大区画が存在したところ<sup>26)</sup>と、施行時期により単位区画が拡張しながら大区画になるところ<sup>27)</sup>に分類した。それによると、南原市内地域の区画地割の形態は市街地区画で、単位区画の拡張が順次的に行われたことになる。

ここで、まず区画地割が施行された時期を検討する必要がある。関連史料で述べたように南原は“邑内に井田法を使って、九つの区域に区画して、その址が残っている。”という『新增東國輿地勝覽』の記録がある。その記録を信用すると、統一期以前に区画地割が行われていることになる。また、この区画地割は田地区画の性格をもつ。そして、南原地域に小京が設置される以前から朝鮮時代まで、痕跡がわかる区画地割が存在したことになる。ところが、統一新羅時代以前の区画地割が存在したとすると、南原小京の設置と関連して何らの記録も存在していないことは不自然ではないか。

簡単な記事ではあるが、『三國史記』には南原小京の設置記録がある。南原地域に小京が設置された際、区画地割の痕跡が存在したとすると、『新增東國輿地勝覽』に出ている‘井田遺基’に関連する何らかの関連記録が『三國史記』にもあったはずである<sup>28)</sup>。

したがって、南原市内地域の区画地割は南原小京の設置とともに行われたと見るのが妥当であろう。『新增東國輿地勝覽』の記録は南原小京の設置時の痕跡に対するものであり、朝鮮時代の記録の誤りであると考えられる。一般的に、区画地割が施行された時期は統一期の九州と五小京の設置に関連して考えられているので、その関連性を検討する必要がある。

---

24) 軍事的目的あるいは新たな開拓の一環として施行され、州と小京の治所の軍事的重要性に関連している区画地割(屯田)。南原(南原小京)、尚州(沙伐州)がある。

25) 統一新羅時代の地方行政制度の整備過程と関連があり、州と小京の中心地に市街地区画を設ける目的で区画地割が行われた。清州(西原小京)、光州(武珍州)、全州(完山州)がある。

26) 尚州(沙伐州)、光州(武珍州)がある。

27) 南原(南原小京)、清州(西原小京)、全州(完山州)がある。

28) 『三國史記』には五小京が設置された地域の区画地割に関連する記事はまったくないのも事実である。そして、区画地割に関連する朝鮮時代の記録がある地域は南原(小京)だけである。

筆者が旧地籍図をあらためて分析してみた結果、南原小京の都市構造の復元案を既存研究とは異なる2案に推定することができると思う。

まず復元案1に関しては、図48で示したように南原小京の区画地割は最初から方形ではなく、単位区画を組み合わせることによって施行されているということを重視した。つまり、小京の中心地である南原市内地域には、既存研究の復元案のように当初から全体が完璧な方

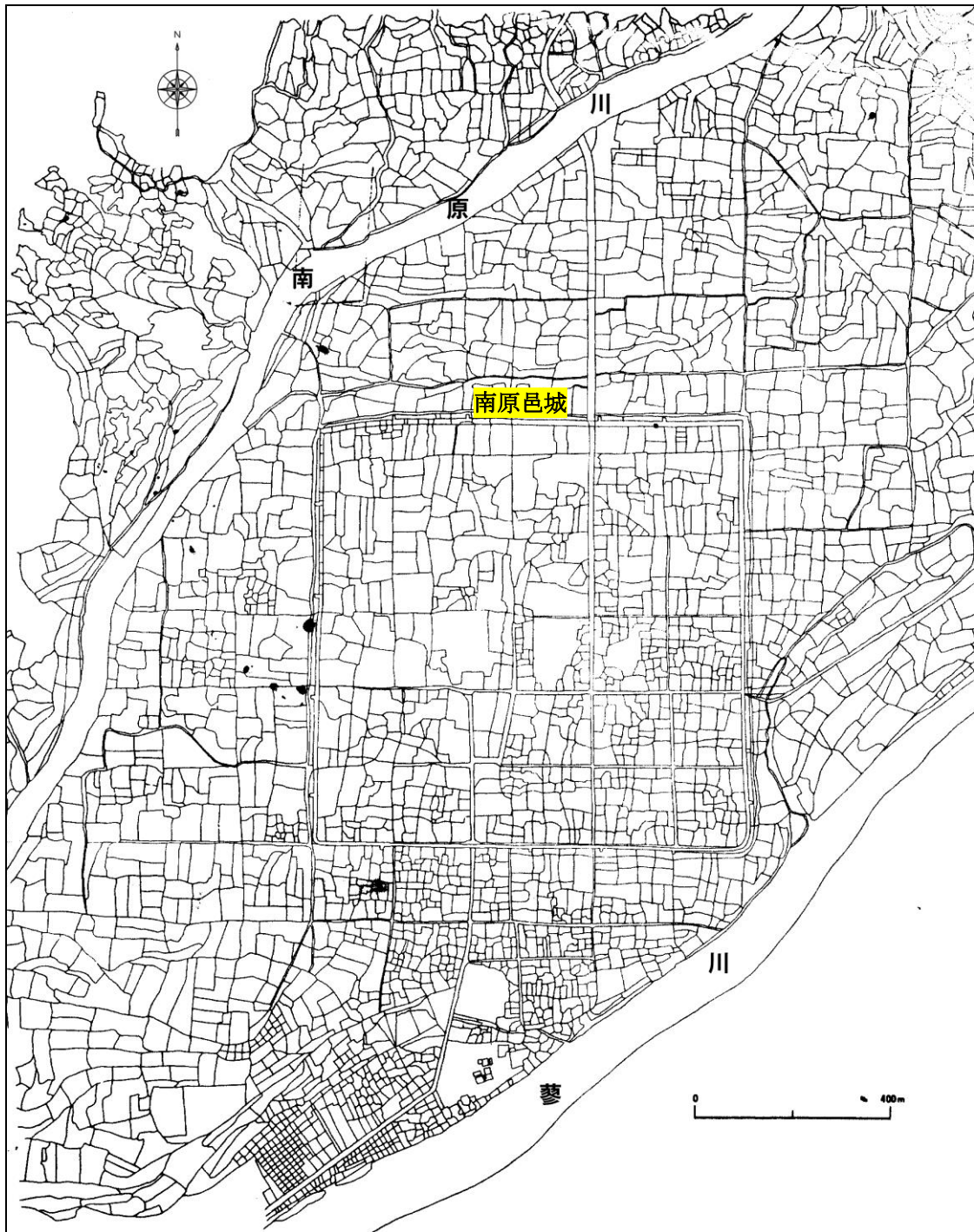


図47 南原市内地域の旧地籍図(1917年製作)(朴泰祐1987、81頁、図1、筆者再編集)

形の区画地割は施行されていない可能性があることを重視した案である。

旧地籍図で区画地割の痕跡を検討してみると、その確認範囲は東西約1,640m×南北約1,580mであると推定される。しかし、その範囲全体の区画地割は里坊制をもとにした方形の形態ではない。

したがって、復元案1では、旧地籍図で見られるように東西約155～165m×南北約150～165mの単位区画が南西から北東側に数多く存在することになる(図48)。南原小京の中心地

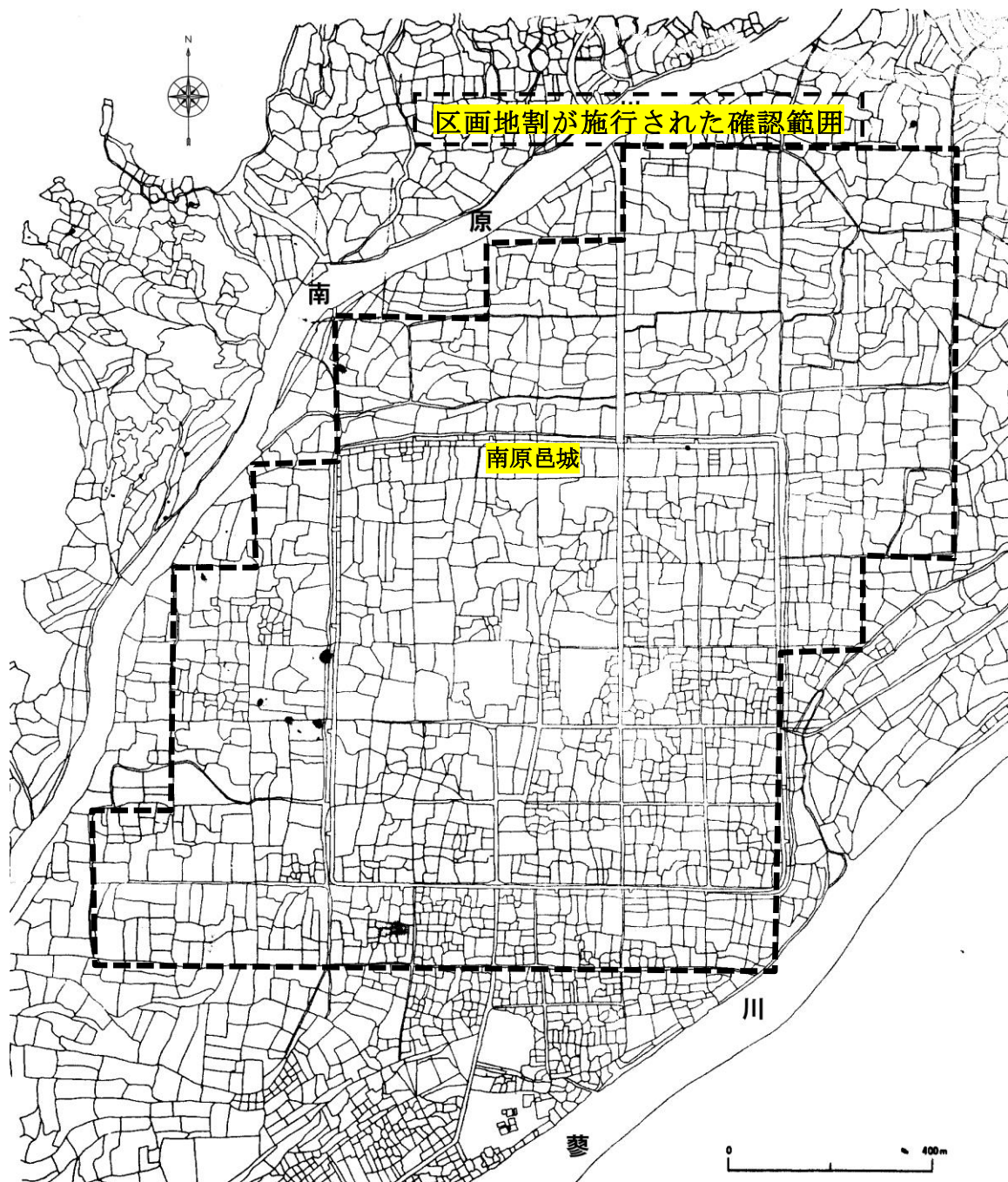


図48 南原小京の都市構造の復元案1(朴泰祐1987、81頁、図1、筆者再編集)

は単位区画の区画地割が行われたと推定できるが、南原小京の設置時期に関連する単位区画の施行範囲や形態は不分明である。

次に復元案2に関しては、南原小京の設置とともに南原小京の中心地には当初から方形の区画地割が施行されたということを重視した。この場合、南原小京の設置当初の区画地割は、全体が方形の東西7坊×南北7坊に復元できると思われる。南原小京の設置の際、里坊制に

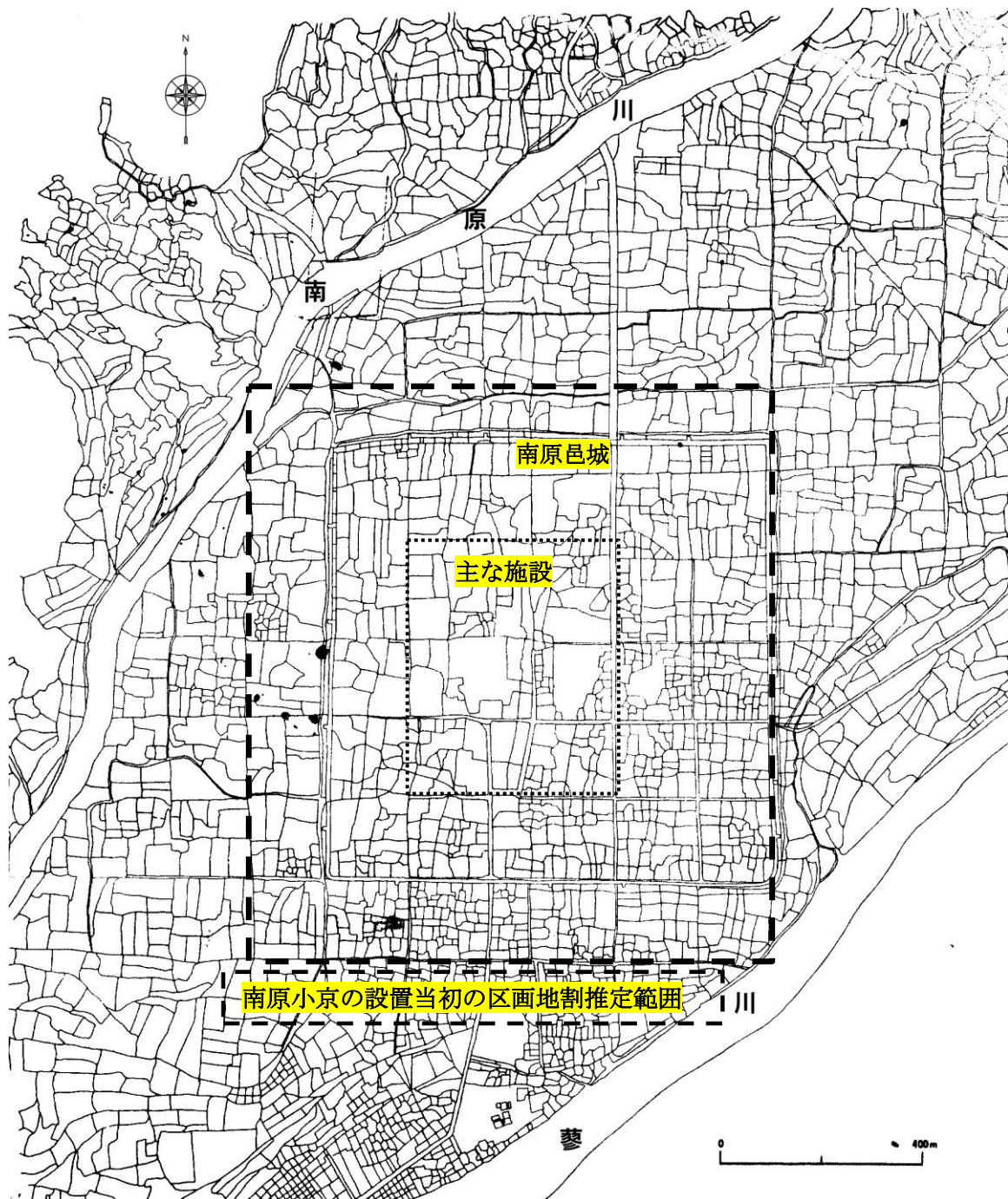


図49 南原小京の都市構造の復元案2(朴泰祐1987、81頁、図1、筆者再編集)

もとづく全体的な区画地割が存在したことになる。

旧地籍図に見られる区画地割の痕跡と地形とを考慮して、施行当時の方形の区画地割を最大に設定してみれば、東西7坊×南北7坊が妥当であろう。そして、中央部の北側に官衙のような主な施設が想定できる(図49)。南原小京の中心地の区画地割は、南原邑城の規模と関連があると推定される。その場合、南原小京城も小京の中心地を囲む形態の城郭である可能性が考えられる。

南原小京の区画地割を東西7坊×南北7坊に想定すると、旧地籍図に見られる他の単位区画の痕跡は都市の発展により、順次的に区画地割が行われた可能性があると思う。その施行時期は推定できないが、南原市内地域の地形は河川に挟まれている形状なので、既存の区画地割の延長で、北東側、南西側に広がったと思われる。

特に、筆者が提示した東西7坊×南北7坊の範囲の外側では、区画地割の東西区画線が少し偏向していることも旧地籍図の痕跡からよくわかるのである。

以上、統一新羅期に施行された南原小京の都市構造の復元案を二つ示してみた。この2案の妥当性を検討してみると、南原小京の中心地に施行された区画地割が復元案1であった可能性は低いと思われる。なぜならば、王京を除いて復元案1のような形態の単位区画の区画

表20 南原小京の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)
①	朴泰佑(1987)	東西 約1,680m 南北 約1,600m	東西 約160m (中央約80m) 南北約160m	10坊×9坊 (1,680m×1,600m) 南北大路約80m 1坊の規模は道路を含む
②	李京贊(2002)	東西 約1,345m 南北 約1,410m	東西 約140・150・160・165m (中央約85m) 南北約155・160・165m	8区×9区(9行9列) 中央部半区区画約85m 1坊の規模は道路を含む
③	山田隆文 (2008)	東西 約1,700m 南北 約1,500m	東西 約160m(中央約80m) 南北 約160m	10坊×10坊 (1,680m×1,600m) 中軸大路約80m 1坊の規模は道路を含む
④	黄仁鎬(2014)	—	東西 440尺(約156.2m)(中央約80m) 南北 440尺(約156.2m)	10坊×10坊 (1,642×1,562m) 中央部変形区画約80m 1坊の規模は道路を含む
⑤	筆者	東西 約1,640m 南北 約1,580m	東西 約155~165m(中央約80m) 南北 約150~165m	7坊×7坊 1坊の規模は道路を含む

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。

地割は他の州と小京の中心地では見られないからである。すなわち、南原小京の中心地にも他の州と小京の中心地と同様に方形ないしは長方形の区画地割が施行された可能性が高いと考えられる。また、図48の旧地籍図に見られる単位区画の範囲と形態すべてが南原小京の設置と関連する可能性は低いと考えられる。

したがって、復元案2のように、当初から方形の区画地割が施行され、それを中心に地形による区画地割の拡大が行われたと見るのが妥当であると思う。南原小京の中心地の区画地割が、南原小京の設置以後、時期によってどのように変化してきたのかは不明である。

単位区画の痕跡が1910年代製作の旧地籍図に見られるので、南原小京の設置から高麗・朝鮮時代までの都市の拡張による区画地割の拡大があった可能性も考えられる。これからの発掘調査によって明らかになることを期待するしかない。

## (2) 南原小京の都市構造と小京城問題

ここでは、南原小京の都市構造を検討してみよう。前述したように、南原小京の都市構造に関連する研究は、当時の区画地割が明確に確認される旧地籍図・旧地形図の分析によって行われている。一方、南原小京の関連遺跡は少ないので、考古学的検討は厳しい。南原市内地域は他の小京が設置された地域と比べても、発掘調査の事例もかなり少なく、現段階では南原小京と関連する遺跡の調査もあまり行われていない。南原と同じく旧地籍図の分析がなされた尚州<sup>29)</sup>では発掘調査によって、区画地割の痕跡である道路関連遺構と区画の内側(坊)に竪穴建物跡や建物跡が確認された(図50、嶺南文化財研究院2004・2006・2008・2009a・2009b)。

その結果、旧地籍図にもとづいた区画地割の推定はある程度正確であることが証明されている。したがって、南原でも尚州のように旧地籍図に見られる区画地割の痕跡が発掘調査で確認できるのかが問題となる。

一方、既存研究では南原市内地域の北西側に位置している蛟龍山城を小京城あるいは小京と関連する城郭として見ている(図51)。蛟龍山城は周囲3,120mの石築山城であり、百濟時代に築城されたと推定されている。蛟龍山城は海拔500mに位置し、南原市内地域までは約2kmの距離である。区画地割が見られる南原市内地域からの距離はあまり離れていないが、蛟龍山城の立地から見ると、南原小京の治所城に比定することは難しいと思われる。いずれにせよ、2015年に蛟龍山城の発掘調査が行われているので、その成果に注目したい。

---

29) 九州の一つである沙伐州の治所。



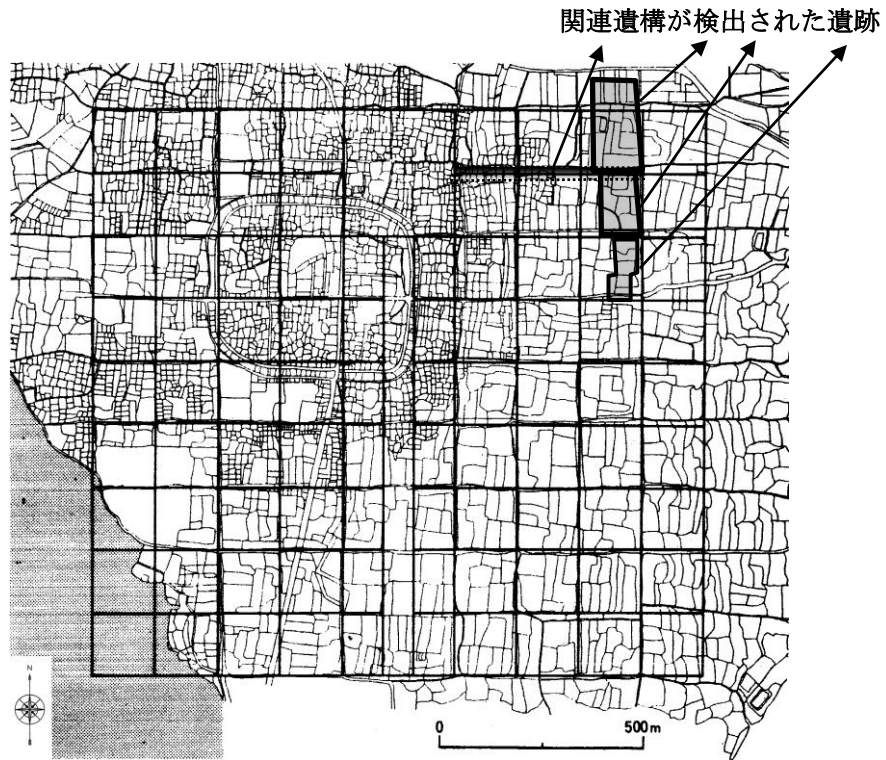


図50 朴泰祐の沙伐州復元案と関連遺跡分布(朴泰祐1987、91頁、図5、筆者再編集)

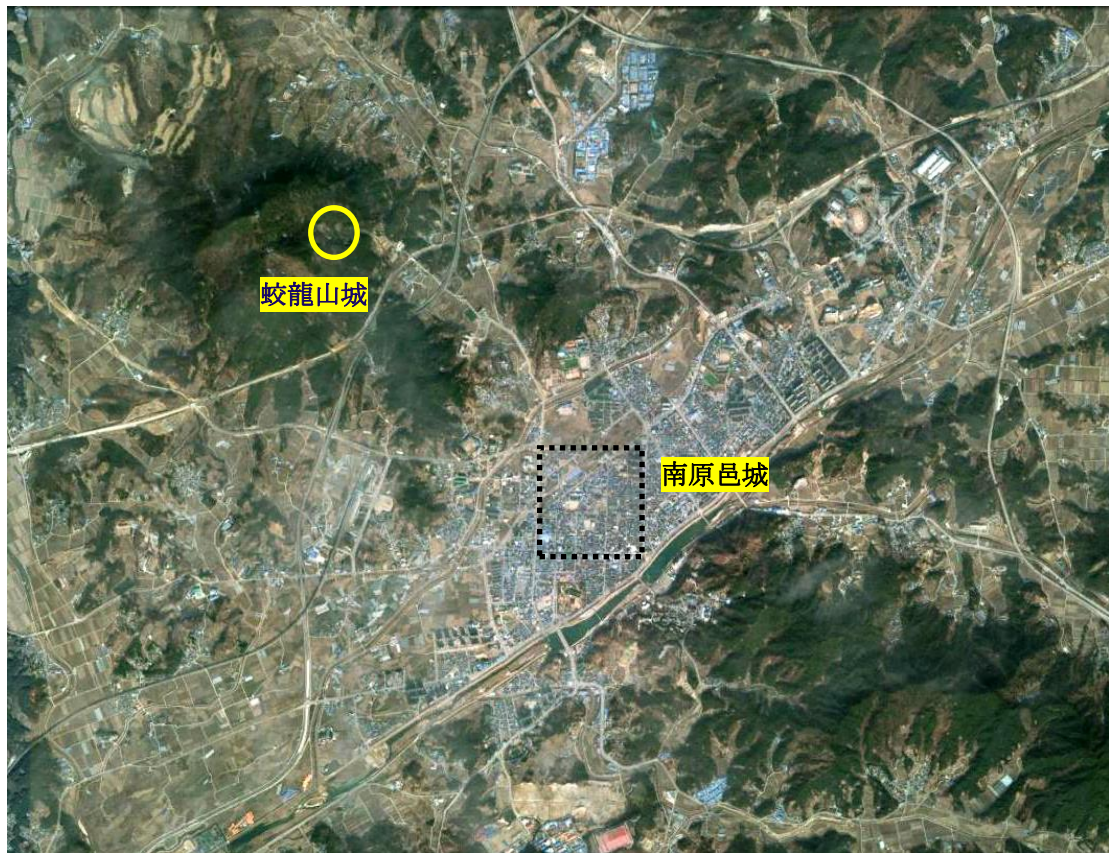


図51 南原市内地域の地形と南原小京関連遺跡分布2(GOOGLE EARTHから作製)

なお、南原邑城の発掘調査で統一新羅時代の城壁が検出され、南原邑城が南原小京城である可能性が出てきている。この場合、南原小京城は小京の中心地を囲む正方形の羅城であることになる。南原邑城の規模を旧地籍図で検討してみると、城壁の東・南・西側は区画地割と一致しているが、北側だけが一致していない。したがって、旧地籍図に見られる区画地割の痕跡は南原邑城の北側の外まで広がっているため、南原邑城と区画地割の位置関係を検討する必要がある。

また、区画地割が施行されてから城郭を築城したのか、あるいは城郭を築城してそれを中心に区画地割が施行されたのだろうか。旧地籍図で検討する限り、区画地割が施行されてから城郭を築城した可能性が高いが、これからの発掘調査の成果を期待するしかない。

以上、南原小京の都市構造を検討してみた。本来は主に考古資料を通して南原小京の都市構造の復元を検討しなければならないが、関連する考古資料が足りないため、旧地籍図の分析を通して都市構造の復元案を検討してきた。前述したように、南原市内地域の旧地籍図には区画地割の痕跡が明確に見られ、既存研究の中でも都市構造の復元案が多く出されてきた小京である。

筆者は既存研究の南原小京復元案を検討して、南原小京の都市構造に対して筆者自身の復元案を二つ提示した。そのうち、復元案2が妥当であると判断した。旧地籍図の痕跡から南原小京の区画地割を東西7坊×南北7坊に想定することができると思われる。1坊の規模は旧地籍図の痕跡では少し違いがあるが、その相違は一辺が約150～165mの間に収まる程度であると考えられる。

また、旧地籍図で東西7坊×南北7坊の範囲の外側に見られる区画地割の痕跡は、都市の発展により順次的に区画地割が行われた可能性を示していると思われる。南原小京の区画地割は小京の設置と同時に施行され、その範囲は南原邑城の範囲と密接な関連があると思われる。

南原小京が設置された当初の都市構造は中心地を囲む城郭を有し、その一帯に区画地割が施行されている形態であると考えられる。また、小京の中心地に近接して防禦と関連する城郭をもつ類型であると考えられる。

残念ながら南原小京の都市構造の復元は関連する考古資料が足りないため、今後の発掘調査の成果を期待することにしたい。今回示した筆者の復元案を含めて、多様な南原小京の都市構造復元案が提示されているため、今後の考古学調査によってより正確な都市構造が明らかになると思う。

## 第3章 九州の都市構造

九州の治所が設置された都市では最近活発に発掘調査が行われ、多様な時期の遺跡が調査されている。それらのすべてが九州あるいは九州の治所と関連する遺跡ではない。しかし、既存研究で州の治所に比定されていた地域に、統一新羅時代の遺跡が確かに分布していることも確認できたのである。地域ごとに関連する発掘調査事例と遺跡の性格は多様であり、相違はあるが、特に沙伐州と牛首州の調査成果は注目すべきである。

本章では、九州のうち位置が不明確である漢山州(京畿道河南市あるいは広州市)と関連資料がない歙良州(慶尚南道梁山市)を除く、沙伐州(慶尚北道尚州市)、牛首州(江原道春川市)、河西州(江原道江陵市)、完山州(全羅北道全州市)、熊川州(忠清南道公州市)、武珍州(光州広域市)、菁州(慶尚南道晋州市)の7箇所の州を検討する。

### 第1節 沙伐州の都市構造

沙伐州は、現在の慶尚北道尚州市に設置された。尚州地域には、新羅の領域になる前、小国段階の沙伐国があった。尚州地域の自然環境と地理的環境を見ると、西には600～1,000mの山地があり、東には洛東江と洛東江に流入する河川がある。その河川の沖積地帯に尚州市の中心部があり、朝鮮時代の邑城が位置している。尚州地域は三国時代から交通の要衝として新羅の西北地域への進出に重要な役割を果たしていた地域であり、多様な遺跡が調査・報告されてきた。統一新羅時代の九州と五小京が設置された地方都市の中で、考古学調査を通して都市構造がある程度確認できる地域である。

#### 1) 沙伐州の関連史料と既存研究

##### (1) 関連史料

沙伐州の関連史料としては、まず『三國史記』「地理志」の沙伐国に関する記録をあげることができる。『三國史記』「地理志」には、法興王12(525)年に尚州地域に上州が設置され、真興王18(557)年に廃止されたという記事がある。『三國史記』「新羅本紀」には、法興王12(525)年に沙伐州軍主の任命記事があるので、上州が沙伐州であることがわかる。

『三國史記』卷第三十四「雜志」第三 地理 1

尚州 沾解王時取沙伐國爲州 法興王十二年 梁普通六年 初置軍主 爲上州  
眞興王十八年 州廢 神文王七年 唐垂拱三年 復置 築城 周一千一百九步  
景德王十六年 改名尚州 今因之

『三國史記』卷第四「新羅本紀」第四 法興王12年

十二年 春二月 以大阿飡伊登 爲沙伐州軍主

『三國史記』「新羅本紀」には、眞興王18(557)年に沙伐州を廢止して甘文州(慶尚北道開寧)を設置し、眞平王36(614)年に沙伐州を廢止して一善州(慶尚北道善山)を設置したという記事がある。『三國史記』「新羅本紀」眞平王36(614)年に“廢沙伐州 置一善州”の記録があるが、“廢沙伐州”に関しては“廢甘文州”の誤記であるという指摘もある<sup>30)</sup>。

『三國史記』卷第四「新羅本紀」第四 眞興王18年

十八年 以國原爲小京 廢沙伐州 置甘文州 以沙飡起宗爲軍主 廢新州 置北漢山州

『三國史記』卷第四「新羅本紀」第四 眞平王36年

三十六年 春二月 廢沙伐州 置一善州 以一吉飡日夫爲軍主

『三國史記』「新羅本紀」には、神文王7(687)年3月に一善州を廢止して沙伐州を復置し、波珍飡の官長を總管とし、同年秋には沙伐州に城郭を築いたという記事もある。

『三國史記』卷第八「新羅本紀」第八 神文王7年

三月 罷一善州 復置沙伐州 以波珍飡官長爲總管

秋 築沙伐敵良二州城

朝鮮時代の文献ではあるが、『新增東國輿地勝覽』にも沙伐国に関する記録が残っている。〈建置沿革〉条に“本来沙伐国(沙弗)だが、新羅沾解王が奪って州にした。法興王が上州に改め、軍主を置いた。”という記録がある。〈古跡〉条には“沙伐国古城は屏風山下にある。”、そして〈山川〉条に“屏風山は州の東10里にある。”とある<sup>31)</sup>。

このような文献史料から、沙伐国は原三国時代と三国時代初期の国家形成期に尚州地域に存在した小国と推定されている。そして、この小国は後に斯盧国に服属し、新羅の州郡制に編成されたことがわかる。尚州地域は上州の治所であったが、その治所は甘文州の設置によって廢止され、それから神文王代に尚州地域に再び沙伐州が設置されたのである。

30) 朴泰佑 1987、52頁(今西龍1933から再引用)。

31) 『新增東國輿地勝覽』卷第二十八、尚州牧、〈建置沿革〉・〈古跡〉・〈山川〉。

表21 沙伐州の名称変遷

法興王12年 (525年)	神文王7年 (687年)	景德王16年 (757年)	高麗・朝鮮時代	現在地名
上州	沙伐州	尚州	尚州牧・慶尚監營	慶尚北道尚州市

沙伐州は景德王代に尚州に改称され、高麗時代には尚州牧になり、朝鮮時代前期まで尚州牧であった。世宗代には慶尚監營が設置されたが、壬辰倭乱(1592)以後再び尚州牧に戻った。

(2) 既存研究の検討

沙伐州に関する考古学研究は朴泰佑(朴泰佑1987)から始まる。朴泰佑は尚州市内地域の1916年製作の旧地籍図と1933年製作の旧地形図を活用し、沙伐州の都市構造を検討した。朴泰佑は旧地籍図の分析によって、尚州市内地域に東西約1,560m×南北約1,440mの範囲の土地区画が確認されるとした。沙伐州の都市構造の検討では、東西約160m×南北約160mの単位区画が東西8～10坊×南北9坊あると分析した。東西方向の土地区画には中央部に幅約80mの南北大路があり、その東西に幅約100mの区画が1列ずつあって、さらにその両側に約160mの区画が4列ずつあると説明した(図52)。なお、沙伐州の州城は市内の北西側に位置する紫山山城に比定されている。

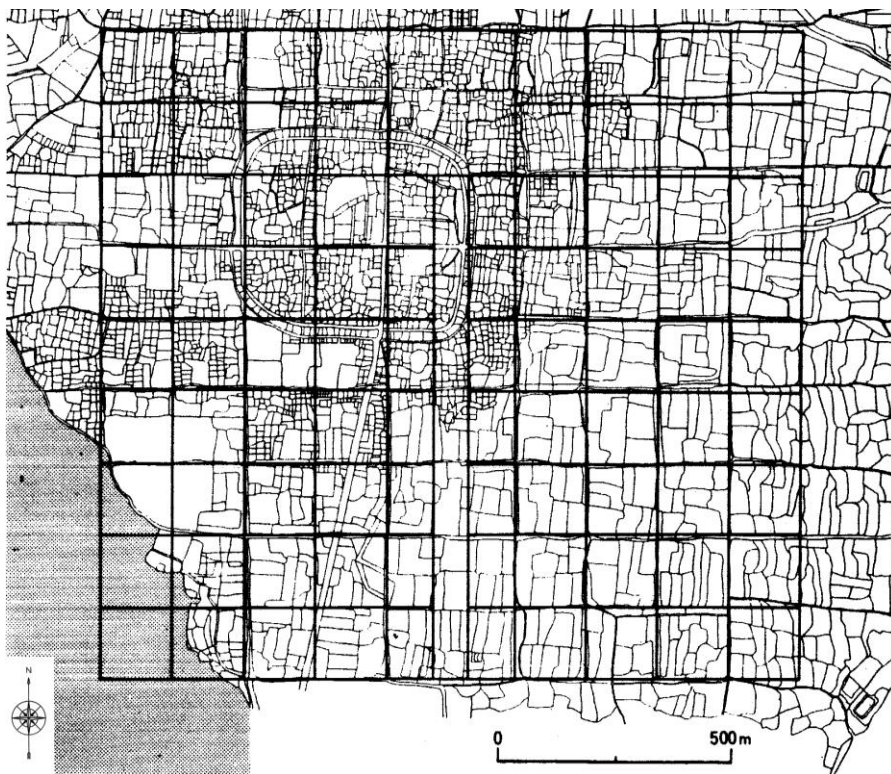


図52 朴泰佑の沙伐州の坊里区画復元案(朴泰佑1987、91頁、図5から引用)

朴泰佑の都市構造復元案は伏龍洞一帯の調査が実施される以前に提示され、旧地籍図の分析にもとづいている。尚州の場合、南原のように旧地籍図で区画地割の痕跡がよく確認でき、実際の調査でも統一新羅時代の坊里制と関連する区画地割が推定できることが確認されている。

李京贊(李京贊2002)は、沙伐州では格子型土地区画が行われたと分析している。李京贊の研究も尚州市内地域の旧地籍図をもとにしていて、尚州市内地域の格子型土地区画の範囲を東西約1,355(620+115+620)m×南北約1,395mとした。基本的に1坊を約155m×約155mとする単位区画が東西8区×南北9区あると見た。東西方向の土地区画の中央部には幅約115mの半区区画があり、計9行9列の坊里区画形態をとっていると見ている。

山田隆文(山田隆文2008)は、1927年製作の旧地形図の検討で尚州市内地域に東西約1,560m×南北約1,440mの範囲の方格地割が確認できると見ている。山田隆文の復元案では、方格の一辺がすべて約160mであり、神文王代に施行されたと見ている(図53)。

朴達錫(박달석2012)は、伏龍洞遺跡群の考古資料から沙伐州の都市構造を検討した。基本的には旧地形図の区画地割の痕跡を分析し、北川・南川・西川と南山に囲まれた範囲の中央部に東西約1,400m×南北約1,440mの格子式で里坊制の東西9里×南北9里の計81坊に復元した。朴達錫の復元案では、東西方向の里坊区画の中央部の1坊は東西約115m×南北約155mであり、それ以外の里坊区画は1坊の規模が東西約155m×南北約155mの正方形である。

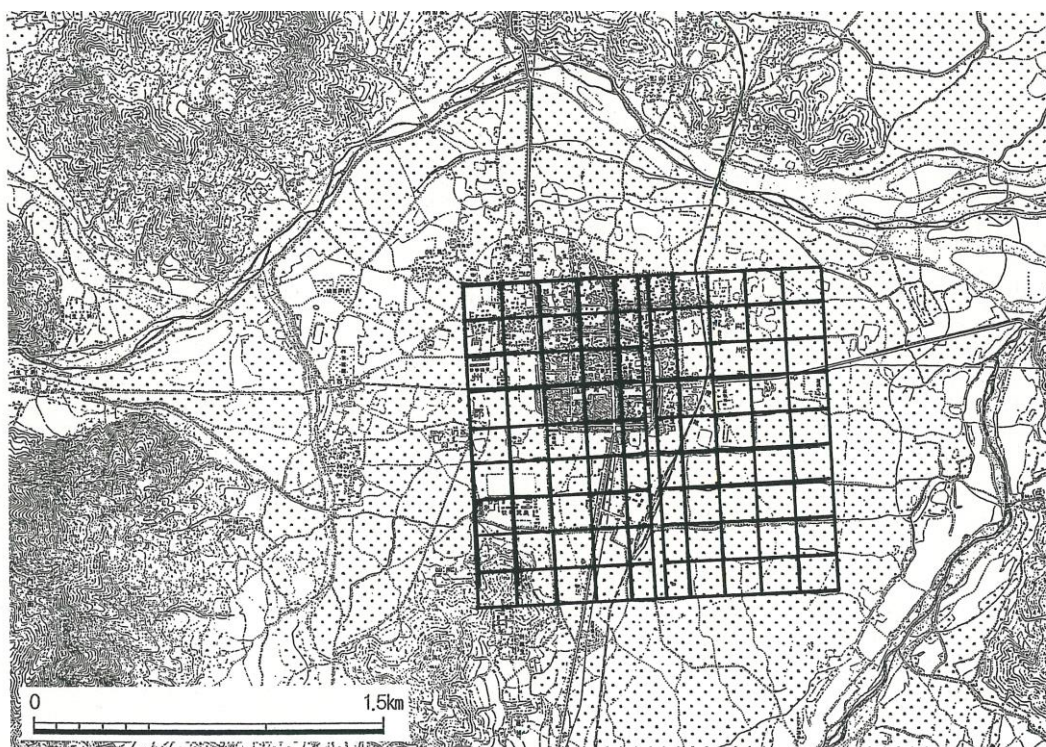


図53 山田隆文の沙伐州の方格地割復元案(山田隆文2008、17頁、図4から引用)

そして各坊の間には道路と排水口が設置されたと見ている。

朴達錫は伏龍洞遺跡群の考古資料と旧地籍図の検討から、古代の沙伐国の中心地は前半には吏部谷土城一帯にあり、後半には屏風山城一帯へ移動したと見ている。また、統一新羅期には沙伐州の中心地は里坊区画が施行された核心区域とその周辺区域からなり、州城である紫山山城が背後に位置している形態の都市空間構造を想定した(図54)。

黄仁鎬(황인호2014)は、沙伐州の都市構造の検討から中心地の土地区画の規模を東西約1,370m×南北約1,405mに推定した。東西方向の土地区画は中央の1列が幅約120m、その東西に440尺(約156.2m)の列が四つずつあるとした。南北方向の土地区画の規模は基本440尺(約156.2m)の9坊が推定され、全体の土地区画は東西9坊×南北9坊であると見た。また、伏龍洞遺跡群の遺構の分布状況からさらに北側・東側にも土地区画が存在する可能性があり、東西10坊×南北10坊の可能性もあると言及している。

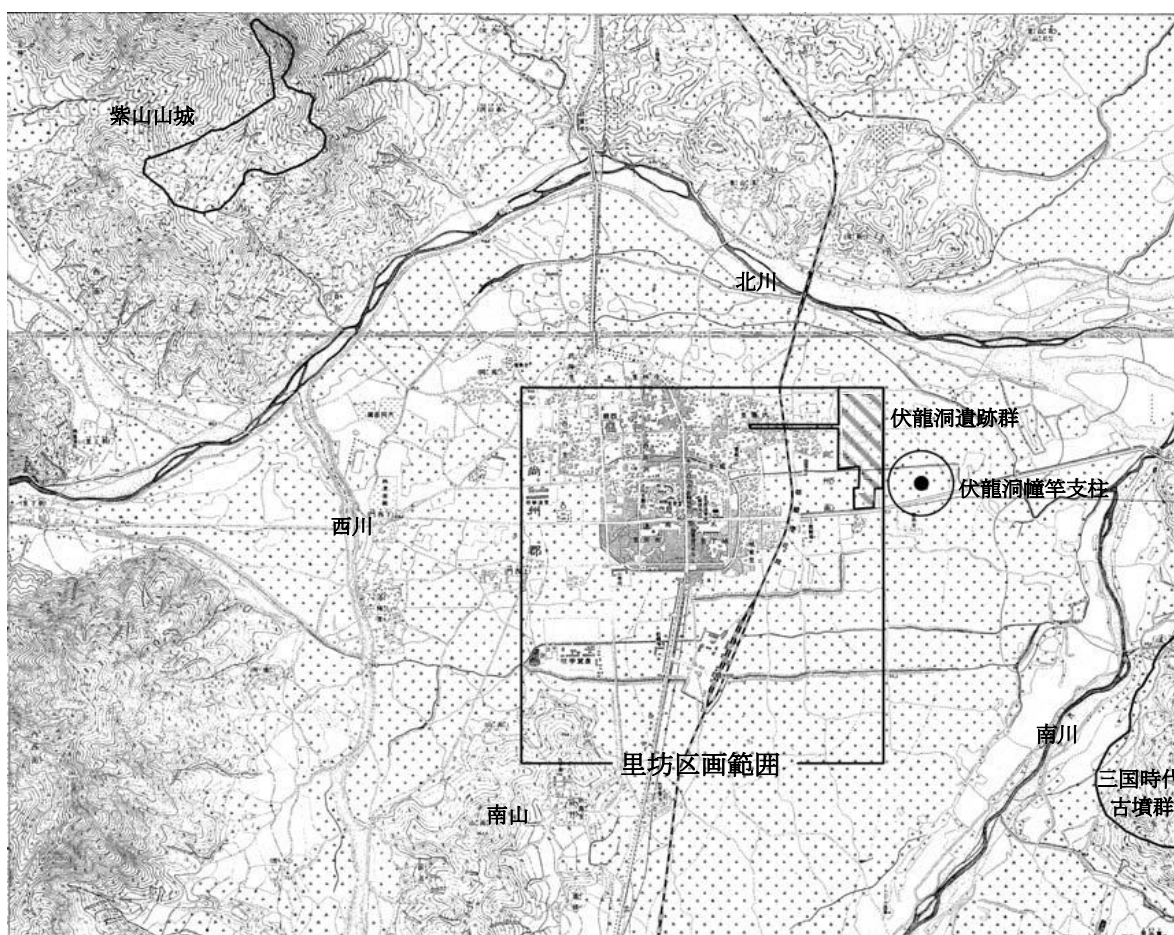


図54 朴達錫の沙伐州の里坊区画復元案(朴達錫2007、97頁、図面9、筆者再編集)



図55 尚州地域の地形と周辺の遺跡分布 (GOOGLE EARTHから作製)

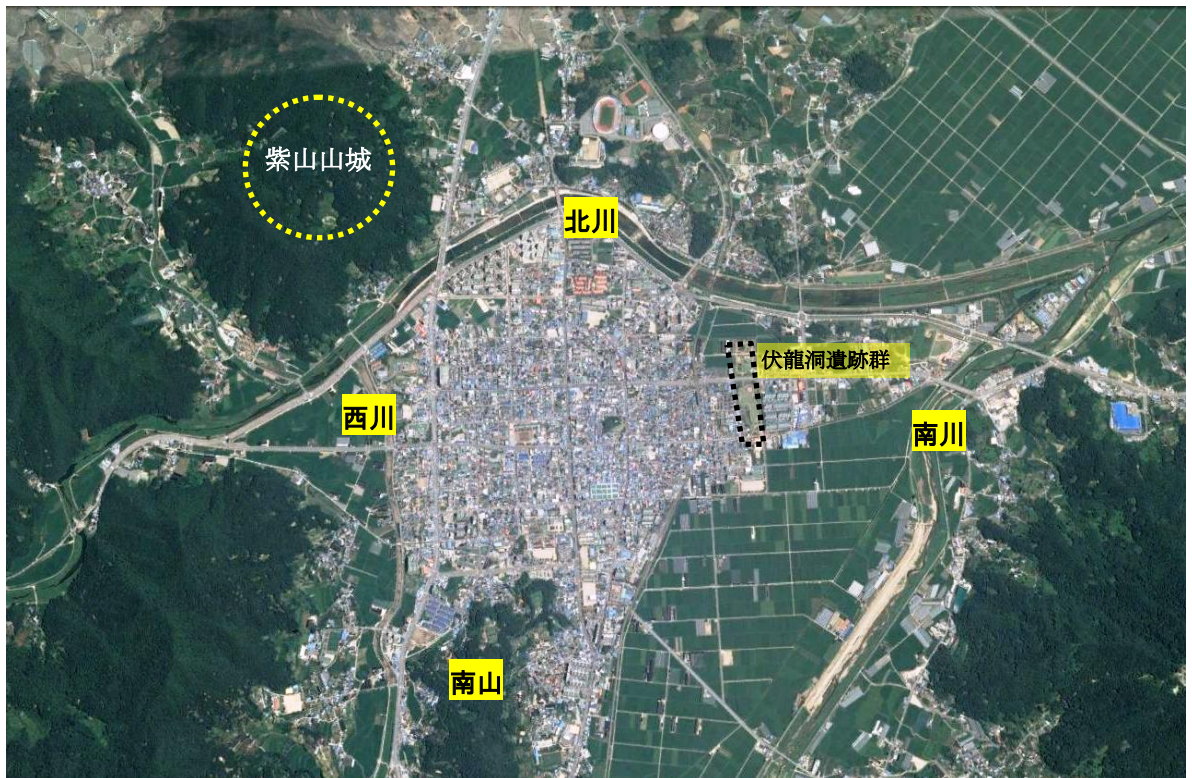


図56 尚州市内地域の地形と沙伐州関連遺跡分布 (GOOGLE EARTHから作製)



## 2) 沙伐州の関連遺跡

沙伐州の治所であった現在の慶尚北道尚州市は、統一新羅時代の九州と五小京が設置された地方都市のうち、考古学調査を通して都市構造がある程度確認できた地域である。特に、重要なのは尚州市内地域に位置する伏龍洞遺跡群の調査成果である。伏龍洞遺跡群では統一新羅時代の建物跡や区画地割を示す道路と見られる遺構群が一部確認されていて、それらは当時の坊里制を通して行われた都市建設とその構造がわかる重要な考古資料になる。

### (1) 関連遺跡の現況(図55・56・57、表22)

伏龍洞遺跡群(図58)として知られる沙伐州に関連する遺跡の概要をまとめると、以下のとおりである。この他にもいくつかの調査成果によって、関連遺跡の分布様相がある程度明らかになっている。

#### ①伏龍洞256番地遺跡

遺跡は洛東江の支流である北川と南川および西川との間の沖積地帯に所在する。調査では、青銅器時代の竪穴建物跡と統一新羅～高麗・朝鮮時代の生活遺構が検出された。この遺跡は青銅器時代や統一新羅時代、高麗時代を経て朝鮮時代まで継続的に生活遺構の建設と廃棄が繰り返し行われた複合遺跡と判断される。

調査の結果、統一新羅～高麗・朝鮮時代の積心建物跡14基、井戸36基、竪穴遺構147基、溝遺構16基、池1基などが検出された。出土遺物は生活遺構と関連する土器類、瓦、陶磁器などである(嶺南文化財研究院2008)。

#### ②伏龍洞3地区遺跡

遺跡は伏龍洞256番地遺跡の南側に隣接し、主に統一新羅～高麗・朝鮮時代の生活遺構が検出された。遺跡は伏龍洞256番地遺跡と同じく伏龍洞遺跡群に含まれる。国の史跡に指定され、発掘調査は実施されず、現在は公園になっている(嶺南文化財研究院2004)。

#### ③伏龍洞230-3番地遺跡(図59)

調査地は伏龍洞3地区遺跡の南側に隣接して位置している。調査では、主に統一新羅～高麗・朝鮮時代の生活遺構が検出された。上述した2遺跡と同じく、統一新羅時代、高麗時代を経て朝鮮時代まで継続的に生活遺構の建設と廃棄が繰り返し行われた複合遺跡と判断される。調査区域の北側と南側で、統一新羅時代～高麗・朝鮮時代の溝遺構が東西方向で検出されている。溝遺構は道路遺構の側溝である可能性が高く、統一新羅時代の道路の様相が把握

できる重要な考古資料である。

調査の結果、統一新羅～高麗・朝鮮時代の積心建物跡21基、井戸48基、竪穴遺構242基、溝遺構10基などが検出された。そのうち統一新羅時代の遺構は、積心建物跡11基、井戸2基、竪穴遺構97基、溝遺構5基である。出土遺物は生活遺構と関連する土器類、瓦、陶磁器などである(嶺南文化財研究院2009a)。

#### ④伏龍洞397-5番地遺跡

遺跡は尚州第2踏切の立体化施設工事敷地内にある。調査の結果、統一新羅時代の井戸2基および竪穴遺構1基、高麗・朝鮮時代の井戸2基および竪穴遺構1基などが検出された(嶺南文化財研究院2006)。

#### ⑤伏龍洞10-4番地遺跡

遺跡は尚州邑城の東門から東側に約500m離れて位置している。調査以前、この一帯は水田や畑で地上に構造物がなく、遺跡の保存状態は良好であった。調査区域は調査の順番によって慶北線の鉄道を基準に、西側地域を1区域、東側地域を2区域とし、1区域の西側を3区域、2区域の東側を4区域とした。

調査の結果、統一新羅～高麗・朝鮮時代の積心建物跡4基、井戸17基、竪穴遺構68基、溝遺構8基などの遺構が検出された。出土遺物は生活遺構と関連する土器類、瓦、陶磁器などである。

統一新羅時代の道路と関連する溝遺構は、東西方向と南北方向の両方が検出されている。伏龍洞遺跡群で南北方向の溝遺構が最初に検出された遺跡であり、東西方向の溝遺構は南側の伏龍洞230-3番地遺跡の北側で検出された溝遺構と約160mの距離にある(嶺南文化財研究院2009b)。

#### ⑥城東洞61-11番地遺跡

遺跡は伏龍洞遺跡群の南西側に位置し、北側は城東洞61-8番地遺跡に接している。調査では、統一新羅時代の建物跡1基、竪穴遺構6基などが検出された(世宗文化財研究院2010)。

#### ⑦城東洞61番地遺跡

遺跡は伏龍洞遺跡群の南西側に位置し、城東洞61-8番地遺跡の北側に隣接している。調査では、統一新羅時代の竪穴遺構15基、柱穴11基などが検出された(世宗文化財研究院2012b)。

#### ⑧城東洞61-8番地遺跡

遺跡は伏龍洞遺跡群の南西側に位置し、城東洞61-11番地遺跡の北側に隣接している。調査では、統一新羅時代の柱穴15基が検出された(世宗文化財研究院2012a)。

⑨尚州官衙遺跡

調査地は朝鮮時代の邑城の内側である。尚州官衙遺跡の調査では、統一新羅時代に関連する遺構は検出されていないが、伏龍洞遺跡群の道路遺構とつながるような位置に道路遺構が検出されているので注目される(嶺南文化財研究院2015)。

表22 尚州市内地域の沙伐州関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	遺構
①	伏龍洞256番地遺跡	試掘 2001～ 2002年 発掘 2003～ 2004年	31,312㎡	青銅器時代 竪穴建物跡6 統一新羅時代 建物跡11、竪穴遺構(住居・貯蔵・廃棄)58、井戸11 高麗時代 建物跡1、竪穴遺構(住居・貯蔵)89、井戸18 朝鮮時代 建物跡4、竪穴遺構(住居・貯蔵)86、井戸39 時代未詳 建物跡16、竪穴遺構(住居・貯蔵)176、井戸16
②	伏龍洞3地区遺跡	2004年	22,494㎡	統一新羅時代～朝鮮時代 建物跡11、竪穴遺構(住居・貯蔵)48、井戸2、溝遺構6
③	伏龍洞230-3番地遺跡	2004年	7,848㎡	統一新羅時代 建物跡8、竪穴遺構(住居・貯蔵・廃棄)97、井戸2 高麗時代 建物跡3、竪穴遺構(住居・貯蔵)60、井戸9 朝鮮時代 建物跡1、竪穴遺構(住居・貯蔵)58、井戸19 時代未詳 建物跡4、竪穴遺構47、井戸1、 溝遺構 統一新羅時代5、高麗時代1、朝鮮時代3、時代未詳1
④	伏龍洞397-5番地遺跡	2004年	3,528㎡	統一新羅時代 竪穴遺構1、井戸2、瓦列1 朝鮮時代 竪穴遺構3、井戸2 時代未詳 竪穴遺構7、積心遺構5、溝遺構1
⑤	伏龍洞10-4番地遺跡	2005年	17,370㎡	統一新羅時代 建物跡2、竪穴遺構(住居・廃棄・工房)8、井戸4 高麗～朝鮮時代 建物跡6、井戸28 高麗～朝鮮時代 竪穴遺構(住居・廃棄・工房)41・56 時代未詳 建物跡3、竪穴遺構(住居・廃棄・工房)38、井戸4 溝遺構 統一新羅～高麗時代5、統一新羅～朝鮮時代5、 高麗時代5、朝鮮時代2、時代未詳4
⑥	城東洞61-11番地遺跡	2010年	1,184㎡	統一新羅時代 建物跡1、竪穴遺構6、
⑦	城東洞61番地遺跡	2010年	625㎡	統一新羅時代 柱穴15
⑧	城東洞61-8番地遺跡	2011年	1,000㎡	統一新羅時代 竪穴遺構15、柱穴11
⑨	尚州官衙遺跡	2011年	4,812㎡	朝鮮時代 建物跡2、竪穴遺構4、道路遺構2、井戸2、池3、塀遺構3
⑩	城東洞81番地遺跡	2013年	792㎡	統一新羅時代～高麗初 建物跡2、竪穴遺構1、溝遺構3、塀遺構1
⑪	城東洞81-1番地遺跡	2013年	710㎡	統一新羅時代～高麗初 建物跡4、竪穴遺構18、溝遺構4、塀遺構1、柱穴14、井戸1
⑫	伏龍洞293-13番地遺跡	2014年	307㎡	統一新羅時代 積心遺構9、竪穴遺構3、溝遺構1
⑬	伏龍洞283-79・81番地遺跡	2014年	673㎡	統一新羅時代 竪穴遺構2 高麗時代 竪穴建物跡3、竪穴遺構4、溝遺構2 朝鮮時代 溝遺構1

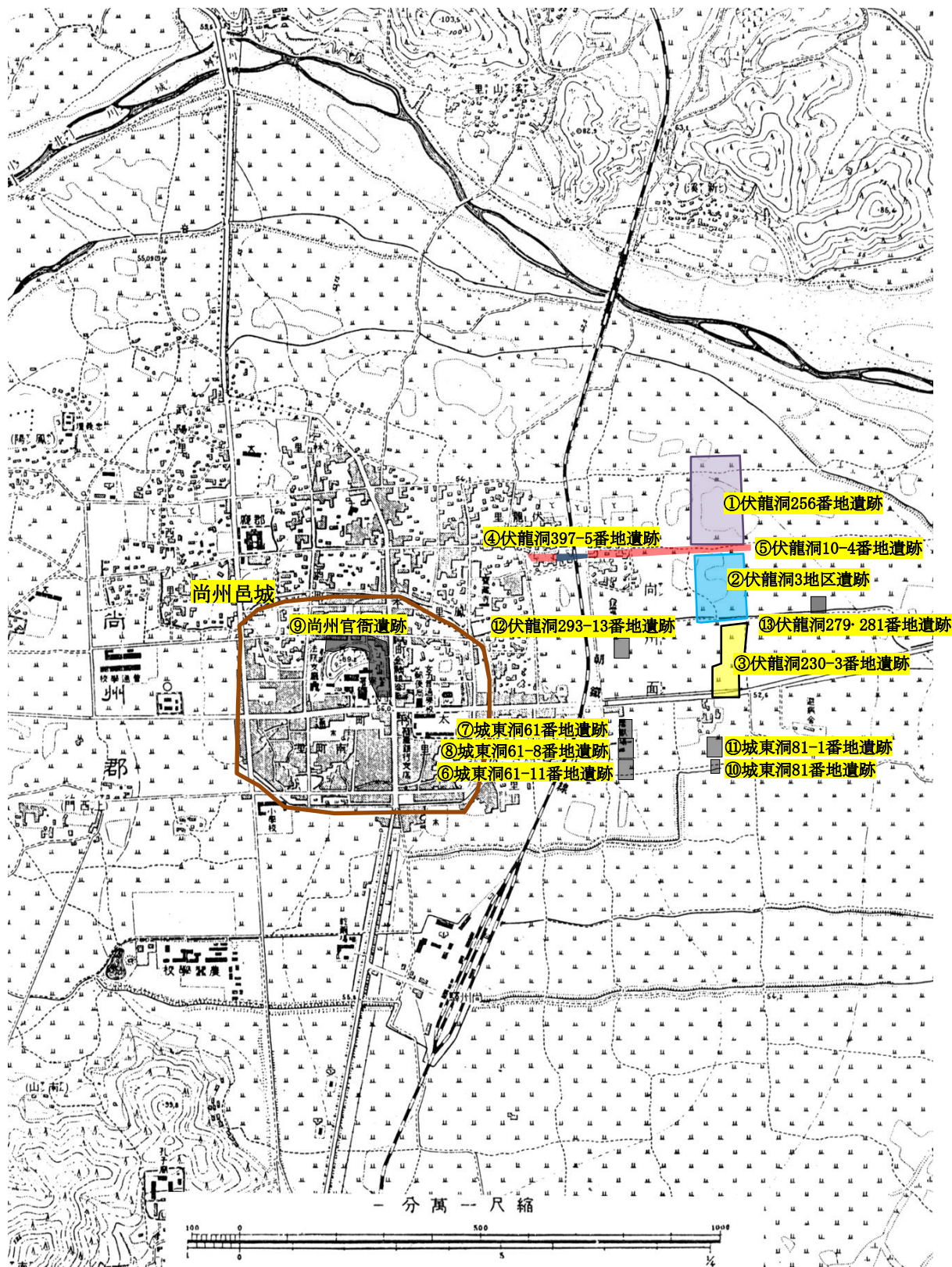


図57 尚州市内地域の沙伐州関連遺跡分布 (1927年製作の旧地形図)



図58 伏龍洞遺跡群(嶺南文化財研究院2008(I)、6頁、写真4、筆者再編集)

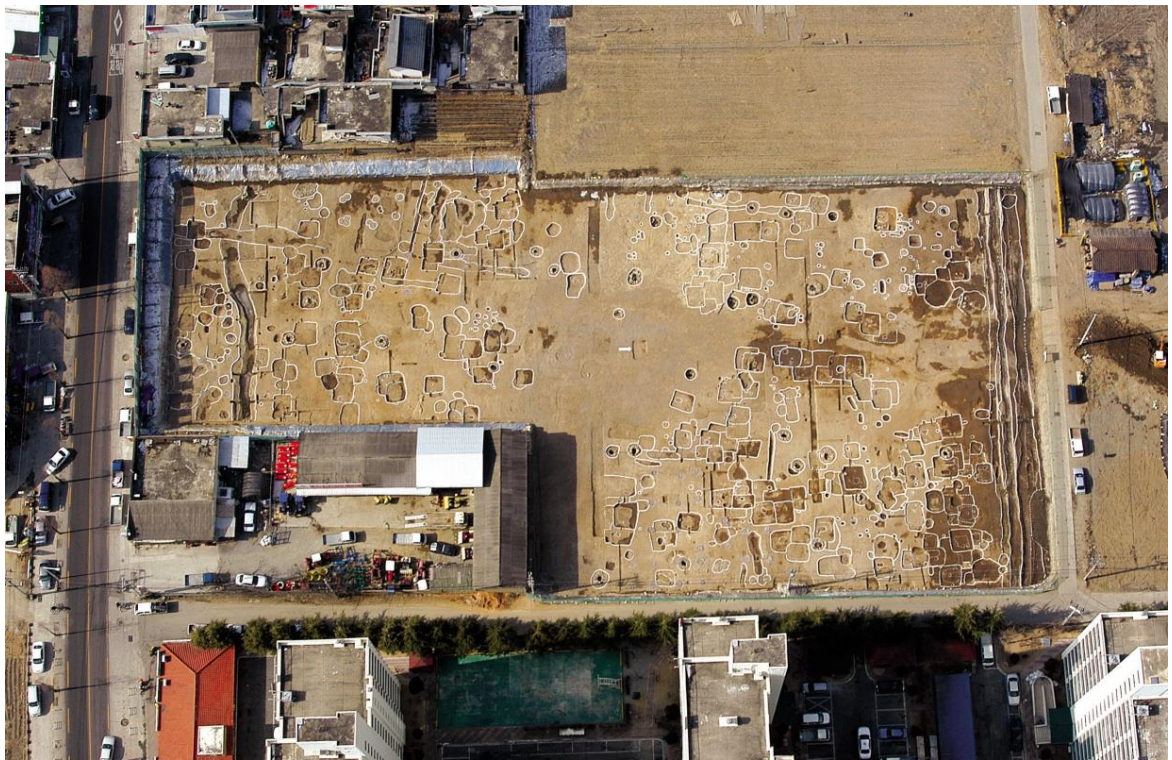


図59 伏龍洞遺跡230-3番地遺跡(嶺南文化財研究院2009(I)、V頁から引用)

#### ⑩城東洞81番地遺跡

遺跡は伏龍洞遺跡群の南側に位置している。統一新羅～高麗時代初期の建物跡と溝遺構が検出された。溝遺構は東西方向と南北方向が検出されていて、南北方向の溝遺構に並行して建物跡がある。南北方向の溝遺構は北側の城東洞81-1番地遺跡の溝遺構とつながる(한국문화재보호재단2013a)。

#### ⑪城東洞81-1番地遺跡

遺跡は伏龍洞遺跡群の南側に位置し、城東洞81番地遺跡の北側に隣接している。統一新羅～高麗時代初期の建物跡と溝遺構が検出された。溝遺構は東西方向と南北方向が検出されていて、南北方向の溝遺構に並行して建物跡がある。南北方向の溝遺構は北側の伏龍洞230-3番地遺跡の溝遺構とつながる可能性がある(한국문화재보호재단2013b)。

#### ⑫伏龍洞293-13番地遺跡

遺跡は伏龍洞遺跡群の西側に位置している。調査の結果、統一新羅時代の積心遺構9基、竪穴遺構3基、溝遺構1基が検出された(세종문화재연구원2014a)。

#### ⑬伏龍洞283-79・81番地遺跡

遺跡は伏龍洞遺跡群の東側に位置している。調査の結果、統一新羅時代～高麗・朝鮮時代の遺構が検出された。統一新羅時代の竪穴遺構2基、高麗時代の竪穴建物跡3基と竪穴遺構4基および溝遺構2基、朝鮮時代の溝遺構1基が検出された。

特に、伏龍洞遺跡群のさらに東側でも統一新羅時代の遺構が検出されていることに注目したい(세종문화재연구원2014b)。

### (2)伏龍洞遺跡群の性格

伏龍洞遺跡群では、建物跡と竪穴建物跡の分布状況を詳しく確認できたことから、旧地籍図で確認される区画地割の1坊の中の建物跡や竪穴建物跡の分布が推定できる。ここでは、1坊の内部の遺構分布を推定できる伏龍洞256番地遺跡、伏龍洞230-3番地遺跡、伏龍洞10-4番地遺跡、城東洞81・81-1番地遺跡の建物跡・竪穴建物跡・道路遺構の分布と出土遺物を検討してみよう。

#### ①建物跡と竪穴建物跡

まず、伏龍洞256番地遺跡の遺構分布を見てみよう。伏龍洞256番地遺跡では、建物跡が11基検出されている。建物は統一新羅時代の8世紀以降に建てられて、高麗時代を経て朝鮮時

代に至るまで何度も建て替えられている。

同遺跡では統一新羅時代の建物跡は中軸方向が正南位のものが多数である。確認された建物跡の柱間距離は300cm以上で、積心直径が100cm前後、深さは40cm以上であり、長軸の長さが10m以上の大型建物が築造されている。また、10m以上の大型建物跡は密集して配置されていて、一般の住居用ではなく、特殊な機能があったと推定される。

統一新羅時代の竪穴建物跡は38基が検出されていて、内部にカマド施設があるものかないものに分けることができる。竪穴建物跡の平面形態はほとんどが方形または隅丸方形である。また、内部にカマド施設がある竪穴建物跡はカマドの形態によって‘ㄷ’・‘ㄣ’・‘一’字形に分類できる。

次に、伏龍洞230-3番地遺跡の遺構分布を見てみよう。伏龍洞230-3番地遺跡では、建物跡が8基検出されている。建物は統一新羅時代に建てられて高麗時代まで使用された場合が多い。統一新羅～高麗時代の建物跡は長軸が10m以上の大型あるいは5m以上の中型がほとんどである。また、統一新羅時代の建物跡は伏龍洞256番地遺跡と同じく中軸方向が正南位のものが多数である。

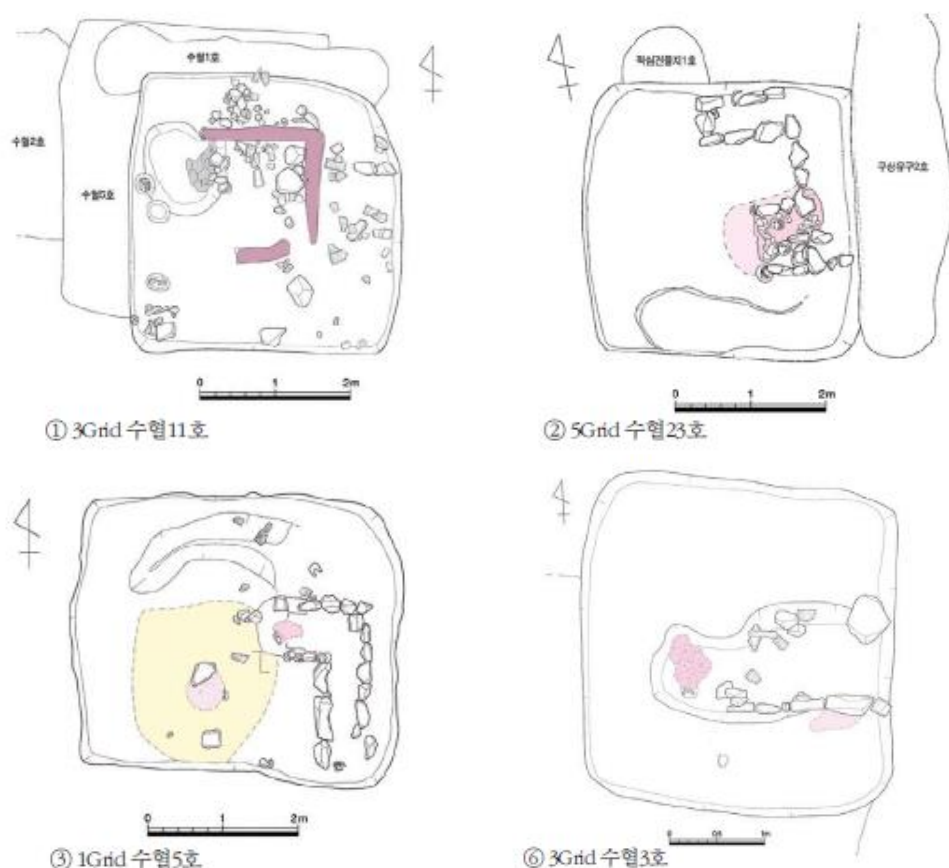


図60 伏龍洞230-3番地遺跡の竪穴建物跡のカマド形態  
(嶺南文化財研究院2009(Ⅱ)、324頁、図面2から一部引用、筆者再編集)

統一新羅時代の竪穴建物跡は85基が検出されていて、伏龍洞256番地遺跡と同じく内部にカマド施設があるものもあり、竪穴・炉などの施設があるものもある。竪穴建物跡の平面形態はほとんどが方形である。また、内部にカマド施設がある竪穴建物跡はカマドの形態によって‘ㄷ’・‘ㄱ’・‘一’字形に分類できる(図60)。

伏龍洞230-3番地遺跡で検出された建物跡と竪穴建物跡の分布を見ると、建物跡は2箇所建物群に集中して分布し、竪穴建物跡も密集して分布していることがわかる。特に、竪穴建物跡の分布様相を見ると、空地が存在し、その空地を中心にしてその周囲に竪穴建物跡が分布している特徴が見られる(図61)。

## ②道路遺構

道路遺構と関連する溝遺構は、伏龍洞10-4番地遺跡、伏龍洞230-3番地遺跡、城東洞81・81-1番地遺跡で検出された。溝遺構は道路遺構の側溝であると考えられ、統一新羅時代の溝遺構だけではなく、高麗・朝鮮時代の溝遺構も検出されている。

伏龍洞10-4番地遺跡で検出された東西方向の溝遺構は、伏龍洞230-3番地遺跡の調査区域の北側で検出された東西方向の溝遺構と約160mの距離にある。旧地籍図で復元された1坊の規模である約160mと同一であり、注目される。

伏龍洞230-3番地遺跡の調査区域南側にある統一新羅時代の東西方向の溝遺構は、調査区域の北側で検出された溝遺構との関連性も考えられるが、その距離は約116mであり、検討の余地がある。

城東洞81・81-1番地遺跡では、東西方向と南北方向の溝遺構が検出されていて注目される。東西方向の溝遺構は遺跡の北側と南側の2箇所検出され、その距離は約52mである。南北方向の溝遺構は北にのび、北側の伏龍洞230-3番地遺跡で検出されている南北方向の溝遺構とつながる可能性がある(図62)。

## ③出土遺物

伏龍洞遺跡群出土遺物の様相の特徴としては、統一新羅時代以前のものはほとんどないことがあげられる。統一新羅時代の土器類は、印花文が施された蓋片と椀、無文および陰刻線文が施された椀・鉢・壺類である。7世紀前半に流行した水滴形文が施された土器が出土せず、印花文土器は7世紀後半～8世紀に編年される点列文が施されたものが多数であり、9～10世紀によく見られる隆起文土器も出土している。したがって、遺跡の時期は7世紀後半～8世紀以降であると見られる。

以上、伏龍洞遺跡群で検出された建物跡・竪穴建物跡・溝遺構および出土遺物を分析して



みた。その結果、旧地籍図と旧地形図で推定される沙伐州の中心地の区画地割の1坊の中に、建物・竪穴建物・道路がどのように分布しているのかが一部確認されたのである。

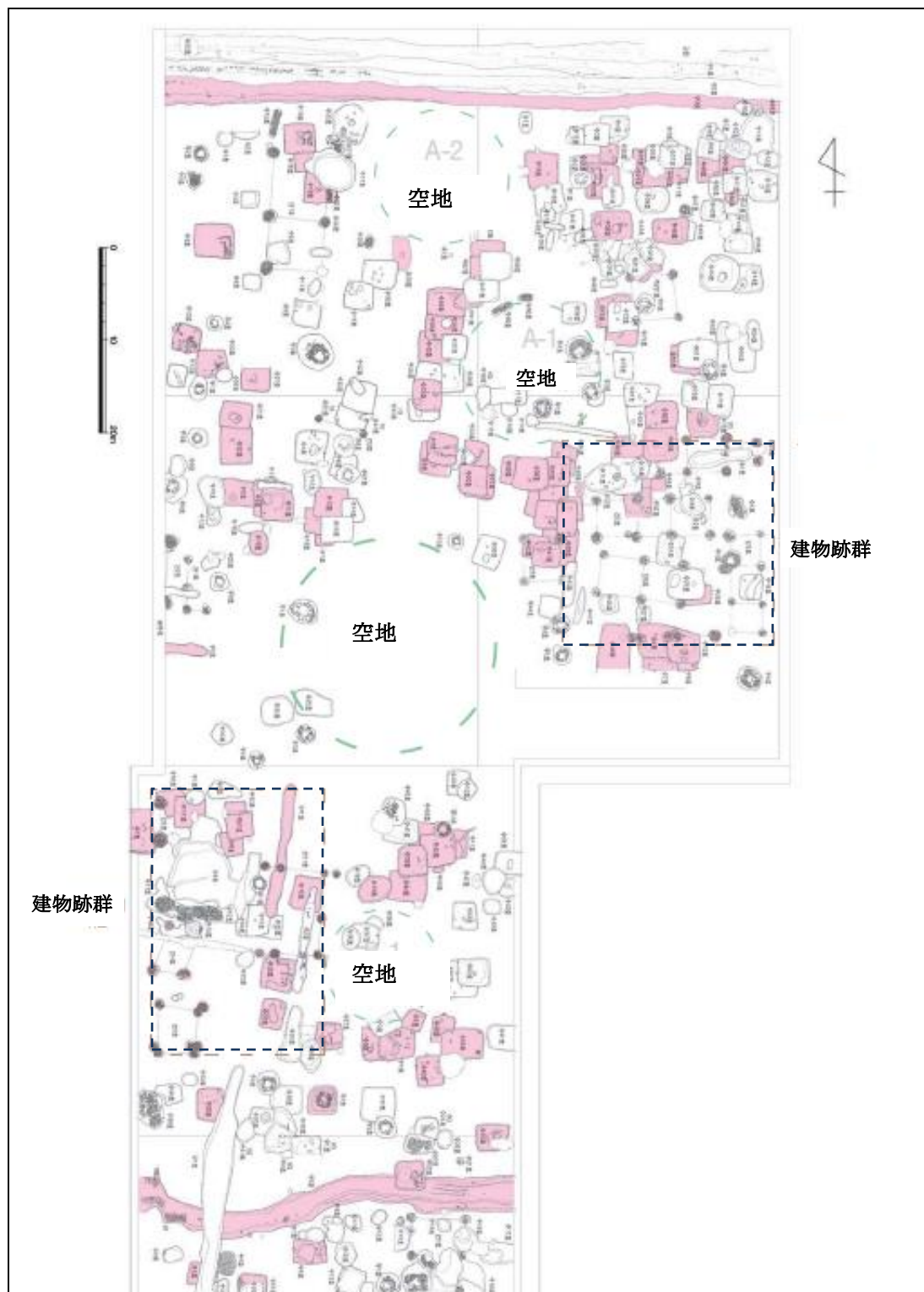


図61 伏龍洞230-3番地遺跡の統一新羅時代の遺構配置  
(嶺南文化財研究院2009(Ⅱ)、356頁、図面8、筆者再編集)

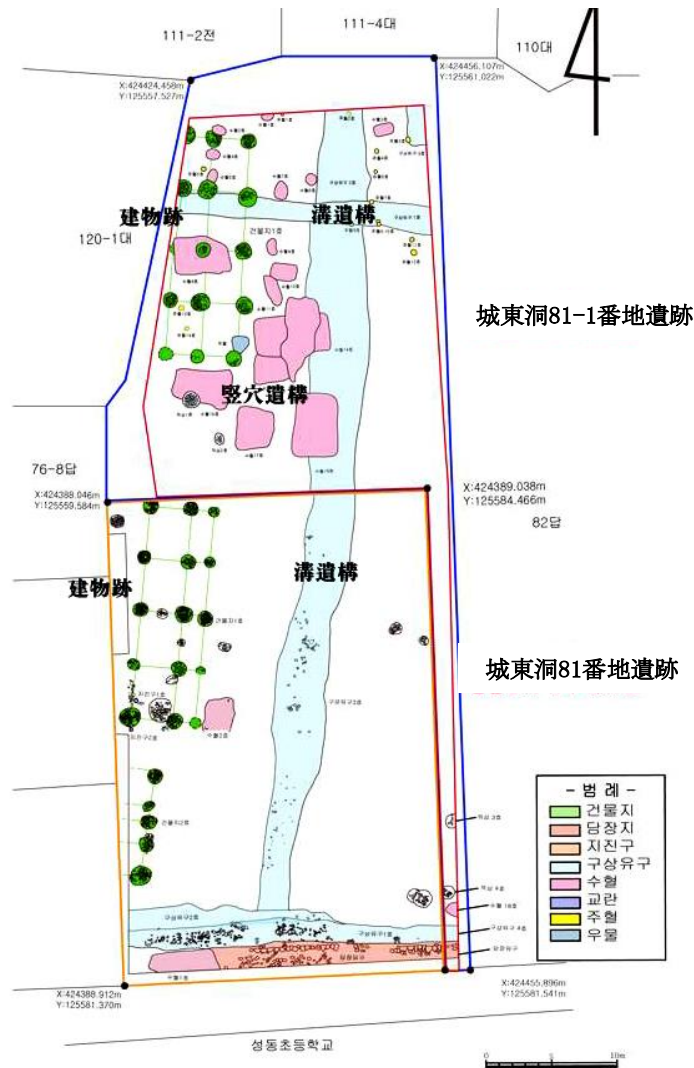


图62 城東洞81·81-1番地遺跡の統一新羅時代の遺構配置  
(한국문화재보호재단2013b、図面6、筆者再編集)

伏龍洞遺跡群の位置は、沙伐州の区画地割北東隅にあたる場所である。竪穴建物跡と井戸および溝遺構の位置から、統一新羅時代の市街地が道路によって区画されていることがある程度推定できる。

建物跡と竪穴建物跡との配置関係(図61)から見ると、報告書の指摘のように建物跡が特殊な機能をもつ建物であるのかどうかはまだ判断できない。また、統一新羅時代の大型建物跡の中軸方向は正南位であると報告されている。ところが、旧地籍図や旧地形図の検討で確認された区画地割では南北方向が西へ1.9度偏向している。したがって、建物跡の方向と旧地籍図・旧地形図で確認される区画地割の方向が少しずれているといえよう。伏龍洞230-3番地遺跡の統一新羅時代の溝遺構の方向も旧地籍図・旧地形図で確認される区画地割の方向と合わないが、溝遺構と建物跡が並行している。さらに城東洞81・81-1番地遺跡でも溝遺構

に並行して建物跡が検出されているので、そのずれに対する検討が必要である。

### 3) 沙伐州の都市構造の検討

『三國史記』と『新增東國輿地勝覽』の記録を分析した諸研究によると、沙伐国の古城は尚州市内地域の東側に位置する屏風山城に推定され、沙伐国が斯盧国に服属する以前の中心地であったと考えられている。また、法興王12(525)年に上州を設置した際、尚州地域に設置された治所は尚州市内地域の北東側に位置する吏部谷山城であると推定されている。すなわち、統一新羅期以前は尚州市内地域北東の沙伐面(吏部谷山城)が中心地であったことが推定される。

したがって、尚州地域の現在の沙伐面は統一新羅期以前までは拠点としての役割があったので、山城などが築かれて、そのまわりには三国時代の古墳が多数分布しているのである。州の治所の移動はその地域の中心地の移動、すなわち新しい都市建設を意味する。神文王代の九州と五小京の整備の際に設置された沙伐州の治所は新たに尚州市内地域に設置され、それと関連する遺跡が市内地域に多数分布していることが調査でわかった。

#### (1) 沙伐州の区画地割の復元(図63、表23)

沙伐州の都市構造に対する既存研究では、基本的に旧地籍図や旧地形図にもとづいて尚州市内地域の区画地割の復元案を提示している。同一の旧地籍図や旧地形図にもとづいて分析が行われているので全体的な規模の違いはないが、東西方向の区画地割の形態・規模や1坊の規模において多少異なっている。

南北方向の区画地割の規模はすべての復元案で約1,400mに推定され、その中に9坊があったと見ている。もちろん、1坊の規模を一辺約160mにした見解(朴泰佑1987、山田隆文2008)と約155mにした見解(박달석2012、李京贊2002)および約156.2m(황인호2014)にした見解があり、研究者によって異なっている。

沙伐州の復元案で問題なところは東西方向の区画地割の規模であり、特に東西方向の土地区画の中央部の規模が幅約155~160mではなく、幅約80~120mの痕跡が見られることである。朴泰佑と山田隆文の復元案では、東西方向の土地区画の中央部に幅約80mの南北大路(中軸大路)を設定している。その両側に1列だけ東西幅約100m区画があり、そこからさらに両側に東西幅約160m区画が4列ずつあると復元した。その結果、東西の区画地割の規模は約1,560mになる。

朴達錫の復元案では、東西方向の土地区画の中央1列だけが縦長方形(東西約115m×南北

約155m)であり、それ以外の規模は東西約155m×南北約155mの正方形で、東西約1,400m×南北約1,440mの格子式で里坊制の東西9里×南北9里の計81坊に復元した。

黄仁鎬の復元案では、東西方向の土地区画の中央1列だけが幅約120mであり、その東西に440尺(約156.2m)の坊が4列ずつあるとし、沙伐州の区画地割の規模を東西約1,370m×南北約1,405mと推定している。

以上の各復元案をまとめてみると、旧地籍図に見られる尚州市内地域の区画地割は東西方向の中央部の規模をどう判断するかによって、東西方向の区画地割の規模と坊の数が異なっていることがわかった。

筆者が旧地籍図や旧地形図を検討してみると、確実に痕跡が見られるのは東西1,370m×南北約1,400mの範囲である。区画地割の規模は東西9坊×南北9坊と復元しても無理はないと思われる。1坊の規模は東西約152～155m×南北約152～155m程度であると推定される。既存研究での見解が異なる中央部の区画地割の規模については、旧地籍図や旧地形図だけでは検討できないが、尚州邑城が築城されてから土地区画の乱れが生じたと考えられる。

したがって、東西方向の中央部に幅約80～120mの区画を必ずしも設定する必要はないと思われる。沙伐州の既存の復元案はあくまでも旧地籍図や旧地形図の検討だけで推定したものであり、発掘調査などによる具体的な検討が求められる。

なお、前述したように伏龍洞230-3番地遺跡の調査区域の北側と南側で検出された道路遺構と関連する統一新羅時代の溝遺構間の距離は約116mである。南北方向の区画地割の距離である約160mよりはかなり短い距離といえる。また、伏龍洞230-3番地遺跡の北側で検出された統一新羅時代の溝遺構の方向も旧地籍図と旧地形図で確認される区画地割の方向と合わない。さらに、城東洞81・81-1番地遺跡では溝遺構に並行して建物跡が検出されているので、区画地割の方向と各坊の規模は今後も検討が必要である。

## (2) 沙伐州の中心地の検討

沙伐州の都市構造を検討してみると、旧地籍図や旧地形図で確認される区画地割の痕跡が実際の調査でも遺構として一部確認され、沙伐州の中心地の都市構造と規模がある程度推定できるようになった。旧地籍図や旧地形図の検討から、沙伐州の中心地には1坊の規模が東西約152～155m×南北約152～155mの区画地割が施行されたことが推定できる。

朴泰佑を始めとする既存研究では、沙伐州は九州の中で区画地割によって建設された都市に分類されていて、州城は紫山山城であると比定している。坊里制では王宮などは区画された都市の中央部や北のほうに位置している。州城を沙伐州の治所城であると考え、川を

挟んだ対岸の山城が治所城の機能をなしていたのかは疑問である(距離はあまり遠くない約2 km)。

中原小京と金官小京のように朝鮮時代の邑城の外側に位置する羅城の存在を考えると、尚州邑城の性格は検討する余地がある。もちろん、州と小京はその構造が異なる可能性もあるが、尚州邑城は確かに沙伐州の中心地に位置している。しかし、統一新羅時代の遺構はまだ検出されていない。また、区画地割の範囲には城郭の痕跡もまったく報告されていない。したがって、沙伐州において、羅城の存在は現段階では想定できない。

また、伏龍洞遺跡群の遺構の分布様相から区画地割の北側の境界がある程度明らかになっている。一方、区画地割の東側の境界は既存研究のそれぞれの復元案のように、确实には推定できない。ところが、伏龍洞遺跡群の東側の発掘調査でも統一新羅時代の遺構が一部検出されているので、区画地割の東側の境界はさらに東になる可能性がある。

以上、沙伐州の都市構造を検討してみた。現段階では、沙伐州の中心地に1坊が1辺約152~155m規模の区画地割が施行されている可能性が高い。また、中心地には主な施設とともに、大型建物や竪穴建物で構成された市街地も分布していると思われる。北西側には中心地の防禦と関連する山城が位置している。すなわち、沙伐州の都市構造は沖積平野地帯に立地する州の中心地に区画地割が施行され、背後に山城をもつ類型であると考えられる。

表23 沙伐州の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)
①	朴泰佑(1987)	東西 約1,560m 南北 約1,440m	東西 約160m(中央約100+約80+約100m) 南北 約160m	10坊×9坊 (1,560m×1,440m) 1坊の規模は道路を含む
②	李京贊(2002)	東西 約1,355m 南北 約1,395m	東西 約155m(中央約115m) 南北 約155m	8区×9区(9行9列) (1,355m×1,395m) 1坊の規模は道路を含まない
③	山田隆文(2008)	東西 約2,000m 南北 約1,400m	東西 約160m(中央約100+約80+約100m) 南北 約160m	10坊×9坊 (1,560m×1,440m) 1坊の規模は道路を含む
④	朴達錫(2012)	—	東西 約155m(中央約115m) 南北 約155m	9里×9里 (1,400m×1,400m) 1坊の規模は道路を含まない
⑤	黄仁鎬(2014)	—	東西 440尺(約156.2m)(中央約120m) 南北 440尺(約156.2m)	9坊×9坊(10坊×10坊) (1,370m×1,405m) 1坊の規模は道路を含む
⑥	筆者	東西 約1,370m 南北 約1,400m	東西 約152~155m 南北 約152~155m	9坊×9坊 1坊の規模は道路を含む

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。

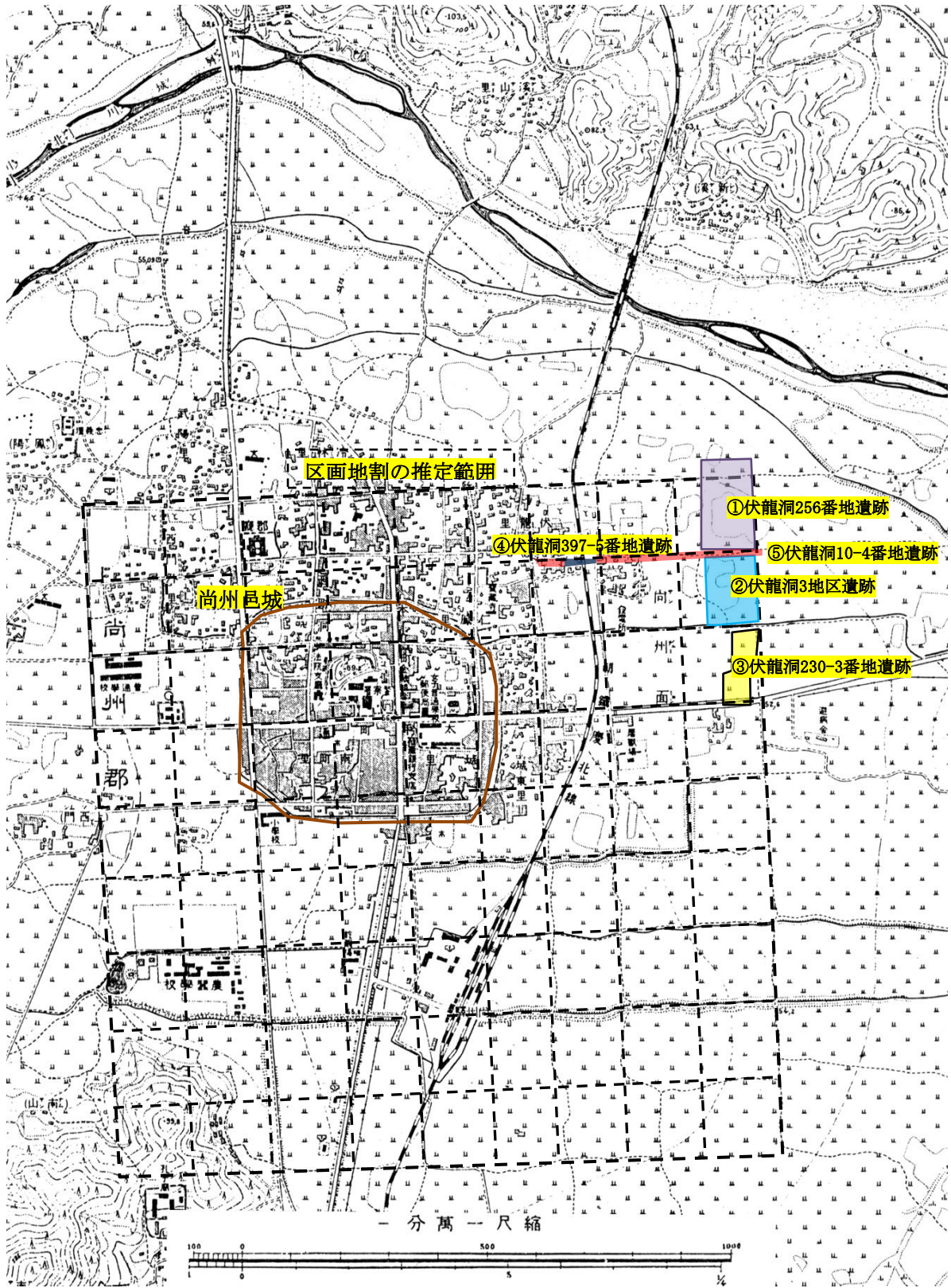


図63 沙伐州の関連遺跡と都市構造の復元案(1927年製作の旧地形図)

## 第2節 牛首州の都市構造

牛首州は、現在の江原道春川市に設置された。牛首州が設置された春川地域に関する史料はあまりないが、だいたい4世紀には百済の領域になって、高句麗の南進とともに5～6世紀までは高句麗の領域であったと考えられている。それから新羅の領域に入って、善徳王6(637)年に牛首州(牛頭州の表記もある)が設置された。

春川地域は北漢江と昭陽江の沖積地帯に位置している。発掘調査の事例と遺跡の数は多いが、そのほとんどが先史時代に集中していた。先史時代に比べて、三国時代から統一新羅時代の考古資料は貧弱であった。そのことは、牛首州の中心地と推定される春川市内地域の西側のほとんどを占めていた米軍基地の存在も一つの原因であった。この春川市内地域は、開発とともに調査が活発に行われていた他の春川地域と比べて、調査された遺跡も少なかった。

しかし、春川市内地域の西側での駅の新築や米軍基地の移転に伴い、広い範囲で調査が行われるようになった。特に、2009年に調査された槿花洞遺跡で統一新羅時代の竪穴建物跡と竪穴遺構が集中的に検出されたことは、注目すべきである。近年には返還米軍基地敷地遺跡の調査を始め、牛首州関連の古代都市遺跡への関心が高まっている。ここでは春川地域の牛首州関連遺跡の調査成果をまとめて分析したうえで、牛首州の中心地やその都市構造、州城などの検討を行いたいと思う。

### 1) 牛首州の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

『三國史記』「地理志」には、善徳王6(637)年に牛首州を設置したという記事があり、文武王13(673)年に首若州を設置したという記事もある。『三國史記』「新羅本紀」には、景德王16(757)年に首若州を朔州としたという記事がある。

『三國史記』卷第三十五「雜志」第四 地理2

朔州 賈耽古今郡國志云 句麗之東南濊之西 古貊地 盖今新羅北朔州 善徳王六年  
唐貞觀十一年 爲牛首州 置軍主[一云 文武王十三年 唐咸亨四年 置首若州]  
景德王改爲朔州 今春州

『三國史記』卷九「新羅本紀」第九 景德王16年

十六年... 冬十二月 ... 首若州爲朔州 領州一 小京一 郡十一 縣二十七...

表24 牛首州(首若州)の名称変遷

善徳王6年 (637年)	文武王13年 (673年)	景德王16年 (757年)	高麗・朝鮮時代	現在地名
牛首州	首若州 走壤城(鳳儀山城)築城	朔州	春州・春川都護府	江原道春川市

『三國史記』 「新羅本紀」には、文武王13(673)年に首若州に走壤城を築城したという記事がある。

『三國史記』 卷第七「新羅本紀」 第七 文武王13年  
十三年 九月... 首若州走壤城[一名迭巖城]...

『三國史記』 「新羅本紀」には、文武王8(668)年に戦争のため北方に比列忽州を設置したという記事があつて、その際に牛首州は廃止されたという指摘もある(전덕재2009b)。

『三國史記』 卷第六「新羅本紀」 第六 文武王8年  
三月... 置比列忽州 仍命波珍浚龍文爲摠管...

したがって、『三國史記』の記事を分析すると、善徳王6(637)年に牛首州が春川地域に設置されて、文武王8(668)年にその牛首州が廃止された可能性がある。また文武王13(673)年に首若州を設置し、走壤城を築城したことがわかる。

首若州は景德王代に朔州に改称され、高麗時代(太祖代)には春州に改称された。朝鮮時代には春川の名称が使われ、春川都護府がおかれた。

## (2) 既存研究の検討

朴泰佑(朴泰佑1987)は、牛首州を九州の中で市街地計画がなかった都市に分類している。また、州城を鳳儀山城に比定している。その他には関連資料の不足でほとんど検討はされていない。

山田隆文(山田隆文2008)は、旧地形図をもとにして方格地割の復元案を提示している。春川市内地域の中で、鳳儀山城の西側のほうに方格地割があつたと想定している。一辺約120mの方格地割が東西約900m×南北約1,000mの範囲にあると見ている。それをもとに、東西5坊(約600m)×南北8坊(約960m)の長方形の方格地割を推定した。しかし、方格地割の西側は北漢江の氾濫によりその痕跡が確認しづらいと述べている。州城に対しては『三國史記』の記事に記された走壤城が鳳儀山城にあたる可能性に注目していた(図64)。



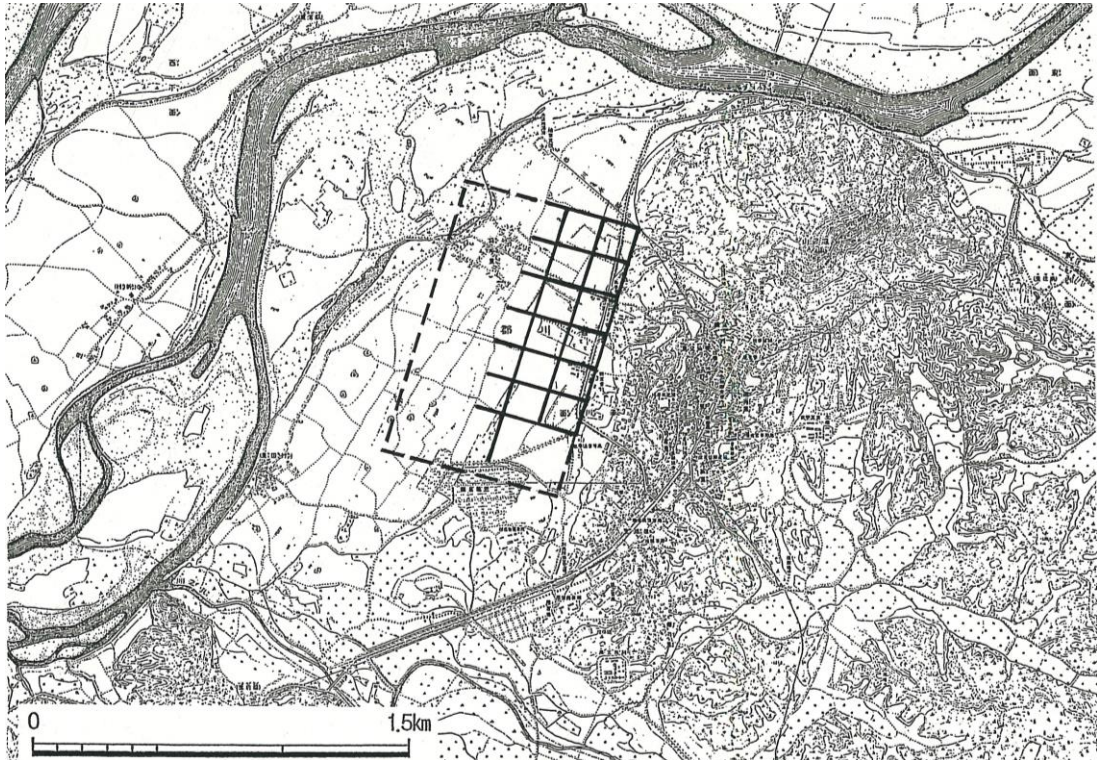


図64 山田隆文の牛首州の方格地割復元案(山田隆文2008、30頁、図23から引用)



図65 春川市内地域の牛首州関連遺跡分布1 (GOOGLE EARTHから作製)

## 2) 牛首州の関連遺跡

### (1) 関連遺跡の現況(図65、表25)

#### ①玉泉洞古墳群(図65)

遺跡は鳳儀山城の城壁の近くに位置している。1984年、翰林大学での水タンク工事の際に、石槨墓の一部が確認され調査された。調査の結果、石槨墓5基と20点の遺物が出土した。出土遺物は統一新羅期の小型台付長頸壺、有蓋高杯などである(江原文化財研究所2003)。

#### ②鳳儀山城(図66)

鳳儀山城は鳳儀山の頂上部に築かれた山城である。1993年の地表調査では建物跡が10箇所確認されていた。2004年の発掘調査の本来の目的は城壁の規模や性格の把握であったが、実際の調査では建物跡3基の検出にとどまった。築城時期は高麗時代であると推定されていたが、出土遺物は統一新羅時代末から高麗時代初のものが多数であると報告された。また、6世紀後半から朝鮮時代前期までの多様な時期の遺物が出土している。築城時期は新羅の春川進出や牛首州の設置と関連していると見られる(江原文化財研究所2005)。

#### ③春川昭陽路遺跡(図67)

発掘調査で瓦窯6基、廃棄場2基、竪穴遺構3基が検出された。窯は半地下式であり、窯の構造と出土した瓦の文様、製作技法から見ると、造営時期は新羅期末から統一新羅時代である。出土した瓦が鳳儀山城で調査された建物跡出土の瓦と製作技法が同一であると推定されているので、鳳儀山城の建物の築造にこの窯の瓦が使用されたことがわかる(예맥문화재연구원2010)。

#### ④返還米軍基地敷地遺跡

この遺跡は、鳳儀山の西側の沖積地帯にあった米軍基地が移転した跡地である。全面発掘調査ではなく、標本試掘調査であり、遺構の分布や範囲を把握する調査であった。調査地はA・B・C地区に分けられているが、北側のB地区から統一新羅時代の竪穴建物跡4基と積心遺構群2箇所が検出された(國立中原文化財研究所2010)。

#### ⑤春川槿花洞遺跡(図68、表26)

遺跡は鳳儀山の西側の沖積地帯に位置し、返還米軍基地敷地遺跡の西側である。新しい春川駅舎の敷地であり、建設工事のため調査は三つの区域に分けて同時に実施された。同じ遺跡であるが、A・B・C区域に分けて調査が行われ、報告書も区域ごとに刊行されている。

遺構としては、原三国時代の竪穴建物跡、三国時代・統一新羅時代の竪穴建物跡・竪穴遺構、高麗時代の竪穴遺構、朝鮮時代の建物跡・竪穴建物跡・竪穴遺構などが検出された。特に、新羅期や統一新羅時代の遺構の数が多(江原文化財研究所2011a・예맥문화재연구원 2011・江原考古文化研究院2011)。

⑥春川槿花洞792-2番地遺跡

遺跡は春川槿花洞遺跡の北側に位置している。原三国時代の竪穴建物跡2基、統一新羅時代の竪穴建物跡2基、朝鮮時代の竪穴遺構などが検出された(예맥문화재연구원2014)。

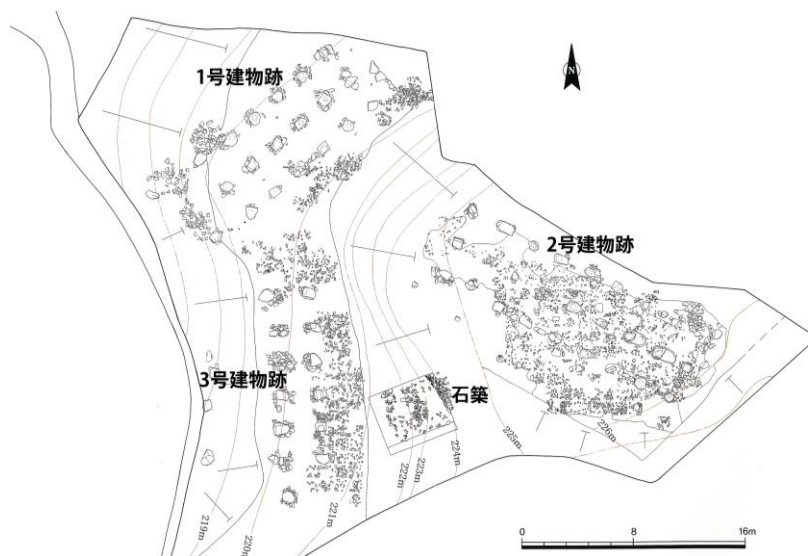


図66 鳳儀山城の建物跡配置(江原文化財研究所2005、27頁、図面7、筆者再編集)

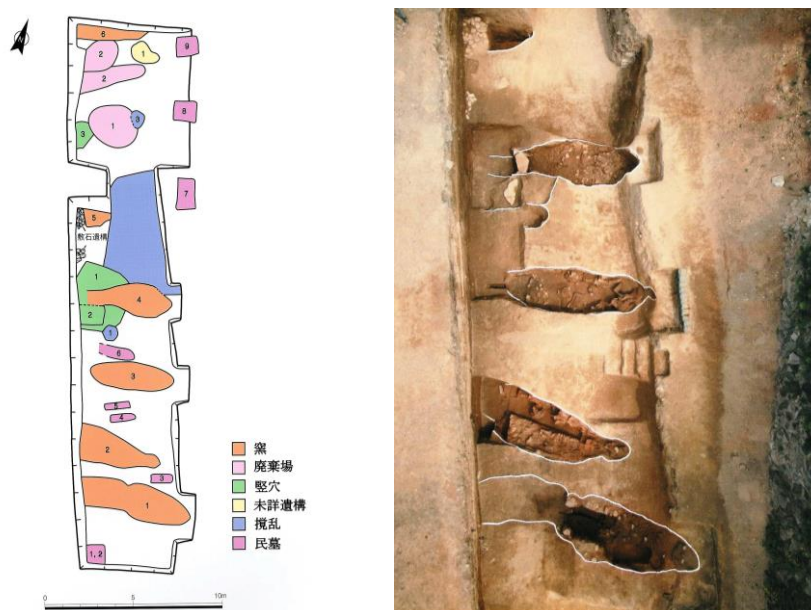


図67 春川昭陽路遺跡の遺構配置  
(예맥문화재연구원2010、左:36頁、筆者再編集、右:5頁、写真3から引用)



図68 春川権花洞遺跡(B区域)(江原文化財研究所2011(Ⅱ)、3頁、写真1から引用)

表25 春川市内地域の牛首州関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構
①	玉泉洞古墳群	1984年	—	統一新羅	石槨墓
②	鳳儀山城	2004年	2,702m <sup>2</sup>	統一新羅 高麗、朝鮮	建物跡
③	春川昭陽路遺跡	2006年	750m <sup>2</sup>	三国～統一新羅	統一新羅時代瓦窯
④	返還米軍基地敷地遺跡	2009年	(標本試掘調査)	統一新羅、高麗	竪穴建物跡
⑤	春川権花洞遺跡	2009年	33,383m <sup>2</sup>	原三国 三国～統一新羅 高麗、朝鮮	竪穴建物跡 竪穴遺構
⑥	春川権花洞792-2番地遺跡	2012年	413m <sup>2</sup>	原三国、統一新羅	竪穴建物跡 竪穴遺構

表26 春川権花洞遺跡の遺構現況

権花洞遺跡	調査面積	原三国時代	三国・統一新羅時代	高麗・朝鮮時代
A区域	19,383m <sup>2</sup>	竪穴建物跡7	竪穴建物跡46、竪穴遺構118	建物跡 12・3 竪穴建物跡 5・6 竪穴遺構 24・4
B区域	6,325m <sup>2</sup>	竪穴建物跡4	竪穴建物跡19、竪穴遺構70 道路遺構1	建物跡 2・9 竪穴建物跡 0・9 竪穴遺構 6・5
C区域	7,675m <sup>2</sup>	竪穴建物跡4	竪穴建物跡22、竪穴遺構14	建物跡 0・4 竪穴建物跡 0・53
合計	33,383m <sup>2</sup>	竪穴建物跡15	竪穴建物跡87、竪穴遺構202 道路遺構1	建物跡 14・16 竪穴建物跡 5・68 竪穴遺構 30・9

## (2) 春川槿花洞遺跡の竪穴建物群の分析

三国～統一新羅時代の竪穴建物跡は槿花洞遺跡で計87基が検出されているが、竪穴遺構に分類されている202基の遺構の中にも竪穴建物跡である可能性があるものがA区域・B区域には多数分布している。市街地は槿花洞遺跡の北側の春川槿花洞792-2番地遺跡、東側の返還米軍基地敷地遺跡のB地区まで広がっている(図69)。

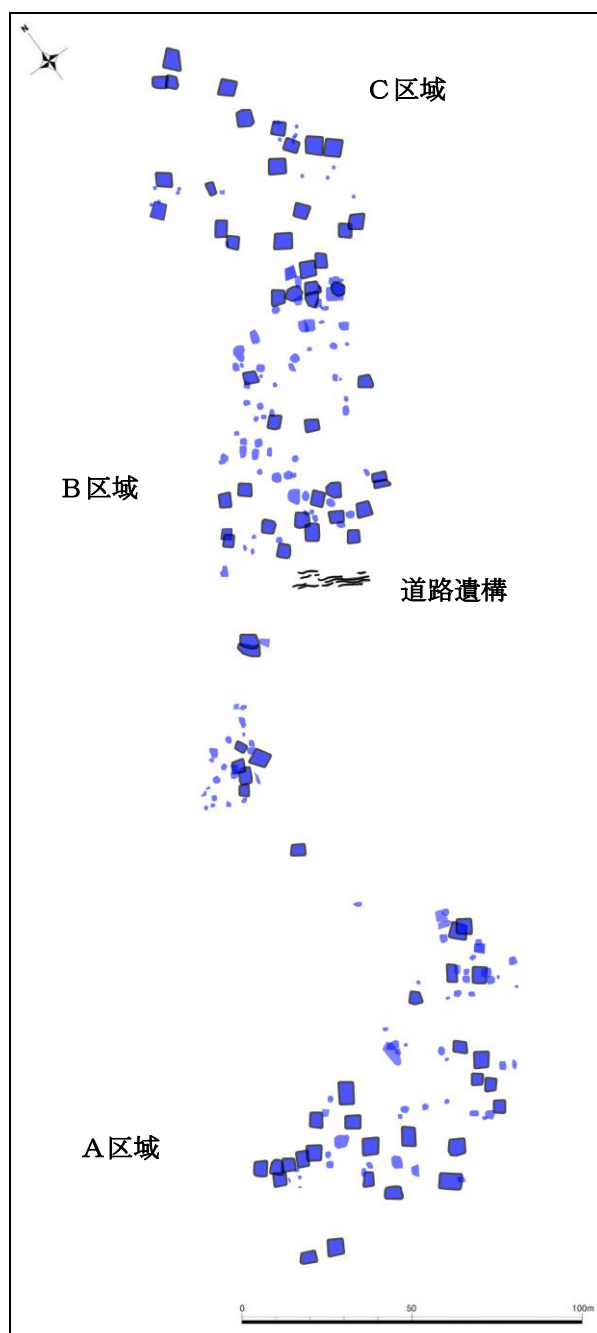


図69 春川槿花洞遺跡の三国～統一新羅時代の竪穴建物跡と竪穴遺構の分布  
(예맥문화재연구원2011、45頁、図8・江原文化財研究所2011(I)、43頁、図面3  
江原考古文化研究院2011、45頁、図面7、筆者再編集)

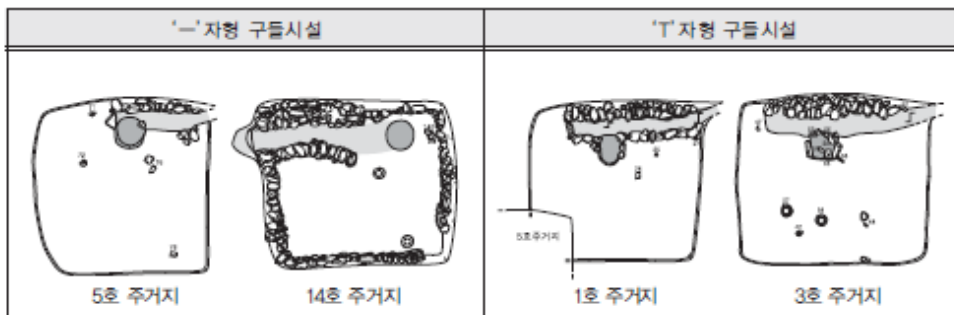
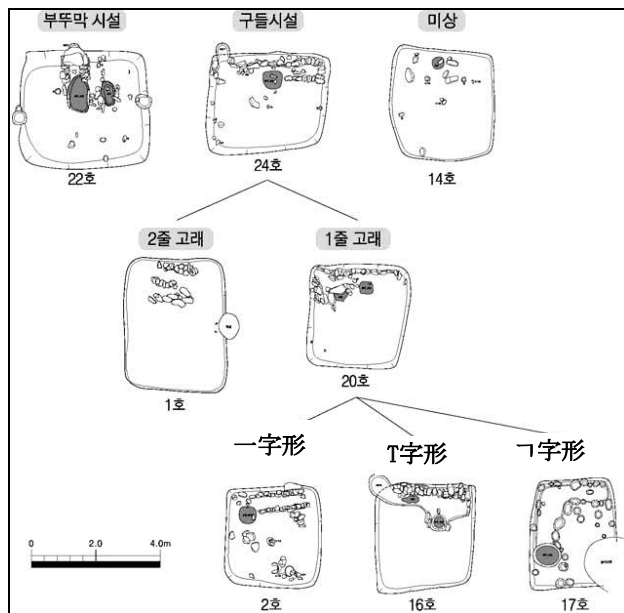


图70 春川槿花洞遺跡의 竪穴建物跡의 類型 (A·B·C区域)  
 (上: 예맥문화재연구원2011, 6頁, 写真7から引用)  
 (中: 江原文化財研究所2011(Ⅱ), 377頁, 図面472の一部, 筆者再編集)  
 (下: 예맥문화재연구원2011, 508頁, 表6から引用)

竪穴建物跡の平面形態は方形・長方形がほとんどであり、内部施設にカマドやオンドル（正確な名称はグドゥル）があるのが特徴である。

C区域の報告書の分析では、竪穴建物跡の築造時期を内部施設にカマドがあるものが早く、オンドルがあるものに変化したと見ている。オンドルがある竪穴建物跡も「一」字形、「T」字形、「冂」字形に分類される。「一」字形オンドルがある竪穴建物跡のAMS分析はA. D. 550～650年代に集中している。「T」字形オンドルがある竪穴建物跡のAMS分析はA. D. 700年以降が多い。

このような結果を考えると、「T」字形オンドルの登場時期を具体的に推定するのは難しいが、統一新羅期から「T」字形オンドルが設置された竪穴建物跡の数が増加するものと判断される(예맥문화재연구원2011)。なお、A・B区域の竪穴建物跡の時期も同じ様相が見られる(図70)。

遺物の編年では、竪穴建物跡の内部施設の変化に見られるような時期差はあまり見られないのが特徴である。土器は統一新羅期以前の様式である6世紀末から7世紀前半の高杯、統一新羅期様式の7世紀後半から8世紀代の点列文が施された蓋と椀などが出土している。一部のオンドルがある竪穴建物跡からも統一新羅期様式の遺物が出土している。

### (3) 牛首州と沙伐州の竪穴建物群の様相

牛首州の中心地に推定される春川市内地域の槿花洞遺跡一帯には、統一新羅時代の竪穴建物跡群が分布していることがわかった。特に、槿花洞遺跡一帯では87基以上の三国～統一新羅時代の竪穴建物跡が検出されている。前節で検討した沙伐州の伏龍洞遺跡群とともに、統一新羅時代の竪穴建物跡が密集して確認されているのである。槿花洞遺跡と伏龍洞遺跡群で検出された竪穴建物跡は方形であり、内部施設にはカマドとオンドルがあるという共通点が



図71 春川槿花洞遺跡の竪穴建物跡  
(예맥문화재연구원2011、7頁、写真8から引用)



図72 伏龍洞遺跡群の竪穴建物跡  
(嶺南文化財研究院2009a(I)、vii頁から引用)

見られる(図71・72)。ところが、槿花洞遺跡一帯の竪穴建物跡群では、尚州地域の伏龍洞遺跡群とは少し異なる様相が見られる。

槿花洞遺跡の竪穴建物跡群では、尚州地域の伏龍洞遺跡群で検出されたような大型建物跡と井戸がほとんど検出されていない。また、槿花洞遺跡では竪穴建物跡の配置の特徴はあまり見られないが、竪穴建物跡の周辺で竪穴遺構が検出される事例が多い。

槿花洞遺跡の竪穴建物跡の中には、出土遺物の時期から見て6世紀末から7世紀前半の統一新羅期以前に築造されたものがあり、統一後の7世紀後半から8～10世紀代に築造された竪穴建物跡もある。

槿花洞遺跡の遺構・遺物の編年から考えると、牛首州の市街地の形成は7世紀代の新羅の春川地域進出(牛首州の設置)と関連していることがわかる。統一新羅期以前に形成された市街地が7世紀後半の首若州の設置や九州と五小京の整備時期によってどのような変化があったのかは不明であるが、統一新羅期においてもその市街地が維持されていたことは確かである。

このように、統一新羅期の沙伐州の設置とともに市街地が形成された尚州地域の伏龍洞遺跡群とは異なり、槿花洞遺跡の市街地の形成時期は統一新羅期以前に遡ることになる。竪穴建物跡の形態と構造は沙伐州の遺構と類似しているが、遺物の出土様相と時期には多少違いが現われている。

### 3) 牛首州の都市構造の検討

#### (1) 牛首州の区画地割の検討

ここでは、牛首州の中心地に沙伐州のような区画地割が存在していたのかどうかを検討してみよう。既存研究の項で言及したように、朴泰佑は牛首州を区画地割が施行されていない都市に分類している。山田隆文の場合、牛首州の中心地に東西5坊(約600m)×南北8坊(約960m)の長方形の方格地割を想定したが、西側の痕跡は確認しづらとした(図73)。

検討ができる春川市内地域の旧地形図は1925年製作のものであるが、区画地割の痕跡は確実には見られない。一部道路のような区画線の痕跡が確認されるが、全体的な区画地割の範囲を設定できるような痕跡は見られない。

1920～1930年代に製作された旧地形図には都市開発による変化が見られるので、筆者は春川地域の1915年製作の旧地籍図を検討してみた。その結果、確実に見られるのは南北区画線5列、東西区画線2列である。しかし、各区画の規模が異なっているので、旧地籍図によっ



て春川市内地域に方形ないし長方形の区画地割を想定することは難しい(図74、表27)。

したがって現段階では、牛首州の中心地には方形ないし長方形の区画地割が施行されていない可能性が高いといえよう。ただ一部の地域には区画地割が施行されていた可能性もあるので、検討は必要である。

## (2) 牛首州の中心地の検討

牛首州の中心地は、竪穴建物跡が集中的に検出されている鳳儀山城の西側一帯であることは確かである。前述したように旧地籍図の検討では、牛首州の中心地には南原小京・沙伐州のような区画地割による都市建設が行われていない可能性が高くなった。

しかし、槿花洞遺跡の一部で道路遺構が検出されていることや、旧地籍図の検討から区画地割が一部施行されていた可能性もあるので、十分な考古資料の分析が必要である。

牛首州の場合、沙伐州のような治所の移動と新しい都市建設は見られない。牛首州(首若州)の設置時期や城郭築城も統一新羅期以前であり、統一後の九州と五小京の整備による中心地での新しい都市建設は行われていない可能性がある。したがって、統一新羅期以前に形成された既存の市街地に区画地割をまったく施行していないか、あるいは一部だけ施行したことが考えられる。

また、州の中心地である鳳儀山城の西側地域でも、主要な施設の関連遺構や羅城のような城郭の痕跡は現段階ではまったくない。

州城は鳳儀山城である可能性が高いと思われるが、鳳儀山城が治所城の役割を果たしていたのかどうか問題である。統一新羅期以前はこの地域の拠点城として、十分に治所城の役割を果たしていたと見られる。統一新羅期になって、九州と五小京の整備の際、牛首州の治所のあり方や構造に変化はあったのだろうか。それに関しては、統一新羅期以前の拠点城は統一後に平地の治所へ移動する傾向が見られるが、拠点城をそのまま治所として使用してい

表27 牛首州の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)
①	山田隆文(2008)	東西 約 600m 南北 約1,000m	東西 約120m 南北 約120m	5坊×8坊 (600m×960m) 1坊の規模は道路を含む
②	筆者	東西 約 800m 南北 約 850m	不明	東西(2列)、南北(5列) 一部区画線痕跡確認

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。

る事例もあると新羅の拠点城に関連する研究の中で述べられている(朴省炫2010)ことが参考になる。

州城である可能性が高い鳳儀山城の発掘調査では建物跡が検出された。鳳儀山城の建物跡は州の中心地である槿花洞遺跡からさほど遠くないところに立地している。したがって、鳳儀山城が治所城としての役割を果たしたことは十分考えられる。しかし、発掘調査では治所城としての役割と関連する具体的な遺構は明らかにされていないので、今後具体的な関連遺構の調査が望ましい。

以上、牛首州の都市構造を検討してみた。牛首州の都市構造の特徴は治所城として山城を使用した可能性が高いことである。また、中心地には区画地割が未施行あるいは一部だけ施行された可能性がある。したがって、他の州の治所とは異なる都市構造が推定される。

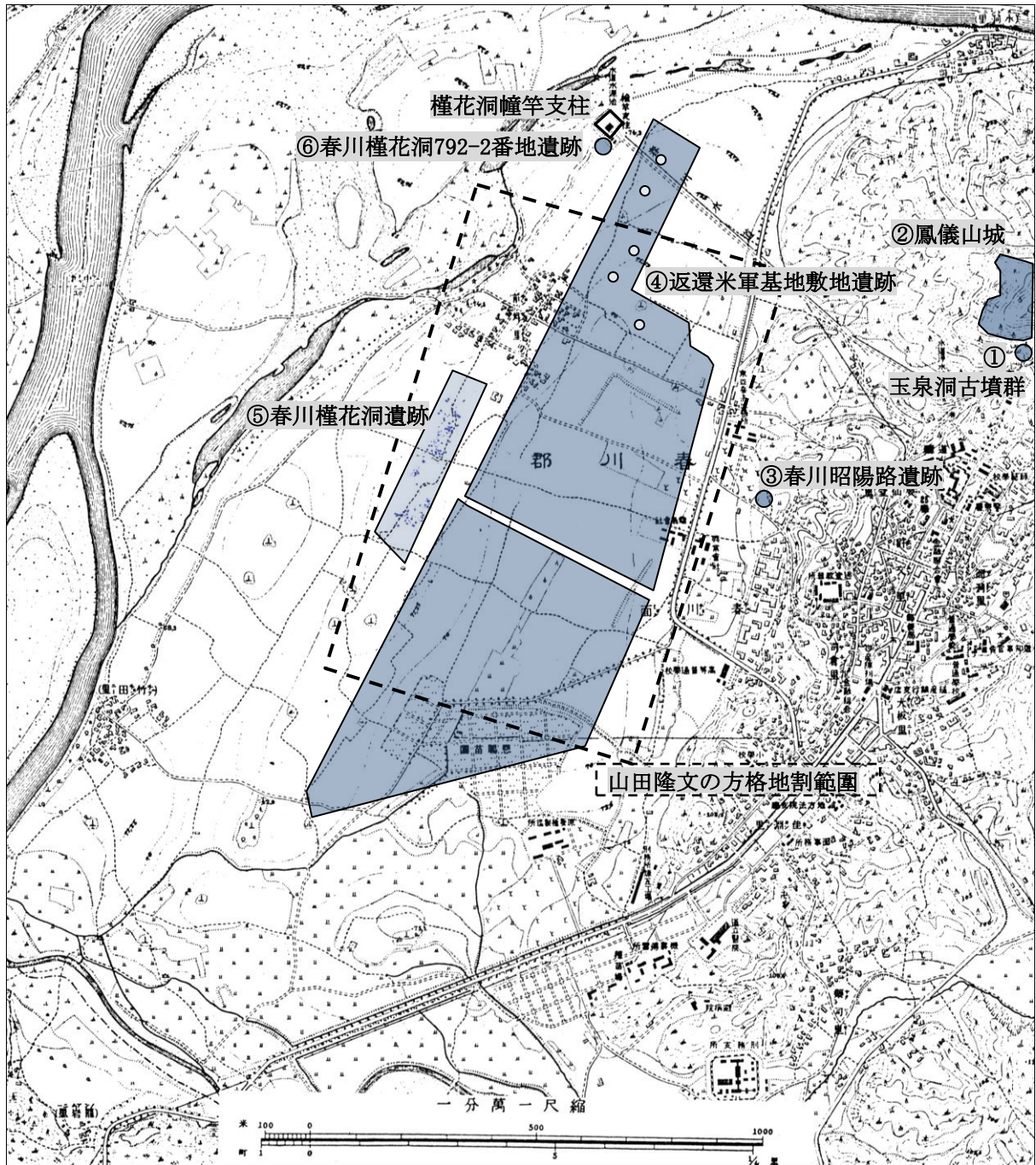


図73 春川市内地域の牛首州関連遺跡分布2(1925年製作の旧地形図)

※④返還米軍基地敷地遺跡の北側に分布している○は標本試掘調査で検出された竪穴建物跡である。

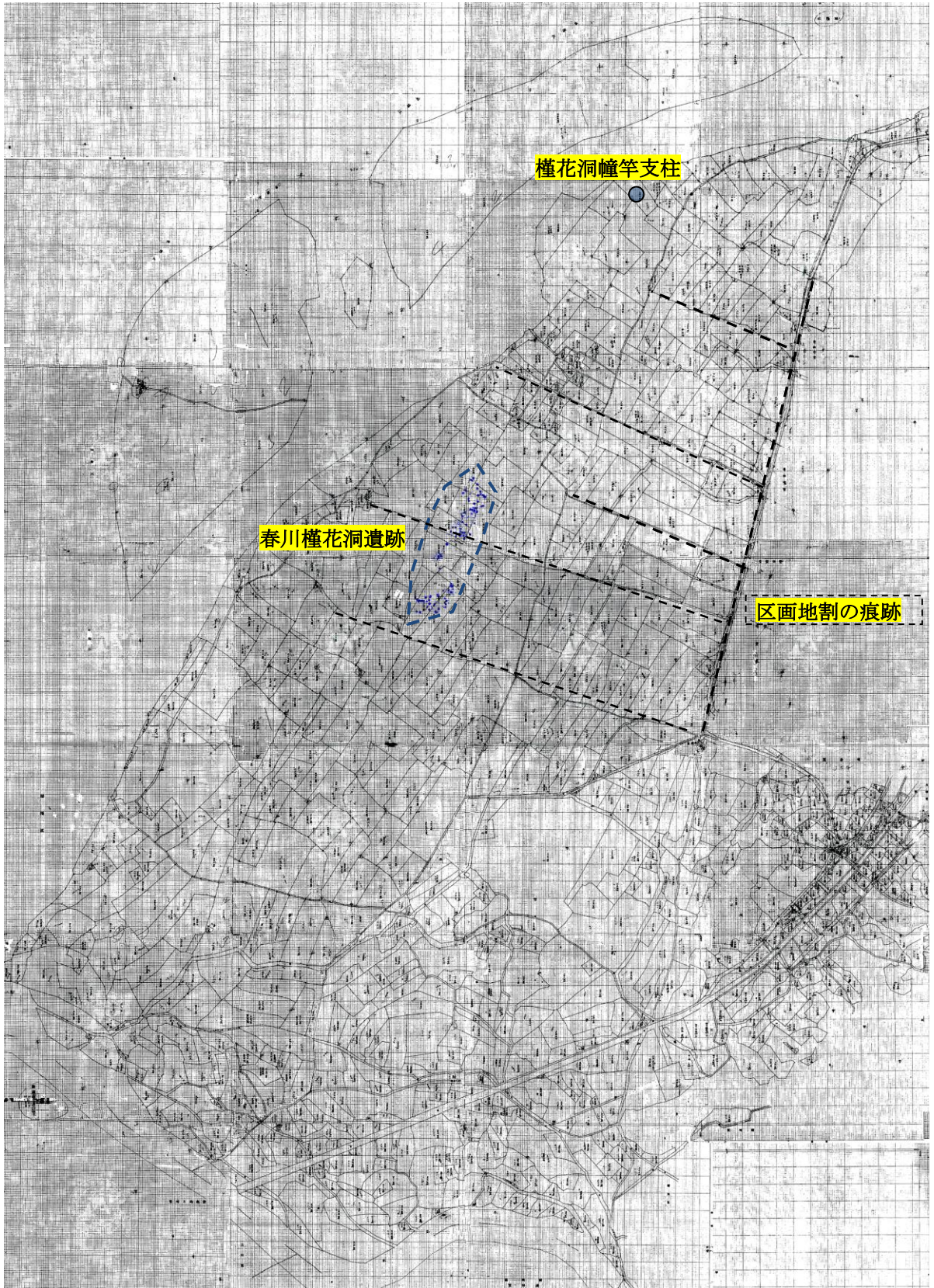


図74 牛首州の区画地割の痕跡(1915年製作の旧地籍図)

## 第3節 河西州の都市構造

河西州は、現在の江原道江陵市に設置された。江陵地域はもともと濊の故地であり、高句麗の支配下にあった時期には河西良であった。善徳王8(639)年に北小京が設置されるが、武烈王5(658)年に河西州として小京から州に変更され、新羅の統一後に九州の一つに位置づけられた。

江陵地域は東海に面しているが、江陵市の中心部は海岸から約5km離れた内陸に位置する。江陵市街地は、市内を南西から北東へ流れる南大川の左岸の平地部に位置している。周辺にはそれほど高い山はないが、江陵市街地の北側に山地が東西に広がる。北側の山地と南大川との間が平坦な地形となっているが、その幅は最大でも1km程度とあまり広くないのが特徴である。

### 1) 河西州の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

河西州が設置された江陵地域に関しては、統一新羅時代に関連する文献記録は多くないが、他の地域より早い時期の記録がある。『三國史記』「新羅本紀」には、智証王13(512)年に伊滄異斯夫が何瑟羅州軍主になったという記事がある。この時期までに何瑟羅州が設置されて、江陵地域は新羅の領域に完全に入っていたと思われる。

『三國史記』卷第四「新羅本紀」第四 智証王13年  
伊滄異斯夫爲何瑟羅州軍主...

『三國史記』「新羅本紀」には、善徳王8(639)年春2月に何瑟羅州を北小京とし、沙滄眞珠に命じてそこを守ることにしたという記事もある。

『三國史記』卷第五「新羅本紀」第五 善徳王8年  
八年 春二月 以何瑟羅州爲北小京命沙滄眞珠鎮之

『三國史記』「新羅本紀」には、武烈王5(658)年に何瑟羅の土地が靺鞨と接しているので、人々が安らかに暮らしていないと思って京を廃止し、州として都督を置いて守ることにしたと記されている。

表28 河西州の名称変遷

善徳王8年 (639年)	武烈王5年 (658年)	景德王16年 (757年)	高麗・朝鮮時代	現在地名
北小京	何瑟羅州	河西州→溟州	江陵大都護府 溟州府・江陵府	江原道江陵市

『三國史記』卷第五「新羅本紀」第五 武烈王5年

五年 ... 三月 王以何瑟羅地連鞞鞞 人不能安 罷京爲州 置都督以鎮之...

『三國史記』「地理志」にも、善徳王代に何瑟羅州を北小京とし、武烈王5(658)年に北小京を廃止して瑟羅州にして、景德王16(757)年に河西州を溟州にしたという記事があり、この地域が河西州であったことがわかる。

『三國史記』卷三十五「雜志」第四 地理2

溟州 本高句麗河西良[一作何瑟羅] 後屬新羅 賈耽古今郡國志云 今新羅北界溟州  
蓋濊之古國 前史以扶餘爲濊地 蓋誤 善徳王時爲小京 置仕臣 太宗王五年 唐顯慶三年  
以何瑟羅地連鞞鞞 罷京爲州 置軍主以鎮之 景德王十六年改爲溟州 今因之

『三國史記』「新羅本紀」には、景德王16(757)年に他の州とともに改称され溟州となったという記事がある。高麗時代以降、江陵地域の名称は江陵大都護府・溟州府・江陵府などさまざまに変遷し、現在の江原道江陵市となった。

『三國史記』卷第九「新羅本紀」第九 景德王16年

十六年 春正月... 河西州爲溟州 領州一 郡九縣二十五...

## (2) 既存研究の検討

朴泰祐(朴泰祐1987)は、溟州を羅城がある都市と推定し、その羅城を溟州洞にあったとされる城跡(濊国古城址)に比定しているが、現在は市街地化のために確認できないとしている。その他には関連資料の不足であまり検討はされていない。

山田隆文(山田隆文2008・2012)は、旧地形図に見られる方格地割の痕跡から、溟州の都市構造は坊里制を備えた都市であると復元した。1930年代製作の旧地形図の分析から、江陵市街地中心部である玉川洞、林塘洞、錦鶴洞、溟州洞などの一帯に、一辺約190mを基本とする方格地割が北東-南西約1,700m×北西-南東約800mの範囲に遺存していると見ている。特に、江陵邑城がある市街地よりも東側に広がる水田にその痕跡が明瞭に残存していることを確認している。

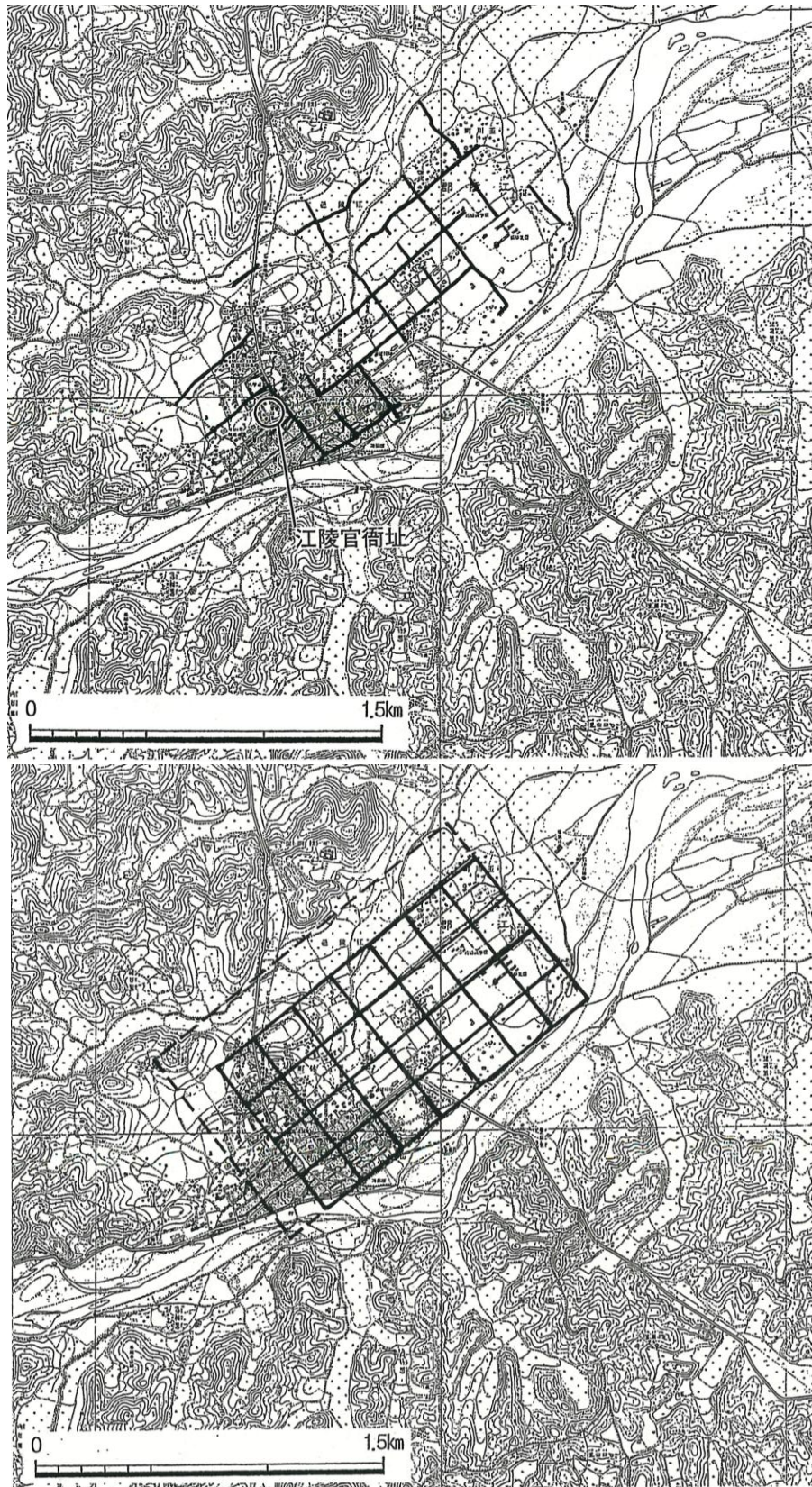


図75 山田隆文の河西州の方格地割復元案(山田隆文2008、31頁、図26から引用)

山田隆文は方格地割の一辺の規模が約190mで、王京や他の州および小京の中心地で見られる1坊の一辺約160mや約140mの規模とは異なるとした。方格地割の中軸方向は自然地形に沿って北から西へ約37.5度傾く北西-南東方向であり、それは南大川の流れと北側の山地に制約を受けたためであると推定した(図75)。

そして山田隆文は、北東-南西7坊(約1,330m)×北西-南東4坊(約760m)の長方形の方格地割に復元した。また、南西側と北西側にそれぞれ1列ずつ増えた北東-南西8坊(約1,520m)×北西-南東5坊(約950m)であった可能性もあると考えている。

都市全体の平面形態は長方形であり、沙伐州や南原小京などで見られるような中軸大路の存在を示す方格地割は確認できず、中軸大路は存在しなかったと見ている。

## 2) 河西州の関連遺跡

### (1) 関連遺跡の現況(図76・77、表29)

江陵地域で河西州に関連する遺跡の調査はあまり行われていない。河西州の中心地と推定される場所は、やはり江陵官衙址と江陵邑城を含む市内地域である。他の州や小京が設置された地域の事例から考えると、江陵地域も統一新羅期に治所が設置された地域が中心地であり、高麗・朝鮮時代にもその地域の中心地であったと思われる。しかし、江陵官衙址と江陵邑城に関する調査は行われているが、河西州に関連する遺構や遺物は現段階では確認されていない。

表29 江陵市内地域の主要遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構・遺物
①	江陵官衙址	2003年	8,032㎡	高麗末～朝鮮初	建物跡、歩道跡、塀遺構
②	城内洞11-1番地遺跡 (江陵邑城)	2004年	661㎡	高麗、朝鮮	土城、石城、南門跡
③	江陵邑城 中央洞舎新築敷地遺跡	2004年	1,263㎡	高麗、朝鮮	土城、石城、建物跡
④	江陵邑城 溟州洞14番地 住宅新築敷地遺跡	2006年	371㎡	高麗、朝鮮	土城、石城
⑤	江陵洪濟洞 アパート新築敷地遺跡	2006年	1,932㎡	6～7世紀代	横穴石室墳2基
⑥	江陵嶺東大学ショートトラック 補助競技場敷地遺跡	2012年	9,364㎡	統一新羅、朝鮮	竪穴遺構、瓦片
⑦	原州-江陵鉄道工事区間遺跡	2015年	6,084㎡	高麗、朝鮮	土器片



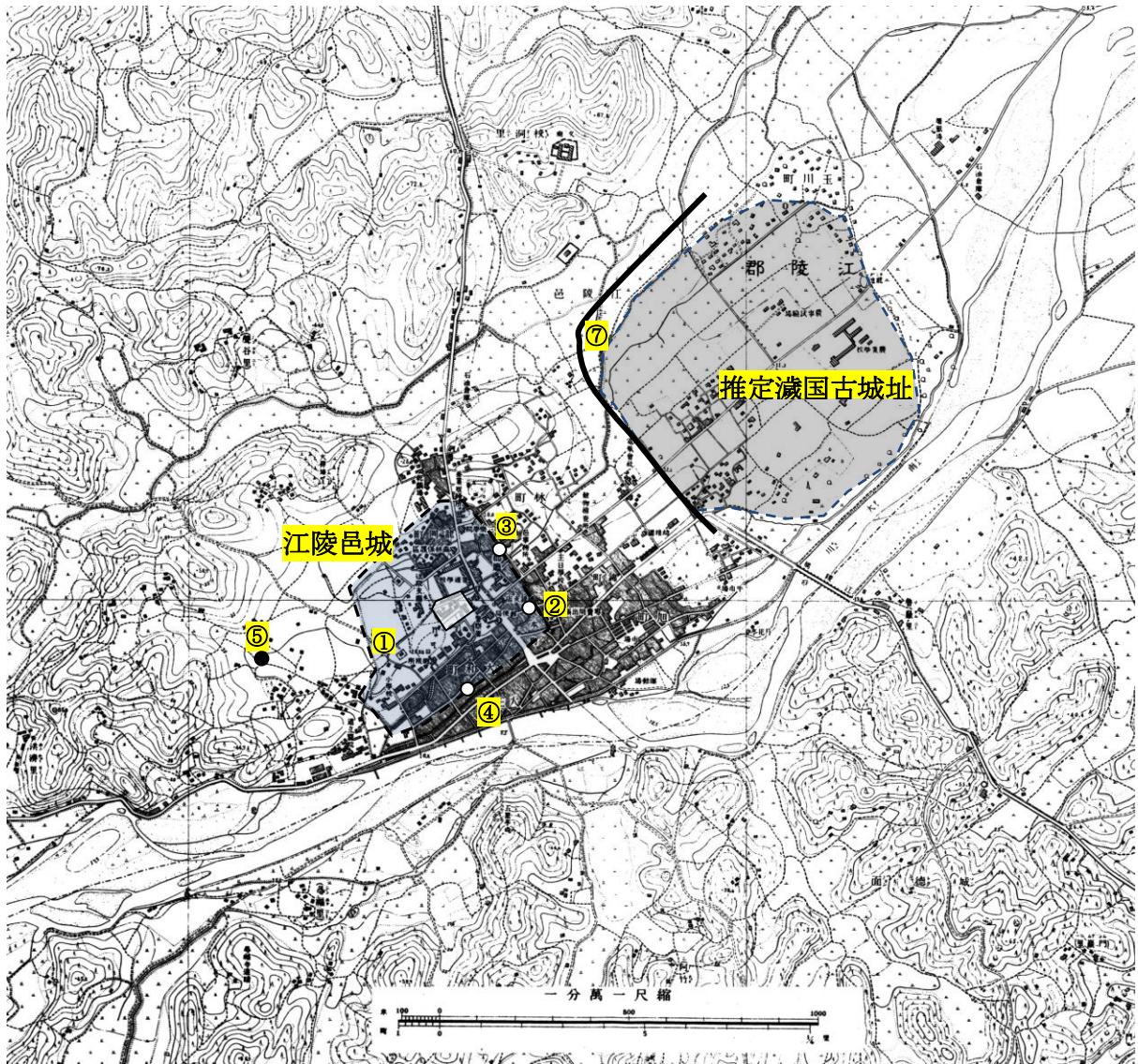


図76 江陵市内地域の遺跡分布(1933年製作の旧地形図)

- ①江陵官衙址 ②城内洞11-1番地遺跡(江陵邑城) ③江陵邑城中央洞舎新築敷地遺跡 ④江陵邑城溟州洞14番地住宅新築敷地遺跡 ⑤江陵洪濟洞アパート新築敷地遺跡 ⑦原州—江陵鉄道工事区間遺跡

江陵邑城として3箇所が調査された土城は、基底部から高麗時代の遺物が出土しているので、高麗時代に築城されたと見られる。石城は改築された痕跡が見られるので、1次石城、2次石城が存在することがわかった。山田隆文は江陵官衙址から統一新羅時代のものと見てよい遺物が出土したとしているが、江陵邑城に関連する遺跡では統一新羅時代の遺物は出土していない。

州治の候補地としては、江陵市中心部から西南西約3kmに位置する溟州山城を州治とする見解が提示されている(관동대학교박물관2009)。溟州山城は海拔117.7mの山地に築かれ、南側に二つの谷を取り込んだ周囲1,624mの包谷式山城である。しかし、平地との比高差は80m程度とそれほど高くない。その規模から州治に推定することもできるかもしれないが、

地表調査で採集された遺物は統一新羅時代末から高麗時代のものが中心で、河西州として設置された時期の遺構や遺物は確認されていない。

溟州山城は江陵市内地域から西側にやや離れて位置しているため、治所城としては立地が不適格であると思われる。しかし、2014年の江陵嶺東大学ショートトラック補助競技場敷地遺跡の調査では、統一新羅時代の竪穴遺構などが検出されている(국강고고학연구소2014)。

朴泰祐が言及した『朝鮮古蹟圖譜』で濊国古城址として推定されている溟州洞一帯で、2014～2015年に原州－江陵鉄道工事区間遺跡の発掘調査が実施された(기호문화재연구원2015)。鉄道工事区間が推定濊国古城址の西壁にあたることとして調査が行われた。推定濊国古城址や河西州に関連する遺構は検出されなかったが、統一新羅時代の土器片が出土している。

## (2)河西州の中心地移動

江陵市内地域では河西州と関連する遺跡の調査が行われていないので、考古学的に河西州の都市構造と中心地を検討することは容易ではない。しかし、江陵市内地域から東側の海岸に近い地域の遺跡分布は注目すべきである。海岸地域は考古学調査が比較的活発に行われている。特に注目されるのは、この地域に新羅が進出したことと関連する古墳の存在である。草堂洞遺跡に代表される古墳群は、江陵地域の在地勢力が新羅の影響を受けたことを示す事例である。

江陵地域への新羅の進出に関連する遺跡としては、雁岬洞遺跡と江門洞遺跡、そして最近の発掘調査で明らかになった江門洞土城がある。江門洞遺跡では、4世紀代の新羅の竪穴建物跡が検出され、新羅地域からの移住集団の様相を見ることができる。その集団の墓域である雁岬洞遺跡では、木槨墓、石槨墓、甕棺墓などが検出された。これらの遺跡の南側に位置する江門洞土城は初築時期が4世紀中葉と推定され、改築時期も5世紀末であると見られている。江門洞土城は、築城時期や立地から新羅が江陵市内地域に進出する際、拠点城として活用されたと推定されている。

江門洞土城を中心として、北側の江門洞遺跡と雁岬洞遺跡、南側の草堂洞遺跡などで検出された竪穴建物跡、古墳の規模や分布範囲、出土遺物は新羅の江陵地域への進出を明らかにする証拠である。土城の存在と古墳の規模や分布を検討すると、これらの遺跡はやはり統一新羅期以前の記録に見られる何瑟羅州と北小京の設置などに関連があると思われる。

したがって、統一新羅期以前に新羅が江陵地域へ進出した際、海岸沿いの江門洞土城一帯が中心地であった可能性が高いと思われる。この場合、その後、江陵市内地域へ中心地が移動したことが想定される(図77)。

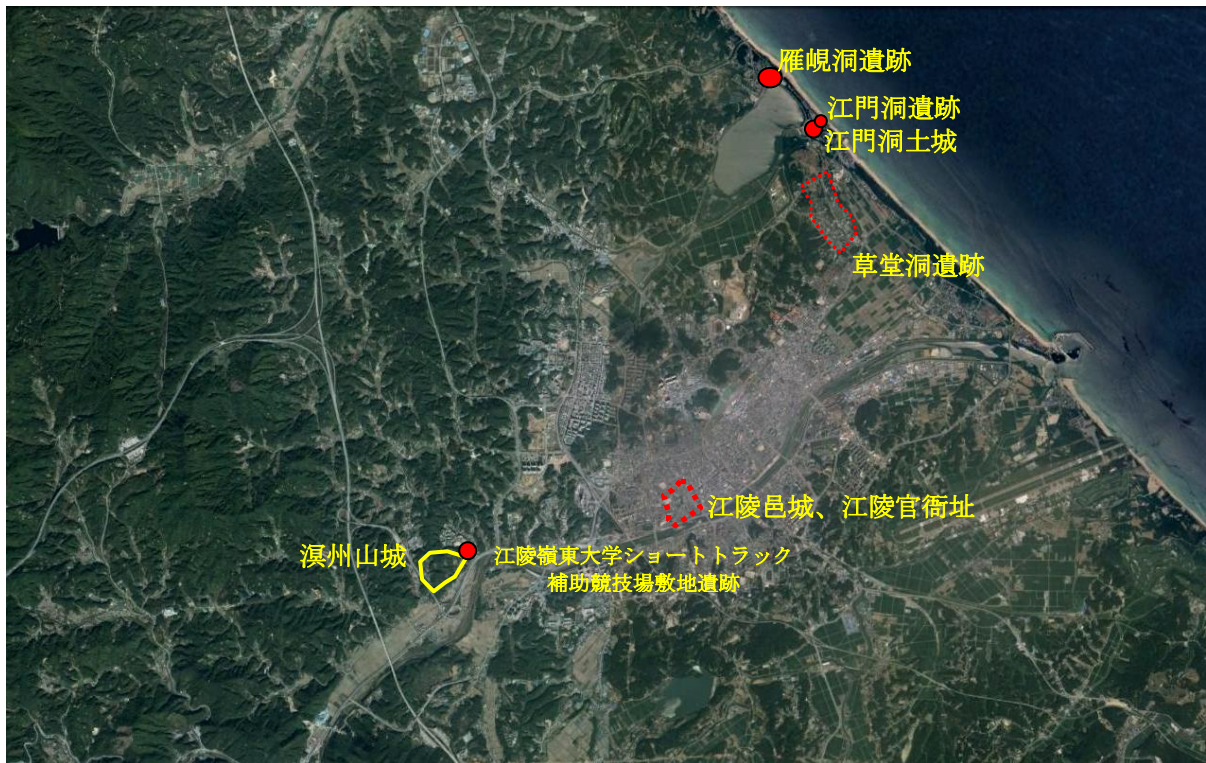


図77 江陵地域の遺跡分布 (GOOGLE EARTHから作製)

ところが、江陵市内地域への中心地の移動時期やその背景には少し疑問の余地がある。移動時期に関しては、『三國史記』に記された北小京が設置された時期の善徳王 8 (639) 年である可能性、あるいは北小京が何瑟羅州になった武烈王 5 (658) 年である可能性がある。また、統一後の九州と五小京の整備の際(文武王・神文王代)に江陵市内地域へ州の中心地の移動があった可能性も考えられる。

一方、江陵市内地域で 6 世紀中葉～ 7 世紀初頭の横穴式石室墳が検出されているので、この時期には江陵市内地域へ中心地が移動した可能性も想定されるが、考古資料はまだ十分ではない。江陵市内地域への中心地の移動が推定できるような考古資料は少なく、その移動時期の検討はまだ難しい。

しかしながら、江陵市内地域は西側に溟州山城が位置していて、江陵邑城の東側に区画地割の痕跡が確認されている。そのようなことから河西州も他の州や小京の都市構造の様相と類似する可能性が推定できる。したがって、九州と五小京が整備された文武王・神文王代には江陵市内地域が河西州の中心地として本格的に機能していたことが考えられる。

### 3) 河西州の都市構造の検討

#### (1) 河西州の区画地割の復元

前述したように、山田隆文は1坊の一边を約190mとし、北東－南西7坊×北西－南東4坊の長方形の方格地割に復元した。また、南西側と北西側にそれぞれ1列ずつ増えた北東－南西8坊×北西－南東5坊であった可能性もあると考えている。

筆者は、1916年製作の旧地籍図(図78)と1933年製作の旧地形図(図76)を検討してみた。その結果、北東－南西約1,000m×南東－北西約570mの範囲で、北東－南西5坊×南東－北西3坊の区画地割の痕跡が確認された。1坊の規模は北東－南西約200m×南東－北西約190mであると推定される(図79、表30)。

区画地割と関連する発掘調査はまだ実施されていないので断定はできないが、区画地割は江陵邑城より東側で確認され、それが濊国古城址推定地の範囲内であるので、これからの関連調査に注目したい。

## (2)河西州の都市構造の検討

江陵市内地域に区画地割が施行されたのかどうかはまだ検討が必要で、不分明なことが多いが、江陵官衙址と江陵邑城より東側一帯が河西州の中心地であるのは間違いないと思う。また、河西州の中心地には旧地籍図の痕跡から北東－南西5坊×南東－北西3坊の区画地割があったと推定される。

区画地割の痕跡が確認される範囲に羅城のような城郭があり調査されたが、具体的な遺構は検出されていない。羅城のような城郭で中心地を囲む形態の都市構造を河西州に想定することはまだ厳しいと思う。確実な州の都市構造を検討するにはまだ難しい地域であり、今後の調査成果を期待するしかない。

表30 河西州の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定
①	山田隆文(2008)	北東－南西 約1,700m 北西－南東 約 800m	北東－南西 約190m 北西－南東 約190m	北東－南西×北西－南東 7坊×4坊(8坊×5坊) (1,520m×950m) 1坊の規模は道路を含む
②	筆者	北東－南西 約1,000m 南東－北西 約 570m	北東－南西 約200m 南東－北西 約190m	北東－南西×南東－北西 5坊×3坊 1坊の規模は道路を含む

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。

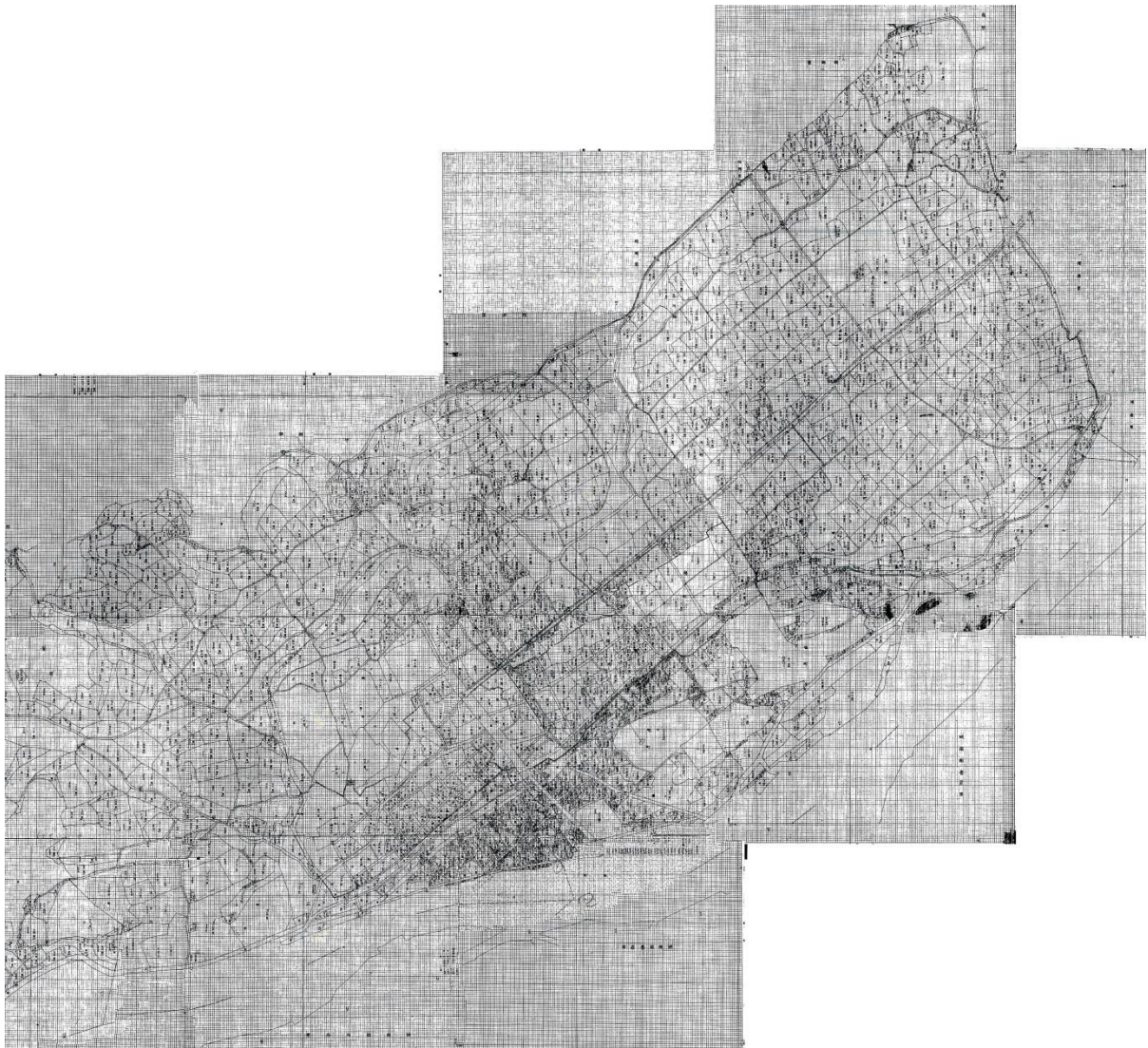


図78 江陵市内地域の旧地籍図(1916年製作)

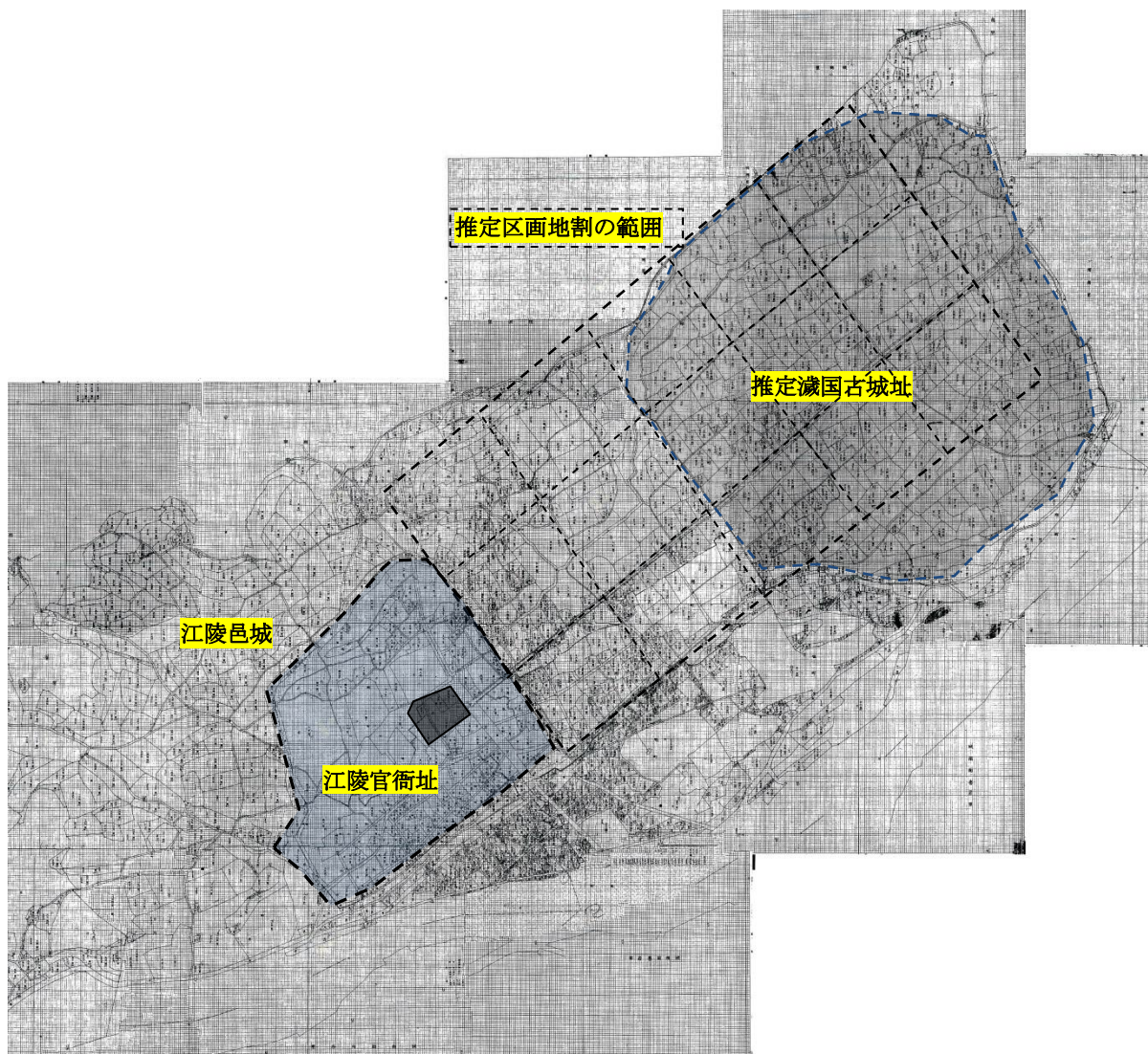


図79 河西州の区画地割の復元案(1916年製作の旧地籍図)

## 第4節 完山州の都市構造

完山州は、現在の全羅北道全州市に設置された。三国時代の全州地域は百済の領域の完山であった。統一新羅時代になって神文王代の九州と五小京の整備の際、旧百済地域の全州地域に完山州が設置された。

また、全州は統一新羅時代末には後三国の一つである後百済の都城であった。そのため、最近では後百済の都城と宮城に関する考古学調査が行われている。しかし、統一新羅時代の完山州に関連する考古資料は少ないのが実情である。

### 1) 完山州の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

『三國史記』「地理志」には、全州は本来百済の完山であり、真興王16(555)年にこの地域に州が設置されたが、同王26(565)年に廃止されたという記事がある。そして、神文王5(685)年に完山州が復置されたという記事がある。

『三國史記』卷三十六「雜志」第五 地理 3

全州 本百濟完山 真興王十六年 爲州 二十六年 州廢 神文王五年 復置完山州 景德王十六年改名 今因之

『三國史記』「地理志」の記事によると、真興王代に全州地域に完山州が設置されて廃止され、神文王代に復置されたことになる。しかし、実際には真興王代の全州地域は百済の領域であったため、記録に見られる真興王16(555)年に完山州が全州地域に設置されたということとはありえない。

『三國史記』「新羅本紀」にも、真興王16(555)年の完山州の設置、同王26(565)年の廃止の記事がある。

『三國史記』卷四「新羅本紀」第四 真興王16年 26年

十六年 春正月 置完山州於比斯伐

二十六年 九月 廢完山州 置大耶州

『三國史記』「新羅本紀」真興王16(555)年の記事に見られる‘比斯伐’は慶尚南道昌寧

表31 完山州の名称変遷

神文王5年 (685年)	景德王16年 (757年)	高麗・朝鮮時代	現在地名
完山州	全州	全州牧・全州府・全羅監營	全羅北道全州市

であるとされている。‘昌寧碑’碑文には、真興王16年・26年に比斯伐に州が設置・廃止されたことが記されていて、『三國史記』「地理志」に記された完山州を全州地域に設置・廃止という記事は間違いであることがわかる。

したがって、『三國史記』「新羅本紀」神文王5(685)年の“復置完山州”の記事は、『三國史記』「地理志」の真興王16年・26年の記事が影響して、完山州を全州地域に“復置”したという誤解で記されたのである。実際は、神文王5(685)年に初めて全州地域に完山州が設置されたと見るのが妥当であろう。

『三國史記』卷四「新羅本紀」第四 神文王5年  
年春 復置完山州 以龍元爲摠管

完山州と関連して『三國史記』「雜志」職官下には、文武王12(672)年に完山州誓を設置したという記事があり、この時期に全州地域が新羅の領域になった可能性を示している。

『三國史記』卷四十「雜志」第九 職官下 武官

五州誓 一曰菁州誓 二曰完山州誓 三曰漢山州誓 衿色紫綠 四曰牛首州誓 五曰河西州誓  
衿色綠紫 並文武王十二年置

以上のように、『三國史記』「新羅本紀」の記事の一部には編纂者の間違いがあり、全州地域に完山州が設置されたのは神文王5(685)年であることがわかった。また、全州地域が新羅の領域に入り、完山州(完山州誓)の名称が現われるのは文武王代であったことが推定される。完山州は景德王代に全州に改称され、高麗時代には全州牧・安南大都護府が設置された。朝鮮時代には、王の故郷であったことから重視されて、完山留守府・全州府になり、全羅監營もあった。

(2) 既存研究の検討

朴泰佑(朴泰佑1987)は、完山州を九州の中で羅城の痕跡が残っている都市に分類している。朴泰佑は、州の中心地と推定される全州市内地域に後百濟の全州都城が存在したと見た。

その都城は全州市内地域の南東側に位置する東固山城を上城とし、その西側の市内地域に



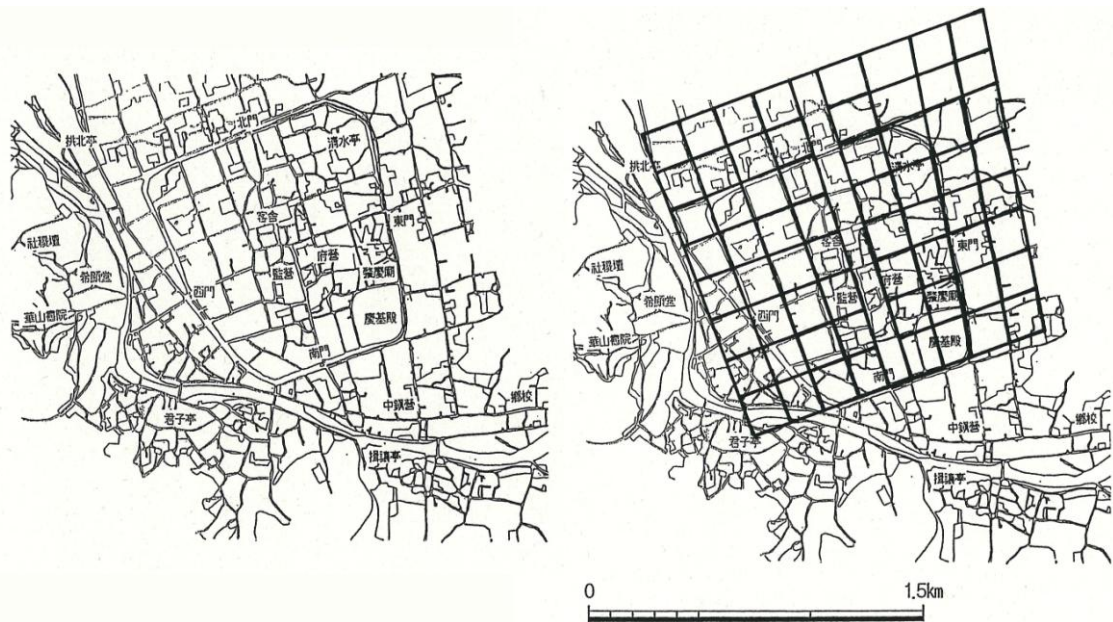


図80 山田隆文の完山州の方格地割復元案(山田隆文2008、23頁、図13から引用)

中城と内城がある構造であると見た。また、後百済の建国と同時に全州都城が築城されたのではなく、それ以前の統一新羅時代から全州都城が存在していた可能性に注目した。一方、完山州の都市構造に関しては区画地割の施行に言及していない。

李京贊の研究(李京贊2002)では、完山州を格子型土地区画が行われた都市と分析している。李京贊の研究は全州の旧地籍図をもとにしている。李京贊は、全州の格子型土地区画の形態が南北中心軸を境にして西側と東側が異なっていると見た。また、土地区画の中央部に東西幅約80mの半区区画を設定した。半区区画の西側に1坊を東西約150m×南北約155mとする区画があり、半区区画の東側に1坊を東西約140m×南北約155mと東西不定形×南北約155mとする区画があると見た。全体の区画地割は東西8区×南北8区と東西方向の中央の半区区画を入れた8行9列であるとした。

山田隆文(山田隆文2008)は、旧地形図をもとにして方格地割の復元案を提示している。全州市内地域の中で、高士洞、慶園洞、中央洞、殿洞、豊南洞一帯に一辺約140mの方格地割が東西約1,400m×南北約1,300mの範囲にあると見ている。

山田隆文の復元案によると、方格地割は幅約80mの中軸大路をもち、正方位を指向せず、南北中軸が北から西へ約9～18度傾いている。また、方格地割の南北幅は一辺約140mで同一であるが、東西幅は区画単位ごとに異なっている。方格地割の東側はかなりいびつな形で、北が幅広い台形状を呈していて、4列ある。また、方格地割の西側にも同様に4列が確認できると見ている。そして、全州市内地域の方格地割を中軸大路をもつ東西8坊×南北8坊(東西南辺約1,180m・北辺約1,410m×南北約1,120m)に復元した(図80)。

## 2) 完山州の関連遺跡と都市構造の検討

### (1) 関連遺跡の現況(図81、表32)

最近、全州地域でも発掘調査が活発に行われているが、完山州の都市構造と関連する遺跡は少ない。しかし、朝鮮時代の全州府城内で統一新羅時代の遺構が一部検出され、遺物も出土している。

全州府城内の南東に位置する全州豊南洞史庫址の発掘調査で、統一新羅時代の瓦片が出土した。また、全州府城内の南東に位置する慶基殿付属建物址遺跡の発掘調査で石列が検出され、統一新羅時代の瓦片と「官」・「王」銘の瓦が出土した。

全羅監営址の発掘調査では、統一新羅時代の建物跡1基と排水路、塀遺構および基壇施設などが検出された。出土遺物は「官」・「全」銘の統一新羅時代の瓦片などである(전북문화재연구원2009)。

1990年から2013年まで7次にわたって実施された東固山城の発掘調査では、北門跡・西門跡・東門跡、城壁、周辺建物跡などが検出された。特に、東固山城の初築時期を後百濟期と推定した既存の見解とは異なり、出土した印花文土器などの編年から築城時期を7世紀後葉から8世紀代と推定することができるようになったことが注目される。出土遺物には「官」・「全州城」銘の統一新羅時代の瓦片などがある(전북문화재연구원2011、全羅文化遺産研究院2014)。2015年には全州後百濟都城壁推定地遺跡の発掘調査が実施された。調査では、梧木台の東側～南西側に統一新羅時代後期から後百濟の時期に該当する長さ251m、幅8m、高さ3～5m前後の大規模な土石混築の城壁が検出された。調査された城壁の構造や出土遺物は統一新羅時代後期(9世紀)から高麗時代初期(10世紀)の様相が見られ、後百濟の時期が含まれる。

後百濟期の緊迫した時代状況が反映されたかのように、城壁は石と土、瓦を混ぜて造成された単純な構造になっている。出土遺物はほとんどが平瓦である。中には初期魚骨文の平瓦と「大」・「官」銘の瓦など、後百濟の山城と推定される順天海龍山城(9世紀末)などの出土品と類似しているものがある。

調査された城壁は今までは後百濟の都城の南西側城壁であり、その東側・北側が都城内側であると考えられていた。しかし、調査の結果、残存城壁の西側・北側が都城の内側であることが確認された。したがって、城壁と自然地形を利用して南の関門を守る要塞の機能が高かったものと判断されている(図82・83)。

表32 全州市内地域の完山州関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構・遺物
①	全州豊南洞史庫址	1997年	—	統一新羅 朝鮮	瓦片
②	慶基殿付属建物址遺跡	1995年	4,628㎡	統一新羅	石列、瓦片 「官」・「王」銘瓦
③	全羅監營址	2007年	500㎡	統一新羅 高麗、朝鮮	土器片 「官」・「全」銘瓦
④	東固山城(1次) 東固山城(2次) 東固山城(3次) 東固山城(4次) 東固山城(5次) 東固山城(6次) 東固山城(7次) 東固山城(7次追加)	1990年 1992年 1995年 2004年 2007年 2009年 2013年 2014年	167,597㎡ (1・2次) 35,041,480㎡ 3,700㎡ 2,000㎡ 5,000㎡ 500㎡ 225㎡	統一新羅 後百濟 高麗 朝鮮	北門跡・西門跡・東門跡 城壁、周辺建物跡 印花文土器 「官」・「全州城」銘瓦
⑤	全州後百濟都城壁推定地遺跡	2015年	80㎡	統一新羅 後百濟	平瓦 「大」・「官」銘瓦

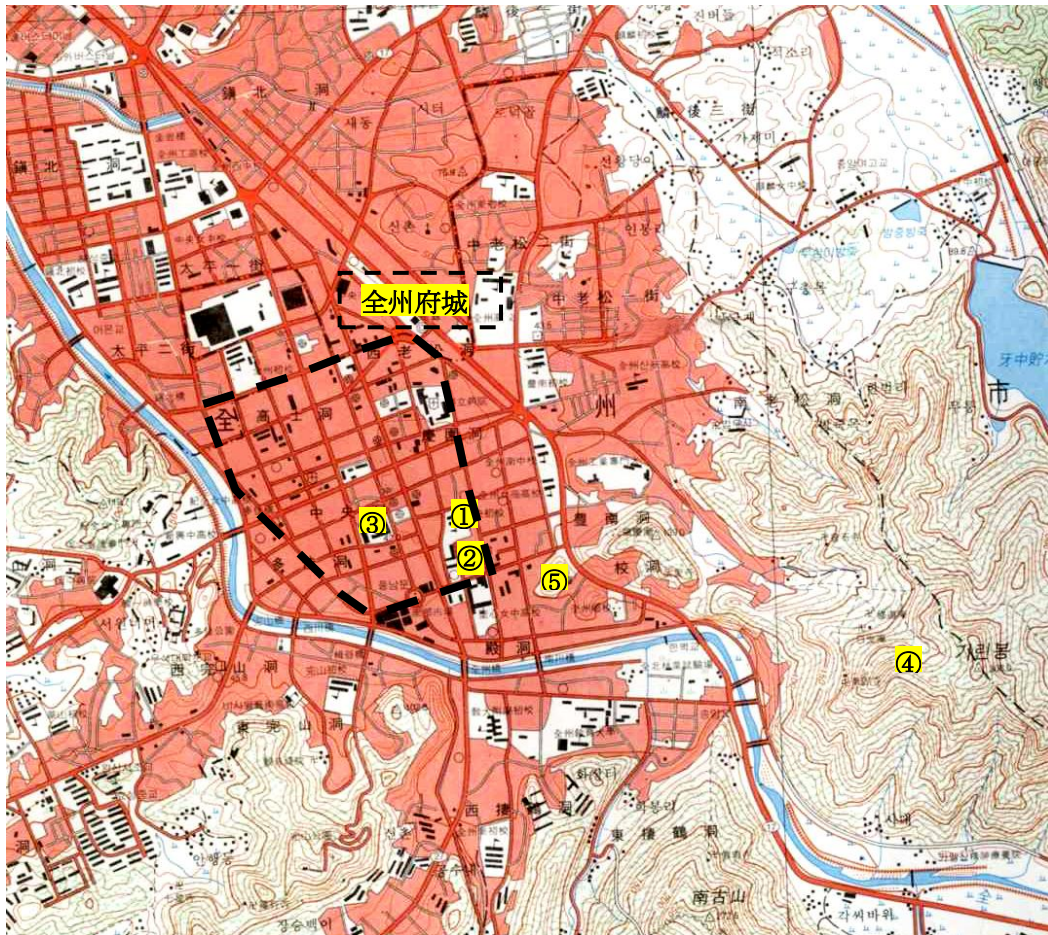


図81 全州市内地域の完山州関連遺跡分布  
 ①全州豊南洞史庫址 ②慶基殿付属建物址遺跡 ③全羅監營址  
 ④東固山城 ⑤全州後百濟都城壁推定地遺跡

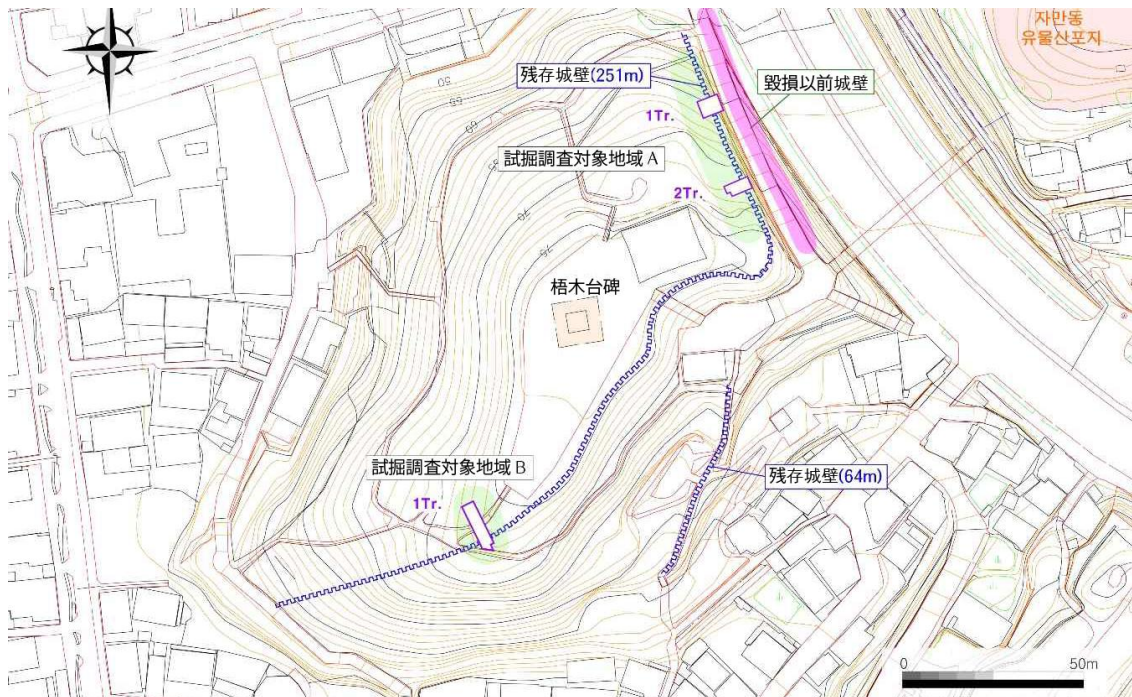


図82 全州後百濟都城壁推定地遺跡の調査現況(국립전주박물관2015、筆者再編集)

(2) 完山州の都市構造の検討(図84・85)

完山州の都市構造を検討するための考古資料はまだ十分ではない。しかし、完山州の中心地は、統一新羅時代の遺構が分布し遺物が出土している全羅監営址や全州府城が所在する一帯であることは確かである。また、東固山城が完山州と関連する城郭であることもわかった。

完山州の都市構造を検討するためには、後百濟の都城の構造も検討する必要がある。最近、全州では後百濟の都城に対する関心が高まり、関連調査と研究が活発に行われつつある。後百濟の都城の構造は当然、完山州の都市構造と密接な関連があったと思われ、今後の後百濟に関連する調査に期待したい。

既存研究の項でも言及したように、完山州の中心地一帯には区画地割の痕跡が確認される。筆者は全州の1912年製作の旧地籍図を検討してみた。その結果、全州府城一帯に区画地割が東西約1,300m×南北約1,500mの範囲で確認されることがわかった。

既存研究でも指摘があったように、中央部の南北区画線より東側の区画地割に乱れが見られる。特に、南北区画線の方角と1坊の規模も一律的ではなく、区画地割の北側が広くて南側に向かってだんだん狭くなる形態である。

一方、中央部の南北区画線より西側の区画地割は比較的一定の形態であるが、東西幅は約140～150m、南北幅は約155～170mで、多様であるといえる。したがって、区画地割の1坊は南北が長い長方形に近い形態である。また、既存研究で中軸大路あるいは半区區画と説明

されている中央部の東西幅は約110～120mであり、既存研究の規模よりやや広いことがわかった。

旧地籍図に見られる全州市内地域の区画地割の形態は、他の州と小京の中心地で見られる区画地割の形態とは多少異なっている。なぜこのような形態になったのかは不明であるが、全州府城の築城と関連する可能性が考えられる。その根拠は、旧地籍図に見られる中央部より東側の南北区画線が全州府城の東壁の方向と並行していることである(図84・85)。このことは、全州府城の築城以後、その城壁に合わせて東側の南北区画線が変更されたことを示している。

興味深いことは、全州府城の東壁が後百済の都城の西壁推定地に該当することである。したがって、区画地割が見られる完山州の中心地の東側に後百済の都城と宮城が位置していることになる。上述したように全州府城の東半部に見られる南北区画線の方向の違いは、後百済の都城と関連する可能性も考えられる(図83)。

完山州の区画地割の中央部には東西幅約110～120mの区画1列があり、その西側に東西4坊×南北8坊の区画地割が明確に見られる。しかし、中央部の区画より東側は後代の都市構造に影響されて、区画地割の規模は明確に判断できない。もちろん、全体的な区画地割の規模は西側の規模だけでもある程度推定できるが、旧地籍図では明確に確認されないのである(表33)。

旧地籍図の検討で、不完全ではあるが、完山州の都市構造は中心地に区画地割が施行されていたことを確認できた。しかし、全体的な区画地割の復元は現段階では難しい。また、考古学的検討が十分にできるような関連資料も不足し、区画地割の具体的な考古学的検討にも

表33 完山州の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)
①	李京贊(2002)	—	東西(左) 約150m (中央約80m) (右) 約140m・不定形 南北(左・右)約155m	8区×8区(9行9列) 中央部半区区画 1坊の規模は道路を含まない
②	山田隆文(2008)	東西(南辺)約1,180m (北辺)約1,410m 南北 約1,120m	東西 約140m(中央 約80m) 南北 約140m	8坊×8坊 中央部中軸大路 1坊の規模は道路を含む
③	筆者	東西 約1,300m 南北 約1,500m	(中央部左辺) 東西 約140～150m (中央 約110～120m) 南北 約155～170m	9坊×8坊(4坊×8坊) 1坊の規模は道路を含む

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。

困難が伴う。完山州の都市構造に関しては、州の中心地に区画地割の痕跡が確認され、中心地に近接して統一新羅時代の山城が位置するような他の州でも見られる形態であるといえる。

完山州の都市構造と関連して、中心地を囲む形態の羅城の存在は既存研究でも指摘されていた。完山州の場合、中心地に全州府城、後百濟の都城・宮城など多様な城郭の存在があり、羅城があった可能性は排除できない。しかし、現段階の考古資料では完山州に羅城が存在したということは推定できないのである。

また、完山州の城郭と後百濟の都城との関連性も想定するにはまだ不十分な点がある。最近の後百濟の都城に関連する調査では、統一新羅時代末から後百濟期の関連遺物が出土している。不足している完山州の考古資料の補完としても今後の後百濟に関連する発掘調査に期待し、完山州の都市構造と後百濟の都城との関連性に注目しておきたい。

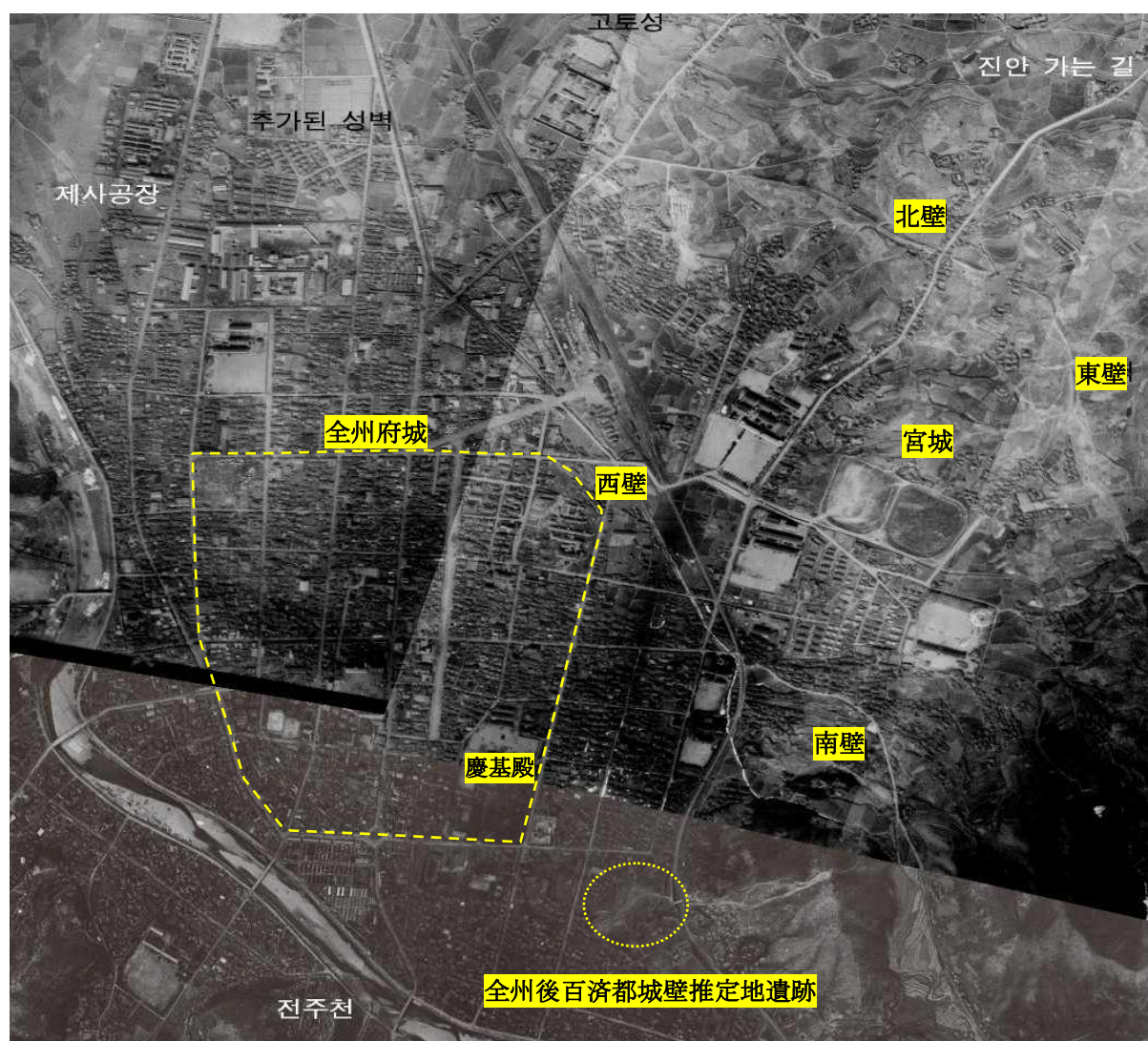


図83 全州市内地域の航空写真(1948年、1954年)と全州後百濟都城壁推定地遺跡  
(국립전주박물관2015、筆者再編集)



図84 全州市内地域の旧地籍図(1912年製作)



図85 完山州の区画地割の様相(1912年製作の旧地籍図)  
(一部地域の旧地籍図がないため復元案は推定部分がある)



## 第5節 熊川州の都市構造

熊川州は、現在の忠清南道公州市に設置された。周知のとおり、公州地域は百済が泗泚(忠清南道扶餘)に遷都するまでの都(熊津)であったところで、百済の関連遺跡が多数分布している。

したがって、百済関連の遺跡調査が主に行われてきて、統一新羅時代に関連する考古資料は少ない。

本節では、限られた熊川州に関連する遺跡をまとめ、熊川州の都市構造を検討してみる。

### 1) 熊川州の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

『三國史記』「地理志」には、熊州は本来百済の旧都であり、百済が滅亡してから唐によって熊津都督府が設置され、文武王・神文王代には完全に新羅の領域になって、神文王代に熊川州が設置され、景德王16(757)年に熊州へ改称したという記事がある。

『三國史記』卷三十六「雜志」第五 地理 3

熊州 本百濟舊都 唐高宗遺蘇定方平之 置熊津都督府 新羅文武王取其地有之 神文王改爲熊川州 置都督 景德王十六年 改名熊州 今公州

ただし、この記事に記された熊津都督府が設置されたのは熊津(公州)ではなく泗泚(扶餘)であり、誤記であると見るのが学界の一般的な見解である。

『三國史記』「新羅本紀」にも、神文王6(686)年に州を設置したことが記されている。

『三國史記』卷八「新羅本紀」第八 神文王6年

六年 二月 置石山馬山孤山沙平四縣 以泗泚州爲郡 熊川郡爲州 發州爲郡 武珍郡爲州

表34 熊川州の名称変遷

神文王6年 (686年)	景德王16年 (757年)	高麗・朝鮮時代	現在地名
熊川州	熊州	公州牧・忠清監營	忠清南道公州市

熊川州は景德王代に熊州に改称されて、高麗時代(太祖代)には公州牧に改称され、公州府・公州牧など時期によって名称の変動があり、朝鮮時代には忠清監営も設置された。

## (2) 既存研究の検討

朴泰佑(朴泰佑1987)は、熊川州を包谷式山城が付随した都市に分類している。朴泰佑は、百済の宮城である熊津城(現公山城)が百済～朝鮮時代まで使用されたことから、公山城が州城であると見た。熊川州の都市構造の検討では、区画地割の施行に関して言及していない。

山田隆文(山田隆文2008)の研究では、旧地形図をもとにして方格地割の復元案が提示されている。公州市内地域の旧市街地である中洞、山城洞、班竹洞一帯に、東西約140m×南北約120mを1坊とした方格地割が東西約600m×南北約1,300mの範囲で存在すると見ている(図86)。また、公州市内地域の旧市街地は平地が細長いため、全体の平面プランを方形の都市に復元するのは不可能であるとした。全体が方形を呈するプランではなく、細長い平地のみ方格地割の街区が設定された可能性に言及した。

朴達錫(박달석2012)は、基本的には公州の旧地形図の土地区画の痕跡を分析し、熊川州の都市構造を検討した。朴達錫の復元案では、旧市街地の土地区画は東西約600m×南北約1,350mの範囲にあると見ている。

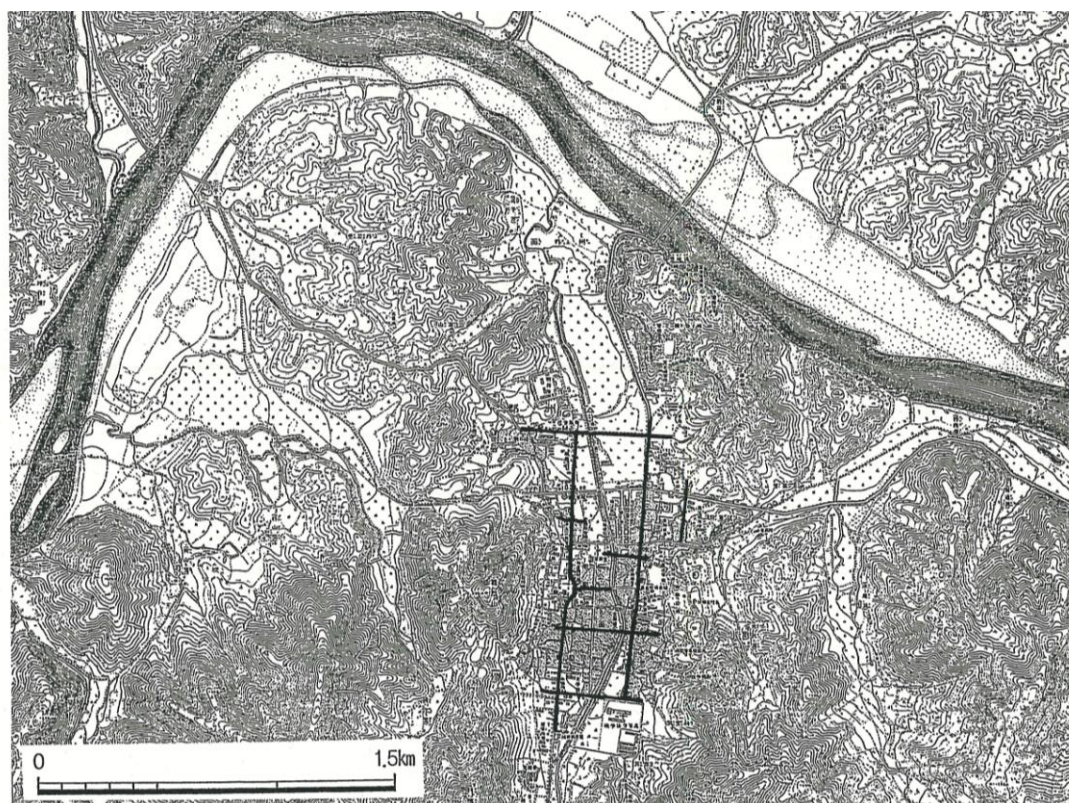


図86 山田隆文の熊川州の方格地割復元案(山田隆文2008、22頁、図12から引用)



一新羅時代末の建物跡が検出されている(공주대학교박물관2014b)。以上のように、熊川州に関連する遺跡は少なく、考古資料の検討は難しい。しかし、公山城の内部で検出されている統一新羅時代の大型建物跡は熊川州の主要な施設と関連する可能性がある。したがって、公山城が州城あるいは治所城である可能性はきわめて高い。

## (2)熊川州の都市構造の検討

上述したように、熊川州の都市構造を検討するには考古資料が不足していて難しいが、ここでは既存研究でも検討に使用された旧地籍図を通して、熊川州の都市構造を検討してみる。

まず、区画地割を検討してみよう。1912年製作の公州市内地域の旧地籍図では、細長い区画地割が東西約300m×南北約1,100mの範囲で確認される。東西区画線と南北区画線も確かに見られる。しかし、南北方向の区画地割の幅は一定ではなく異なっている。また、東西方向の区画地割の幅は約100mの規模であると推定されるが、その規模が確実に見られるところは一部だけである。したがって、1坊の規模は一定ではなく、熊川州の中心地に南原小京や沙伐州のような明瞭な区画地割を復元することは困難である(図88・89)。

旧地籍図を見ると、その区画地割の範囲内には南から北に流れる濟民川が明確に確認される。この濟民川の流路によって区画地割の乱れが生じた可能性がある。現段階では、区画地割の施行とその範囲が一部推定され、東西区画線3列、南北区画線5列が確認されるのみである。

次に、州城を検討してみよう。州城は区画地割の痕跡が見られる公州市内地域の北東側に隣接している公山城である可能性がきわめて高い。この場合、公山城内城内村遺跡で検出された統一新羅時代の建物跡は熊川州の主要な施設であると推定される。区画地割が確認される州の中心地からの距離と立地から見ても、公山城は熊川州の治所城としての機能があったことは十分考えられる。さらに、治所城であると推定される公山城は熊津期百済の王宮でも

表36 熊川州の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)
①	山田隆文(2008)	東西 約 600m 南北 約1,300m	東西 約140m 南北 約100m	不明
②	朴達錫(2012)	東西 約 600m 南北 約1,350m	東西 約120m 南北 約100m	5坊×13坊
③	筆者	東西 約 300m 南北 約1,100m	東西 約100m 南北 ?	東西(3列)、南北(5列) 一部区画線痕跡確認

あり、それ以後もこの地域の拠点城であった。したがって、熊川州は統一新羅期以前の拠点城をそのまま使用していた可能性がきわめて高く、統一新羅期以前の中心地がそのまま州の中心地になっていると思われる。

以上、熊川州の都市構造を検討してみた。熊川州の中心地では地形に沿った都市建設が行われ、南北方向に長い区画地割が一部施行されたと推定される。また、州の中心地に隣接している山城が州の治所城として機能していたことがわかる。

したがって、熊川州の中心地が統一新羅期以前の中心地と同一であることは、金官小京および牛首州と類似している。また、州の中心地に隣接している山城を州の治所城とすることは牛首州の様相と類似しているといえよう。

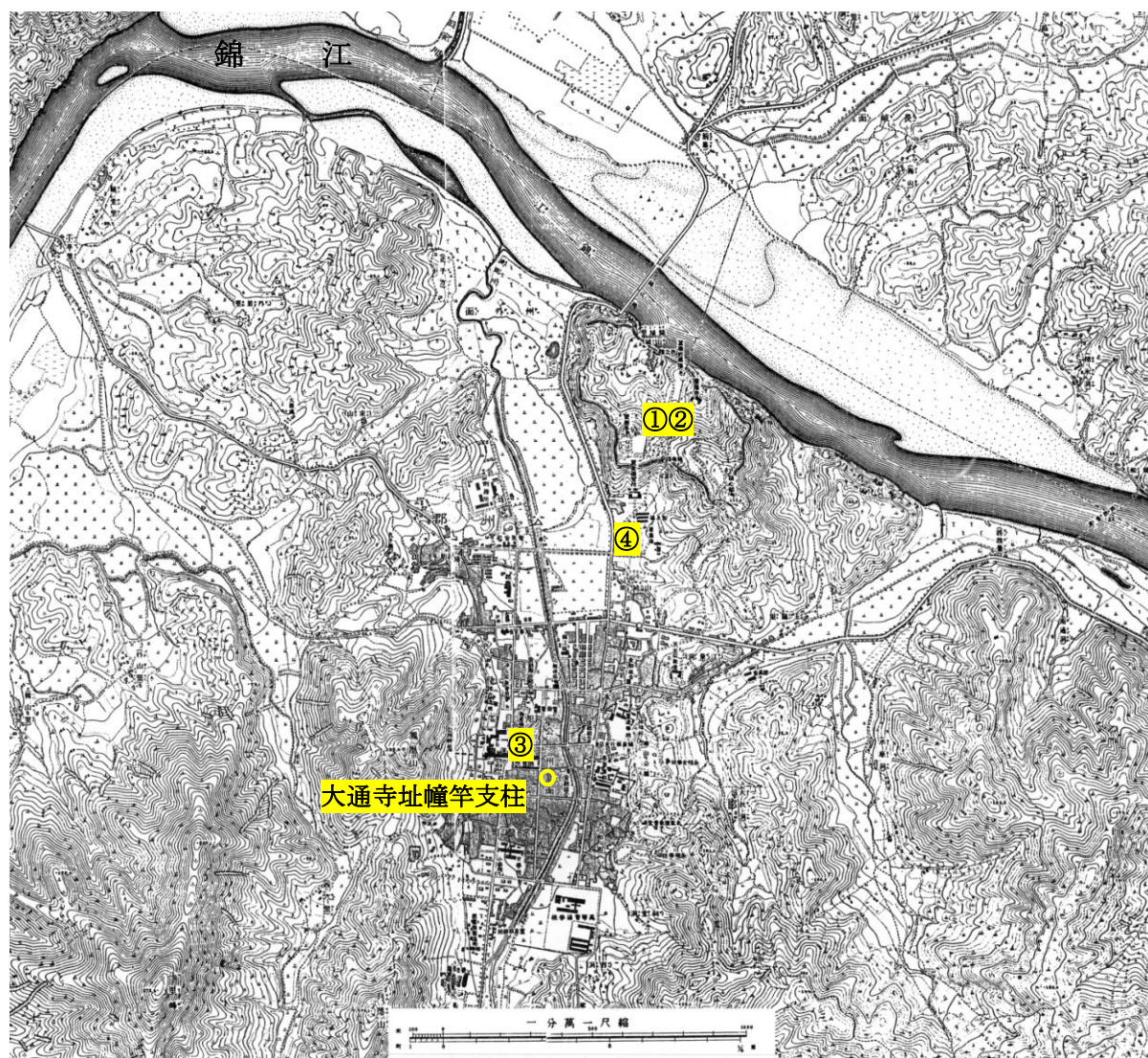


図87 公州市内地域の熊川州関連遺跡分布(1928年製作の旧地形図)

①公山城(建物跡) ②公山城内城内村遺跡 ③大通寺址 ④公州山城洞142-1番地遺跡

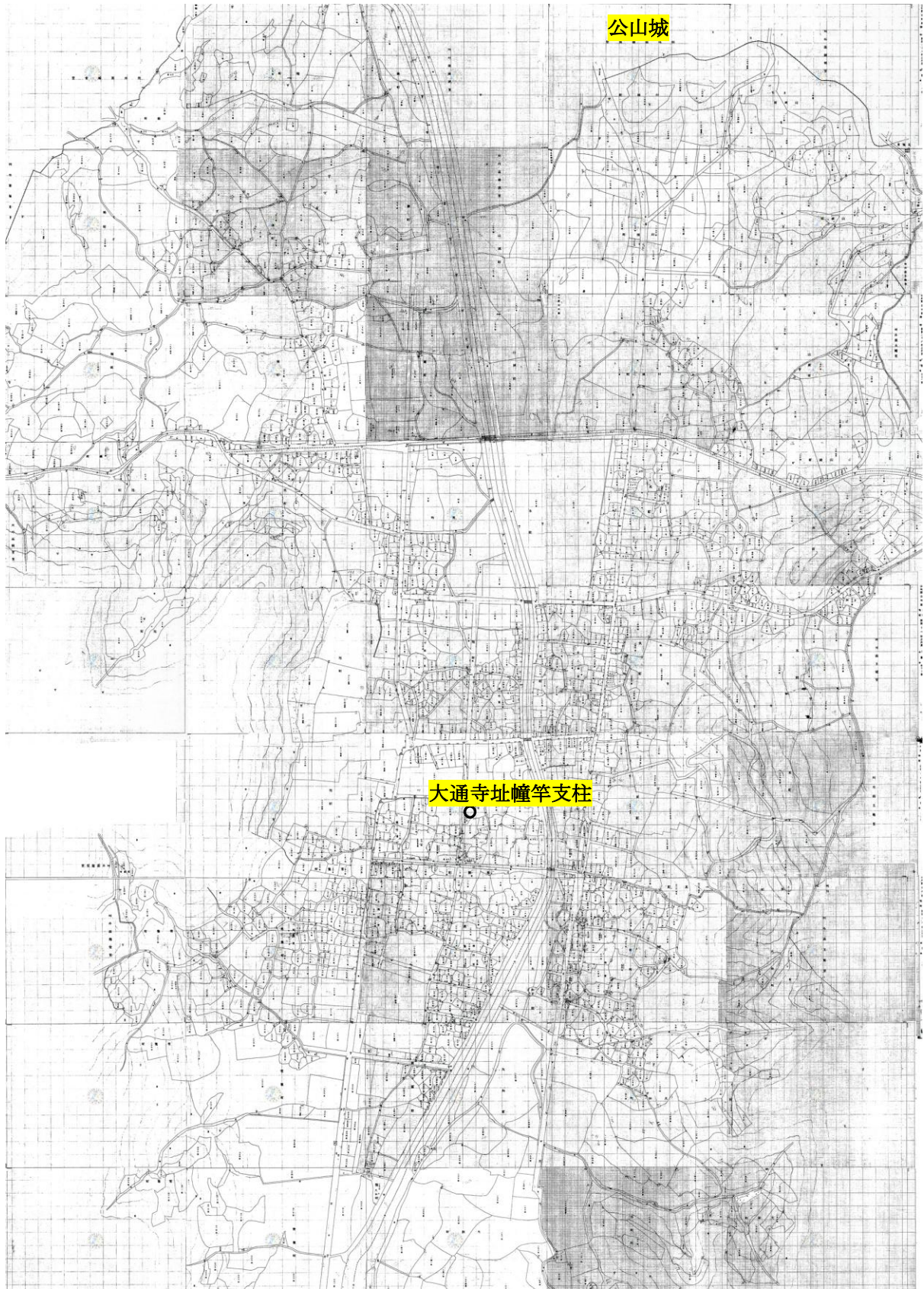


図88 公州市内地域の旧地籍図(1913年製作)

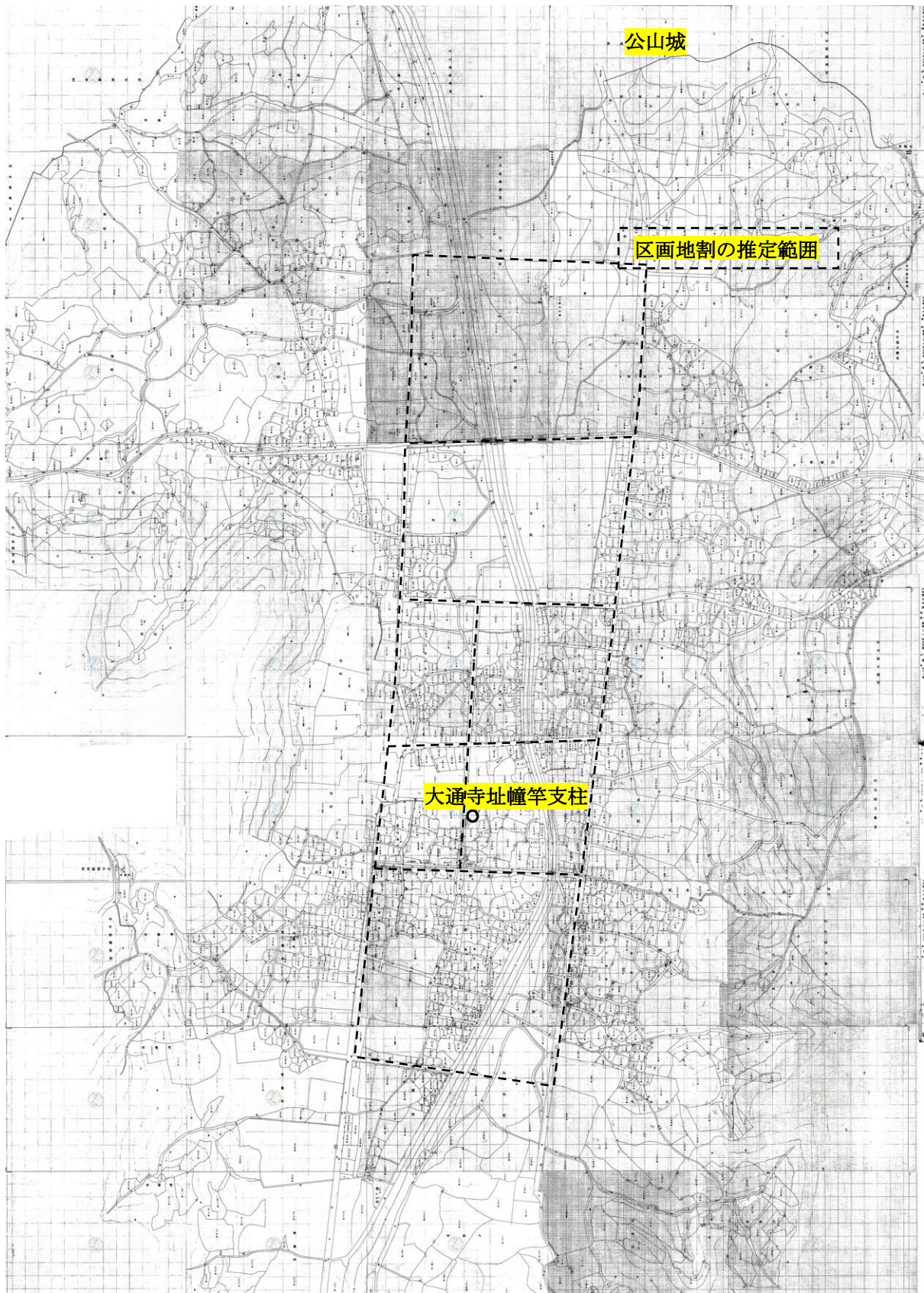


図89 熊川州の区画地割の推定範囲(1913年製作の旧地籍図)

## 第6節 武珍州の都市構造

武珍州は、現在の光州広域市に設置された。光州地域は百済の武珍であったところで、統一新羅時代の神文王6(686)年に武珍州になり、景德王16(757)年に武州となった。武珍州に対しては、関連遺跡も少なく研究はあまり行われていない。一部の研究で、武珍州の中心地が市内東側の光州邑城一帯に推定されているだけである。

### 1) 武珍州の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

統一新羅時代の武珍州と直接的に関連する文献記録は少ない。『三國史記』「地理志」・「新羅本紀」には、神文王6(686)年に武珍郡を武珍州とし、景德王16(757)年にあらためて武州に改称されたという記事だけが簡略に出ている。

『三國史記』卷第三十六「雜志」第五 地理3

武州 本百濟地 神文王六年 爲武珍州 景德王改爲武州 今光州

『三國史記』卷第八「新羅本紀」第八 神文王6年

以泗泚州爲郡 熊川郡爲州 發羅州爲郡 武珍郡爲州

『三國史記』卷九「新羅本紀」第九 景德王16年

十六年...冬十二月 ... 武珍州爲武州 領州一 郡十四 縣四十四...

『三國史記』「新羅本紀」には、文武王18(678)年に阿滄天訓が武珍州の都督になったという記事があり、この時期にすでに武珍州が存在したことが推定される。

『三國史記』卷第七「新羅本紀」第七 文武王18年

夏四月 阿滄天訓爲武珍州都督

以上の記録から、文武王代には武珍州がすでに存在していて一時的に郡になったが、神文王6(686)年に再び武珍州になったことがわかる。

武珍州は景德王代に武州に改称され、高麗時代(太祖代)は光州という地名が使われるようになった。高麗時代には化平府・武珍府・光州牧、朝鮮時代にも武珍郡・光州県・光山県・光州牧など、時期によってそのランクが変わり名称の変動があった。



表37 武珍州の名称変遷

文武王代	神文王6年 (686年)	景德王16年 (757年)	高麗・朝鮮時代	現在地名
武珍州	武珍郡→武珍州	武州	武珍府・光州牧	光州広域市

(2) 既存研究の検討

朴泰佑(朴泰佑1987)は、武珍州を包谷式山城が付随する都市に分類している。朴泰佑は朝鮮時代の『大東地志』に記された‘武珍都督城’を武珍州に関連する城郭であると見て、光州市内地域の北東側に位置する城郭(後の発掘調査で武珍古城と命名)に推定し、州城に比定した。武珍州の都市構造の検討では、区画地割の施行に関して言及していない。

李京贊の研究(李京贊2002)では武珍州を格子型土地区画が施行された都市と分析している。李京贊の研究は光州の旧地籍図をもとにしている。李京贊は、光州市内地域の格子型土地区画の1坊が北西－南東約150m・155m×西南－東北約155m・160mとし、北西－南東方向の中央に110～120mの半区区画が1列ある西南－東北6行(9行)×北西－南東5列とした。

山田隆文(山田隆文2008)は、旧地形図をもとにして方格地割の復元案を提示している。光州市内地域の中で、楼門洞、忠壯洞、黄金洞、不老洞一帯に一辺約160mの方格地割が南東－北西約1,500m×南西－北東約1,300mの範囲にあると見ている。山田隆文の復元案による

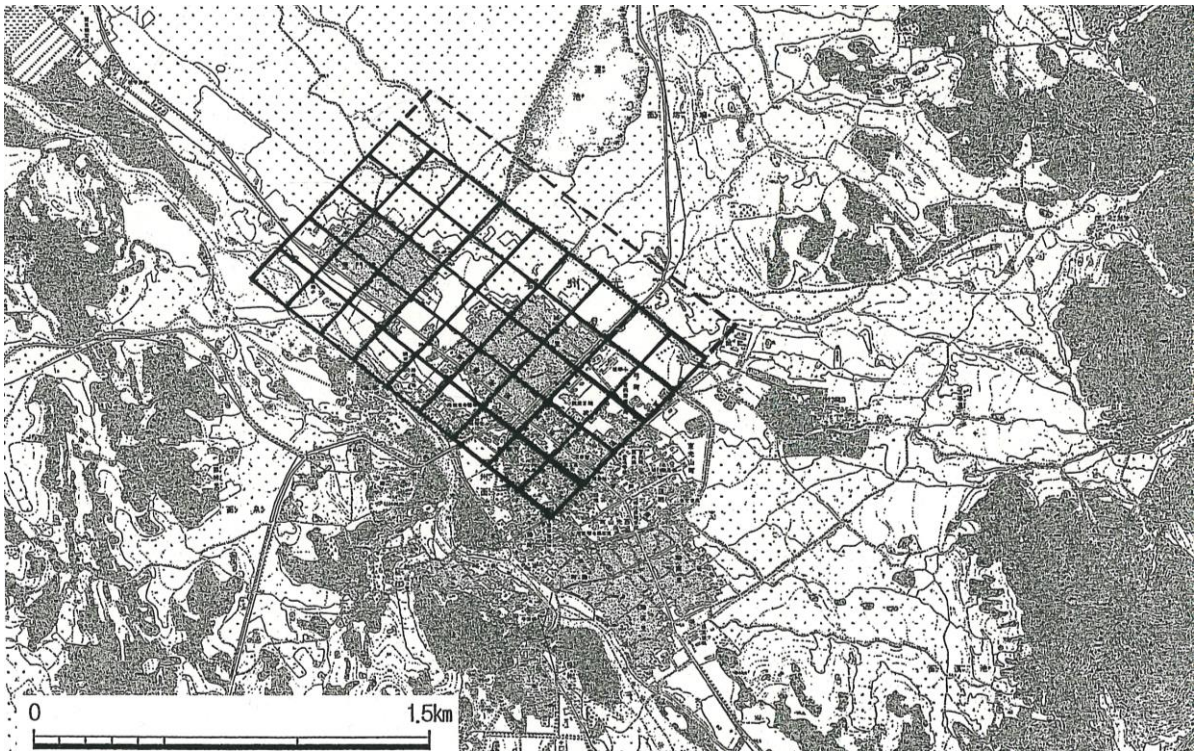


図90 山田隆文の武珍州の方格地割復元案(山田隆文2008、26頁、図17から引用)

と方格地割は正方位を指向せず、南西－北東軸は北から東に約44度偏向している。方格地割は南東－北西9坊×南西－北東5坊の長方形に復元され、南東－北西10坊×南西－北東6坊の可能性もあると言及されている。また、方格地割は南西－北東区画線と南東－北西区画線が直交せず、全体が平行四辺形状を呈していると見た(図90)。

林永珍(林永珍2008)は、『大東地志』に記された‘武珍都督城’を統一新羅時代の武珍州に関連する城郭であると見た。したがって、発掘調査された武珍古城は武珍都督城ではなく、武珍州の背後山城であるとした。そして、光州市内地域に格子型土地区画が見られ、その一帯に武珍都督城があると見た。

## 2) 武珍州の関連遺跡と都市構造の検討

### (1) 関連遺跡の現況(図91、表38)

光州地域は湖南地方の中心地域であり、大都市になっているため現在の市街地は拡大している。武珍州の中心地に推定される場所は、光州市内地域の東方の光州川の北から北東側にあたる忠壯路、錦南路一帯である。この一帯では武珍州の都市構造と関連する遺跡が報告されている。

武珍州の中心地から北東側に位置する武珍古城の発掘調査で、建物跡および石列などが検出され、統一新羅時代の瓦片と「官」・「城」・「國城」銘の瓦が出土した。武珍古城の築城年代は8世紀末に推定されていて、統一新羅時代中期以後の武珍州の背後山城として使用されたと見られている(전남대학교박물관1989・1990)。

光州楼門洞に所在する第一高等学校の新築工事中に統一新羅時代の遺物が出土したことから、1994年に発掘調査が実施された。調査では統一新羅時代の建物跡が検出された。この建物跡は現市街地の道路と並行している。出土遺物は唐草文軒平瓦と平瓦、点列文・変形水滴

表38 光州市内地域の武珍州関連遺跡

	遺跡名	調査年度	調査面積	時期	関連遺構・遺物
①	武珍古城(1次) 武珍古城(2次)	1988年 1989年	1,950㎡ 4,169㎡	統一新羅 高麗	建物跡、石列 「官」・「城」・「國城」 銘瓦
②	光州楼門洞統一新羅時代建物跡	1994年	—	統一新羅	建物跡 瓦、印花文土器片
③	光州都市鉄道区間内遺跡	1999年	99㎡	統一新羅 高麗、朝鮮	井戸 瓦片、土器片
④	光州邑城	2000年	3,969㎡	統一新羅 高麗、朝鮮	積心建物跡 瓦片

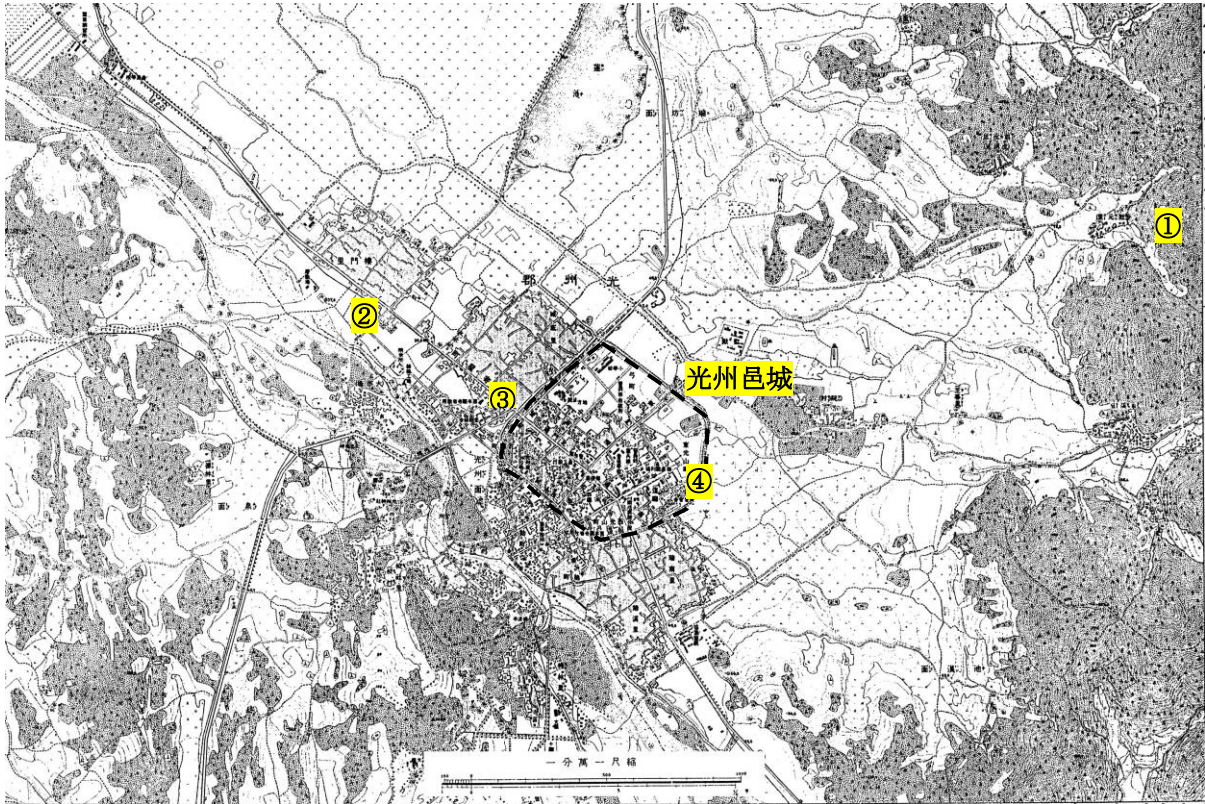


図91 光州市内地域の武珍州関連遺跡分布(1917年製作の旧地形図)

①武珍古城 ②光州楼門洞統一新羅時代建物跡 ③光州都市鉄道区間内遺跡 ④光州邑城

文が施された印花文土器片などである。建物跡の中心年代は8～9世紀に推定されている(林永珍・黄鎬均・徐賢珠1995)。光州都市鉄道区間内遺跡の発掘調査では、統一新羅時代の井戸が検出され、瓦と土器片などの遺物も出土している(전남대학교박물관2002)。

光州邑城の発掘調査では、邑城の築城以前に建てられた統一新羅時代の積心建物跡が検出され、瓦片が出土している(全南文化財研究院2008a・2008b)。

## (2) 武珍州の都市構造の検討

武珍州の都市構造を考古学的に検討するには資料が少なく難しいが、中心地に格子型土地区画が存在していることは李京贊の研究(李京贊2002)でも認識されていた。ここでは、既存研究でも検討するのに使用された旧地籍図を通して、武珍州の中心地の区画地割を検討してみる。光州市内地域の1912年製作の旧地籍図では、区画地割が南東—北西約1,440m×南西—北東約750mの範囲で確認される。

区画地割は、1坊の一边が約160mの南東—北西9坊×南西—北東5坊に復元できる。また、南西—北東方向の区画地割に幅約110mの規模が見られる。区画地割の方向は正方位を

指向せず、南西－北東区画線が北から東に約46度偏向し、河西州の区画地割の方向(北から西に約36度偏向)とは逆である。

また、山田隆文(山田隆文2008)が指摘したように、北東－南西区画線と北東－南西区画線が直交していない形態であり、このことはおそらく東側にある光州邑城の築城と関連するものと考えられる。

旧地籍図に見られる光州邑城の形態は明確であり、内側にも区画地割の痕跡が見られるので、区画地割の施行後に光州邑城が築城されたことがわかる。また、光州邑城の内側には新しい道路の痕跡が見られ、一部の区画線は見られない。このことから、清州邑城の事例のように、光州邑城の築城が区画地割に一部影響を与えたことが想定できる(図92、表39)。

筆者の検討では、武珍州の中心地には区画地割が施行されていたことが推定された。その区画地割が見られる光州市内地域では、統一新羅時代の建物跡と井戸が検出されている。そして、光州邑城の東城壁に隣接して統一新羅時代の建物跡が検出されているので、区画地割の範囲が復元案より東側に拡張する可能性もある。武珍州の中心地の北東側に位置する武珍古城は州の治所城としては考えにくい、州の防禦と関連する城郭であろう。

武珍州の都市構造を検討してみた結果、武珍州は中心地に区画地割が施行され、近接して防禦と関連する山城が存在する形態であると思われる。

表39 武珍州の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定
①	李京贊(2002)	—	北西－南東 約150・155m 西南－東北 約155・160m	西南－東北×北西－南東 6行(9行)×5列 北西－南東 半区区画 約110～120m
②	山田隆文(2008)	北東－南西 約1,520m 北西－南東 約 950m	北東－南西 約190m 北西－南東 約190m	北東－南西×北西－南東 9坊×5坊(10坊×6坊) 1坊の規模は道路を含む
③	筆者	南東－北西 約1,440m 南西－北東 約 750m	南東－北西 約160m 南西－北東 約160m 1列 約110m	南東－北西×南西－北東 9坊×5坊 1坊の規模は道路を含む

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。



図92 武珍州の区画地割の推定範囲(1912年製作の旧地籍図)

## 第7節 靑州の都市構造

靑州は、現在の慶尚南道晋州市に設置された。晋州地域は三国時代には伽耶の勢力圏であったが、後に百済の領域になって居列城が置かれた。文武王3(663)年に新羅が居列城を攻撃したという記録があり、この時期から新羅の領域に入ったと見られる。統一新羅時代の神文王5(685)年に靑州が設置されたが、関連する考古資料は少なく、研究にも進展が見られない。

### 1) 靑州の関連史料と既存研究

#### (1) 関連史料

『三國史記』「地理志」には、神文王5(685)年に居陔州(居列州)を分割して靑州を設置したという記事、『三國史記』「新羅本紀」には、景德王16(757)年に康州に改称されたという記事がある。

『三國史記』卷三十四「雜志」第三 地理1

康州 神文王五年 唐垂拱元年 分居陔州 置靑州 景德王改名 今晋州

『三國史記』卷九「新羅本紀」第九 景德王16年

十六年...冬十二月 ...靑州爲康州 領州一 郡十一 縣二十七...

『三國史記』「新羅本紀」にも、神文王5(685)年に居列州を分割して靑州を設置したことが記されている。

『三國史記』卷八「新羅本紀」第八 神文王5年

挺居列州 以置靑州 始備九州 以大阿飡福世爲摠管

『三國史記』「新羅本紀」には、文武王3(663)年に新羅が百済の居列城を攻撃してこれを奪ったという記事がある。

『三國史記』卷六「新羅本紀」第六 文武王3年

二月 欽純天存領兵 攻取百濟居列城...

したがって、晋州は百済の居列城であって、文武王3(663)年に新羅の領域になり、その

表40 靑州の名称変遷

文武王代	神文王5年 (685年)	景德王16年 (757年)	高麗・朝鮮時代	現在地名
居列州(?)	靑州	康州	晋州牧・晋陽大都護府	慶尚南道晋州市

際に居列州が設置された可能性がある。そして、神文王5(685)年に居列州を分割して靑州を設置したことがわかる。靑州は景德王代に康州に改称され、高麗時代には晋州牧に改称された。朝鮮時代には晋州・晋陽大都護府・晋州牧など、時期によって名称の変動があった。

(2) 既存研究の検討

朴泰佑(朴泰佑1987)は、靑州を包谷式山城が付随し当時の市街地痕跡が残っている都市に分類している。朴泰佑は、旧地形図の検討で晋州城の北側に当時の市街地の単位区画の痕跡が見られるとした。しかし、1坊の規模、南北大路の幅、市街地の全体の範囲などは地形図だけでは検討できないので課題とした。

山田隆文(山田隆文2008)の研究では、旧地形図をもとにして方格地割の復元案が提示されている。晋州市内地域の北側にあたる上鳳洞、中安洞、本城洞、東城洞、将台洞一帯に一辺

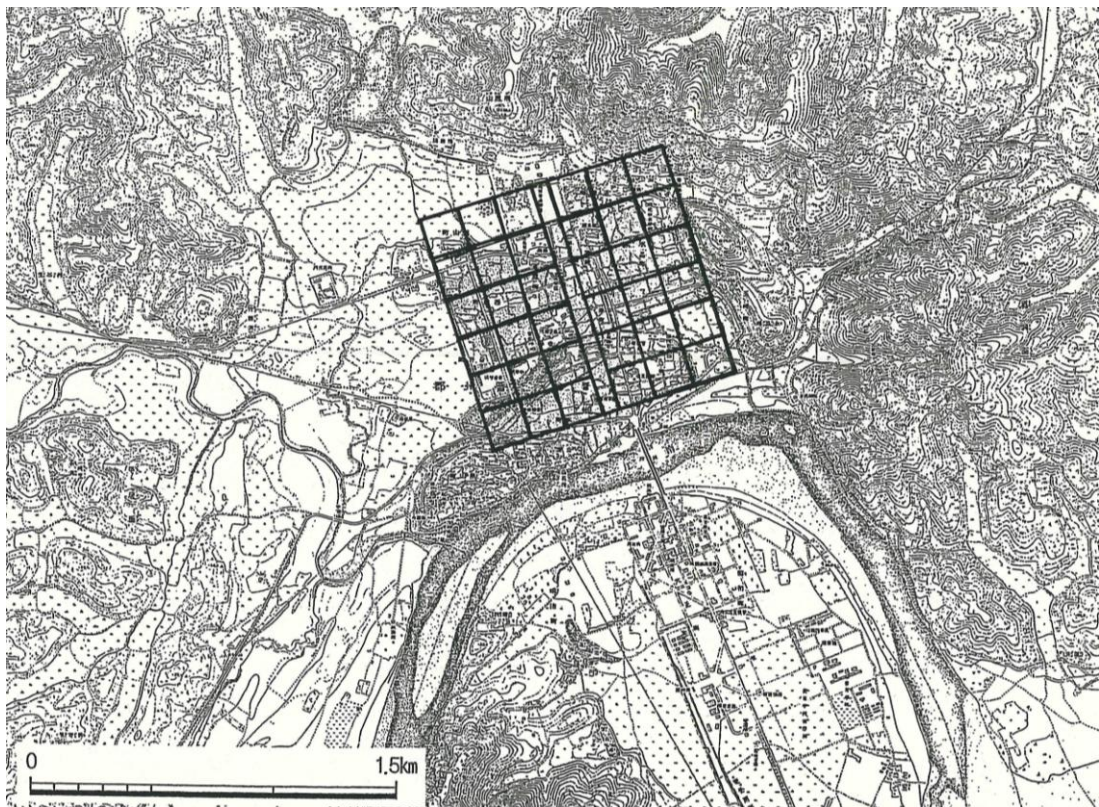


図93 山田隆文の靑州の方格地割復元案(山田隆文2008、20頁、図10から引用)

約160mの方格地割が東西約1,400m×南北約1,000mの範囲で存在すると見ている。

山田隆文の復元案では、東西方向の方格地割の中央部に幅約80mの中軸大路を設定している。その両側に東西幅約160m区画が3列ずつあると復元した。その結果、南北の中軸大路をもつ東西6坊(約1,040m)×南北6坊(約960m)の方格地割の復元案を提示した(図93)。

## 2) 菁州の関連遺跡と都市構造の検討

現段階では、菁州の都市構造を検討するための考古資料が不足していて、その復元は難しい。ここでは、既存研究でも検討に使用された旧地籍図・旧地形図を通して、菁州の中心地の区画地割だけを簡略に検討してみる(図94)。

1912年製作の旧地籍図では、晋州城の北東側に区画地割が東西約970m×南北約800mの範囲で確認される。南北区画線は北から約17度西に偏向していて、南北幅より東西幅が長い長方形の区画地割が復元できる。

南北方向の区画地割は幅約160mの規模が3列見られ、東西方向の区画地割の幅は一定ではなく6列あると推定される。東西方向の区画地割の幅は約180m・160m・110mがあり、さまざまである(図95、表41)。

旧地籍図を見ると、区画地割の範囲内には池が確認されるなど、区画の乱れが見られる。中央部には東西約180m×南北約160mの区画地割が一部見られる。現段階では、区画地割が施行されたこととその範囲はある程度推定できるが、その正確な規模は不明確である。

以上、菁州の都市構造を検討してみた。残念ながら、菁州の都市構造と関連する考古資料がなく、十分な検討は難しい。菁州の中心地に区画地割が施行されたことは確かに推定できるが、具体的な検討には困難が伴う。今後の調査成果に期待したい。

表41 菁州の都市構造の復元案

	復元案	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)
①	山田隆文(2008)	東西 約1,400m 南北 約1,000m	東西 約160m(中央約80m) 南北 約160m	6坊×6坊 (1,040m×960m) 1坊の規模は道路を含む
②	筆者	東西 約 970m 南北 約 800m	東西 約180m・160m・110m 南北 約160m	東西(6列)、南北(3列) 確認

※一部研究者の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。



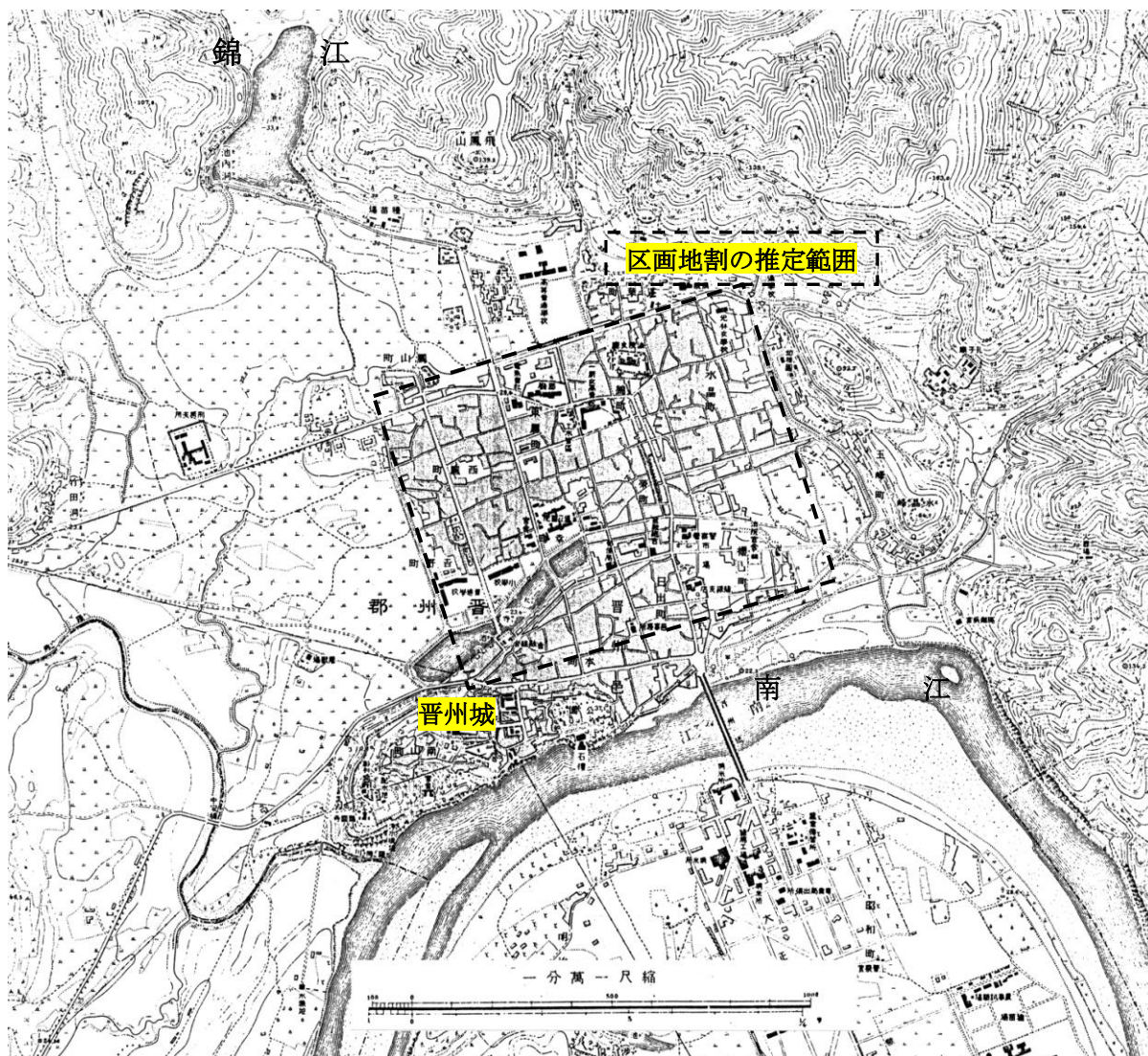


図94 晋州の区画地割の推定範囲(1933年製作の旧地形図)



図95 青州の区画地割の推定範囲(1912年製作の旧地籍図)

## 第4章 九州と五小京の都市構造分析

### 第1節 州と小京の城郭問題

#### 1) 州城と小京城の性格の検討

第2・3章で分析したように、州と小京の都市構造を検討するためには、その中心地に関連する城郭の究明がきわめて重要であるといえる。既存研究でも、一部の関連する考古資料が備わった地域では、州と小京の城郭の位置比定などさまざまな検討が行われてきた。

特に、既存研究では関連史料に記されている州城と小京城の築城記事にもとづき、州城と小京城の比定に重点を置いた検討がなされてきた。州や小京の中心地に関連する城郭(ほとんど山城)を州城や小京城に比定する例が多い。このような築造記事は、基本的には“州と小京に築城された城郭”という字句どおりの意味で解釈され、その意味が曖昧に思われる。以下は『三國史記』の州と小京の築城関連記事である。

『三國史記』卷七「新羅本紀」第七 文武王13年

九月 築國原城[古薊長城]

『三國史記』卷第七「新羅本紀」第七 文武王13年

十三年 九月... 首若州走壤城[一名迭巖城]...

『三國史記』 卷三十五「雜志」第四 神文王5年

北原京 本高句麗平原郡 文武王置北原小京 神文王五年 築城 周一千三十一歩  
景德王因之 今原州

『三國史記』卷第八「新羅本紀」第八 神文王7年

三月 罷一善州 復置沙伐州 以波珍飡官長爲摠管

秋築沙伐敵良二州城

『三國史記』卷第八「新羅本紀」第八、神文王9年

秋閏九月二十六日 幸獐山城 築西原京城

『三國史記』「新羅本紀」第八、神文王11年

十一年 春三月... 築南原城

このような『三國史記』に記された州城や小京城の築城記録の意味をどう考えるべきであろうか。『三國史記』に記されている州城と小京城の築城記事の信憑性を検討する必要もあるが、築城記録がなくても、すべての州と小京には城郭が存在したと見られる。

州城と小京城の性格と意味を検討するには、『三國史記』の記録も不十分であり、関連考古資料がまだ不足している。しかし、州城と小京城の位置、性格と形態は州と小京の中心地の都市構造を究明するのに重要な要素である。ここでは州と小京の都市構造と関連して、州城や小京城の性格と形態を検討してみたい。

まず、第2・3章の既存研究で見てきたように、州城と小京城に対する検討では、州城と小京城の築城は治所の設置を意味すると解釈する場合がほとんどである。州城と小京城に関する研究の内容も性格や形態よりは位置比定に集中している。

第2・3章で検討したように、州と小京の都市構造では、中心地に区画地割が存在していた可能性は高い。したがって、ほとんどの州と小京の中心地には、平地に区画地割を設け、主要施設が区画地割の中央や北側に位置する構造をもっていたと推定できる。もちろん、地域ごとに地形や立地による相違点は見られるが、州と小京の中心地には主要施設(官衙などの行政関連施設)が位置すると考えられる。

州城と小京城が主要施設を保護する機能をもつと解釈すると、その城郭は平地の主要施設や市街地を囲む形で存在したと判断される。官衙のような主要施設が行政機関としての機能を果たすためには、平地にその施設が存在することが妥当だと思う。この場合、州城と小京城は中心地を保護する機能がある城郭あるいは土塁や塀などの施設であった可能性がある。しかし、既存研究で言及される州城や小京城はほとんど山城であるので、そのことに対してはさらに検討が必要である。

上述したことに関しては、新羅の拠点城に関連する研究の中で、統一新羅期以前の拠点城をそのまま治所(官衙のような主要施設)として使用している事例が提示されている(朴省炫2010)。第2・3章で検討したように、西原小京と牛首州・熊川州の場合、中心地に隣接して位置する山城が治所城として活用された可能性はきわめて高いので注目しておきたい。牛首州では史料に記された城郭を州城として鳳儀山城に比定することに異論がなく、熊川州の場合も築城記録はないが、公山城を州城に比定している。したがって、州と小京の中心地に近接した山城が治所城としての役割を果たした可能性は否定できない。

次に、『三國史記』の築城記事を単純に州や小京に築城された城郭の記録として考えると、その城郭の性格と形態はさまざまな解釈が可能であろう。実際、『三國史記』の築城記事の内容だけでは、州城と小京城の性格や形態は推定できない。

もちろん、史料に見られる州城と小京城の築城記録を、州と小京の有事の際、防禦などの機能と関連する城郭の築城記録として解釈することも可能であると思われる。

州と小京の中心地の周囲に近接して位置するほとんどの山城は統一新羅時代またはそれ以前の時期に築城され、使用されてきたことが調査などである程度明らかになっている。既存研究でも言及されている防禦機能の城郭として州や小京と密接な関係があることも確かである。

結局、州城と小京城の形態や規模、性格がどのようなものであるのかは正確に推定できない部分が多い。ここでは州と小京の中心地で確認されている城郭や区画地割の形態からその様相を推定してみる。

表42 州と小京の関連城郭

	名称	築城記録	関連城郭 (推定)	周囲 (推定)	城郭の位置 (海拔)	州と小京の中心地と 周囲の山城との距離
九州	沙伐州	686年	紫山山城	約1,860m	約350～400m	約1.5km
	牛首州	—	鳳儀山城	約1,240m	約220m	約1.0km
	河西州	—	溟州山城	約1,624m	約117.7m	約3.0km
	完山州	—	東固山城	約1,588m	約236～306m	約1.9km
	熊川州	—	公山城	約2,450m	約61～80m	—
	武珍州	—	武珍古城	約3,500m	約350m	約2.5km
	菁州	—	?	—	—	—
	漢山州	山城整備(672年)	?	—	—	—
	敵良州	687年	?	—	—	—
五小京	金官小京	—	盆山城	約900m	約330m	約0.9km
	中原小京	673年	忠州山城 大林山城 忠州邑城	約4,906m —	約487m —	約2.7km —
	北原小京	685年	鴿原山城 金台山城 金頭山城	約2,350m 約1,730m —	約840～970m 約540～600m 約700m	約8.5km 約7.2km 約7.0km
	西原小京	689年	牛岩山城 上党山城	約2,997m 約4,400m	約200～300m 約300～400m	約1.2km 約4.9km
	南原小京	691年	蛟龍山城	約3,100m	約500m	約2.3km

州城と小京城の基本形態としては、州と小京の中心地の区画地割の範囲と関連が深いことは間違いない。すなわち、一部の研究者が指摘したように羅城の形態を一つの類型に推定することもできる。

金官小京・中原小京の例からわかるように、小京の主要施設とその周辺の市街地を囲む形態の城郭の存在が想定できる。その城郭(あるいはそれに相当する施設)が史料に記されている州城と小京城であるのかどうかは、現在の考古資料だけではまだ断定できない。

しかし、州と小京の中心地とその周辺の市街地を囲む形態の施設である可能性は高い。その施設の性格や形態は金官小京のように土城の形態であるのか、あるいは土塁・塀・堤防のようなものであるのかは当然これから検討が必要である。

また、州城と小京城を山城の形態である可能性も考えられる。この場合、州と小京に近接した防禦と関連する城郭あるいは山城をそのまま治所城として使用し、その城郭が州城と小京城であった可能性も十分考えられる。

州と小京の都市構造の中で、州城と小京城に関わ疑問はまだ多く、州城と小京城に対する検討は今後の調査成果次第といえよう。

## 2) 州および小京の中心地と邑城との関連性

州城と小京城をその州と小京の中心地に施行された区画地割と関連させて考えると、当然平地の主な施設および市街地の範囲と密接な関連が推定できる。注目されることは、九州と五小京の治所が設置された地域にある邑城の存在である。

表43でわかるように、五小京の治所では4箇所、九州の治所でも4箇所で邑城(完山州は府城)が確認される。すべての邑城は州と小京の中心地に位置している。邑城の築城年代は、関連史料や発掘調査などによって、ほとんどが高麗・朝鮮時代であることもわかった。

現在は邑城が位置していた地域が市街地になっていて、当時の形態はほとんど確認できず、旧地籍図や旧地形図にその一部の痕跡が見られるぐらいである。旧地籍図や写真資料から、少なくとも20世紀に入るまでは邑城の全体の規模と城壁の形態が把握できるほど残存していたこともわかった。

邑城に対しては、一部残された邑城の痕跡や文献および旧地籍図・旧地形図をもとに調査が行われてきた。その結果、邑城の基壇部、城壁と門跡などが検出され、邑城の形態や規模がわかるようになっている。そして、邑城の復元と整備のための発掘調査も行われつつある。

朝鮮時代の地理志などでは、一部の邑城の築城時期を統一新羅時代に推定している。一部の研究でも、州と小京の中心地に位置している邑城を統一新羅時代の州城と小京城に比定し

ている。しかし、邑城を州城と小京城に比定する具体的な考古資料はほとんどないといえる。

高麗・朝鮮時代の邑城の様相と範囲が、九州と五小京の中心地や都市構造と直接に関連しているのかどうかはまだ判断できない。一方、九州と五小京の中心地に高麗・朝鮮時代の邑城が位置しているのは、当然その中心地が高麗・朝鮮時代にも中心地であったためであると考えられる。したがって、邑城の築城時期や運営時期が高麗・朝鮮時代であっても、邑城は統一新羅時代の九州と五小京の中心地の範囲と関連する可能性がきわめて高いと思われる。

第2・3章で述べたように、各地域の旧地籍図を検討してみると、邑城と九州および五小京の中心地との位置に関連性が見られる。九州と五小京の中心地に施行された区画地割の範囲と邑城の位置関係はおおむね二つの類型に分けられる。

一つは、区画地割の範囲が邑城の外側に隣接して見られる類型で、河西州(図96)・中原小京(図97)がある(外接型)。もう一つは、区画地割の範囲内に邑城の全体や一部が含まれる類型で、沙伐州(図98)・完山州・武珍州・西原小京(図99)・南原小京がある(内接型)。

外接型に分類される場合も区画地割が邑城の内側まで存在した可能性はあるが、旧地籍図上では確認されない。また、外接型に分類される場合は、邑城の築城によって市街地と主要

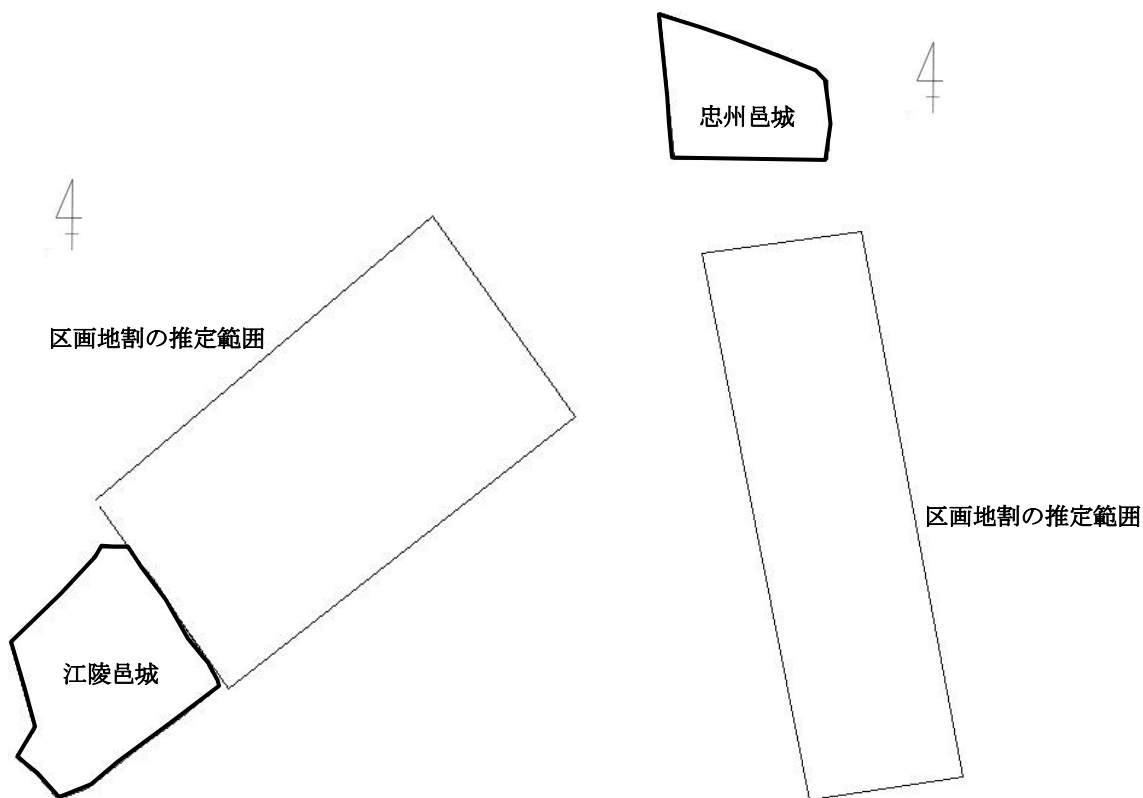


図96 河西州の区画地割と邑城の位置(外接型)

図97 中原小京の区画地割と邑城の位置(外接型)

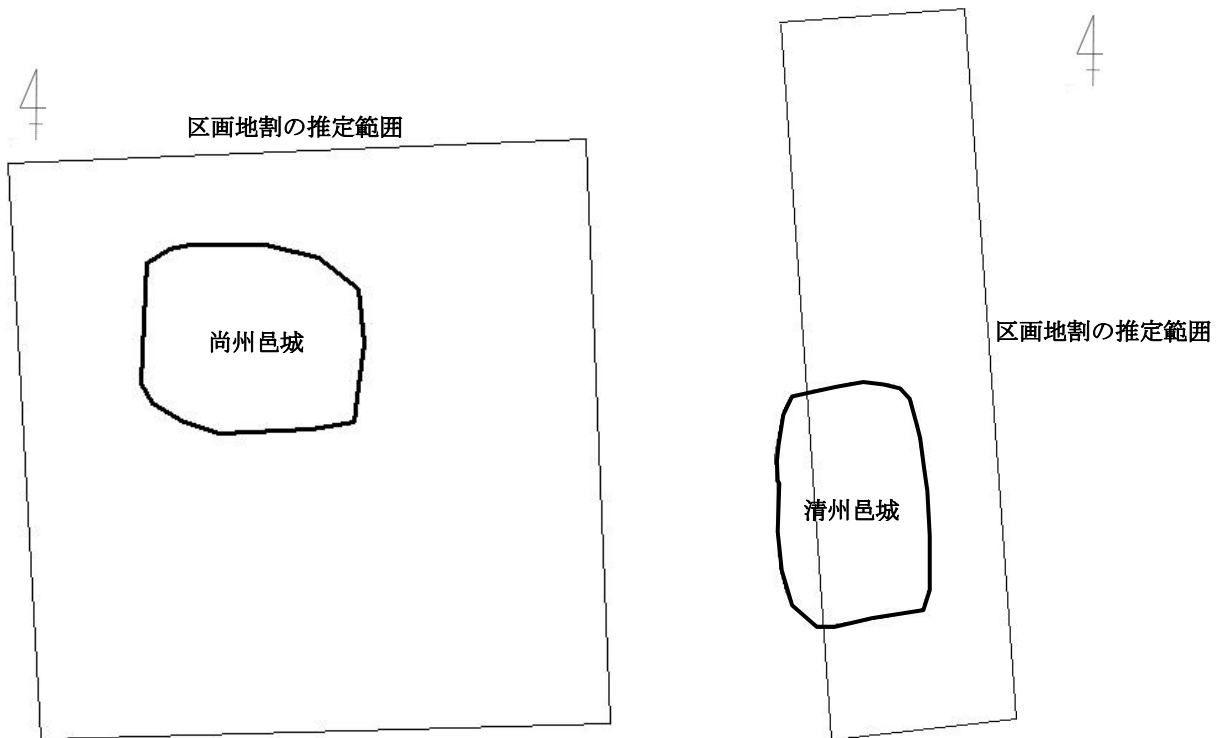


図98 沙伐州の区画地割と邑城の位置(内接型) 図99 西原小京の区画地割と邑城の位置(内接型)

施設が分離されたことを示していると思われる。内接型は区画地割の施行後に邑城が築城されたことを示し、州および小京の主要施設と邑城の位置とが関連することを示す。両類型を検討すると、区画地割の範囲は邑城の位置と密接な関連性があるものと考えられる。

各地域の邑城は、復元と整備のための調査が最近活発に行われている。残念ながら、邑城の調査では統一新羅時代の州と小京に関連する遺構はほとんど検出されていない<sup>32)</sup>。なぜなら、邑城の調査はほとんどが朝鮮時代の城郭の復元のために行われているためである。しかし、一部の邑城の内側と外側、およびその周辺で統一新羅時代の建物跡や遺物が確認されてきているので注目される。

一方、第2章第1節で検討した金海古邑城と金海邑城との位置関係やその範囲から見ると、高麗・朝鮮時代の邑城が統一新羅時代の区画地割の範囲より縮小する傾向がある。これは、他の九州と五小京の中心地に残存する邑城も同じである。

つまり、このことは統一新羅時代の中心施設と市街地を含む城郭の範囲が高麗・朝鮮時代になると市街地を含まず、官衙などの主要な施設だけを囲む形態に変化するためであると思われる。高麗・朝鮮時代の邑城も一部市街地を含む形態である場合もあるが、ほとんどが主

32) 南原邑城の北門跡調査では、朝鮮時代の城壁の下部に割石で築造された城壁が検出され、統一新羅時代の初築城壁と推定されている。



要な施設だけを含む様相が見られる。

九州と五小京の中心地と関連する高麗・朝鮮時代の邑城の規模をそのまま統一新羅時代の州および小京の中心地の規模や範囲と比較するのは意味がない。

したがって、高麗・朝鮮時代の邑城をそのまま州城と小京城あるいは中心地を囲む城郭に比定することは無理である。統一新羅時代の州と小京の中心地がそのまま高麗・朝鮮時代の邑城の範囲になったとはとても考えられないのである。

結局、高麗・朝鮮時代の邑城の範囲は統一新羅時代の中心施設の位置と深い関係にあると思われる。

一方、南原邑城の北門跡調査で確認されたように、一部で統一新羅時代の基礎部と朝鮮時代の基礎部が重複している可能性もあるので、今後の調査成果に注目しておく必要がある。

表43 州と小京の中心地と関連する邑城

名称	関連邑城	区画地割範囲と邑城の位置	邑城とその周辺の関連遺跡
九州	沙伐州	尚州邑城	区画地割範囲内(内接型) 邑城範囲と周辺で統一新羅時代の遺構・遺物確認
	牛首州	なし	—
	河西州	江陵邑城	区画地割範囲に隣接あるいは一部含む(外接型) —
	完山州	全州府城	区画地割範囲内(内接型) 全羅監営址で統一新羅時代の遺構・遺物確認
	熊川州	(公山城)	— —
	武珍州	光州邑城	区画地割範囲に一部含む(外接型) 邑城範囲と周辺で統一新羅時代の遺構・遺物確認
	菁州	なし	— —
	漢山州	なし	— —
	歙良州	なし	— —
五小京	金官小京	金海邑城	統一新羅時代の土城内側 邑城範囲と周辺で統一新羅時代の遺構・遺物確認
	中原小京	忠州邑城	区画地割範囲に隣接(外接型) 邑城範囲と周辺で統一新羅時代の遺物確認
	北原小京	なし	— —
	西原小京	清州邑城	区画地割範囲内(内接型) 邑城範囲と周辺で統一新羅時代の遺構・遺物確認
	南原小京	南原邑城	区画地割範囲内(内接型) 邑城範囲と周辺で統一新羅時代の遺構・遺物確認

## 第2節 州と小京の中心地検討

### 1) 州と小京の中心地の区画地割の様相

第2・3章では、州と小京の都市構造の検討を行い、州と小京の中心地に施行された区画地割を分析した。また、前節の州と小京の城郭に関する性格の検討でも、城郭と区画地割との関連性について述べた。区画地割の分析対象地域は九州と五小京であり、その中心地は官衙のような主要施設とその周辺の市街地を含む。ここでは、第2・3章で検討した州と小京に見られる区画地割の形態を検討してみる。

#### (1) 旧地籍図に見られる区画地割の様相

既存研究では、1910年代製作の旧地籍図と1920～1930年代製作の旧地形図をもとに、九州と五小京の中心地の区画地割の復元案が提示されてきた。特に、一部の地域を除いては、旧地形図を通した復元案がほとんどである。筆者は、基本的に旧地籍図と旧地形図をともに分析してみた。

金海地域(金官小京)の旧地籍図は1912年製作と1934年製作のものがある。この二つの旧地籍図を比べると、土地の形態は全体的にはあまり変化が見られないが、一部で土地利用の変化が見られる(図12・15)。清州(西原小京)・南原(南原小京)・春川(牛首州)の場合も、1910年代製作の旧地籍図とその後に製作された旧地形図を比べてみると、土地の形態が変化しているのがわかる(図100)。

したがって、州と小京の中心地の土地の形態は10～20年の時期差でも変わることがあるのである。もちろん、1910年代に製作された旧地籍図に見られる土地の形態も、統一新羅時代からは高麗・朝鮮時代を経た約1,000年後のものである。その土地形態に変化があった可能性もまったく否定はできない。

しかし、統一新羅時代から19世紀までは、州と小京の中心地の地形や区画地割の目立った変化は比較的少なかった可能性が高い。20世紀に入ってから開発による各地域の急激な変化を考えると、土地形態の変化がまだ進んでいない1910年代に製作された旧地籍図を分析することがより望ましいと考える。

筆者は、統一新羅時代の区画地割の形態を適切に推定できる可能性が高い1910年代製作の旧地籍図を検討してみた。もちろん、それ以前の時期の区画地割が見られる資料があれば、あらためて分析が行われることもありえるだろう。州と小京の中心地の旧地籍図に関する検討でさらに注意しなければならないことは、中心地に位置する河川の存在と流路変化だと思

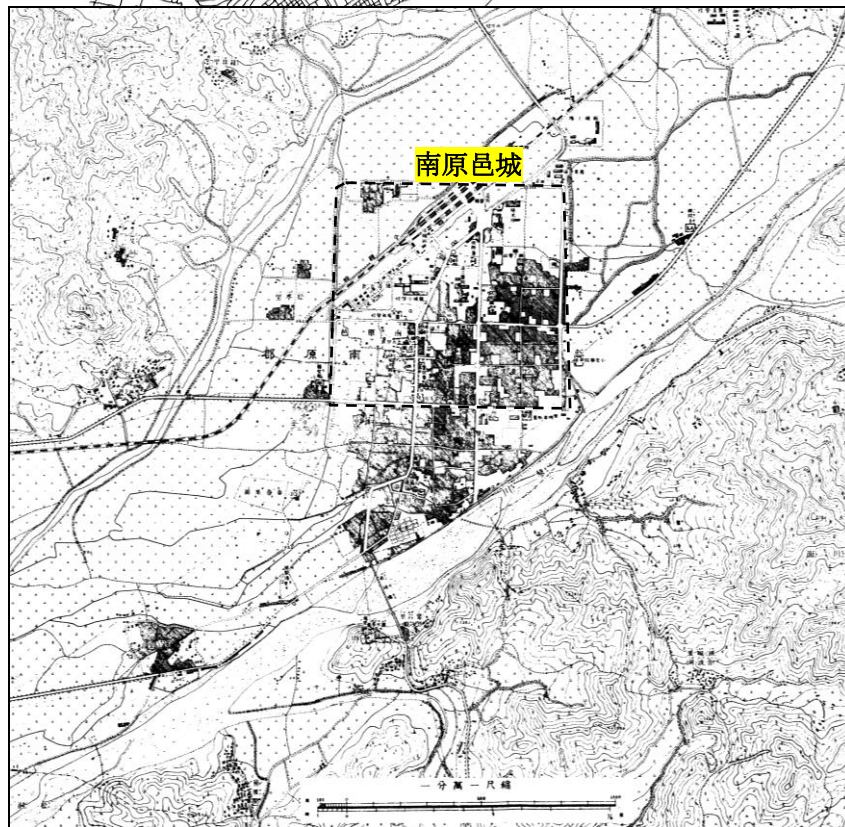


図100 南原市内地域の旧地籍図(1917年製作、上)と旧地形図(1938年製作、下)との比較

われる。

区画地割の検討対象地域である州と小京の中心地はほとんどが河川の沖積地帯に位置し、河川の影響下にあった地域である。忠州(中原小京)と公州(熊川州)の区画地割の検討では、中心地を流れる河川の流路変化が区画地割に影響を及ぼしていることもわかった(図26・89)。

## (2)州と小京における中心地の区画地割の検討

筆者が旧地籍図で検討した結果、九州では検討が不可能だった2箇所を除いて7箇所で区画地割が確認され、五小京では金官小京と北原小京を除いて3箇所で区画地割が確認された。

区画地割の類型に関しては既存研究でもさまざまな言及があった。既存研究では、一部の地域を除いて、区画地割は全体的に方形あるいは長方形であると見ている。また、中国の都市構造を模倣したという坊里制にもとづき、区画地割の形態を推定している。

しかし、州と小京の中心地の区画地割は必ずしも坊里制にもとづいていない様相が見られる。坊里制にもとづいた区画地割では、基本的にその中軸方向が正方位(正北)の正方形あるいは長方形であろう。州と小京の中心地の区画地割の中軸方向が正方位あるいはそれに近いところは、五小京では南原小京、西原小京、中原小京、九州では沙伐州、完山州、熊川州、菁州だけである。厳密に言えば、南原小京を除いて、西原小京、中原小京、沙伐州、完山州、熊川州、菁州は中軸方向が正方位から多少偏向している。

一方、河西州、武珍州は区画地割の中軸方向が正方位とはまったく異なるところである。したがって、州と小京の中心地の区画地割の中軸方向は地域ごとに相違が見られるのである。

区画地割の形態は、正方形に分類できるところもあれば、長方形に分類できるところもある。南原小京と沙伐州は正方形の区画地割であり、中原小京と西原小京は南北方向が長い長方形、河西州と武珍州は東西方向が長い長方形の区画地割である。

一方、完山州、熊川州、牛首州のように方形・長方形などの一定した形態の区画地割が見られず、一部地域だけに区画地割が施行された可能性があるところも存在する。

したがって、区画地割の形態は州と小京の中心地の地形によって、中軸方向の偏向や東西方向あるいは南北方向のいずれか一辺の区画地割が長くなるなどの変化が見られる。特に、河川の沖積地帯に立地する州と小京の中心地は、区画地割の形態が河川の流路と並行するように施行されたと見られる(南原小京の場合は例外である)。

区画地割の1坊の規模は、州と小京によって一定ではなくさまざまである。既存研究でも、地域ごとに規模が異なる区画地割の復元案を提示している。また、1坊の東西方向と南北方向の幅も、州と小京によって多少異なる場合が見られる。もちろん、1坊の東西方向と南北

方向の幅が同一である正方形あるいは正方形に近い場合のほうが多く見られる(南原小京、沙伐州、河西州、武珍州)。しかし、中原小京、西原小京、完山州のように、1坊の東西方向と南北方向の幅が異なり、一定ではない場合もある(図26・42・85)。

筆者が旧地籍図を検討した結果、旧地籍図に見られる区画地割の1坊の規模は、既存研究で復元された規模よりさらに一定ではないことがわかった。州と小京の区画地割の1坊の規模は地域ごとに異なり、同じ区画地割の範囲内でも東西方向と南北方向の幅がさまざまである。また、同じ区画地割の範囲内でも東西区画線と南北区画線の方向も異なる場合が多く見られる。

州と小京の中心地に施行された区画地割の1坊の規模が、なぜこのように地域ごとに異なっているのか。坊里制にもとづいた区画地割でも、その施行範囲は地域ごとの立地や地形による変化が考えられるが、1坊の規模が同一でないことは当然疑問になる。

その理由としてはまず、王京の区画地割の規模が時期によって変化が見られるように、施行時期の違いである可能性が考えられる。次に、同じ区画地割の範囲内でも1坊の規模が異なっているのは、旧地籍図に見られるように、後代の都市開発や河川の影響などさまざまな原因も考えられる。たとえば、前述したように、区画地割の範囲内に位置する朝鮮時代の邑城によってその形態が変化したことも考えられる。その例としては、邑城の内部と外部の区画地割の中軸方向が変化している西原小京、全州府城によって東側の区画地割に変化が見られる完山州があげられる(図42・85)。

したがって、旧地籍図による区画地割の範囲や1坊の規模の検討には限界があり、一定の規模に復元するのは難しい。このことは九州と五小京の区画地割の特徴であるといえる。しかし、既存研究では区画地割の範囲や1坊の規模が一定の形態であるように復元する傾向があった。本論文では、旧地籍図を分析し、推定可能な区画地割の範囲および規模と1坊の規模だけを示しておきたい(表44)。ここで提示した区画地割の範囲と1坊の規模はあくまでも推定であり、当然、考古学調査による検証が必要である。

九州と五小京の中心地に坊里制にもとづいて区画地割が施行された地域もあるが、すべての地域ではない。九州と五小京の中心地には当然、道路が存在し、市街地が形成されていたと思われる。したがって、都市構造の解明は必ずしも坊里制によらなくてもよく、道路によって区画地割の痕跡を確認することでも可能である。牛首州、熊川州の中心地で確認される一部の区画地割の形態を坊里制にもとづく区画地割の施行として考える根拠はないのである。

以上のことから、九州と五小京の中心地すべての地域に坊里制にもとづいた区画地割が施行されていたわけではないことがわかる。さらに、坊里制にもとづいた区画地割が施行され

表44 州と小京の区画地割の規模

名称	区画地割の推定範囲	1坊の規模	区画地割の規模推定 (東西×南北)	中軸方向 (南北基準)	
九州	沙伐州	東西 約1,370m 南北 約1,400m	東西 約152~155m 南北 約152~155m	9坊×9坊 1坊の規模は道路を含む	北から西に 約3度
	牛首州	東西 約 800m 南北 約 850m	?	東西(2列)、南北(5列) 一部区画線痕跡確認	—
	河西州	北東-南西 約1,000m 南東-北西 約 570m	北東-南西 約200m 南東-北西 約190m	北東-南西5坊× 南東-北西3坊 1坊の規模は道路を含む	北から西に 約36度
	完山州	東西 約1,300m 南北 約1,500m	東西 約140~150m 南北 約155~170m	9坊×8坊(4坊×8坊)	北から西に 約17度
	熊川州	東西 約 300m 南北 約1,100m	東西 約100m 南北 ?	東西(3列)、南北(5列) 一部区画線痕跡確認	—
	武珍州	南東-北西 約1,440m 南西-北東 約 750m	南東-北西 約160m 南西-北東 約160m (約110m)	南東-北西9坊× 南西-北東5坊	北から東に 約46度
	菁州	東西 約 970m 南北 約 800m	東西 約180・160・110m 南北 約160m	東西(6列)×南北(3列)	北から西に 約19.5度
	漢山州	?	?	?	?
	歆良州	?	?	?	?
五小京	金官小京	なし	なし	なし	—
	中原小京	東西 約 400m 南北 約1,375m	東西約200m 南北約125m	2坊×9(11)坊 1坊の規模は道路を含む	北から西に 約11度
	北原小京	なし	なし	なし	—
	西原小京	東西 約 460m 南北 約1,800m	東西 約140~160m 南北 約155~160m(7) 約140~150m(5)	3坊×12坊 1坊の規模は道路を含む	北から西に 約5度
	南原小京	東西 約1,640m 南北 約1,580m	東西 約155~165(中 央約80m) 南北 約150~165m	7坊×7坊 1坊の規模は道路を含む	正北

※一部の区画地割の推定範囲は区画地割が確認される範囲であり、実際の復元案の規模とは異なる場合がある。この表の区画地割の推定範囲は実際の復元案の推定最大規模と関連がある。

た地域でも坊里制をそのまま受け入れたのではなく、その地域の地形と立地条件などが反映して受容され、その結果さまざまな変化が現われていると思われる。

## 2) 州と小京の中心地に関連する考古資料の検討

第2・3章では、州と小京の都市構造の検討のため、中心地一帯の関連遺跡を分析してきた。州と小京の都市構造や中心地がわかる証拠としては、主要施設である(大型)建物跡、区

画地割の痕跡である道路関連遺構、また市街地の痕跡である密集した住居用建物跡などが必要である。その他にも寺院などの仏教遺跡や瓦窯などの生産遺跡、墳墓なども必要である。

州と小京の都市構造に関しては、これまでの発掘調査において区画地割を示す道路遺構の検出事例が少ないので、前項で行ったように旧地籍図を通して区画地割を検討してみた。この項ではその他の都市構造に関連する遺構の様相を検討してみる。

#### (1) 主要な施設に関連する建物跡

州と小京の主要な施設の性格や構造・規模などがわかる建物跡、特に住居用ではない大型建物跡の調査はあまり行われてこなかった。

発掘調査の成果が見られる沙伐州(尚州)の場合、伏龍洞遺跡群で区画地割の範囲内に大型建物跡が検出され注目されるが、その用途や性格は不明である。伏龍洞遺跡群の位置は区画地割の範囲の中では東側の境界付近である。したがって、伏龍洞遺跡群の大型建物が区画地割の中心部の主要な建物である可能性は高くない。しかし、道路遺構に面して建物跡が位置していることや竪穴建物跡群に一定の分布が見られることは、ある程度都市構造の究明の手がかりになろう(図61・62)。

州と小京に関連する建物跡の調査事例は少ないが、この他にいくつかの事例があげられる。西原小京の関連遺跡である清州邑城北側に位置する清州中学校の多目的教室およびテコンドー訓練場敷地遺跡の調査では、統一新羅時代の南北方向・東西方向の道路遺構とともに塀遺構、建物跡が検出された。

それらの遺構の中でも、道路遺構の方向が旧地籍図に見られる区画地割の方向と並行していることが注目される。特に、この遺跡で注目されるのは道路遺構と排水路<sup>33)</sup>が並行して検出され、その方向に沿って塀遺構と竪穴建物跡が検出されたことである。このように道路遺構・排水路・塀遺構・竪穴建物跡が同時に検出されたのはこの遺跡だけで、今後の都市構造に関連する遺跡の調査で重要な参考事例になると思われる(図38・39)。

また、完山州の関連遺跡である全羅監営址の調査で、統一新羅時代の建物跡が検出されたことは重要である。全羅監営址で検出された統一新羅時代の建物跡は1基であり、正確な用途や性格は不明であるが、朝鮮時代の全羅監営址が統一新羅時代の主要な中心施設の位置と関連する可能性は高い。他の州と小京の中心地にも朝鮮時代の監営址・官衙址がある場合が多く見られる。したがって、今後の朝鮮時代の監営址・官衙址に関する調査で統一新羅時代

---

33) 略報告書によると、排水路施設は塀遺構の西側に沿って60~100cmの比較的大きな石材で45cmの幅で造成されている。

の建物跡が検出された場合、その用途や性格に留意する必要がある。

## (2) 市街地関連遺構の様相

州と小京の中心地に関連する遺構として、市街地と関連する遺構の検討も必要である。沙伐州の伏龍洞遺跡群では市街地と関連する住居用堅穴建物跡、堅穴遺構、井戸などが検出された。特に、伏龍洞遺跡群では住居用堅穴建物跡が密集して検出されている(図61、表22)。おそらく、州に居住する住民の住居用建物である可能性が高いが、その性格を把握することは難しいだろう。

このように、市街地と関連する堅穴建物跡、井戸が州の中心地に施行された区画地割の範囲内に分布していることは注目すべきである。すなわち、沙伐州の都市構造は中心地に区画地割が施行され、その範囲内に主要施設とともに市街地が含まれているのである。

牛首州の槿花洞遺跡でも住居用堅穴建物跡が密集して検出された(図69、表26)。牛首州の中心地には区画地割が一部しか見られないので、沙伐州のような検討は難しい。しかし、州の中心地一帯に市街地が存在していることは確かである。したがって、州や小京の都市構造を検討するためには、市街地の存在も主要な要素であるといえる。

沙伐州と牛首州に関連する遺跡で検出された堅穴建物跡は、高麗・朝鮮時代の遺構と重複している事例が多い。今後の州と小京の中心地で確認される高麗・朝鮮時代の市街地の様相も参考にする必要がある。

## (3) 仏教関連遺跡の検討

州と小京の中心地に関連する仏教遺跡を検討してみる。王京でも中心地には皇龍寺と芬皇寺など主要寺院が位置している。これは王京の場合であるが、寺院は都市構造の主要な要素の一つであると考えられる。したがって、州と小京の中心地にも関連寺院が存在していた可能性は十分にある。

残念ながら、第2・3章の関連遺跡の現況で検討したように、州と小京の中心地一帯では直接的に州と小京に関連する寺院として調査報告があった事例はまだない。しかし、沙伐州、牛首州、熊川州の中心地には寺院と関連する幢竿支柱が位置している(沙伐州：伏龍洞幢竿支柱、牛首州：槿花洞幢竿支柱、熊川州：大通寺址幢竿支柱)。

現在は幢竿支柱が残されているだけで正確な寺域は不明であるが、その近くに寺院が存在していた可能性は高い。寺院が州と小京の中心地の区画地割の範囲に含まれるのかどうか、その位置関係などは今後の課題である。



#### (4) 墳墓関連遺跡の検討

州と小京の中心地に関連する考古資料として墳墓遺跡を検討してみる。第2・3章で検討した州と小京の中心地には、近接した山地に州と小京の防禦に関連する山城が位置している場合が多かった。したがって、州および小京の中心地と山城との間の丘陵部には住民や支配者層の墓域が存在する可能性が考えられる。

第2・3章で州と小京の中心地一帯の遺跡の現況を検討してみた結果、州と小京に関連する統一新羅時代の古墳は中原小京、西原小京、北原小京、牛首州で確認された(中原小京：丹月洞古墳群、西原小京：龍潭洞古墳群、北原小京：盤谷洞遺跡、牛首州：玉泉洞古墳群)。これらの地域では統一新羅期になってから、地方の小規模化した新羅後期様式の古墳が見られる(최명현2009)。

特に、忠州の楼岩里古墳群・下九岩里古墳群で見られる統一新羅期以前の大規模古墳群と大型墳(横穴式石室墳)は、他の州と小京では今のところほとんど確認されていない。他の州と小京の中心地に関連する古墳としては、小規模な石室墳と石槨墓だけが多少見られるだけである。したがって、古墳の様相と州および小京の都市構造との関連性を把握することは難しい。今後も、九州と五小京に関連する墳墓遺構が大規模に検出される可能性は高くないと推定される。

#### (5) その他の遺跡

北原小京の関連遺跡では統一新羅時代の耕作遺構が検出され、小京関連の生産遺跡として注目される(原州鶴城洞遺跡、図28)。また、牛首州の関連遺跡では中心地に近接して統一新羅時代の瓦窯が確認されている(春川昭陽路遺跡、図67)。これらの遺跡以外に、州と小京で消費されるものに関連する生産遺跡はまだ確認されていない。今後の調査では生産関連遺跡の事例は増える可能性が高く、注目しておきたい。

以上、九州と五小京の都市構造を検討するために、さまざまな性格の考古資料を分析してみた。九州と五小京に関連する考古資料は、全体的な様相と類型などを論じることができるほどには多くない。しかし、九州と五小京に関連する多様な考古資料の様相は、今後の州と小京の都市構造に関連する考古学調査には十分参考になるような方向性は示していると思われる。

### 第3節 王京の考古学的検討

九州と五小京の都市構造に関する既存研究では、王京の影響に言及している場合が多い。文武王・神文王代に九州と五小京が整備された際、九州と五小京の治所では都市建設が行われたと推定される。当然、九州と五小京の都市建設はやはり王京の都市構造から影響を受けていた可能性も考えられる。

ところが、九州と五小京の都市構造が王京の都市構造からどのような影響を受けたのかは明らかではない。

新羅の地方都市の構造を検討するためには、当然、王京の都市構造も分析する必要がある。特に、王京であった慶州では関連遺跡と調査成果も十分に蓄積され、関連研究も九州と五小京とは比較できないほど行われている。

したがって、慶州の発掘成果にもとづいて新羅の王京の都市構造や範囲およびその変遷などを検討する必要がある。王京の都市構造に関連する遺跡としては、40箇所以上の遺跡で検出された道路遺構および1坊の規模とその内部が調査された王京遺跡が特に注目される。

王京に関する研究は、王京の空間的な検討、道路遺構の分析を通じた王京の都市構造の検討など多様である。このような分析や検討は、九州と五小京の研究にも多様な見方を示すことになると思う。

#### 1) 新羅王京の研究現況

新羅は、建国から滅亡まで約1,000年間、王都を現在の慶尚北道慶州市に置いていた(『三國史記』では紀元前57~935年)。新羅の王都は、高句麗や百済とは異なり、遷都がなかった。

田中俊明(田中俊明2013)によると、新羅の王京をどのような観点から見るのかについては基準が必要であるとする。田中俊明によると、新羅人にとって王京の意味は二つある。一つは六部王京であり、もう一つは王京である。六部は新羅の前身である斯盧国を形成した集団の六村から成り立つ。新羅の領域が拡大して斯盧国以外の地域も領土になると、六部の人々は自らを王京人であるとし、地方の人々に対して優越意識をもつようになる。これが六部王京の成立であり、その時期は6世紀初期と見られる。

新羅が三国を統一した7世紀後半になると、王京の中心部の月城の周りに坊里制を施行して、新しい王京が成立することになる。統一新羅期の王京の成立は、既存の六部王京の人には混乱をもたらすことになる。すなわち、律令制の整備と唐の都城制の模倣は、南側にかた

よっている月城の位置を補完する北宮と東宮の建設につながる。

王京の都市構造の復元を主なテーマとする研究は1920年代から始まり、最近まで継続的に行われている。その主なテーマは、王京の都市構造の復元および王京の形成過程と変遷に関する研究である。

王京の都市構造の復元を主なテーマとする研究は、1910年代に製作された慶州の旧地形図をもとにして行われた。主な研究者には、藤田元春(藤田元春1929)、藤島亥治朗(藤島亥治朗1930)がいた。一方、尹武炳(尹武炳1972・1987)は韓国の研究者としては最初に日本人学者の研究の間違いを批判し、新しい復元案を示した。その後、張順鏞(張順鏞1976)・金秉模(金秉模1984)・閔徳植(閔徳植1986・1989)の研究が行われてきた。このような王京の都市構造の復元研究は考古資料が不足していて、旧地形図だけを利用していたので限界があり、最近慶州で活発に行われている発掘調査の成果によって修正が行われている。

王京の形成過程と変遷に関する研究で、南北の中軸大路があったとする王京の復元案としては、尹武炳(尹武炳1972・1987)、金秉模(金秉模1984)、閔徳植(閔徳植1989)、東潮・田中俊明(東潮・田中俊明1988)などがあり、多様な見解が示されている。

新羅王京の平面プランの有無に関する研究で、平面形態が方形であったとする研究としては、尹武炳(尹武炳1987)、東潮・田中俊明(東潮・田中俊明1988)、東潮(東潮1999)、山田隆文(山田隆文2002・2009)の研究をあげることができる。

王京の拡張については、朴方龍(朴方龍1997)、黄仁鎬(황인호2005)、山田隆文(山田隆文2002・2009)の研究がある。これらの研究では、王京の拡張は1～3段階に分けて行われたと見ている。また、最近の坊里制と関連する王京復元の研究では、以前と同様な平面形態が方形であるという主張(東潮2012)と、部分的かつ段階的に拡張したという李恩碩(李恩碩2004)や黄仁浩(황인호2007)の異なる見解もある。

王京に対する既存研究は、文献研究や都市構造の復元研究が中心であったといえる。最近の考古学調査によって、王京の都市構造に関するさまざまな研究が可能になりつつあり、文献研究や都市構造の復元研究の成果が実際の調査で立証できるようになってきた。

## 2) 王京の都市構造の検討

### (1) 王京の都市構造

道路遺構によって区画地割が確認された王京遺跡を中心に検討し、統一新羅期に坊里制を通して整備された王京の都市建設が、同時期の九州と五小京の都市建設にもそのまま適用さ

れたのかどうかを分析する必要がある。

王京の都市構造に関する復元案はいろいろ提示されてきたが、それを具体的に立証できる発掘調査事例が十分ではなかった。したがって、1990年代までは坊里制による坊の規模や坊の数に関する見解はさまざまであった。しかし、2002年以降、皇龍寺址の南東側の王京遺跡で、東西方向と南北方向の直線道路によって区画された居住域が確認された。報告書(国立慶州文化財研究所2003)によると、中国の坊里制による新羅の坊(東西約167.5m×南北約172.5m)であるとされている(図101)。

王京の造営時期に関しては、中央集権化段階初期(5世紀後半)、中央集権化完成期(6世紀初～中葉)、統一新羅期(7世紀後半)の三つの見解がある。

まず、5世紀後半の中央集権化段階初期に王京の都市体系が整備されたとする見解は、5世紀中葉にすでに王京には坊里区画道路が設置されたと見ている(朴方龍1997)。

次に、王京の造営時期を中央集権化完成期と見る見解は考古学的研究成果によっている。王京関連の5世紀代の区画道路はまだ確認されておらず、6世紀以降に計画都市が整備され、皇龍寺址の西北の仁旺洞556番地遺跡の道路遺構が一番早い時期に築造されたと見られている(이희준2010)。

最後に、7世紀後半の統一新羅期以降、都市を計画的に再編したとする見解もある。新羅の都市計画は唐の坊里制を模倣して整備され、神文王9(689)年に大邱への遷都に失敗してから、王権の強化のために王京の範囲を縮小して調整する中で、都市が計画的に再編されたとする見解である(全徳在2009a)。

王京の都市構造に関する研究は、慶州市内の調査で確認された道路遺構の分析によって進展を見せている。1990年代以降、慶州地域ではさまざまな開発が活発になり、発掘調査が増加してきた。その結果、王京関連遺跡が続々と確認され、そのうち王京に関連する道路遺構

表45 王京の都市構造に関連する主要遺跡

遺跡名	調査年度	調査面積	調査内容
①王京遺跡	1987～2002年	34,000m <sup>2</sup>	東西方向・南北方向の道路で区画された1坊の内部を調査。
②国立慶州博物館敷地遺跡	1998～2000年	5,732m <sup>2</sup>	南北方向の道路は上下2層の路面を確認。下層道路の幅は23.7m、上層道路の幅は8m。
③東宮と月池遺跡	2007～ 2007～2010年 2010～2012年	가地区 1～4次 4～6次 6,575m <sup>2</sup>	王京遺跡の東西方向の道路と慶州博物館敷地遺跡の南北方向の道路が交差する地域に該当。王京では一番早い時期に建設されたと考えられる。
④慶州仁旺洞王京遺跡	2011～2012年	63,341m <sup>2</sup>	南北方向の道路遺構を検出。

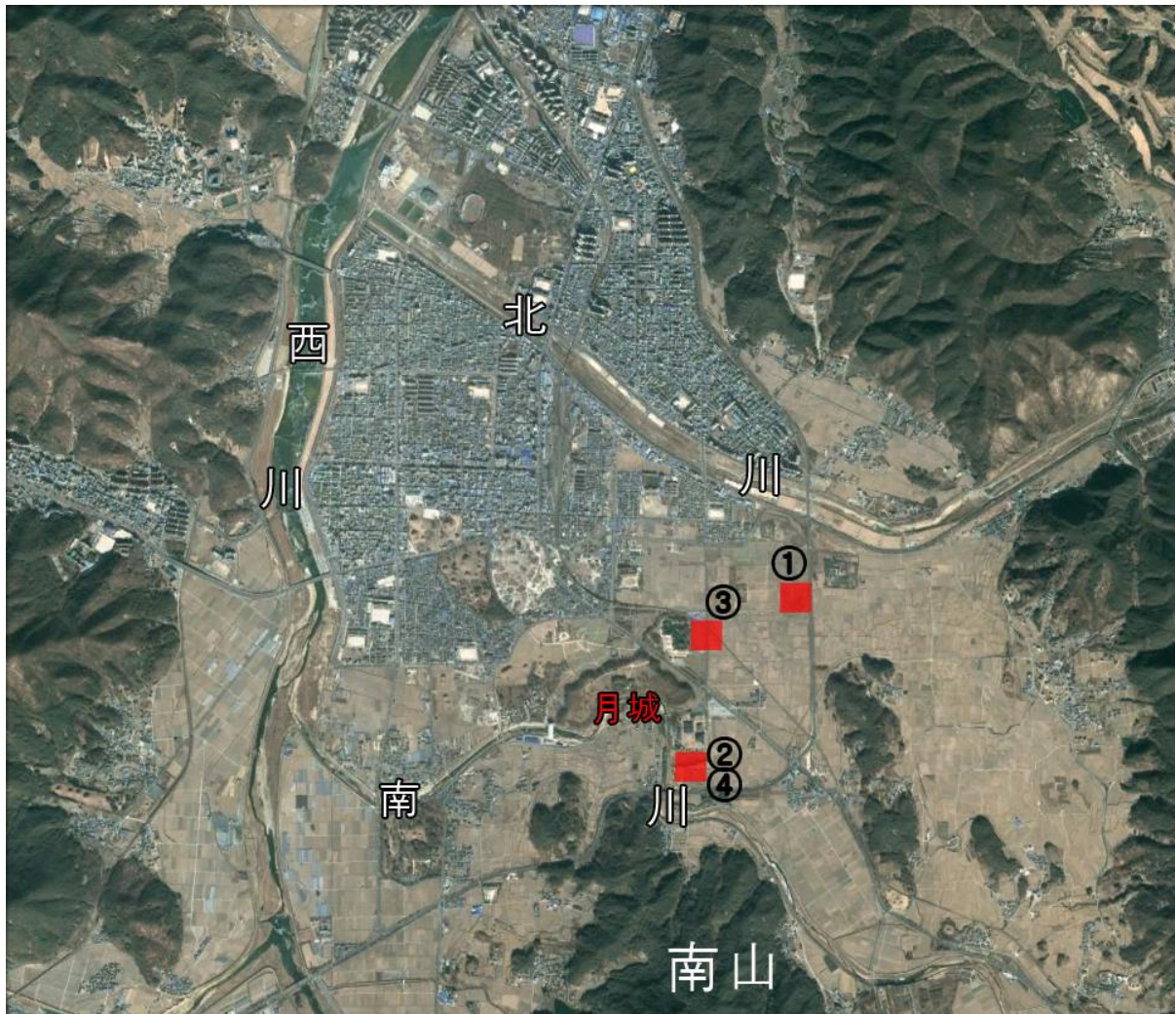


図101 王京の地形と関連遺跡分布

①王京遺跡 ②国立慶州博物館敷地遺跡 ③東宮と月池遺跡 ④慶州仁旺洞王京遺跡  
(GOOGLE EARTHから作製)

が 40 箇所以上の遺跡から検出された。調査された道路の幅は 3～20m 前後である。道路は幅によって、大路(15m 以上)、中路(10m 内外)、小路(7m 内外)に区分されるのが一般的である(朴方龍 1997)。

このような道路遺構の検討によって、最近わかった区画道路の特徴がある。それをまとめると、道路は直線で設置され、路面は 5～10cm の小石と土を混ぜて固める。また、道路の側溝や道路の中央など多様な位置に排水路が設置されている。道路の断面は U 字形で複雑な層位をもつので、頻繁に補修や改修が行われたと推定できると見ている(박상은・손혜성 2009)。

慶州市内の調査で王京に関連する道路遺構が多数検出され、道路の築造時期についてはだいたい 6 世紀後半以降であること、統一新羅期以前には皇龍寺の周辺一帯を中心として道路

が築造されていたことがわかった。

統一新羅期以降から築造されたと推定されている道路遺構の時期と拡張の方向に関しては、研究者によって異なる。一部の研究では、7世紀後半から東川洞、隍城洞で道路が築造されていて、西辺の西部洞、城東洞一帯では8世紀中・後半になってから道路が設置され、西辺が一番遅く都市化が進んだと見る見解がある(황보은숙2008)。これとは逆に、統一新羅期以降、王京の道路は芬皇寺北辺から西部洞19番地など西辺地域にまで拡張され、8世紀中・後葉に北川の北側の東川洞一帯にまで拡張されたと見る見解がある(장용석2006)。

黄仁鎬(황인호2007)は、王京の拡張が段階的に行われ、区画地割の基本単位が時期によって変化していると見た。そのため、区画道路の方向と坊の規模が地域によって異なり、3段階に区分されるとした。その1・2段階は400尺×400尺で一辺が約142m(高句麗尺、1尺=0.355m)である。また、3段階は基本430尺×330尺(約152m×約117m)で、変形が400尺×330尺(約142m×約117m)である。道路幅は、20尺(7m)・40尺(14m)・60尺(21m)に分類した。王京では、土地の効果的な活用のため、河川や山地周辺の地形に沿った区画地割も行われていたと見ている。

道路遺構と都市構造に関連する主要な遺跡を中心に王京の都市構造を検討すると、いくつかの特徴が見られる。王京での坊里制の施行を考古資料を通して検討した結果、王京には画一的な都市計画は存在せず、段階的な拡張が見られるという特徴がある。

王京での坊里制の施行と王京の範囲に関しても意見が分かれている。既存の王京復元案の場合、まず王京の中心地に区画地割の復元案を提示している。それから東西南北に拡張された区画地割の痕跡に関しては、それを王京の拡張として理解するのか、あるいは単純に市街地の拡張や道路のつながりの側面から考えるのかによって、解釈が変わるのである。また、北川の北側など王京の外郭地域に見られる区画地割の痕跡を、王京の区画地割として考えるのかどうかも問題である。

王京の都市構造だけでも時期別・地域別の違いがさまざまであり、時期とは関係なく王京に全体的な都市建設の計画が立てられていたのかも明らかではない。特に、北川の北側地域が坊里制の対象地であったのかも疑問に思う。

主に王京の都市構造を道路遺構を中心に分析すると、王京の中心部に位置する大型古墳の存在と王宮(月城)が南側に位置していることなど、唐の文化の影響で都城の整備が施行されるには制約が多いと思われる。それらの制約が王京の都市構造の特徴であり、王京でさえ区画地割による都市の空間構造と都市の整備および拡張とに多様性が認められるのである。このような王京の都市構造の様相が、九州と五小京の都市建設にどのように反映しているのか

は検討が必要である。

## (2) 王京と九州五小京の都市構造の関連性

新羅王京の都市構造に関する研究は、慶州で行われた発掘調査による道路遺構(図102)などの関連資料の増加によって進展し始めている。それは、九州と五小京に関連する考古資料に比べられないほどである。本論文のテーマである九州と五小京の都市構造の検討では、王京の都市構造が九州と五小京の都市構造とどのような関連が認められるのかも分析対象であるが、地方都市である九州と五小京の場合、王京に見られるような都市の整備と建設計画がどのように適用されたのかは明らかではない。

王京の都市構造には地域・時期ごとに違いがあったことが、最近の調査成果から認められている。しかし、王京の時期ごとに見られる区画地割の規模の違いを都市建設の計画の変化として考えられるのだろうか。区画地割の規模の違いは、都市建設の計画による変化というよりは、王京の地域ごとに異なる地形などによって現われたと見られる。つまり、九州と五小京の中心地で同時期に王京で施行された規模の区画地割が確認されたとしても、それを王京からの影響と見るべき根拠はないのである。

区画地割の規模は施行時期ごとに変化するのではなく、該当地域の地形と関連するものと思われる。したがって、九州と五小京に施行された区画地割が同じ時期に施行された王京の区画地割の影響をそのまま受けたとは思えない。

区画地割の施行に関して、1坊の規模の類似点だけをもって王京からの影響を想定することは難しい。たとえば、王京の都市構造に関連する道路遺構では築造方法や道路の幅などの様相に独特な点が見られ、州と小京の道路遺構でも同じ様相が見られれば、王京からの影響を考えることもできよう。しかし、九州と五小京には王京の都市構造と関連するような考古資料が少なく、検討が難しい。

王京遺跡で見られる道路遺構の様相の中で、小石を使用していることは中国と日本の都城遺跡で検出された道路遺構では見られない特徴である。西原小京の関連遺跡で検出された道路遺構も小石を使用していて、王京遺跡の道路遺構と同様の様相が見られる(図38・39)。この場合は、王京からの影響というよりは当時の築造技術との関連性が考えられる。

慶州市内地域の北川の北側に位置する東川洞の調査では、中軸方向が正方位(正北)ではなく、地形に沿って区画地割が見られるので、注目される。このような区画地割の形態は、王京で坊里制が受容されたとしても、地形に影響されて区画地割が実施されたという証拠になる。むしろ、このようなことが九州と五小京の区画地割に影響を与えた可能性がある。

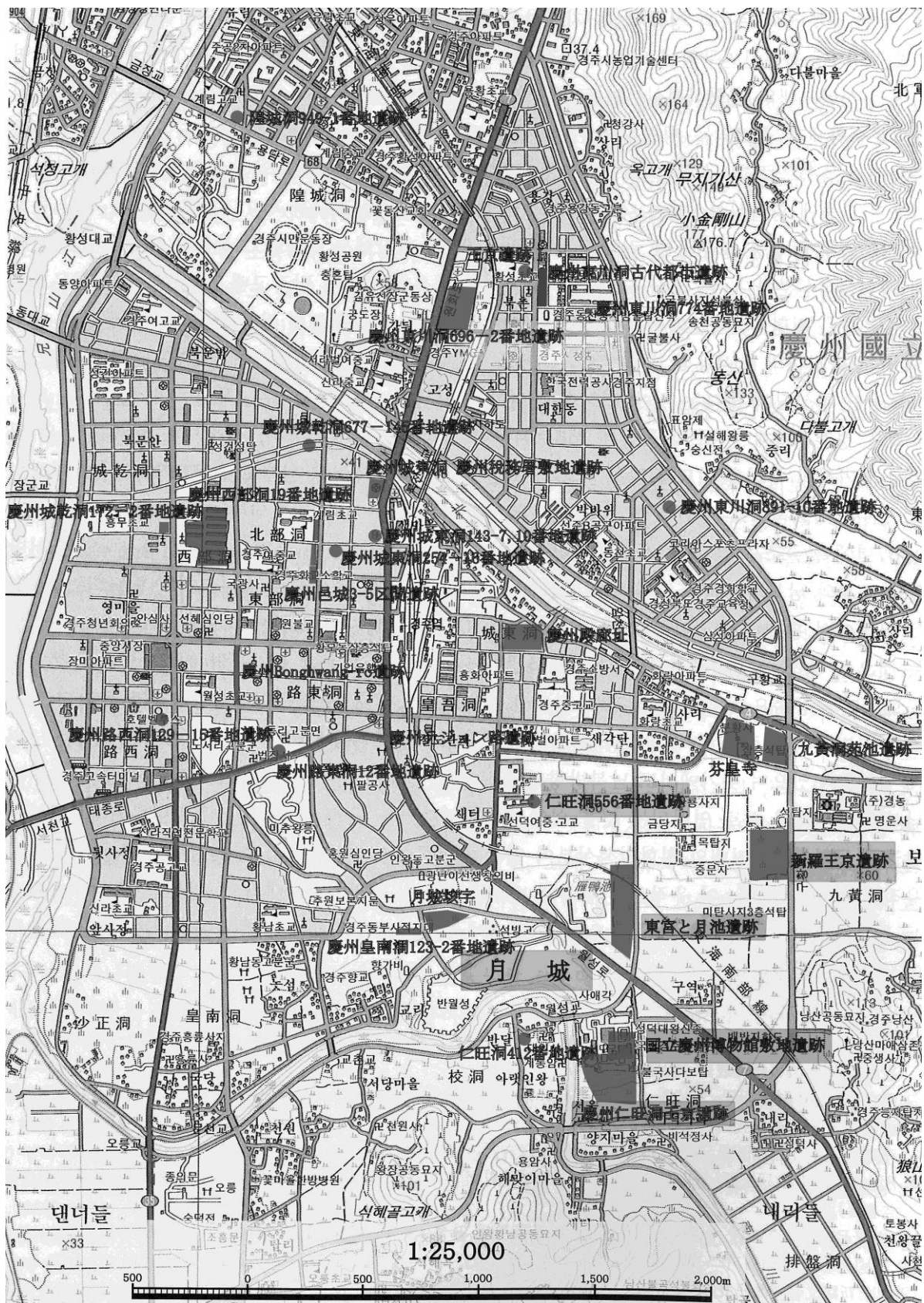


図102 王京の道路遺構の分布



南原小京と沙伐州で推定される区画地割は、王京では施行できなかった都市建設を新しく試した結果と解釈することもできる。九州と五小京が地方都市であったとしても、新羅の中では主な拠点地域であるので、都市建設に王京からの影響が当然あったことも考えられる。結局、九州と五小京の都市構造に王京からの影響は多少あっても、州と小京もその地域の地形などの状況によって都市建設が行われたと思われる。したがって、九州と五小京の都市構造は一律的に規定するのは難しく、多様な検討が望ましい。

### 3) 牟梁里遺跡の検討

慶州市内から南西側に約7kmの距離にある牟梁里一帯の調査で、統一新羅時代の南北方向と東西方向の道路遺構、建物跡・竪穴建物跡などが検出された。

特に注目されるのは、都市遺跡と関連する南北方向の道路遺構4箇所、東西方向の道路遺構4箇所が検出されたことである。検出された道路の幅は5～8mで、小路～中路に該当する。

また、同じ方向の道路遺構が並行して検出され、道路間の距離が約120mであることがわかった。したがって、道路によって区画された1坊の規模は一辺約120mであり、規模から見ると王京遺跡で確認された1坊の規模より小規模であることがわかった(図103)。

報告書(嶺南文化財研究院2015)によると、道路遺構や建物跡などから出土した遺物の検討で、この地域の坊里制は7世紀末から8世紀末に完成したと見られる。牟梁里遺跡で確認された1坊の規模は一辺約120mである。慶州市内地域の場合でも、東川洞の北側で調査された道路遺構によって一辺約120mの規模の坊が確認されている。したがって、牟梁里一帯の都市建設の時期が王京の都市拡張の時期と関連している可能性があると見ている。

『三國遺事』には、王京に関して“新羅全盛之時 十七萬八千九百三十二戸、一千三百六十坊 五十五里”という記録がある。

これまでの研究では、記録に出ている王京の範囲や規模は1,360坊ではなく、360坊である可能性が高いと見ていた。また、王京の範囲も現在の慶州市内地域であると推定されてきた。ところが、牟梁里遺跡で坊里制の施行が確認されたことによって、記録に記されている王京の規模1,360坊が正しいという見解が提示されている(朴方龍2013)。

牟梁里遺跡で検出された道路遺構は、統一新羅時代の王京以外の地域でも坊里制による都市建設が行われていることを証明したことに重要な意味がある。

筆者は、検出された道路遺構の位置を牟梁里の1913年製作の旧地籍図を使用して比較・検討してみた。その結果、旧地籍図には区画地割の痕跡が明らかに確認される。また、旧地籍

図に見られる区画地割の痕跡と発掘調査で検出された道路遺構の方向とが一致していることもわかった(図104)。

旧地籍図に見られる区画地割の範囲を推定してみると、東西約850m×南北約1,240mが確認される。これは発掘調査で検出された道路遺構の分布範囲とほぼ一致している。

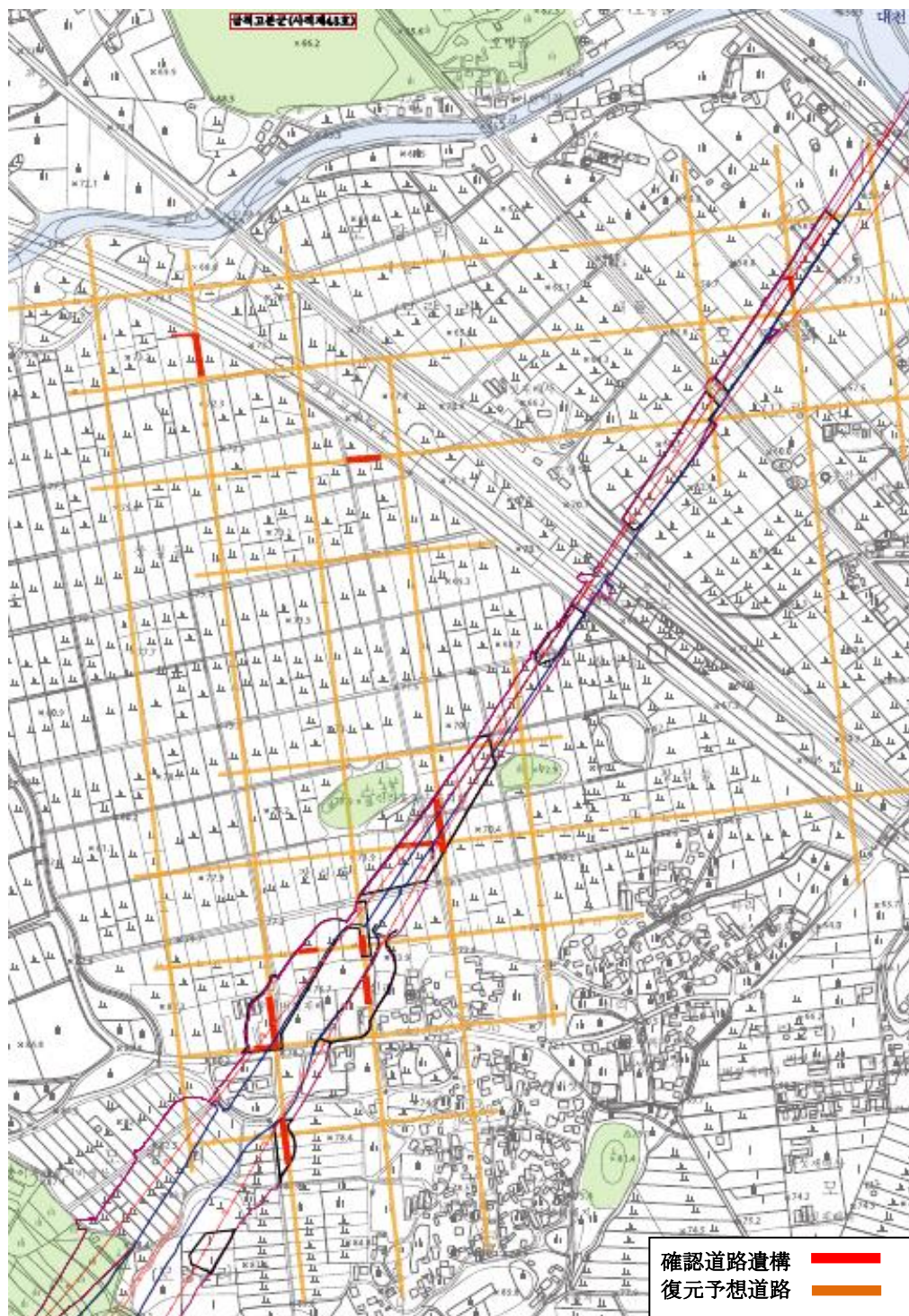


図103 牟梁里遺跡の道路遺構の分布(嶺南文化財研究院、2015、587頁、挿図14から引用)

1 坊は東西約120m×南北約120mである。中軸方向は正方位ではなく、北から西に約7.5度偏向しているのがわかる。このことは、王京の区画地割の中軸方向とは異なり、牟梁里一帯の地形による影響が考えられる。

したがって、九州と五小京の中心地で旧地籍図から区画地割の痕跡が確認されるところは、道路遺構が検出される可能性が高くなった。九州と五小京の中心地に関する研究では旧地籍図の活用が有効である可能性が高くなったといえよう。

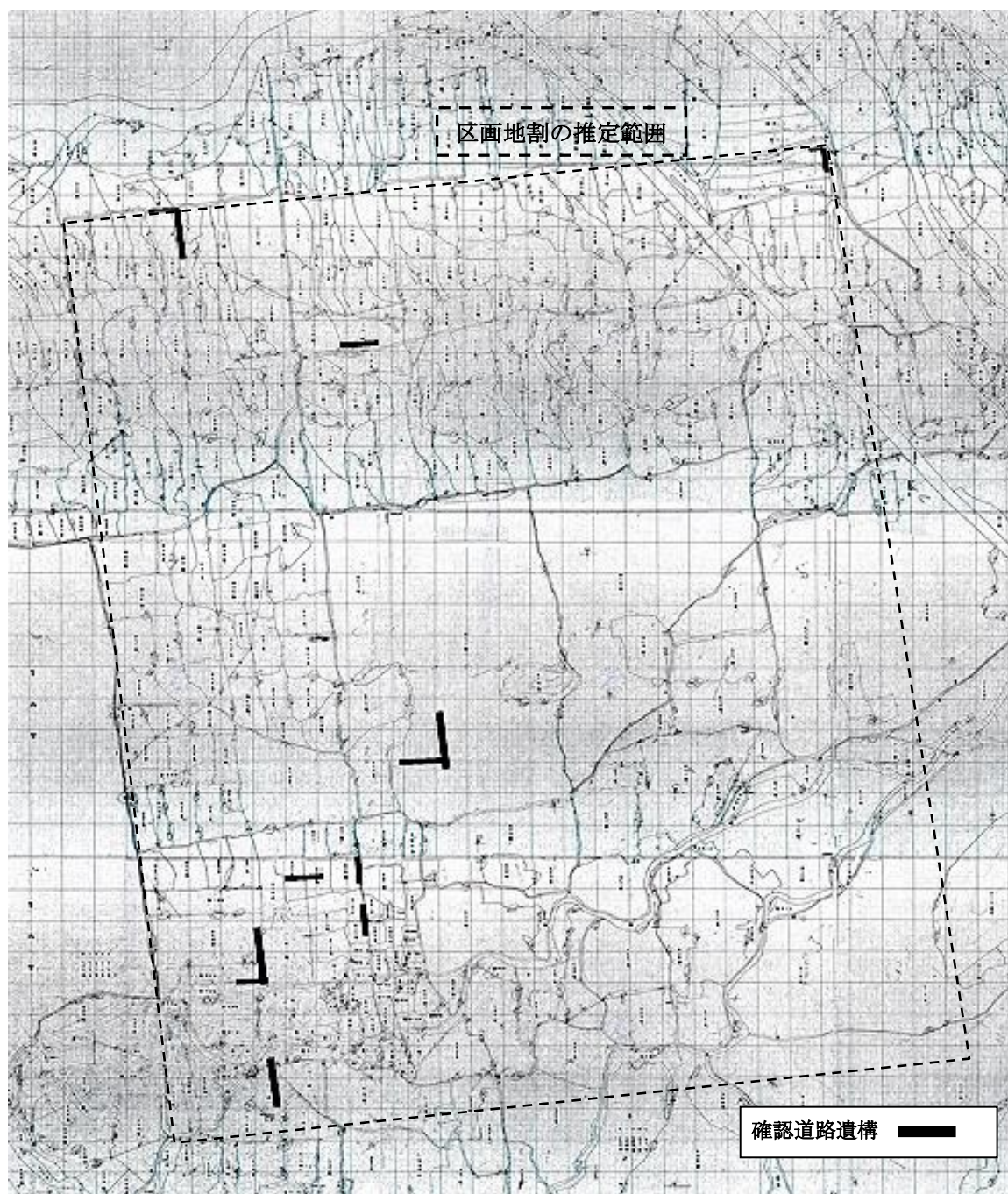


図104 牟梁里遺跡の道路遺構の分布(1913年製作の旧地籍図)

## 第5章 結論

### －九州と五小京の都市構造の類型－

第2・3・4章で、九州と五小京および王京の都市構造に関して考古資料をもとに検討してみた。九州と五小京の都市構造の様相を究明できるような考古資料はまだ不足しているが、多様な検討を試みた。その中でいくつかの様相を基準とし、九州と五小京の都市構造の類型案を示してみよう。

既存研究では、九州と五小京を統一新羅期以前の地域を基準として、次のように分類している。

九州では、沙伐州、敵良州、菁州が古新羅および伽耶の故地に、熊川州、完山州、武珍州が百済の故地に、漢山州、牛首州、河西州が高句麗および濊・貊の故地に設置されたとしている。

五小京では、金官小京が古新羅および伽耶の故地に、西原小京、南原小京<sup>34)</sup>が百済の故地に、中原小京、北原小京<sup>35)</sup>が高句麗の故地に設置されたとしている。

このような分類は、統一新羅期になって領域となった百済・高句麗地域の統治のために全国を新しい行政体系に整備し、九州と五小京を設置したということと関連していると思われる。しかし、九州と五小京の設置背景や地域差が州および小京の都市構造とどのように関連しているのかがこの分類ではよくわからない。

上述した分類のように、九州と五小京の設置がその地域の歴史的背景と関連があるとする、九州と五小京の設置過程の様相に注目する必要がある。

まず、州と小京の中心地の移動という観点から州と小京を下記のように大きく二つに分類してみる。

I型は、考古学的様相から見ると、統一新羅期以前のその地域の中心地がそのまま九州と五小京の治所になっている地域である。九州と五小京の治所が設置された地域は、当時もその地域の中心地であったことになる。金官小京、牛首州、熊川州がこれに該当する。

金官小京の場合、金官伽耶の中心地だった金海市内地域が統一新羅時代にも金官小京の中心地であり、羅城(金海古邑城)をもっている。熊川州の場合、熊津期百済の宮城である公山

---

34) 南原の場合、伽耶の勢力圏でもあったので、この分類には疑問がある。

35) 原州の場合も百済の勢力圏でもあったので、高句麗の故地だけに分類するのは疑問である。

城が州城であると推定されている。したがって、百済～統一新羅時代まで公山城一帯が中心地であったことになる。

Ⅱ型は、治所が設置された地域が統一新羅期以前の中心地(拠点)ではなく、新しく中心地が形成された地域である。つまり新たな地域に治所を設置した地域、すなわち州と小京の中心地の移動が見られる地域である。五小京では西原小京、北原小京、中原小京が、九州では沙伐州、河西州がこの類型であると考えられ、このⅡ型はさらに二つに細分できる。

Ⅱ-1型は、統一新羅期以前に新羅の領域になってすでに治所あるいは拠点があった地域であり、統一新羅期になって治所あるいは拠点を別の地域に新設したと見られる地域である。

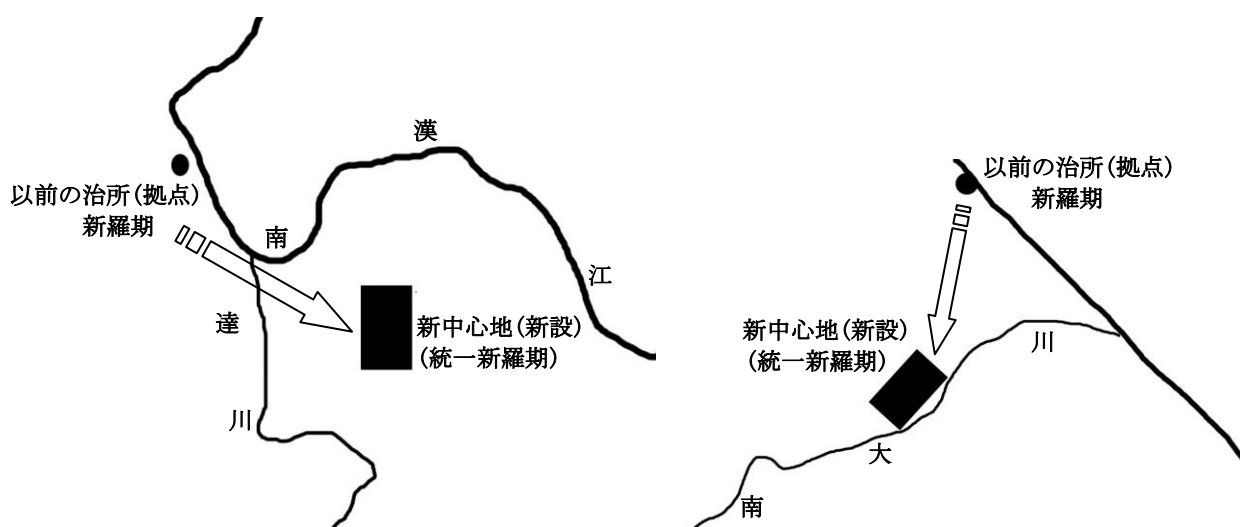


図105 Ⅱ-1型の模式図(中心地の移動)(左:中原小京、右:河西州)

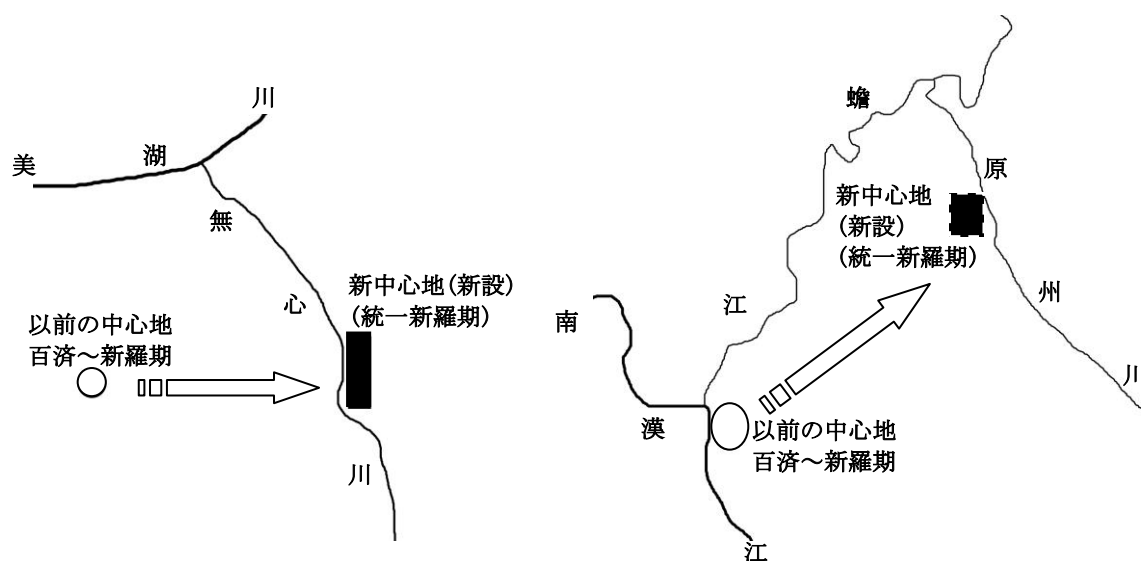


図106 Ⅱ-2型の模式図(中心地の移動)(左:西原小京、右:北原小京)

つまりこれらの地域は、統一新羅期以後の九州と五小京の整備過程で、統一新羅期以前の治所や拠点とは異なる地域に新中心地が設置されたのである。中原小京、河西州、沙伐州がこれに該当する(図105)。

Ⅱ-2型は、統一新羅期以後、新しく州や小京が設置された地域である。つまり統一新羅期以前の百済～新羅期の中心地が新中心地へ移動した地域である。西原小京と北原小京がこれに該当する(図106)。これらの地域は旧勢力(特に百済系)の牽制のため、新しい地域に小京の中心地を移動させる必要があったと思われる。

これらの類型の特徴を詳しく説明すると、次のようになる。Ⅱ-1型の沙伐州(尚州)の場合、第3章第1節で述べたように、統一新羅期の州の設置によって新しい都市建設が行われたことが伏龍洞遺跡群の考古資料から確認される。また、沙伐州の中心地に施行された区画地割の形態と中軸方向も方形の形態と正方位であるという典型的な様相が見られる。

さらに、Ⅱ型の中心地の移動が見られる州と小京は、『三國史記』に築城記事が見られる州と小京とだいたい一致していて興味深い。新しい地域に治所が移動、新設され、改めて州や小京の主な施設や市街地の建設が行われ、そのことが記録に残された可能性が考えられる。

Ⅱ型のように、州と小京の設置が新しい地域での都市建設を通して行われた場合、その都市構造も当然Ⅰ型とは異なる可能性が想定できる。

中心地の移動の有無による州や小京の都市構造にはどのような違いがあるのであろうか。現段階の考古資料では、各地域の都市構造の違いが何なのかに関しては検討が難しい。しかし、第3章第1・2節で検討したように、Ⅰ型の牛首州(春川)とⅡ-1型の沙伐州(尚州)の中心地で検出された竪穴建物群の様相は、その違いを示している。

Ⅰ型の牛首州は州の中心地に統一新羅期以前から統一新羅期に形成された竪穴建物群が確認されるが、Ⅱ-1型の沙伐州は州の中心地に明らかに統一新羅期以後に形成された竪穴建物群だけが確認される。牛首州と沙伐州の竪穴建物群の形成時期の違いから、『三國史記』の記事に記された牛首州の設置時期(善徳王6[637]年)と沙伐州の治所の移動時期(神文王7[687]年)との違いが説明できるのである。

表46 州と小京の中心地移動の類型

	中心地の移動なし (Ⅰ型)	中心地の移動(Ⅱ型)	
		Ⅱ-1型	Ⅱ-2型
九州	牛首州 熊川州	沙伐州 河西州	—
五小京	金官小京	中原小京	北原小京 西原小京

したがって、Ⅰ型の金官小京、牛首州、熊津州の場合、既存の中心地ではすでに市街地が形成され、一定の都市構造をもっていた可能性がある。Ⅱ型の沙伐州、河西州、中原小京のように新しい地域に形成された市街地とは異なる都市構造の様相が想定される。

以上、中心地の移動の観点から州と小京を検討してみた。これからはそれと関連して、州と小京の中心地の区画地割の類型を検討してみる。

第4章第2節で検討したように、州と小京の中心地の区画地割は、沙伐州の調査事例から有効性が確認された旧地籍図を使用して行った。旧地籍図の有効性は、牟梁里遺跡で検出されている道路遺構によってさらに一層確実に became といえよう。

ここでは、九州と五小京で検討が不可能だった2箇所を除いて分類を行った。まず、区画地割が明確に確認されるのは、中原小京、西原小京、南原小京、沙伐州、河西州、完山州、武珍州、菁州である。次に、区画地割が確認されないか一部確認されるのは、金官小京、北原小京、牛首州、熊川州である。

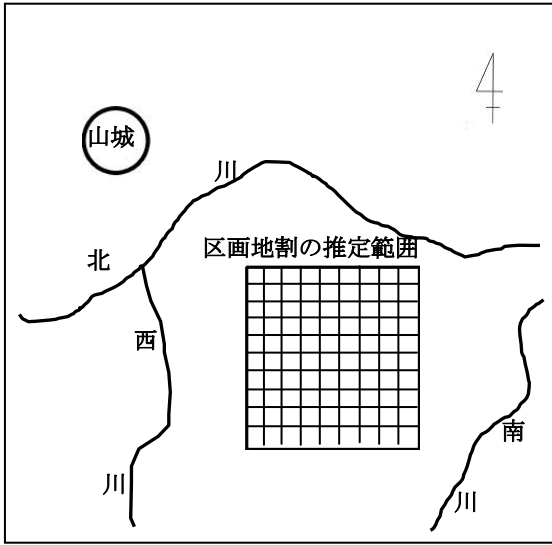
第4章第2節で州と小京の中心地の区画地割を検討した結果では、区画地割の形態と範囲はその地域の地形と密接な関連があることがわかった。州と小京の中心地の地形、河川の流れなどさまざまな様相が、区画地割の範囲と形態に影響を与えている。区画地割の形態、1坊の規模などは、九州と五小京の中心地においてほとんど一定していないことが判明した。

考古学的検討が十分にできず議論するのは難しいが、考古資料から分析を試みた金官小京や中原小京、沙伐州を中心に、州と小京の都市構造を以下のような三つの類型にまとめて提示したい。

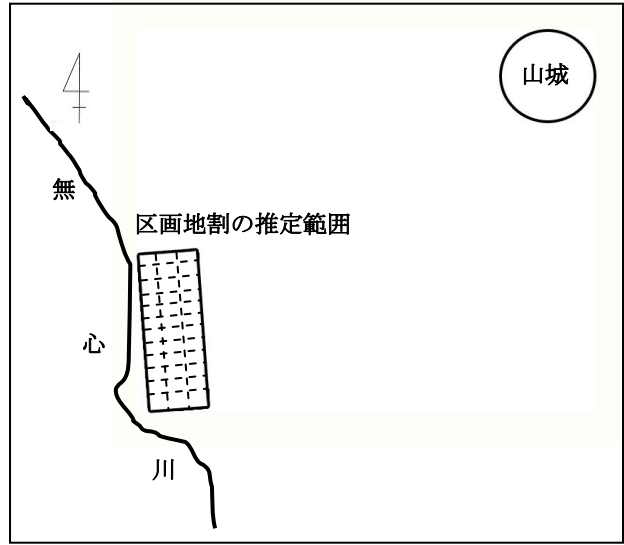
A類型は、州と小京の中心地に区画地割が施行され、近接して防禦と関連する城郭が位置する地域である。西原小京、南原小京、沙伐州、完山州、河西州、武珍州が該当する(図107)。この地域の中心地には、規模と形態は多少異なるが、区画地割が施行され、近接して州や小京と関連する山城が存在している。

B類型は、小京の中心地を囲む羅城が存在し、近接して防禦と関連する城郭が位置する地域である。中原小京と金官小京が該当し、中原小京には中心地に区画地割が施行され(B-1類型、図108)、金官小京には区画地割が施行されていない(B-2類型、図109)特徴が見られる。州と小京の中心地を囲む羅城(土城)が存在しているところは、この中原小京と金官小京だけである。

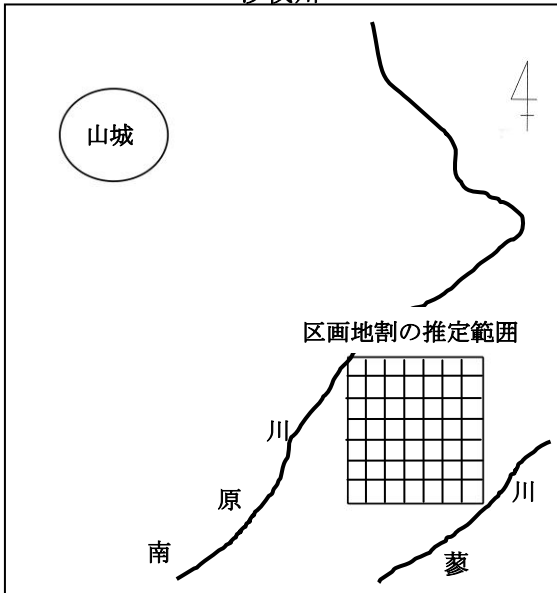
C類型は、州の中心地に隣接した山城を治所城として使用した可能性が高い地域で、牛首州と熊川州が該当する。この両州は中心地に区画地割が一部確認される都市構造という特徴が見られる(図110)。C類型の地域は前述したⅠ型に該当することも特徴である。



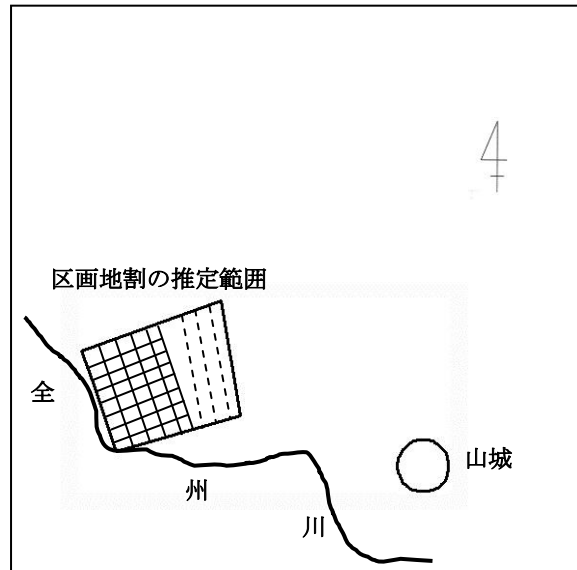
沙伐州



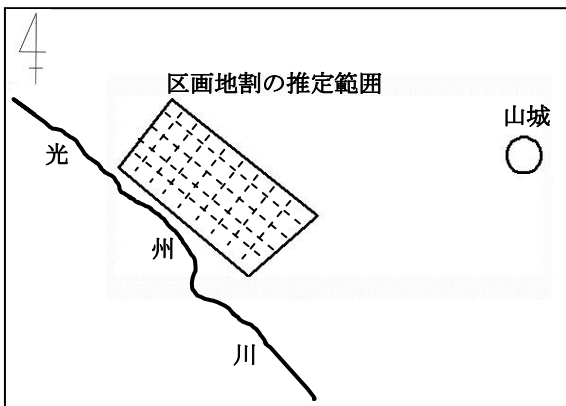
西原小京



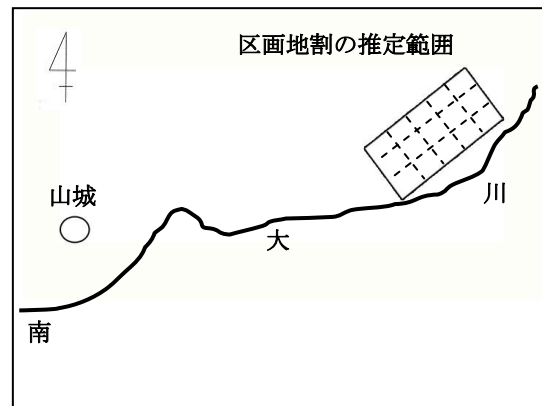
南原小京



完山州



武珍州



河西州

図107 A類型の都市構造模式図



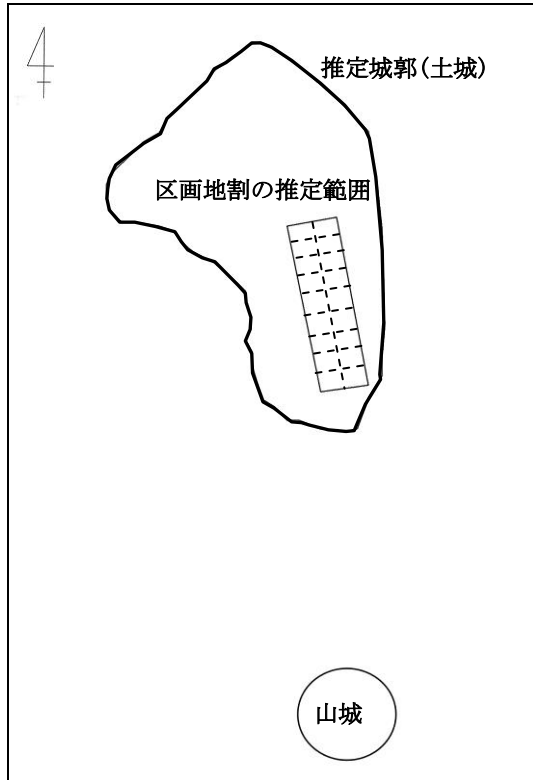


図108 B-1類型(中原小京)の都市構造模式図

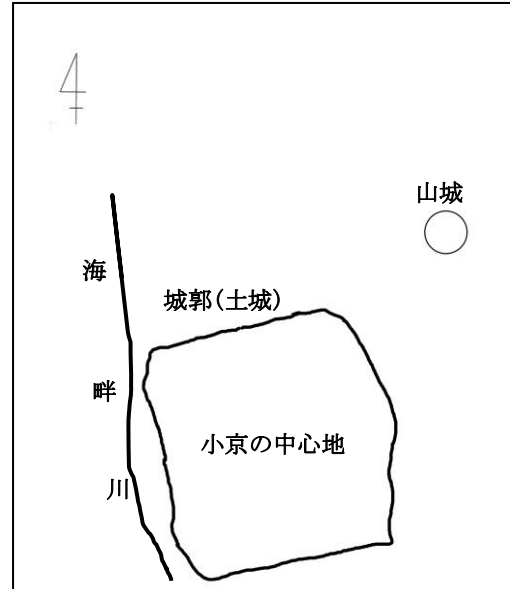
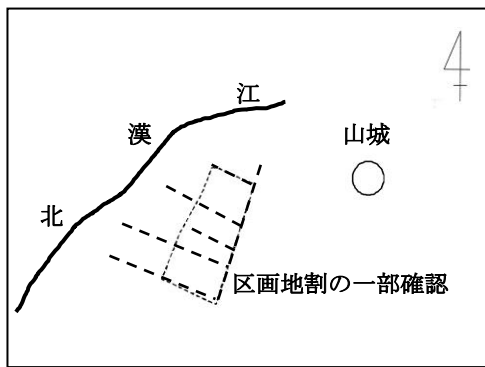
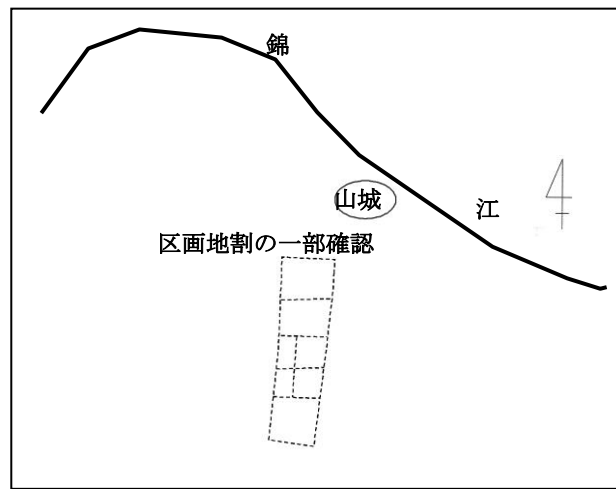


図109 B-2類型(金官小京)の都市構造模式図



牛首州



熊川州

図110 C類型の都市構造模式図

A・B・C類型は、中心地の区画地割の規模と形態が異なっていることから、都市構造に違いがあることが推定される。そして、A・B・C類型は中心地の移動の有無によるI・II型と一部関連性が考えられる。

I型の場合、金官小京や熊川州は金官伽耶の中心地や熊津期百済の中心地がそのまま州や

小京の中心地になっている。この地域は中心地の移動がないので、すでに都市構造が整っていた可能性が高い。Ⅰ型の牛首州と熊川州は山城を治所城として使用し、区画地割の一部施行が見られるC類型である。また、B-2類型の金官小京は区画地割の施行が見られない。これらは統一新羅期以前に都市構造が整っていたことと関連があると思われる。

Ⅱ型の場合、治所の移動や新設を通して統一新羅期に新しい都市建設が行われたことが想定される。一部の例外を除くと、A類型と関連する。おそらく、州と小京の中心地における新しい都市建設は区画地割の施行と防禦用山城の築城であったと推定される。この場合、関連資料の不足でまだ中心地移動の類型に分類されていないA類型の武珍州、南原小京、完山州はⅡ型に分類される可能性が高い。今後増加する考古資料によって、州と小京の都市構造に関する類型の関連性はさらなる分析が必要である。

表47 九州と五小京の都市構造の類型

名称		類型	関連城郭	区画地割の規模推定 (東西×南北)
九州	沙伐州	Ⅱ-1型/A類型	紫山山城	9坊×9坊 1坊の規模は道路を含む
	牛首州	Ⅰ型/C類型	鳳儀山城	東西(2列)、南北(5列) 一部区画線痕跡確認
	河西州	Ⅱ-1型/A類型	溟州山城	北東-南西5坊×南東-北西3坊 1坊の規模は道路を含む
	完山州	A類型	東固山城	9坊×8坊(4坊×8坊)
	熊川州	Ⅰ型/C類型	公山城	東西(3列)、南北(5列) 一部区画線痕跡確認
	武珍州	A類型	武珍古城	南東-北西9坊×南西-北東5坊
	青州	?	?	東西(6列)×南北(3列)
	漢山州	?	?	?
	歙良州	?	?	なし
五小京	金官小京	Ⅰ型/B-2類型	盆山城 金海古邑城	なし
	中原小京	Ⅱ-1型/B-1類型	大林山城 忠州邑城	2坊×9(11)坊 1坊の規模は道路を含む
	北原小京	Ⅱ-2型	鴿原山城、金台山城 金頭山城	なし
	西原小京	Ⅱ-2型/A類型	牛岩山城、上党山城	3坊×12坊 1坊の規模は道路を含む
	南原小京	A類型	蛟龍山城	7坊×7坊 1坊の規模は道路を含む

以上、九州と五小京の都市構造の類型を検討してみた。その結果、九州と五小京の都市構造は一律的ではなく、各設置地域の特性が反映していることがわかった。その中で、九州と五小京の都市構造にはいくつかの要素が見られる。すなわち、中心地に区画地割が施行され、その中心地に関連する施設(城郭、土塁、塀、堤防など)が存在し、近接して防禦に関連する城郭が位置することである。しかし、金官小京のように区画地割が施行されていないなどの要素が見られる例外的な地域もある。

上述した州と小京の中心地に関連する施設がどのような形態であるのか検討が必要である。現段階では、金官小京と中原小京で関連城郭(金官小京：金海古邑城、中原小京：忠州邑城)が確認されている。区画地割、中心地に関連する施設、防禦に関連する城郭は、例外的な地域を除いて、九州と五小京の都市構造において主要な要素であると考えられる。したがって、今後の関連調査に期待しておきたい。

最後に、州の都市構造と小京の都市構造がはたして同じであるのかどうかを考えてみたい。文献史学では州と小京の設置背景や性格は異なっているという見解が示されてきた。しかし、同じ時期に設置された主な地方行政の中心地である州と小京は、基本的に同じ計画で建設され、類似した都市構造をもっていると考えられる。本論文で検討してきた州と小京の都市構造には違いは見られない。州と小京の都市構造は各地域の地形などによる規制が強く影響していると思われる。

九州と五小京の都市構造の検討には関連する考古資料が不足していて、まだ正確な検討ができないところも多い。今後の期待される調査成果に活用するためにも、より多様な類型化を試み、それを提示していきたい。

## おわりに

本論文では、統一新羅時代の九州と五小京の関連遺跡をまとめ、分析・検討して統一新羅時代の地方都市の都市構造の全般的な様相を考察した。まだ限界は見られるが、既存研究をもとにして最近までの九州と五小京の考古資料を集めて分析することに集中した。

その結果、地域によって差は若干現われているが、一部地域を除いては、九州と五小京に関連する遺跡は結構増加していることもわかった。したがって、九州と五小京に関連する考古学的研究は関連遺跡の飛躍的な増加に伴い、進展しているといえる。また、九州と五小京が設置された地域では、今後さらなる関連遺跡の調査が行われることが十分に予想できるのである。

本論文で検討した九州と五小京の関連遺跡は、だいたい統一新羅時代の遺構と高麗・朝鮮時代の遺構が重複している場合が多い。実際に、金官小京と沙伐州、牛首州に関連する発掘調査でその様相が明確になったので、遺構の重複様相もこれからの調査の参考にしなければならない。

この遺構の重複様相は九州と五小京の中心地が高麗・朝鮮時代の都市基盤と密接な関連があることを示しているのである。したがって、不足する九州と五小京の関連遺構を分析するには、高麗・朝鮮時代の遺構を活用して統一新羅時代の考古資料を補完することも重要である。

すべての地域ではないが、本論文で検討した調査事例と考古資料の様相から見ると、九州と五小京の関連遺跡・関連遺構が残存している可能性は高いと思われる。現実的には厳しいと思われるが、九州と五小京が設置された都市の調査には、常に関連遺跡・関連遺構の残存の可能性を考えておくことが必要である。

何よりも、調査者や研究者には事前に九州と五小京に関する理解と準備が求められる。このような理解と準備のもとで調査に取り組むことによって、正確な関連遺跡・関連遺構の発掘や検討が行われ、より正確な考古資料を手に入れることができると思う。

また、旧地籍図と旧地形図を活用した都市構造の検討は、考古学調査でも有効であることが確認され、正確な調査のために必要であると思われる。

特に、1910年代に製作された九州と五小京の中心地の旧地籍図には7～8世紀の区画地割

の痕跡が残されていて、それを確認できることは注目すべきである。さらに、九州と五小京が設置された地域では近現代の地形図にもその痕跡が見える場合がある。結局、九州と五小京の設置とともに造営された区画道路と都市構造が現在の都市の原形であることになる。

新羅の王京の場合、中国の長安城を模倣していて、坊里制を通して造営されたことが知られている。しかし、考古資料の分析から王京と地方都市の都市構造が異なっていること、各地方都市も同じ都市構造ではないことが明らかになった。一方、地方都市である九州と五小京に王京からどのような影響があったのかはまだ明らかではない。

何よりも、王京の都市構造に関連する豊富な考古資料に比べて、九州と五小京に関連する考古資料は不足している。これから、九州と五小京の都市構造の研究に王京関連の考古資料をどう適用するのが課題である。

九州と五小京の都市構造に関しては、各設置地域の特性が反映されているので、一律的な類型化は多少困難な部分もある。その中で、州と小京の中心地の移動、区画地割の施行有無、関連する城郭の存在などの諸要素で都市構造を検討し、その類型案を提示してみた。

本論文で分析した九州と五小京に関連する諸様相は、地域ごとの特性が強く現われている。したがって、各地域の特性が目立つ九州と五小京の都市構造に関連する多様な様相を、今後の調査の参考にしていくことが課題であろう。

九州と五小京の設置に関しては、今後も注目していく必要がある重要な研究テーマであり、研究を進めていかななくてはならない。考古資料にもとづいた九州と五小京に関する研究には限界が見られるので、一層多様な研究方法や接近方法が求められる。検討が必要な課題がまだ多く残されていて、これからの調査成果によっては、以前より多くの考古資料を通した九州と五小京の研究が期待できる。本論文が、今後の九州と五小京の考古学的研究に少しでも役立つことを期待したい。

## — 参考文献 —

### 1. 基本史料

『三國史記』  
『三國遺事』  
『世宗實錄』  
『文宗實錄』  
『高麗史』  
『新增東國輿地勝覽』

### 2. 論文

#### — 韓國語 —

- 강민식 2001 「신라 서원소경의 유적과 유물」 『新羅 西原小京 研究』 서경문화사
- 姜鍾薰 2006 「신라 왕경의 방어체계—경주 지역 성곽에 대한 검토를 중심으로—」 『新羅文化祭學術發表會論文集』 第27輯 동국대학교 신라문화연구소
- 金秉模 1984 「도시계획」 『역사도시 경주』 열화당
- 김영관 2008 「新羅西原小京의 歷史的背景」 『淸州 福臺洞 금호어울림아파트 敷地內 淸州福臺洞遺蹟』 (재) 한국선사문화연구원
- 盧秉湜 2005 『淸州地域 古代城郭의 性格』 忠北大學校大學院史學科碩士學位論文
- 盧秉湜 2014 『新羅國原小京과 西原小京의 防禦施設變遷』 忠北大學校大學院史學科文學博士學位論文
- 羅庚峻 1996 「上黨山城성돌 小考」 제10회 향토사연구회 전국학술대회 발표요지문
- 羅庚峻 2000 「西原京 治址 研究」 『史學誌』 第33輯 檀國史學會
- 羅庚峻 2000 『新羅 西原京 治址 研究』 檀國大學校大學院史學科碩士學位論文
- 閔德植 1986 「新羅王京의 都市設計와 運營에 關한 考察」 『白山學報』 第33輯 白山學會
- 閔德植 1989 「新羅王京의 都市計劃에 關한 試考(上)—諸 都城과의 比較연구를 중심으로—」 『史叢』 第35輯 高大史學會

- 朴達錫 2007 「統一新羅時代 沙伐州의 里坊制檢討」『大東考古』創刊號 大東文化財研究院
- 박달석 2012 『統一新羅時代 沙伐州 伏龍洞集落과 都市構造研究』釜山大學校大學院考古學科碩士學位論文
- 朴方龍 1997 『新羅 都城 研究』東亞大學校大學院史學科博士學位論文
- 朴方龍 2013 「新羅 都城制와 牟梁里 都市遺蹟」『고고학연구 공개강좌』영남문화재연구원
- 박상은·손혜성 2009 「도로유구에 대한 분석과 조사방법」『야외고고학』한국문화재조사연구기관협회
- 朴省炫 2007 「4 세기 전후 신라의 토성 축조와 그 목적—영남지역 초기 토성의 성격—」『韓國史研究』제 139 권 韓國史研究會
- 朴省炫 2010 『新羅의 拠点城 축조와 지방제도의 정비과정』서울大學校大學院國史學科文學博士學位論文
- 朴省炫 2012 「신라 통일기 州·小京의 성격과 그 활용—漢山州와 國原小京을 중심으로—」『한국성곽학보』叢書21 한국성곽학회
- 朴泰祐 1987 「統一新羅時代의 地方都市에 對한 研究」『百濟研究』第18輯 忠南大學校百濟文化研究所
- 성재현 2002 「淸州地域出土新羅土器의 編年과 性格」『湖西考古學』第 6·7 合輯 湖西考古學會
- 東潮 2012 「新羅金京의 坊里制再論」『百濟와 周邊世界』진인진 서울문화사
- 山田隆文 2012 「구주오소경명주(하서주) —그 도시구조를 중심으로—」『文化財』第 45 卷第 2 號 國立文化財研究所
- 山本孝文 2001 「考古資料로 본 新羅勢力의 湖西地方進出」『湖西考古學』第 4·5 合輯 湖西考古學會
- 山本孝文 2001 「考古資料로 본 南漢江上流地域의 三國領域變遷」『韓國上古史學報』第 40 號 韓國上古史學會
- 梁起錫 1993 「新羅五小京의 設置와 西原京」『湖西文化研究』제11집 忠北大學校湖西文化研究所
- 梁起錫 1999 「新羅의 淸州地域進出」『文化史學』第11·12·13號合輯 韓國文化史學會
- 梁起錫·姜珉植 2000 「新羅西原京城의 位置와 運用」『忠北史學』第11·12合輯(鶴山金鎮鳳教授停年紀念特輯號) 忠北大學校史學會
- 梁起錫외 2001 『新羅 西原小京研究』西京文化社

- 梁起錫 2006 「國原小京과 于勒」『忠北史學』第16輯 忠北大學校史學會
- 余昊奎 2002 「한국 고대의 지방도시—신라 5 소경을 중심으로—」『강좌 한국고대사』제 7권 가락국 사적개발연구원
- 禹成勳 1997 『新羅王京慶州의 都市計劃에 關한 研究』成均館大學校大學院建築工學科碩士學位論文
- 우현승 2001 『경북 상주시의 도시공간구조의 변천과정에 관한 연구』연세대학교대학원건축공학과석사학위논문
- 尹武炳 1972 「역사도시 경주의 보존에 대한 조사」『문화재의 과학적 보존에 관한 연구』I 과학기술처
- 尹武炳 1987 「新羅王京의 坊制」『李丙燾博士九旬紀念韓國史學論叢』知識産業社
- 李京贊 2002 「고대 한국 지방도시의 격자형 토지구획의 형태특성에 관한연구」『建築歷史研究』第11卷 韓國建築歷史學會
- 李殷碩 2004 「왕경의 성립과 발전」『통일신라시대 고고학 5』제 28 회 한국고고학대회 요지문 한국고고학회
- 李仁在 2003 「羅末麗初北原京의 政治勢力再編과 佛敎界의 動向」『韓國古代史研究』제31집 韓國古代史學會
- 李仁在 2004 「법천리 고분군을 통해 본 삼국시대 原州와 마한·백제와의 관계」『東方學志』제126집 延世大學校 國學研究院
- 이인철 1990 「新羅 中古期の 地方統治體制」『韓國學報』第五56輯 一志社
- 李在桓 2007 『고고학자료를 통해본 統一新羅時代 北原京研究』江原大學校大學院史學科文學碩士學位論文
- 이재환 2012 「統一新羅時代 北原小京에 대한 고고학적 접근」『韓國上古史學報』第75號 韓國上古史學會
- 李賢泰 2012 「新羅王京의 里坊區劃 및 範圍에 대한 연구현황과 과제」『新羅文化』第40輯 동국대학교 신라문화연구소
- 이희준 2010 「신라 왕경유적 발굴조사 성과」『韓國의 都城—三國~朝鮮, 發掘調査와 成果—』국립경주문화재연구소
- 林炳泰 1967 「新羅小京考」『歷史學報』第 35·36合輯 歷史學會
- 林永珍 2008 「統一新羅時代 武珍都督城의 位置와 規模」『지방사와 지방문화』제11권 제2호 역사문화학회



- 張順鏞 1976 『新羅王京의 都市計劃에 關한 研究』 서울大學校環境大學院碩士學位論文
- 장용석 2006 「新羅道路의 構造와 性格」 『嶺南考古學』 第38號 嶺南考古學會
- 장준식 1981 『高句麗國原城治址에 대한 研究』檀國大學校大學院史學科碩士學位論文
- 장준식 1998 『新羅 中原京 研究—位置 比定을 中心으로—』檀國大學校大學院史學科博士學位論文
- 張俊植 1998 『新羅 中原京研究』學研文化社
- 전덕재 2005 「西原小京의 設置와 行政體系에 대한 考察」 『湖西史學』 第41輯 湖西史學會
- 全德在 2009a 「新羅 6部 名稱의 語義와 그 位置」 『신라 왕경의 역사』 새문사
- 전덕재 2009b 「牛首州의 설치와 변천에 관한 고찰」 『강원문화연구』 제28집
- 전덕재 2010 「韓國古代의 王京과 都城, 地方都市」 『歷史學報』 第207輯 歷史學會
- 전덕재 2011 「신라의 왕경과 소경」 『歷史學報』 第209輯 歷史學會
- 田中俊明 1996 「新羅中原小京의 成立」 『中原文化 國際學術會議 結果報告書』 忠北大學校湖西文化研究所
- 田中俊明 2011 「中原小京의 諸問題—特に國原小京의 意義」 『先史와 古代』 제34호 韓國古代學會
- 車勇杰 1980 「牛岩山所在 城地調查概報」 『牛岩山地域文化遺蹟地表調查報告書』 忠北大學校博物館
- 車勇杰 1992 「國原小京의 遺蹟·遺物」 『中原京과 中央塔』 忠州工業專門大學博物館
- 車勇杰 1993 「西原京의 位置와 構造」 『湖西文化研究』 第 11 輯 忠北大學校湖西文化研究所
- 車勇杰 2001 「韓國中世城郭의 性格問題」 『湖西地方의 中世考古學』 제4회 湖西考古學會學術大會發表集 湖西考古學會
- 車勇杰 2012 「淸州地域築城의 系列順次」 『韓國城郭學報』 第22輯 韓國城郭學會
- 최범호 2016 「『삼국사기』 완산주(完山州) 관련 기록의 재검토」 『전북사학』 제48집 전북사학회
- 최병현 2009 「증원의 신라고분」 『증원의 고분』 國立中原文化財研究所
- 황보은숙 2008 「신라왕경의 도시적 발달」 『新羅文化』 第32輯 동국대학교 신라문화연구소
- 황인호 2005 『慶州 王京 道路를 통해 본 新羅 都市計劃 研究』 동아대학교대학원사학과석사학위논문
- 황인호 2007 「신라왕경의 조영계획에 대한 일고찰」 『한일문화재논집』 1 國立文化財研究所·奈良文化財研究所

황인호 2013 「國原小京에서 中原小京으로의 변천과정 연구」 『考古學』 第12卷第3號 中部考古學會

황인호 2014 「新羅 9州5小京의 都市構造 研究」 『중앙고고연구』 제15호 中央文化財研究院

#### －日本語－

東潮・田中俊明 1988 「王京と山城」 『韓国の古代遺跡1』 新羅編(慶州) 中央公論社

東潮 1999 「新羅金京の坊里制」 『条坊制・都市研究』 15号 条坊制・都市研究会

李在桓 2013 「統一新羅時代の九州五小京の考古学的研究現況と課題」 『人間文化』 第29号 滋賀県立大学人間文化学部

李在桓 2015 「統一新羅時代の南原小京の考古学的検討」 『人間文化』 第33号 滋賀県立大学人間文化学部

田中俊明 1997 「新羅五小京の成立と國原小京」 『古代の日本と渡来の文化』 学生社

田中俊明 2013 「新羅都城制研究の到達点」 『東アジア都城比較の試み(国際公開研究会資料)』 東アジア比較都城史研究会

藤田元春 1929 「都城考－慶州の遺蹟－」 『尺度綜考』 刀江書院

藤田亮策 1953 「新羅九州五小京攷」 『朝鮮學報』 第5輯 朝鮮学会

藤島玄治郎 1930 「朝鮮建築史論其1・其2」 『建築雜誌』 44

山田隆文 2008 「新羅の九州五小京城郭の構造と実態について－統一新羅による計画都市の復元研究－」 『考古学論攷』 第31冊 橿原考古学研究所

山田隆文 2009 「新羅金京の形成と変遷過程」 『研究紀要』 第14集 由良大和古代文化協会

山田隆文 2012 「九州五小京と溟州－その都市構造を中心に－」 『文化財』 第45卷第2号 國立文化財研究所

### 3. 報告書

#### －金海－

國立昌原文化財研究所 2005 『金海 鳳凰洞 單獨住宅敷地 試掘調査報告書』

慶南考古學研究所 2007 『金海 鳳凰洞 遺蹟－金海 韓屋體驗館 造成敷地 内 發掘調査報告書－』

慶南文化財研究院 2007a 『金海 大成洞 都市計劃道路 開設區間 內 金海 大成洞・東上洞遺蹟』

慶南文化財研究院 2007b 『東萊 古邑城址:釜山 望美洞 共同住宅敷地 內 遺蹟 試・發掘調查 報告書・圖面・寫眞』

慶南文化財研究院 2010 『김해 가야사 조성사업 주차장부지 문화유적 발굴조사 지도 위원회의 자료』

慶南發展研究院歷史文化센터 2003 『金海鳳凰洞407-9番地遺蹟』

慶南發展研究院歷史文化센터 2004 『金海會峴洞消防道路區間內遺蹟』

慶南發展研究院歷史文化센터 2013 『김해 가야인 생활체험촌 조성부지 내 문화유적Ⅱ』

慶南發展研究院歷史文化센터 2013 『김해 회현동 소방도로 구간 내 유적Ⅱ』

東亞大學校博物館・金海市 1998 『文化遺蹟分布地圖:金海市』

東亞細亞文化財研究院 2008 『金海古邑城』

東亞細亞文化財研究院 2013a 『金海 盆山城 東門址』

東亞細亞文化財研究院 2013b 『김해 봉황동유적지 일원 하수관거 정비사업 부지 내 유적 精密發掘調查 學術諮問會議』

東西文物研究院 2010 『金海鳳凰洞土城址』

東西文物研究院 2011 『金海鳳凰洞220-3・5・9番地遺蹟』

頭流文化財研究院 2011 『김해 대성동 195번지 공동주택부지 내 문화유적 발굴조사 결과 약보고서』

釜山大學校博物館 1998 『金海 鳳凰臺遺蹟』

釜山大學校博物館 2007 『金海 鳳凰洞 低湿地遺蹟』

韓國文化財財團(한국문화재단) 2015 『金海鳳凰洞217-7番地遺蹟(김해 봉황동 217-7번지 유적)』

## 一 忠州 一

건국대학교박물관 1994 『忠州 丹月洞 古墳群』

國立中原文化財研究所 2008 『중원의 산성』

國立中原文化財研究所 2009a 『忠州 塔坪里 遺蹟(中原京 추정지) 시굴조사보고서』

國立中原文化財研究所 2009b 『忠州 樓岩里 古墳群 지표조사 및 발굴조사보고서』

國立中原文化財研究所 2009c 『중원의 고분』

國立中原文化財研究所 2010 『고대도시유적 中原京—유적별—』  
 國立中原文化財研究所 2011 『忠州 下九岩里古墳群 發掘調査 報告書』  
 國立中原文化財研究所 2013 『忠州 塔坪里 遺蹟(中原京추정지) 발굴조사보고서』  
 東亞細亞文化財研究院 2014 『충주 호암지구 택지개발 사업부지 내 유적(精密發掘調査諮  
 問會議資料)』  
 상명대학교 박물관 1997 『충주 대림산성 정밀지표조사보고서』  
 忠北大學校中原文化研究所 1992a 『中原 見鶴里土城』  
 忠北大學校中原文化研究所 1992b 『中原 薔薇山城』  
 忠北大學校中原文化研究所 1993 『忠州 樓岩里古墳群 發掘調査報告書』  
 忠北大學校中原文化研究所·忠州市 1998 『文化遺蹟分布地圖:忠州市:1:10,000』  
 忠北大學校中原文化研究所 1999 『忠州山城 東門址 發掘調査 報告書』  
 忠北大學校中原文化研究所 2000 『충주 하구암리 고분군 지표조사 및 시굴조사 보고서』  
 충청대학박물관 2008 『충주 淸寧軒 주변 시굴조사 보고서』  
 충청북도문화재연구원 2009 『忠州 虎岩洞遺蹟』  
 충청북도문화재연구원 2011 『忠州 邑城(學術調査報告書)』

## —原州—

江陵大學校 博物館 2000 『原州 監營』  
 江原文化財研究所 2005 『江原 監營』  
 江原文化財研究所 2014 『江原 監營—원주 강원감영 원주우체국청사 부지 발굴조사 보고서  
 —』  
 國立中央博物館 2000 『法泉里 I』  
 國立中央博物館 2002 『法泉里 II』  
 延世大學校 原州博物館·原州市 2004 『文化遺蹟分布地圖:原州市』  
 연세대학교 원주박물관 2005 『원주 학성동 516번지 근린생활부지 유적 발굴조사 보고서』  
 예맥문화재연구원 2008 『原州建登里遺蹟』  
 忠北大學校湖西文化研究所 1998 『원주 영월산성 해미산성 정밀지표조사보고서』  
 한강문화재연구원 2010 『강원 원주혁신도시 개발사업부지 내 문화유적 발굴조사 약보고  
 서』  
 한강문화재연구원 2011 『원주 혁신도시 오천년의 기록』

한림대학교박물관 2011 『원주 행구동유적』

— 淸州 —

국립청주박물관 2002 『淸州龍潭洞 古墳群:發掘調査報告書』

충원문화재연구원 2008 『청주 서문동 마야복합상영관 부지내 淸州西門洞성안遺蹟』

충원문화재연구원 2014 『청주중학교 다목적교실 및 태권도훈련장부지내 유적 발굴 조사  
약보고서』

忠北大學校博物館・忠淸北道・淸州市 1998 『文化遺蹟分布地圖:淸州市』

충청북도문화재연구원 2013a 『청주읍성 내 우리은행 부지 유적』

충청북도문화재연구원 2013b 『청주읍성 내 남궁타워 부지 유적』

충청북도문화재연구원 2013c 『청주 읍성성벽 구간 발굴조사1』

충청북도문화재연구원 2015a 『청주 북문로 2가 78-10번지 유적』

충청북도문화재연구원 2015b 『청주시 문화동 50-2 번지 일원 공동주택 건립부지내 문화  
재 발굴(시굴)조사 약보고서』

한국선사문화연구원 2015 『청주 서운동 28-15번지 다가구주택부지 내 유적 발굴 조사  
보고서』

호서문화유산연구원 2013 『청주 우암산성 발굴조사 완료약보고서』

— 南原 —

군산대학교박물관 2010 『남원성 북벽 일대 시(발)굴 조사 약보고서』

군산대학교박물관 2014 『남원성 북문지 일대 시(발)굴 조사 약보고서』

전라문화유산연구원 2013 『남원 도시가스 관로매설지역 발굴(시굴)조사 약보고서』

全北大學校博物館・南原市 2005 『南原文化遺蹟分布地圖』

전북문화재연구원 2008 『남원시 구도심권 전선 지중화사업부지 내 문화재 시굴조사  
약보고서』

— 尙州 —

慶尙北道文化財研究院 2002 『文化遺蹟分布地圖:尙州市』

嶺南文化財研究院 2004 『尙州 伏龍洞 3地區遺蹟』

嶺南文化財研究院 2006 『尙州 伏龍洞 397-5番地遺蹟』

- 嶺南文化財研究院 2008 『尙州 伏龍洞 256番地遺蹟(Ⅰ~Ⅳ)』
- 嶺南文化財研究院 2009a 『尙州 伏龍洞 230-3番地遺蹟(Ⅰ·Ⅱ)』
- 嶺南文化財研究院 2009b 『尙州 伏龍洞 10-4番地 遺蹟』
- 嶺南文化財研究院 2015 『尙州 官衙遺蹟』
- 世宗文化財研究院 2010 『상주 성동동 61-11 번지 공동주택 신축부지 내 유적 문화재 발굴(시굴)조사 약보고서』
- 世宗文化財研究院 2012a 『尙州 城東洞 61-8番地 遺蹟』
- 世宗文化財研究院 2012b 『尙州 城東洞 61番地 遺蹟』
- 세종문화재연구원 2014a 『상주 복룡동 293-13번지 단독주택 신축공사부지내 유적 국비지원 문화재 정밀발굴조사 약식보고서』
- 세종문화재연구원 2014b 『상주 복룡동 283-79, 283-81번지 근린생활시설 신축공사부지내 유적 국비지원 문화재 정밀발굴조사 약식보고서』
- 한국문화재보호재단 2013a 『상주 성동동 81번지 근린생활시설 신축부지 내 문화유적 국비지원 발굴조사 약보고서』
- 한국문화재보호재단 2013b 『성동동 81-1번지 근린생활시설 신축부지 내 문화유적 국비지원 발굴조사 약보고서』

#### —春川—

- 江原考古文化研究院 2011 『春川 槿花洞遺蹟—경춘선 춘천정거장 예정부지내 A구역 유적 발굴조사—(1권~3권)』
- 江原文化財研究所·文化財廳·春川市 2003 『文化遺蹟分布地圖:春川市』
- 江原文化財研究所 2005 『鳳儀山城』
- 江原文化財研究所 2011a 『春川 槿花洞遺蹟—경춘선 춘천정거장 예정부지내 B구역 발굴조사 보고서—(Ⅰ·Ⅱ)』
- 國立中原文化財研究所 2010 『춘천 반환미군기지(캠프페이지)부지 내 유적 표본시굴 조사 보고서』
- 예맥문화재연구원 2010 『春川 昭陽路遺蹟』
- 예맥문화재연구원 2011 『春川 槿花洞遺蹟—경춘선 춘천정거장 예정부지내 C구역 유적 발굴조사보고서—』
- 예맥문화재연구원 2013a 『華川 原川里遺蹟』 』

예맥문화재연구원 2014 『春川 槿花洞 792-2番地 遺蹟』

－江陵－

江原文化財研究所 2005 『江陵官衙址』

江原文化財研究所 2006a 『江陵城内洞 11-1番地 遺蹟 發掘調査報告書』

江原文化財研究所 2006b 『江陵邑城』

江原文化財研究所 2008 『江陵 草堂洞遺蹟IV』

江陵大學校研究所・文化財管理局・江原道・江陵市 1998 『文化遺蹟分布地圖：江陵市』

관동대학교박물관 2009 『江陵 溟州山城－地表調査報告書－』

국강고고학연구소 2014 『영동대학교 쇼트트랙 보조경기장 건립부지내 문화재 시굴조사 약보고서』

국강고고학연구소 2015 『강릉 강문동 신라토성』

기호문화재연구원 2015 『원주-강릉 철도공사 부지(11-3 공구)내 유적 발굴조사 약보고서』

－全州－

국립전주박물관 2015 『전주 후백제 도성벽 추정지 문화재 시굴조사 학술자문위원회의 자료』

圓光大學校馬韓百濟文化研究所 1991 『全州 史庫址 發掘調査 報告書』

전북문화재연구원 2006 『全州 東固山城』

전북문화재연구원 2009 『全羅監營』

전북문화재연구원 2011 『全州 東固山城』

전주대학교박물관 1998 『전주 경기전 부속건물지 발굴조사 보고서』

全州文化遺産研究院 『전주 동고산성 7차 추가 발굴(정밀)조사 약식보고서』

全州歷史博物館・全州市 2005 『全州文化遺蹟分布地圖』

－公州－

公州大學校博物館 1992 『공산성 건물지』

公州大學校博物館・忠清南道 1998 『文化遺蹟分布地圖：公州市』

- 공주대학교박물관 2010 『사적12호 公山城 성안마을 내 유적 제3차 문화유적 발굴조사』  
공주대학교박물관 2011a 『공주 대통사지 시굴(탐색)조사 약보고서』  
공주대학교박물관 2011b 『사적12호 公山城 성안마을 내 유적 제4차 발굴조사 약보고서』  
공주대학교박물관 2012 『사적12호 公山城 성안마을 내 유적 제5차 발굴조사 약보고서』  
공주대학교박물관 2014a 『사적12호 公山城 성안마을 내 유적 제7차 발굴조사 개략보고서』  
공주대학교박물관 2014b 『공주 산성동 142-1번지 일원 도시형생활주택 신축부지 문화유적 발굴조사 개략보고서』  
충청남도역사문화연구원 2008 『공주 공산성 성안마을 내 문화유적 발굴조사 개략보고서』

### —光州—

- 全南大學校博物館 1989 『武珍古城 I』  
全南大學校博物館 1990 『武珍古城 II』  
全南大學校博物館 2002 『羅州 靑洞 遺蹟—附 광주 도시철도 T-K-1 공구 우물지—』  
全南大學校博物館·光州廣域市 2004 『文化遺蹟分布地圖:光州廣域市』  
全南文化財研究院 2008a 『光州邑城 I』  
全南文化財研究院 2008b 『光州邑城 II』  
林永珍·黃鎬均·徐賢珠 1995 「光州 樓門洞 統一新羅時代 建物址 收拾 調查報告」 『湖南考古學報』 第2輯 湖南考古學會

### —慶州—

- 慶州文化財研究所 1995 『殿廊址·南古壘 發掘調查報告』  
慶州文化財研究所 2005 『芬皇寺 發掘調查報告書 I』  
慶州文化財研究所 2008 『慶州 九黃洞 皇龍寺展示館 建立敷地 內 遺蹟 九黃洞 苑池 遺蹟』  
慶州文化財研究所 2009 『慶州 東川洞 古代都市遺蹟—慶州市 宅地造成地區 內 7B/L—』  
國立慶州文化財研究所 1995 『慶州西部洞19番地遺蹟 發掘調查報告書』  
國立慶州文化財研究所 2003 『신라왕경 발굴조사보고서 I』  
國立慶州文化財研究所 2011 『王京遺蹟』  
國立慶州文化財研究所 2012 『慶州 東宮과 月池 I』



- 國立慶州文化財研究所 2014 『慶州 東宮과 月池Ⅱ』
- 國立慶州博物館 2002 『國立慶州博物館敷地内 發掘調査報告書』
- 국립경주박물관·慶州市 2008 『文化遺蹟分布地圖:慶州市:遺蹟概要』
- 高麗文化財研究院 2014 『慶州仁旺洞 王京遺蹟』
- 東國大學校 慶州캠퍼스 博物館 2002a 『慶州 皇南洞 376 統一新羅時代遺蹟』
- 東國大學校 慶州캠퍼스 博物館 2002b 『王京遺蹟Ⅰ－隍城初等學校 講堂敷地－』
- 신라문화유산조사단 2007 『王京遺蹟Ⅲ－慶州市 城東洞 134-7·10番地 김용탁산부인과  
病院新築豫定敷地 遺蹟－』
- 신라문화유산조사단 2009a 『慶州 忠孝洞 都市開發事業地區 遺蹟』
- 신라문화유산조사단 2009b 『王京遺蹟Ⅺ－慶州 稅務署 新築敷地 内 遺蹟－』
- 신라문화유산조사단 2009c 『王京遺蹟Ⅹ－慶州 東川洞 891-10番地 遺蹟－』
- 신라문화유산조사단 2009d 『王京遺蹟Ⅹ－慶州 皇吾洞 3-7番地 遺蹟－』
- 신라문화유산조사단 2011 『王京遺蹟ⅩⅣ－경주 태종로 전선지중화사업부지 内 유적－』
- 嶺南文化財研究院 2015 『慶州 牟梁·芳内里 都市遺蹟』
- 韓國文化財保護財團 1995 『慶州 東川洞 692-9 番地 遺蹟－공동주택 신축부지 발굴조사  
보고서－』